

(本学における開講授業科目等)

第4条 教育職員免許状の授与に必要な授業科目について、教育職員免許法および教育職員免許法施行規則等の関係法令に基づいて、次の通り定める。

教科に関する科目

①中学校教諭一種免許状（社会）

表A - 1

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
日本史及び外国史	日本史	2		
	世界史	2		
地理学（地誌を含む。）	地理学	2		地誌を含む
「法律学、政治学」	法学	2		
	政治学	2		
	国際関係論		2	
「社会学、経済学」	社会学	2		
	家族社会学	2		
	経済学	2		
	社会調査法	2		
	社会保障論Ⅰ	2		
	社会保障論Ⅱ	2		
	国際福祉論		2	
「哲学、倫理学、宗教学」	宗教学	2		
	倫理学	2		
教員の免許状取得のための 最低修得単位数 20 単位	教員の免許状取得のための必修科目 26 単位 〃 選択科目 4 単位			最低必要単位数を超えて修得した単位 は、「教科又は教職に関する科目」の単 位数として使用することができる。

②高等学校教諭一種免許状（公民）

表 A - 2

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
「法律学（国際法を含む。）、 政治学（国際政治を含む。）」	法学	2		国際法を含む
	政治学	2		国際政治を含む
	民族と国家	2		
	国際関係論		2	
「社会学、経済学（国際経済を 含む。）」	社会学	2		
	家族社会学	2		
	経済学	2		国際経済を含む
	社会調査法	2		
	社会保障論Ⅰ	2		
	社会保障論Ⅱ	2		
	国際福祉論		2	
「哲学、倫理学、宗教学、 心理学」	宗教学	2		
	倫理学	2		
	心理学	2		
教員の免許状取得のための 最低修得単位数 20 単位	教員免許状取得のための必修科目 24 単位 〃 選択科目 4 単位			最低必要単位数を超えて修得した単位 は、「教科又は教職に関する科目」の単 位数として使用することができる。

③高等学校教諭一種免許状（福祉）

表 A - 3

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
社会福祉学(職業指導を含む。)	社会福祉学総論Ⅰ	2		
	社会福祉学総論Ⅱ	2		
	就労支援	1		職業指導を含む
高齢者福祉、児童福祉及び 障害者福祉	高齢者福祉論Ⅰ	2		
	高齢者福祉論Ⅱ	2		
	児童・家庭福祉論	2		
	児童・家庭福祉論詳説		2	
	障害者福祉論	2		
	障害者福祉論詳説		2	
社会福祉援助技術	ソーシャルワークⅠ	2		
	ソーシャルワークⅡ	2		
	ソーシャルワーク演習Ⅰ	2		
	ソーシャルワーク演習Ⅱ	2		
	ソーシャルワーク演習Ⅲ	1		
介護理論及び介護技術	介護技術	1		
	介護福祉論	1		
社会福祉総合実習（社会福祉 援助実習及び社会福祉施設等 における介護実習を含む。）	ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	1		
	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	2		
	ソーシャルワーク実習	4		
人体構造及び日常生活行動に 関する理解	人体の機能と日常生活	2		
加齢及び障害に関する理解	加齢・障害の理解	2		
教員の免許状取得のための 最低修得単位数 20 単位	教員の免許状取得のための必修科目 35 単位 〃 選択科目 4 単位			最低必要単位数を超えて修得した単位 は、「教科又は教職に関する科目」の単 位数として使用することができる。

教職に関する科目

中学校教諭一種免許状（社会）

高等学校教諭一種免許状（公民）

高等学校教諭一種免許状（福祉）

表 B

免許法施行規則に定める科目区分等				左記に対応する開設授業科目			備考
科目	各科目に含める必要事項	中学 一種 免許	高校 一種 免許	授業科目	単位数		
					必修	選択	
教職の意義等に関する科目	・ 教職の意義及び教員の役割 ・ 教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む。） ・ 進路選択に資する各種の機会の提供等	2	2	教職概論	2		
教育の基礎理論に関する科目	・ 教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	6	6	教育原理	2		
	・ 幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）			学習心理学	2		
				発達心理学	2		
				教育心理学	2		
				・ 教育に関する社会的、制度的又は経営的事項	教育社会学	2	
教育課程及び指導法に関する科目	・ 教育課程の意義及び編成の方法	12	6	教育課程論	2		
	・ 各教科の指導法			社会科教育法Ⅰ		2	中免(社会)は必修
				社会科教育法Ⅱ		2	
				公民科教育法Ⅰ		2	高免(公民)は必修
				公民科教育法Ⅱ		2	
				福祉科教育法Ⅰ		2	高免(福祉)は必修
	福祉科教育法Ⅱ				2		
	・ 道徳の指導法			道徳教育の指導法	2		中免のみ
・ 特別活動の指導法	特別活動の指導法	2					
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	・ 生徒指導の理論及び方法 ・ 進路指導の理論及び方法	4	4	生徒指導論	2		
	・ 教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法			教育相談	2		
				教育実習指導	1		
教育実習		5	3	教育実習Ⅰ	2		
				教育実習Ⅱ		2	中免（社会）は必修
教職実践演習				2	2	教職実践演習（中・高）	2
教員の免許状取得のための最低修得単位数 中免（社会）31単位 高免（公民）23単位 高免（福祉）23単位				修得単位数 （選択必修科目の単位数を含む） 中免（社会）35単位 高免（公民）31単位 高免（福祉）31単位			最低必要単位数を超えて修得した単位は、「教科又は教職に関する科目」の単位数として使用することができる。

教科又は教職に関する科目

表 C

中学校教諭一種免許状（社会）

免許法施行規則に定める 科目区分	授業科目	単位数		履修方法
		必	選	
教科又は教職に関する科目	福祉マインド実践講座	2		「教科又は教職に関する科目」の選択科目 又は 最低修得単位を超えて履修した「教科に関する科目」若しくは「教職に関する科目」について、併せて6単位以上修得

高等学校教諭一種免許状（公民）

免許法施行規則に定める 科目区分	授業科目	単位数		履修方法
		必	選	
教科又は教職に関する科目	福祉マインド実践講座	2		「教科又は教職に関する科目」の選択科目 又は 最低修得単位を超えて履修した「教科に関する科目」若しくは「教職に関する科目」について、併せて14単位以上修得

高等学校教諭一種免許状（福祉）

免許法施行規則に定める 科目区分	授業科目	単位数		履修方法
		必	選	
教科又は教職に関する科目	福祉マインド実践講座	2		「教科又は教職に関する科目」の選択科目 又は 最低修得単位を超えて履修した「教科に関する科目」若しくは「教職に関する科目」について、併せて14単位以上修得

特別支援教育に関する科目

特別支援学校教諭一種免許状（知的障害者・肢体不自由者）

表D

免許法施行規則に定める科目区分		単位数	左記に対応する開設授業科目		備考	
			授業科目	単位数		
				必修		選択
特別支援教育の基礎理論に関する科目		2	障害児教育論	2		
特別支援教育領域に関する科目	心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目	16	知的障害者の心理	2		
			知的障害者の生理・病理	2		
			肢体不自由者の心理	2		
			肢体不自由者の生理・病理	2		
	心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目		知的障害児教育Ⅰ	2		
			知的障害児教育Ⅱ	2		
			肢体不自由児教育Ⅰ	2		
			肢体不自由児教育Ⅱ	2		
・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目 ・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目						
免許状に定められることとなる特別支援教育領域以外の領域に関する科目	5	障害児の心理・生理・病理	2			
		病弱教育論	1			
		視覚障害者指導法	1			
		聴覚障害者指導法	1			
		L D・A D H D等教育総論	1	言語・情緒・L D・A D H D		
		重複障害者教育指導法	1	重複・言語		
心身に障害のある幼児、児童又は生徒についての教育実習		3	特別支援教育実習指導	1	事前事後指導含む	
			特別支援教育実習	2		
教員の免許状取得のための最低修得単位数 26 単位		28 単位				

その他文部科学省令に定める科目（教育職員免許法施行規則第 66 条の 6 に定める科目）

中学校教諭一種免許状（社会）

高等学校教諭一種免許状（公民）

高等学校教諭一種免許状（福祉）

表 E

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
日本国憲法	日本国憲法	2		
体育	球技スポーツ		1	5科目より 2科目選択必修
	スポーツ・コミュニケーション		1	
	アドベンチャー・スポーツ		1	
	スキー・スポーツ		1	
	スノーボード・スポーツ		1	
外国語コミュニケーション	英語コミュニケーション		2	2科目より 1科目選択必修
	実用英語		2	
情報機器の操作	コンピュータ・リテラシー	2		
教員の免許状取得のための最低修得単位数 8単位	必修4単位 選択必修4単位 合計8単位			

シ ラ バ ス

(科目名 50 音順)

科 目 名	アドベンチャー・スポーツ		副題		
担 当 者	外川 重信				
開講期	集中	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	ロッククライミングや沢登り、イカダで湖を横断するなどの挑戦を主眼とした冒険活動を体験する。宿泊はバンガローに泊まり、自炊もおこなう。				
授業のねらい・到達目標	冒険活動によって、人とのコミュニケーション、個人の挑戦、グループで挑戦する体験を学修する。そして自分の可能性や人と協力しておこなう事の可能性について深め、セルフディスカバリー（自己発見）の一助とする。				
授業の方法・授業計画・補足説明					
夏休みに3泊4日の集中授業として実施する。 スケジュール 1日目：イニシアティブゲーム、いかだを作って湖を横断する（アイスブレイク）夜ふりかえり 2日目：ロッククライミング（個人の挑戦）夜ふりかえり 3日目：沢登り（グループで挑戦）夜ふりかえり 4日目：登山及びまとめ（ふりかえり） ＜日程は、天候などによって変更があり得る。＞ 実施期日（予定）：9月上旬 実施場所（予定）：山梨県西湖及び神奈川県丹沢 宿泊形態：バンガロー泊で自炊 募集人数：16名とし、参加者が多い場合は抽選とする。 持ち物：水着、スポーツシューズ、懐中電灯など家庭で準備できるものは各自で持参するが、ヘルメット、ザイルなどの専門の道具は現地です貸与する。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	（事前）オリエンテーションに参加すること。安全なアウトドアを行うための理論をよく調べておくこと。（事後）理論及び反復練習によって技術の向上を図ること。				
履修上の注意	普段から体力作りをしていることが望ましい。団体で宿泊し、生活時間も授業と考える。健康診断を受けていて、心身共に4日間の集中授業ができること。				
テキスト	必要に応じて配付する。				
－					
－					
参考文献	「アドベンチャーグループカウンセリングの実践」デックブラウティ（プロジェクトアドベンチャージャパン）				

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	印藤 京子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この講座では、初級の総合教材を用いて英語の基礎力を再構築します。具体的には、be動詞と一般動詞の使い方の違い、英語の語順、疑問文・否定文の作り方などの基本的な文法事項を取り上げます。 また、補助教材(プリント)を用いて、保育現場で使われる英語の語彙を学修します。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらい:英語に対する苦手意識を払拭し、グローバル化に対応できる保育者に必要な教養の一つとして、保育の現場で役立つ英語を習得する。 到達目標:基礎英語力に加え、保育英検4級に相当する語彙力を身につけ、保育場面に即した使い方ができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	Unit 1 (Grammar)			16	Unit 8 (Reading & Listening)
2	Unit 1 (Reading & Listening)			17	Unit 9 (Grammar)
3	Unit 2 (Grammar)			18	Unit 9 (Reading & Listening)
4	Unit 2 (Reading & Listening)			19	Unit 10 (Grammar)
5	Unit 3 (Grammar)			20	Unit 10 (Reading & Listening)
6	Unit 3 (Reading & Listening)			21	Unit 11 (Grammar)
7	Unit 4 (Grammar)			22	Unit 11 (Reading & Listening)
8	Unit 4 (Reading & Listening)			23	Unit 12 (Grammar)
9	Unit 5 (Grammar)			24	Unit 12 (Reading & Listening)
10	Unit 5 (Reading & Listening)			25	Unit 13 (Grammar)
11	Unit 6 (Grammar)			26	Unit 13 (Reading & Listening)
12	Unit 6 (Reading & Listening)			27	Unit 14 (Grammar)
13	Unit 7 (Grammar)			28	Unit 14 (Reading & Listening)
14	Unit 7 (Reading & Listening)			29	Unit 15 (Grammar)
15	Unit 8 (Grammar)			30	Unit 15 (Reading & Listening)
期末	試験あり			期末	試験あり
「保育語彙テスト」、前回の「復習テスト」、そして「理解度確認テスト」の3種類の小テストを毎回行い、知識の定着を図ります。それぞれのテストは、模範解答を提示して解説し、採点終了後返却します。 「保育語彙テスト」、「復習テスト」は、定期試験の準備の際に活用すること。また、「理解度確認テスト」は翌週の「復習テスト」の準備に活用すること。 なお、欠席した場合、上記テストは0点となります。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内実施の小テスト(80%)と期末試験(20%)で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習:授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをする。(予習には30分以上かかると想定される。) 事後学習: 十分な復習をして知識の定着をはかり、「保育語彙テスト」・「復習テスト」に備える。(復習には1時間以上かかると想定される。)				
履修上の注意	遅刻(早退)3回で欠席1回とみなします。				
テキスト	津村 修志他、Good Choice! Basic Grammar for College Students、金星堂				9784764740372
—					
—					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	印藤 京子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この講座では、保育現場を教材としたテキストを使用して、高校までに学習した基本事項を復習します。文法・語法の基本事項を確認し、バランスの取れた4技能(Reading・Listening・Writing・Speaking)修得のための基礎を築きます。テキストの各ユニットは、保育者と、子どもや保護者とのコミュニケーションを軸として、語彙練習、表現練習、聞き取り練習、読解練習で構成されています。それぞれの練習を通して、4技能の定着を図ります。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらい:外国人の保護者や園児が増える中、グローバル化に対応できる保育者に必要な教養の一つとして、乳幼児と触れ合う現場で使える英語力の基礎を培う。 到達目標:基礎英語力に加え、保育の現場に必要な語彙ならびに頻出表現等、保育英検3級に相当する英語力を身につけ、保育現場に即した使い方ができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業案内			16	前期授業内容の復習
2	Unit 1: The School Year Begins			17	Unit 11: Preparation for the Sports Day
3	Unit 2: Arrival			18	Unit 12: The Sports Day
4	Unit 3: Playtime in the Classroom			19	Unit 13: Going for a Walk
5	Unit 4: In the Sandbox			20	Unit 14: Discovering Autumn
6	Unit 5: In the Playground			21	Unit 15: Drawing and Letter Writing
7	Grammar 1: 一般動詞・be 動詞			22	Grammar 3: 前置詞
8	Review Test 1: Units 1～5			23	Review Test 3: Units 11～15
9	Unit 6: Lunchtime			24	Unit 16: A Snowy Day
10	Unit 7: Changing Clothes and Story Time			25	Unit 17: Leaving for Home
11	Unit 8: Nap Time			26	Unit 18: School Diary
12	Unit 9: Blowing Bubbles			27	Unit 19: Bean-Throwing Day
13	Unit 10: A Sick Child			28	Unit 20: With Thanks for a Wonderful School Year
14	Grammar 2: 疑問文・否定文・命令文			29	Grammar 4: 疑問詞を使った疑問文
15	Review Test 2: Units 6～10			30	Review Test 4: Units 16～20
期末	試験実施			期末	試験実施
毎回の授業で「復習テスト」と「予習確認テスト」の2種類の小テストを行い、また半期に2回「Review Test」を行って知識の定着を図ります。 小テスト、「Review Test」とも、模範解答を提示して解説し、採点后返却します。 なお、欠席した場合は0点となります。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内実施の小テストおよび「Review Test」(80%)と期末試験(20%)で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学修:授業計画にて授業内容を確認し、「予習確認テスト」に備えて予習する。予習には1時間以上かかる想定される。 事後学修:「復習テスト」「Review Test」に備えて十分な復習をして知識の定着をはかる。復習には、1時間以上かかる想定される。				
履修上の注意	遅刻(早退)3回で欠席1回とみなします。				
テキスト	森田 和子、『新・保育の英語』、三修社				9784384333992
－					
－					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	嵯峨野 美香				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この講座では、初級の総合教材を用いて英語の基礎力を再構築します。具体的には、be動詞と一般動詞の使い方の違い、現在完了、比較、受動態などの基本的な文法事項を取り上げます。 また、補助教材(プリント)を用いて、保育現場で使われる英語の語彙や表現を学修します。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらい:外国人の保護者や園児が増える中、グローバル化に対応できる保育者として、乳幼児と触れ合う現場で使える英語力を習得する。 到達目標:保育現場で使われる語彙、表現を身につけ、保育英検4級に合格することができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業案内、英語と日本語の違い			16	前期授業内容の復習
2	Unit 1 (Grammar: be動詞の現在形)			17	Unit 8 (Grammar: 場所を表す前置詞)
3	Unit 1 (Listening & Activity)			18	Unit 8 (Listening & Activity)
4	Unit 2 (Grammar: be動詞の過去形)			19	Unit 9 (Grammar: 疑問詞)
5	Unit 2 (Listening & Activity)			20	Unit 9 (Listening & Activity)
6	Unit 3 (Grammar: 一般動詞の現在形)			21	Unit 10 (Grammar: 現在完了)
7	Unit 3 (Listening & Activity)			22	Unit 10 (Listening & Activity)
8	Unit 4 (Grammar: 一般動詞の過去形)			23	Unit 11 (Grammar: 助動詞)
9	Unit 4 (Listening & Activity)			24	Unit 11 (Listening & Activity)
10	Unit 5 (Grammar: 未来時制)			25	Unit 12 (Grammar: 名詞の数え方, Listening & Activity)
11	Unit 5 (Listening & Activity)			26	Unit 13 (Grammar: 比較)
12	Unit 6 (Grammar: 進行形)			27	Unit 13 (Listening & Activity)
13	Unit 6 (Listening & Activity)			28	Unit 14 (Grammar: 受動態)
14	Unit 7 (Grammar: 代名詞)			29	Unit 14 (Listening & Activity)
15	Unit 7 (Listening & Activity)			30	Unit 15 (Grammar: 接続詞, Listening & Activity)
期末	試験あり			期末	試験あり
「保育語彙テスト」、前回の「復習テスト」、そして「理解度確認テスト」の3種類の小テストを毎回行い、知識の定着を図ります。それぞれのテストは、模範解答を提示して解説し、採点終了後返却します。 「保育語彙テスト」・「復習テスト」は定期試験の準備の際に活用すること。また、「理解度確認テスト」は翌週の「復習テスト」の準備に活用すること。 なお、欠席した場合、上記テストは0点となります。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内実施の小テスト(80%)と期末試験(20%)で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習: 授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをする。(予習には30分以上かかると想定される。) 事後学習: 十分な復習をして知識の定着をはかり、「保育語彙テスト」・「復習テスト」に備える。(復習には1時間以上かかると想定される。)				
履修上の注意	遅刻(早退)3回で欠席1回とみなします。				
テキスト	並木一美他、English Illustrated、金星堂				978-4-7647-4063-1
—					
—					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	嵯峨野 美香				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この講座では、初級の総合教材を用いて英語の基礎力を再構築します。具体的には、be動詞と一般動詞の使い方の違い、現在完了、比較、受動態などの基本的な文法事項を取り上げます。 また、補助教材(プリント)を用いて、保育現場で使われる英語の語彙や表現を学修します。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらい:外国人の保護者や園児が増える中、グローバル化に対応できる保育者として、乳幼児と触れ合う現場で使える英語力を習得する。 到達目標:保育現場で使われる語彙、表現を身につけ、保育英検4級に合格することができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業案内、英語と日本語の違い			16	前期授業内容の復習
2	Unit 1 (Grammar: be動詞の現在形)			17	Unit 8 (Grammar: 場所を表す前置詞)
3	Unit 1 (Listening & Activity)			18	Unit 8 (Listening & Activity)
4	Unit 2 (Grammar: be動詞の過去形)			19	Unit 9 (Grammar: 疑問詞)
5	Unit 2 (Listening & Activity)			20	Unit 9 (Listening & Activity)
6	Unit 3 (Grammar: 一般動詞の現在形)			21	Unit 10 (Grammar: 現在完了)
7	Unit 3 (Listening & Activity)			22	Unit 10 (Listening & Activity)
8	Unit 4 (Grammar: 一般動詞の過去形)			23	Unit 11 (Grammar: 助動詞)
9	Unit 4 (Listening & Activity)			24	Unit 11 (Listening & Activity)
10	Unit 5 (Grammar: 未来時制)			25	Unit 12 (Grammar: 名詞の数え方, Listening & Activity)
11	Unit 5 (Listening & Activity)			26	Unit 13 (Grammar: 比較)
12	Unit 6 (Grammar: 進行形)			27	Unit 13 (Listening & Activity)
13	Unit 6 (Listening & Activity)			28	Unit 14 (Grammar: 受動態)
14	Unit 7 (Grammar: 代名詞)			29	Unit 14 (Listening & Activity)
15	Unit 7 (Listening & Activity)			30	Unit 15 (Grammar: 接続詞, Listening & Activity)
期末	試験あり			期末	試験あり
「保育語彙テスト」、前回の「復習テスト」、そして「理解度確認テスト」の3種類の小テストを毎回行い、知識の定着を図ります。それぞれのテストは、模範解答を提示して解説し、採点終了後返却します。 「保育語彙テスト」・「復習テスト」は定期試験の準備の際に活用すること。また、「理解度確認テスト」は翌週の「復習テスト」の準備に活用すること。 なお、欠席した場合、上記テストは0点となります。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内実施の小テスト(80%)と期末試験(20%)で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習: 授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをする。(予習には30分以上かかると想定される。) 事後学習: 十分な復習をして知識の定着をはかり、「保育語彙テスト」・「復習テスト」に備える。(復習には1時間以上かかると想定される。)				
履修上の注意	遅刻(早退)3回で欠席1回とみなします。				
テキスト	並木一美他、English Illustrated、金星堂				978-4-7647-4063-1
—					
—					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

科 目 名	英語コミュニケーションI/英語コミュニケーション【エントリー】			副題	
担 当 者	山口 隆博				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	コミュニケーションとは、相手を理解し、自分も理解してもらうこと。本授業では、英語でのコミュニケーションができるよう、以下のActive Learning活動を行う。学生が日常身近に体験する話題を取り上げ、サンプル英会話で、Listening力の訓練、Repeating・Shadowing・OverlappingによるSpeaking力の訓練を行う。その上で、ペアワーク、グループワーク、プレゼンテーション活動により、学んだ英語表現を自分のものとして使うことができるようにする。				
授業のねらい・到達目標	本授業のねらいは、学生が実体験できる英会話を通して、コミュニケーション手段としての英語を楽しく学び、自分の気持ちを英語で自己発信できるようになることである。 そのための到達目標は、基礎的な質疑応答や簡単な挨拶ができ、基礎レベルの英語が聞き取れ、様々な場面での意思の疎通や情報交換ができるようにすることである。				
授業の方法・授業計画					
1	Lesson 01 Introduce Yourself ①テキスト学習			16	Lesson 08 Talk about Your Friends ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
2	Lesson 01 Introduce Yourself ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等			17	Lesson 09 Talk about Food ①テキスト学習
3	Lesson 02 Talk about Your Hometown ①テキスト学習			18	Lesson 09 Talk about Food ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
4	Lesson 02 Talk about Your Hometown ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等			19	Lesson 10 Talk about Your Hobby ①テキスト学習
5	Lesson 03 Give Directions ①テキスト学習			20	Lesson 10 Talk about Your Hobby ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
6	Lesson 03 Give Directions ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等			21	Lesson 11 Explain How to Use Something ①テキスト学習
7	Lesson 04 Describe Your Problem ①テキスト学習			22	Lesson 11 Explain How to Use Something ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
8	Lesson 04 Describe Your Problem ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等			23	Lesson 12 Talk about the Past ①テキスト学習
9	Lesson 05 Talk about Your Favorite Things ①テキスト学習			24	Lesson 12 Talk about the Past ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
10	Lesson 05 Talk about Your Favorite Things ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等			25	Lesson 13 Talk about Your Leisure Activities ①テキスト学習
11	Lesson 06 Explain Your Daily Life ①テキスト学習			26	Lesson 13 Talk about Your Leisure Activities ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
12	Lesson 06 Explain Your Daily Life ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等			27	Lesson 14 Talk about Do and Don'ts ①テキスト学習
13	Lesson 07 Talk about Your Part-time Job ①テキスト学習			28	Lesson 14 Talk about Do and Don'ts ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
14	Lesson 07 Talk about Your Part-time Job ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等			29	Lesson 15 Talking about Your Future ①テキスト学習
15	Lesson 08 Talk about Your Friends ①テキスト学習			30	Lesson 15 Talking about Your Future ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
授業中の、ペアワーク、グループワーク、プレゼンテーション活動の各場面で、個人的なアドバイスや、フィードバックを行う。					
評価方法及び評価基準	成績評価は、小テスト・宿題・プレゼン等(80%)と、授業参加態度(20%)による。評価基準は、できればと積極的な姿勢。				
事前・事後学習の内容	必ず予習をして授業に臨むこと(1.5時間)。授業で学習した英語表現を暗記し、自分のものとして使えるようにする(2.5時間)				
履修上の注意	授業中の私語、勝手な携帯使用は厳禁する。				
テキスト	『CONNECTING Listening + Speaking』 桐原書店 著者：臼倉美里・馬場千秋				978-4-342-55310-3
－					
－					
参考文献	YouTube番組:バイリンガール英会話(Bilingirl Chika)				

科 目 名	英語コミュニケーションI/英語コミュニケーション【エントリー】			副題	
担 当 者	山口 隆博				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	コミュニケーションとは、相手を理解し、自分も理解してもらうこと。本授業では、英語でのコミュニケーションができるよう、以下のActive Learning活動を行う。学生が日常身近に体験する話題を取り上げ、サンプル英会話で、Listening力の訓練、Repeating・Shadowing・OverlappingによるSpeaking力の訓練を行う。その上で、ペアワーク、グループワーク、プレゼンテーション活動により、学んだ英語表現を自分のものとして使うことができるようにする。				
授業のねらい・到達目標	本授業のねらいは、学生が実体験できる英会話を通して、コミュニケーション手段としての英語を楽しく学び、自分の気持ちを英語で自己発信できるようになることである。 そのための到達目標は、基礎的な質疑応答や簡単な挨拶ができ、基礎レベルの英語が聞き取れ、様々な場面での意思の疎通や情報交換ができるようにすることである。				
授業の方法・授業計画					
1	Lesson 01 Introduce Yourself ①テキスト学習	16	Lesson 08 Talk about Your Friends ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
2	Lesson 01 Introduce Yourself ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等	17	Lesson 09 Talk about Food ①テキスト学習		
3	Lesson 02 Talk about Your Hometown ①テキスト学習	18	Lesson 09 Talk about Food ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
4	Lesson 02 Talk about Your Hometown ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等	19	Lesson 10 Talk about Your Hobby ①テキスト学習		
5	Lesson 03 Give Directions ①テキスト学習	20	Lesson 10 Talk about Your Hobby ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
6	Lesson 03 Give Directions ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等	21	Lesson 11 Explain How to Use Something ①テキスト学習		
7	Lesson 04 Describe Your Problem ①テキスト学習	22	Lesson 11 Explain How to Use Something ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
8	Lesson 04 Describe Your Problem ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等	23	Lesson 12 Talk about the Past ①テキスト学習		
9	Lesson 05 Talk about Your Favorite Things ①テキスト学習	24	Lesson 12 Talk about the Past ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
10	Lesson 05 Talk about Your Favorite Things ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等	25	Lesson 13 Talk about Your Leisure Activities ①テキスト学習		
11	Lesson 06 Explain Your Daily Life ①テキスト学習	26	Lesson 13 Talk about Your Leisure Activities ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
12	Lesson 06 Explain Your Daily Life ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等	27	Lesson 14 Talk about Do and Don'ts ①テキスト学習		
13	Lesson 07 Talk about Your Part-time Job ①テキスト学習	28	Lesson 14 Talk about Do and Don'ts ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
14	Lesson 07 Talk about Your Part-time Job ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等	29	Lesson 15 Talking about Your Future ①テキスト学習		
15	Lesson 08 Talk about Your Friends ①テキスト学習	30	Lesson 15 Talking about Your Future ②テキスト応用ワークショップ・プレゼン等		
期末	試験実施なし		期末	試験実施なし	
授業中の、ペアワーク、グループワーク、プレゼンテーション活動の各場面で、個人的なアドバイスや、フィードバックを行う。					
評価方法及び評価基準	成績評価は、小テスト・宿題・プレゼン等(80%)と、授業参加態度(20%)による。評価基準は、できればと積極的な姿勢。				
事前・事後学習の内容	必ず予習をして授業に臨むこと(1.5時間)。授業で学習した英語表現を暗記し、自分のものとして使えるようにする(2.5時間)				
履修上の注意	授業中の私語、勝手な携帯使用は厳禁する。				
テキスト	『CONNECTING Listening + Speaking』 桐原書店 著者：臼倉美里・馬場千秋			978-4-342-55310-3	
－					
－					
参考文献	YouTube番組:バイリンガール英会話(Bilingirl Chika)				

科 目 名	LD・ADHD等教育総論		副題			
担 当 者	温泉 美雪					
開講期	半期	単位数	1		配当年次	2
授業の概要	本授業では、LD・ADHD等の特性を認知面・行動面・心理面から捉え、その状態像に関するイメージを持つことを目的とする。また、特性に合った教育や支援について学ぶ。さらに、教育制度などの教育的処遇に関する知識を得て、特殊教育から特別支援教育への転換についての意義を学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	1. LD・ADHD等の障害特性を説明することができる。 2. LD・ADHD等に対する教育や支援について説明することができる。					
授業の方法・授業計画						
1	概論:LD・ADHD等とは何か					
2	注意欠如多動症の特性と教育支援					
3	自閉スペクトラム症の特性と教育支援					
4	限局性学習症の特性と教育支援					
5	LD・ADHD等のある子どもの家族支援					
6	LD・ADHD等のある子どもに対する特別支援教育					
7	LD・ADHD等のある人に対するキャリア支援					
8	まとめ					
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
期末	試験実施なし					
本授業では双方向的学習を行うため、積極的な参加を求めます。また、演習を多用し、LD・ADHD等に対する教育支援についての知識の定着と応用力の涵養を図ります。						
評価方法及び評価基準	授業中の活動(25%)、コメントシート(15%)、レポート課題(60%)					
事前・事後学習の内容	授業中に指示した事前・事後学習内容に取り組むこと。 必要な事前学習は1.5時間、事後学習は2.5時間が目安となる。					
履修上の注意	レポート課題は8回目の授業の中で提出を求める予定である。					
テキスト	なし					
—						
—						
参考文献	『特別支援教育がわかる本3 通常学級でできるトラブル・行動問題への対処』温泉美雪(著)ミネルヴァ書房 『新しい発達と障害を考える本3 もっと知りたいLD学習障害のおともだち』神奈川LD協会(編)ミネルヴァ書房					

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい ・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	飯田 千夏				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	飯田 千夏				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	飯田 千夏				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	入江 薫子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	入江 薫子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	入江 薫子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	大田 美郁				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	大田 美郁				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	大田 美郁				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	酒井 亜弥				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	酒井 亜弥				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	酒井 亜弥				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	滝沢 真弓				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	滝沢 真弓				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	滝沢 真弓				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	原田 ゆかり				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	原田 ゆかり				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	原田 ゆかり				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識を習得し、実践に生かすことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	入江 薫子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード発展)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード復習)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードまとめ)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジまとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(創作)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム発展)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(創作課題提出)
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム復習)			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネームまとめ)			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード付け)			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード付け小テスト)			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(総まとめ)			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	入江 薫子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	大田 美郁				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	大田 美郁				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	酒井 亜弥				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	酒井 亜弥				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	滝沢 真弓				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	滝沢 真弓				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい ・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	田中 明子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	田中 明子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他（教育芸術社）				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士（ドレミ楽譜出版社）				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	原田 ゆかり				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード発展)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード復習)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードまとめ)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジまとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(創作)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム発展)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(創作課題提出)
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム復習)			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネームまとめ)			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード付け)			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード付け小テスト)			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(総まとめ)			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	原田 ゆかり				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力を身に付け、応用して実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード発展)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード復習)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジ復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードまとめ)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(アレンジまとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(創作)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム発展)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(創作課題提出)
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネーム復習)			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コードネームまとめ)			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード付け)			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(コード付け小テスト)			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(総まとめ)			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
・進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。 ・授業内で行った小テストは、事後の授業において返却するので、そこで明らかとなった課題を各自整理し、期末テストの準備に役立てること。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を踏まえて練習しておくこと。事前には0.5時間以上の予習、事後も0.5時間以上の復習が必要となる。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

科 目 名	介護技術		副題			
担 当 者	茂木 高利					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	介護における生活支援のあり方について理解する。居住環境の整備、移動・移乗の介護、身じたくの介護、食事の介護、身体の清潔、排泄の介護について学ぶ。また、介護を行うにあたって、利用者の心身状況や障害特性に応じた個別性のある生活支援技術のあり方を習得する。					
授業のねらい・到達目標	1 利用者の自立支援を支える生活支援技術の概要を理解できる。 2 各生活支援技術の意義・目的、留意点、手順、及びそれらの根拠が理解できる。 3 演習により 介助者・利用者双方の体験を通して、支援を受ける利用者の気持ちを理解した介護ができる。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション: 介護の基本理念 介護過程と生活支援技術の概要 使用する語彙の理解					
2	ボディメカニクスの理解・住生活環境の整備					
3	睡眠の環境整備と援助: ベッドメイキング					
4	ベッド上の移動介助(水平・上方移動)					
5	ベッド上の移動介助(仰臥位⇔側臥位)					
6	ベッド上の移動介助(起き上がり、仰臥位⇔端座位)					
7	立位に向けた準備動作と介助・移乗介助の基本視点(ベッド⇔車いす)					
8	さまざまな移乗介助(⇔トイレ・⇔浴槽 他)					
9	車いすの介助					
10	歩行の介助					
11	身じたくの介助(座位及びベッド上での着脱介助と自立に向けた支援)					
12	身体の清潔に向けた介助					
13	食事の介助					
14	排泄の介助 (ポータブルトイレ、便器・尿器の介助)					
15	排泄の介助(おむつ交換)					
期末	筆記試験実施					
・リアクションペーパー・コメントシート・課題についてのフィードバックについて 提出された用紙等は、次回以降①講師コメント記入にて個別返却②フィードバックであることを告げ、講義内でその内容について解説及び演習デモンストレーションで全体共有化、という方法をとります。						
評価方法及び評価基準	試験60%、コメントシートおよび課題20%、授業態度20%をもって評価する。					
事前・事後学習の内容	技術演習的科目ゆえ、事前学習については、授業計画にて予め各回の内容を確認し、テキストの該当箇所を熟読の上、授業に参加してください。また授業後は十分な復習を行い、各自の理解と技術の定着を深めることが望まれます。事前・事後の学習には、毎回それぞれ0.5時間以上が目安となります。					
履修上の注意	実技の時は、授業開始までに実技を行うにふさわしい服装に着替え、遅刻をしないこと。					
テキスト	千葉典子編著『改訂 介護概論・基本介護技術』 共栄出版株式会社					
—						
—						
参考文献	必要に応じて、適宜配布・紹介する。					

科 目 名	介護福祉論		副題		
担 当 者	浦尾 和江				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	本教科では、介護を必要とする人の尊厳を支えるケア、自立支援に関する知識や技能について包括的に学ぶ。 少子・高齢化により、介護を取り巻く社会的ニーズも増大し、多様化してきている。介護の社会的問題の背景を考え、社会的ケアの意義を理解する。また、介護の目的と役割、介護に必要な利用者の理解、生活支援技術について学び、介護とは何か基本的な考え方を習得する。				
授業のねらい・到達目標	1. 社会と人間に関する知識を習得し、様々な福祉問題や社会的環境について理解し説明できる。 2. 介護問題の背景と政策の動向、介護の目的と役割を理解できる。 3. 利用者の尊厳を支え、自立支援を実現するために必要な個別ケアの重要性を理解できる。 4. 介護と医療にかかわる多職種との連携について理解できる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業計画のオリエンテーション 介護問題の背景と政策の動向				
2	介護を必要とする利用者の理解 尊厳を支える介護 介護の定義 介護従事者の職業倫理				
3	介護活動の場 在宅介護と施設介護				
4	介護過程とICF				
5	利用者との援助関係を築く基本 コミュニケーション技法				
6	生活支援技術の基本 居住環境の整備、移動、食事、排せつ、睡眠、身だしなみ、入浴、緊急時の対応				
7	障害の理解と対応 終末期の介護 認知症の介護				
8	地域ケアシステム 多職種との連携 まとめ				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末	試験実施せず				
授業内で提出した提出物については、授業において適宜フィードバックし、課題のポイントについて説明する。					
評価方法及び評価基準	レポート課題(50%)、コメントシート(30%)、授業中の参加度(20%)を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、下調べをしてから授業に臨むこと。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかること。事前学習には、1.6時間、事後学習には2.0時間が目安となる。				
履修上の注意	授業への主体的な参加を重視する。				
テキスト	社会福祉学習双書編集委員会編『社会福祉学習双書15 介護概論』 全国社会福祉協議会				
－					
－					
参考文献					

科 目 名	学習心理学		副題		
担 当 者	横山 孝行				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	心理学では人間の学習のメカニズムを説明するために様々な理論が提案してきた。また、教育や福祉などの対人援助場面では、学習に関する理論に基づいた支援が行われている。本科目は、学習心理学における基本的な理論や知見を学び、指導や支援について理解を深めていく。また、この授業の全体をととして、生徒一人ひとりの特長理解や生徒間の人間関係の理解、クラス集団の雰囲気作り等にも探求していきたい。				
授業のねらい・到達目標	1 学習心理学における基本的な理論を理解し説明できる。 2 人間行動を学習心理学の観点から考えることができる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(6)、B-1(4)(5)(6)(7)】				
授業の方法・授業計画					
1	心理学における学習				
2	古典的条件づけ(1):概要				
3	古典的条件づけ(2):般化と消去				
4	オペラント条件づけ(1):概要				
5	オペラント条件づけ(2):行動の獲得と消去				
6	応用行動分析(1):概要、アセスメント				
7	応用行動分析(2):指導・支援例				
8	社会的学習				
9	技能学習				
10	概念学習、言語獲得				
11	記憶				
12	自己調整学習				
13	ソーシャルスキルトレーニング(1):概要、スキルの評価				
14	ソーシャルスキルトレーニング(2):指導・支援例				
15	まとめ				
期末	試験は実施しない				
授業中に記入を求めるコメントシートについては次回の授業でフィードバックする。					
評価方法及び評価基準	小テスト①(30%)、小テスト②(30%)、レポート課題(40%)から評価する。小テスト①は6回目の授業、小テスト②は13回目の授業で行う予定である。レポート課題は14回目の授業の中で提出してもらう予定である。レポート課題の内容は提出日の1ヶ月前に授業の中で説明する。なお、授業への参加態度に問題がある場合は減点もしくは単位認定しないことがある。				
事前・事後学習の内容	事前学習:毎回、次回の授業内容のキーワードを紹介する。次週までにそのキーワードを調べ、ノート等にまとめること。(1.5時間程度) 事後学習:授業内容の理解を定着するために、配布資料を基に要点をノート等に整理して記すこと。(2.5時間程度)				
履修上の注意	欠席・遅刻しないこと。				
テキスト	なし				
—					
—					
参考文献	・実森正子・中島定彦(2000)学習の心理―行動のメカニズムを探る。サイエンス社。 ・山内光哉・春木豊編著(2001)グラフィック学習心理学―行動と認知。サイエンス社。 ・G. シュタイナー著 塚野州一・若井邦夫・牧野美知子訳(2005)新しい学習心理学―その臨床的適用。北大路書房。 ・山本淳一・池田聡子(2005)応用行動分析で特別支援教育が変わる―子どもへの指導方略を見つける方程式。図書文化社。 ・上野一彦監修 岡田智・中村敏秀・森村美和子(2012)特別支援教育をサポートする 図解よくわかるソーシャルスキルトレーニング(SST)実例集。ナツメ社。 ・B. ジーマーマン・D. シャンク編著 塚野州一・伊藤崇達訳(2014)自己調整学習ハンドブック。北大路書房。				

科 目 名	家族社会学		副題		
担 当 者	石川 円				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	どんな人も「家族」のなかに生まれ、育ち、暮らしています。しかし、その構造や形式、関係性は多種多様です。また人が成長するように、「家族」も内外からの影響をつぶさに受けながら、変わっていきます。あなたが当たり前のように思っている「家族」のイメージは、隣にいる人のそれとは大きく異なるかもしれません。改めて「家族」について一緒に考えてみましょう。				
授業のねらい・到達目標	「家族」はすべての人々にとって最も「身近な」集団です。しかし、家族が問題を抱えると、解きほぐすのは容易ではありません。一体、「家族」とは何なのでしょう？ 本講義では、社会福祉に必要不可欠である「家族」に社会学的視点からアプローチします。家族に関する基本概念を学ぶとともに、ライフステージで起こりうる家族の関係性の変容や問題を多面的に考察できるようになることをめざします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション:「家族」を「社会学」するとはどういうこと？				
2	家族規範の成立と変容:「家族」のイメージはどのように形成されたか？				
3	家族の変化と家族関係:ライフステージにおける「家族」				
4	結婚とパートナー関係:晩婚、非婚、同性婚、パートナーの選択				
5	育児と子育て支援(1):共働き世帯と子ども				
6	育児と子育て支援(2):専業主婦への支援				
7	ひとり親家族:夫婦の離婚と子育てについて				
8	子どものジェンダー形成:「家族」のあり方と子どもの成長				
9	障害のある人と家族(1):障害のある子どもとその家族				
10	障害のある人と家族(2):障害のある人の生活、恋愛、結婚				
11	医療技術の発達と家族(1):医療とのなかの家族の位置づけ				
12	医療技術の発達と家族(2):専門機関と「家族」の関係				
13	老いと家族(1):高齢化と家族				
14	老いと家族(2):介護と看取り				
15	まとめ:期末試験対策				
期末 筆記試験(論述形式)					
配布資料をもとに、講義形式で授業を進めます。 定期試験に際しては、結果が評価の大部分を占めることから、各自入念な準備学習が必要となります。					
評価方法及び評価基準	学期末試験(70%)、授業時の課題(30%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	1回の授業に対して、事前学習(予習)1.5時間、事後学習(復習)2.5時間を必要とする。 ＜事前学習＞授業の最後に次回について予告し、課題を指示する。 ＜事後学習＞配布資料を読み返し、授業内容を整理し、取り上げたテーマや問題について、各自学習を深める。				
履修上の注意	私語は厳禁。				
テキスト	特になし				
－					
－					
参考文献	石川実著「現代社会の社会学」夕斐閣 1997年				

科 目 名	加齢・障害の理解		副題			
担 当 者	伊東 秀幸、馬場 康德					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2	
授業の概要	1～11「加齢」領域は馬場、12～15「障害」領域は伊東が担当する。 高齢者や障害者等のサービス利用者が尊厳ある生活を実現するための介護を実践するうえで必要な、心身の状況や疾病による機能低下が及ぼす日常生活への影響などを学ぶ。 また、高齢者や障害者等の家族を含めた周囲の環境、社会資源の活用に関して学ぶ。					
授業のねらい ・到達目標	・高齢者や認知症、障害について基礎的な知識を学び、日常生活で発生する様々な介護ニーズに対応できるようになる。 ・サービス利用者の生活や心身の状況に加え、家族を含めた周囲の環境にも十分留意する必要があることを理解できるようになる。 ・高齢者や障害者に多く見られる疾病や機能低下が及ぼす日常生活への影響などを理解し、高齢者や障害者の尊厳ある介護の基本を理解できるようになる。 ・家庭にかかわる様々な福祉問題に応じた支援に、社会福祉や心理に関係する地域の諸機関と連携、調整を行い、主体的に取り組むことができるようになる。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション					
2	こころとからだの基本的理解					
3	生活支援に必要なこころとからだのしくみの理解					
4	人間の成長と発達					
5	老年期の理解と日常生活					
6	高齢者と健康1(高齢者に多い疾病と日常生活の留意点)					
7	高齢者と健康2(高齢者の健康管理と保健医療職との連携)					
8	認知症の基礎的理解					
9	認知症に伴う心身の変化と日常生活					
10	認知症の家族への支援					
11	認知症を取り巻く状況					
12	障害の基礎的理解					
13	生活機能障害の理解					
14	障害者の生活理解					
15	障害者の家族への支援					
期末	試験は実施せず					
提出されたレポート等にかんしては、でんでんばんで、総合的なコメントをもってフィードバックする。						
評価方法 及び評価基準	レポート、授業態度、提出物等で総合的に評価する					
事前・事後 学習の内容	事前に関連該当箇所を学習し、授業後は参考文献等を含めて学習する。 毎回、予習1.5時間、復讐2.5時間を目安とする。					
履修上の注意	講義に主体的に参加する。					
テキスト	開講時に指示する。					
—						
—						
参考文献	授業内で紹介する。					

科 目 名	球技スポーツ【エントリー】		副題		
担 当 者	山本 享				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	「友達づくり」と「健康づくり」 集団スポーツ活動の実践を通じて、「スポーツコミュニケーション」「ヘルスリテラシー」を身につけ、自ら「社会人基礎力」を育成することを目的とする。スポーツ活動は体育館半面ずつ実施する2種目から各自選択する。 1) 授業展開 2) 挨拶・出欠確認 3) 準備運動 4) 事前指導(安全面の確認、チームづくり、チームでの作戦会議・役割確認・ルール確認) 5) スポーツ活動 6) 片づけ・振り返り(レポート記入) ※社会人基礎力 「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」				
授業のねらい・到達目標	[授業のねらい] 集団スポーツ活動の実践を通じて、「スポーツコミュニケーション」「ヘルスリテラシー」を身につけるとともに、主体的に学ぶ姿勢・コミュニケーションスキル・多様な人々と学び働く能力を身につけ、「社会人基礎力」を育成することができるようになる。 [到達目標] 「スポーツコミュニケーション」誰とでも認め合い、協力することができるようになる。 「ヘルスリテラシー」日常生活の中にスポーツ実践を取り入れ、活動的なライフスタイルを実行することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：A－1(1)～(4)、3(1)～(3)、5(1)～(3)、C－3(1)～(5)、4(8)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(授業概要説明、注意点の確認・グループワークなど)				
2	学校における体育活動の役割 スポーツの意義と生涯スポーツ				
3	バスケットボール1(男女別)個人技術(ドリブル・パス・シュート)				
4	バスケットボール2(男女別)集団技術(オフェンス・ディフェンス)				
5	バスケットボール3(男女別)ミニゲーム				
6	フットサル1(男女別)個人技術(ドリブル・パス・シュート)				
7	フットサル2(男女別)集団技術(オフェンス・ディフェンス)				
8	フットサル3(男女別)ミニゲーム				
9	選択(混合) バスケットボール 集団技術(オフェンス・ディフェンス)／ゲートボール 個人技術(打つ・ルール理解)				
10	選択(混合) バスケットボール 集団技術(戦術)／ゲートボール 集団技術(連携)				
11	選択(混合) フットサル 集団技術(オフェンス・ディフェンス)／フリンゴ 個人技術(サーブ・アタック・レシーブ)				
12	選択(混合) フットサル 集団技術(戦術)／フリンゴ 集団技術(ラリー・様々なテクニック)				
13	アルティメット(混合)1 個人技術(スロー・キャッチ)				
14	アルティメット(混合)2 ルール理解				
15	アルティメット(混合)3 戦術・ゲーム				
期末	試験実施なし				
種目は適時順番を変更する場合があります。毎時間、授業開始時に挨拶、準備運動、事前指導を行い、授業終了時に片づけと振り返りを行う。					
着替えは体育館更衣室で行い、荷物・貴重品は必ず体育館フロアに持って来ること。					
授業内で提出した振り返りレポートについては、事後の授業において評価して返却し、評価内容についてのコメントを事後の授業の振り返りに活用すること。					
評価方法及び評価基準	授業内の活動状況 30% ⇒ コミュニケーション・技能・態度を評価 毎授業の提出物 70% ⇒ 振り返りによる授業の達成度を評価				
事前・事後学習の内容	[事前] 授業内でグループワークを行うため、事前学習としてルール等しっかりと調べをしておくこと。個人で調べられることは授業前に各自調べておく。授業では、人が集まってできることを行う。 [事後] 日常生活の中にスポーツ実践を取り入れ、活動的なライフスタイルを実行する。 事前・事後学習にそれぞれ0.5時間程度を必要とする。				
履修上の注意	授業ごとの振り返りレポート課題を出すので、欠席をするとその分の評価は加算されない。授業中は、スポーツウェアと体育館シューズ(屋内シューズ)を使用すること。				
テキスト	特になし。				
－					
－					
参考文献	最新版わかりやすいゲートボール―新ルールによる基本からチームプレーまで― 高橋隆輔 梧桐書院 フットサル教本 改訂版 松崎康弘・須田芳正・日本フットサル連盟 大修館書店 中学校学習指導要領解説 保健体育編 文部科学省 東山書房 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編 文部科学省 東山書房				

科 目 名	教育課程論		副題		
担 当 者	菅谷 正美				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	本授業では、現在の教育課程について、関連法令との関係、並びにそれに基づく学習指導要領の編成について学ぶ。また、我が国の学校教育の中心である教育課程がどのように変遷してきたかを学び、教育課程の意義の理解に役立てる。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、以下の点である。 1 教育課程の意義・役割と法令との関係を理解することができる。 2 我が国の教育課程の編成とその手順を理解することができる。 3 教育課程の変遷を知り、学習指導要領の内容を理解することができる。 4 新しい学力観のもと、今後を目指す学力について理解することができる。 (履修ファイルの対応項目は、A-4(4)である)				
授業の方法・授業計画					
1	教育課程とは何か				
2	教育課程確立の歴史				
3	諸外国の教育課程				
4	我が国の教育課程 明治以前の藩校・寺子屋				
5	我が国の教育課程 戦前の学校教育				
6	我が国の教育課程 戦後の学校教育				
7	教育課程と関係法令				
8	学習指導要領と教科書				
9	学習指導要領の改訂の特色				
10	学校における教育課程の編成				
11	新しい学力観と教育課程				
12	新しい学力観と学習指導				
13	中高一貫教育の意義と内容				
14	小中一貫教育の意義と内容				
15	新教科の意義と背景				
期末	試験実施				
分担した授業の内容を調べて発表する授業を行う。発表された内容の中から、特徴的な事柄を取り上げて、討論を行うとともに、教育の歴史や社会の変化等の背景を学ぶ。					
評価方法及び評価基準	試験の得点および授業における発表の内容により総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前の学習では、授業計画に沿って授業内容を確認し文部科学省の審議会報告および文献等で下調べしておくこと。 事後学習では、授業内容を整理し必要な補充を行い知識の定着を図ること。 毎回、予習は1.5時間、復習は2時間を目安とする。				
履修上の注意	知識理解にとどまらず、積極的に教育課程の背景にある社会の変化に興味と関心を持つことが望まれる。				
テキスト	授業に必要なプリントは配布する。				
—					
—					
参考文献	文部科学省 中学校学習指導要領 文部科学省 高等学校学習指導要領 文部科学省 特別支援学校学習指導要領				

科 目 名	教育課程論		副題		
担 当 者	瀬川 千津子、岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	教育課程(カリキュラム)とは何かを明らかにし、現代におけるカリキュラムのあり方を、社会とのかかわりの中で考えていく。そして、「文化」・「知識」の伝達としての教育と、子ども中心主義の教育の両方の思想を踏まえながら、教育課程の編成について理論的・実践的に考察していく。また、幼稚園教育要領、保育所保育指針、法規等の理解に基づいて、実際にカリキュラム編成するための基礎知識を学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、以下の3点である。 ①「教育課程」(カリキュラム)とは何か、を理論的に説明できるようになること。 ②教育課程と関連する法規・法令等を理解すること。 ③教育課程の編成と手順について理解し、実際に指導計画を作成できるようになること。 【「履修ファイル」の対応項目:A-4(1),A-4(4),A-4(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス、教育課程(カリキュラム)とは何か(岩本、瀬川)				
2	幼児教育における教育課程の変遷と理論的背景(岩本)				
3	学習指導要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針(岩本)				
4	指導計画を作成するには(瀬川)				
5	指導計画の実際(1)ー幼稚園ー(瀬川)				
6	指導計画の実際(2)ー保育所ー(瀬川)				
7	指導計画の実際(3)ー部分実習指導案ー(瀬川)				
8	幼稚園、保育所における教育課程・保育課程編成の基礎知識、小テスト(岩本)				
9	カリキュラムの類型、スコープとシーケンス(岩本)				
10	文化伝達としての教育課程(岩本)				
11	子ども中心主義の教育課程(岩本)				
12	隠れたカリキュラム(岩本)				
13	教育・保育計画と評価(瀬川)				
14	教育・保育計画、教育課程とカリキュラム・マネジメント実践(瀬川)				
15	預かり保育と教育課程、まとめ(瀬川)				
期末	試験実施				
授業は、講義形式を中心としつつ、ワークシートを利用した少人数でのグループワークも取り入れて行う。 ワークシートは、授業において適宜フィードバックし、課題のポイントについて説明する。第8回の小テストは、その後の授業内で返却する。					
評価方法及び評価基準	①小テスト・ワークシート・課題等(50%) ③期末試験(50%)				
事前・事後学習の内容	予習・復習をして授業に臨むこと。特に復習を大切にすること。資料プリントを配布するので、該当箇所を熟読の上授業に臨むこと。(必要な事前学習については1.5時間、事後学習については、2.5時間が目安となる)				
履修上の注意	資料を整理するファイルを用意すること。				
テキスト	文部科学省『平成29年告示幼稚園教育要領解説』(フレーベル館)				978-4577812457
－	内閣府・厚生労働省・文部科学省『平成29年告示幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説』(フレーベル館)				978-4-577-81373-7
－	文部科学省『指導計画の作成と保育の展開 <平成25年7月改訂>(幼稚園教育指導資料 第1集)』(フレーベル館,2013年) 浅見佳子・宮里暁美・横山草介・瀬川千津子『子どもからはじまる保育の世界』(北樹出版,2018年)				978-4-577-81350-8
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	教育行政学		副題		
担 当 者	犬塚 典子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	教育に関する社会的, 制度的, 経営的事項を理解した上で, 幼稚園と地域との連携及び学校安全への対応について学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	○社会の状況を理解し、その変化が学校教育にもたらす影響とそこから生じる課題、並びにそれに対応するための教育政策の動向を理解する。(1)学校を巡る近年の様々な状況の変化を理解している。(2)子供の生活の変化を踏まえた指導上の課題を理解している。(3)近年の教育政策の動向を理解している。(4)諸外国の教育事情や教育改革の動向を理解している。 ○現代公教育制度の意義・原理・構造について、その法的・制度的仕組みに関する基礎的知識を身に付けるとともに、そこに内在する課題を理解する。(1)公教育の原理及び理念を理解している。(2)公教育制度を構成している教育関係法規を理解している。(3)教育制度を支える教育行政の理念と仕組みを理解している。(4)教育制度をめぐる諸課題について例示することができる。 ○学校や教育行政機関の目的とその実現について、経営の観点から理解する。 (1)公教育の目的を実現するための学校経営の望むべき姿を理解している。(2)学校における教育活動の年間の流れと学校評価の基礎理論を含めたPDCAの重要性を理解している。(3)学級経営の仕組みと効果的な方法を理解している。 (4)教職員や学校外の関係者・関係機関との連携・協働の在り方や重要性を理解している。 ○学校と地域との連携の意義や地域との協働の仕方について、取り組み事例を踏まえて理解する。 (1)地域との連携・協働による学校教育活動の意義及び方法を理解している。(2)地域との連携を基とする開かれた学校づくりが進められてきた経緯を理解している。 ○学校の管理下で起こる事件、事故及び災害の実情を踏まえて、学校保健安全法に基づく、危機管理を含む学校安全の目的と具体的な取組を理解する。(1)学校の管理下で発生する事件、事故及び災害の実情を踏まえ、危機管理や事故対応を含む学校安全の必要性について理解している。(2)生活安全・交通安全・災害安全の各領域や我が国の学校をとりまく新たな安全上の課題について、安全管理及び安全教育の両面から具体的な取組を理解している。				
授業の方法・授業計画					
1	公教育の原理及び理念				
2	公教育制度と関係法規				
3	教育行政の理念と仕組み				
4	教育制度の課題と改革				
5	学校を巡る近年の変化				
6	子どもの生活の変化を踏まえた指導上の課題				
7	日本・海外における教育政策の動向				
8	公教育の目的を実現するための学校経営				
9	学校経営における年間計画, 学校評価の基礎理論およびPDCAサイクルについて				
10	学級経営の仕組みと効果的な運営方法				
11	教職員や学校外の関係者・関係機関との連携・協働の在り方				
12	地域との連携・協働による学校教育活動の意義と方法				
13	地域との連携を基とする開かれた学校づくりの背景				
14	危機管理や事故対応のための学校安全の必要性				

15	安全管理・安全教育のための具体的な取組	
期末		
評価方法及び評価基準	期末試験, 授業中の活動を総合的に評価する。	
事前・事後学習の内容	事前学習としては、授業計画からテキストの該当箇所を予習し、事後学習としては、配付資料の復習やテキストの内容確認を行うこと(各回につき、事前・事後学習4時間を目安とする)。	
履修上の注意	・授業後は、配付資料の整理・確認を行うこと。 ・欠席授業分の資料が欲しい場合は、各自の責任において対応すること。 ・日頃から保育・教育に関する社会の出来事や情報に積極的な関心をもって生活し、自分なりの意見をもつことが望ましい。	
テキスト	谷田貝公昭・高橋弥生『幼稚園の教育経営』一藝社、2015年。 文部科学省『幼稚園園教育要領(H29年公示)解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領(H29年公示)解説』 厚生労働省『「保育所保育指針(H29年公示)解説』	978-4863590960
—		
—		
参考文献		

科 目 名	教育行政学		副題		
担 当 者	犬塚 典子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	教育に関する社会的、制度的、経営的事項を理解した上で、幼稚園と地域との連携及び学校安全への対応について学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	○社会の状況を理解し、その変化が学校教育にもたらす影響とそこから生じる課題、並びにそれに対応するための教育政策の動向を理解する。(1)学校を巡る近年の様々な状況の変化を理解している。(2)子供の生活の変化を踏まえた指導上の課題を理解している。(3)近年の教育政策の動向を理解している。(4)諸外国の教育事情や教育改革の動向を理解している。 ○現代公教育制度の意義・原理・構造について、その法的・制度的仕組みに関する基礎的知識を身に付けるとともに、そこに内在する課題を理解する。(1)公教育の原理及び理念を理解している。(2)公教育制度を構成している教育関係法規を理解している。(3)教育制度を支える教育行政の理念と仕組みを理解している。(4)教育制度をめぐる諸課題について例示することができる。 ○学校や教育行政機関の目的とその実現について、経営の観点から理解する。 (1)公教育の目的を実現するための学校経営の望むべき姿を理解している。(2)学校における教育活動の年間の流れと学校評価の基礎理論を含めたPDCAの重要性を理解している。(3)学級経営の仕組みと効果的な方法を理解している。 (4)教職員や学校外の関係者・関係機関との連携・協働の在り方や重要性を理解している。 ○学校と地域との連携の意義や地域との協働の仕方について、取り組み事例を踏まえて理解する。 (1)地域との連携・協働による学校教育活動の意義及び方法を理解している。(2)地域との連携を基とする開かれた学校づくりが進められてきた経緯を理解している。 ○学校の管理下で起こる事件、事故及び災害の実情を踏まえて、学校保健安全法に基づく、危機管理を含む学校安全の目的と具体的な取組を理解する。(1)学校の管理下で発生する事件、事故及び災害の実情を踏まえ、危機管理や事故対応を含む学校安全の必要性について理解している。(2)生活安全・交通安全・災害安全の各領域や我が国の学校をとりまく新たな安全上の課題について、安全管理及び安全教育の両面から具体的な取組を理解している。				
授業の方法・授業計画					
1	公教育の原理及び理念				
2	公教育制度と関係法規				
3	教育行政の理念と仕組み				
4	教育制度の課題と改革				
5	学校を巡る近年の変化				
6	子どもの生活の変化を踏まえた指導上の課題				
7	日本・海外における教育政策の動向				
8	公教育の目的を実現するための学校経営				
9	学校経営における年間計画、学校評価の基礎理論およびPDCAサイクルについて				
10	学級経営の仕組みと効果的な運営方法				
11	教職員や学校外の関係者・関係機関との連携・協働の在り方				
12	地域との連携・協働による学校教育活動の意義と方法				
13	地域との連携を基とする開かれた学校づくりの背景				
14	危機管理や事故対応のための学校安全の必要性				

15	安全管理・安全教育のための具体的な取組	
期末		
評価方法及び評価基準	期末試験, 授業中の活動を総合的に評価する。	
事前・事後学習の内容	事前学習としては、授業計画からテキストの該当箇所を予習し、事後学習としては、配付資料の復習やテキストの内容確認を行うこと(各回につき、事前・事後学習4時間を目安とする)。	
履修上の注意	・授業後は、配付資料の整理・確認を行うこと。 ・欠席授業分の資料が欲しい場合は、各自の責任において対応すること。 ・日頃から保育・教育に関する社会の出来事や情報に積極的な関心をもって生活し、自分なりの意見をもつことが望ましい。	
テキスト	谷田貝公昭・高橋弥生『幼稚園の教育経営』一藝社、2015年。 文部科学省『幼稚園園教育要領(H29年公示)解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領(H29年公示)解説』 厚生労働省『「保育所保育指針(H29年公示)解説』	978-4863590960
—		
—		
参考文献		

科 目 名	教育原理		副題		
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	教育の目的や意義、方法、評価、制度等について、学校教育を中心とし、それ以外の場面（家庭教育、社会教育・生涯学習、企業内教育等）にも触れつつ、「教え」と「学び」の概念に焦点を当てながら「教育」の意味を考察していく。その際、現代の「教育」を相対化する視点として、教育の歴史及び思想史をとりあげていく。また、受講生自らが受けてきた教育と学習の歴史を振り返る作業を通して、教育について理解を深めていく。そして、基礎知識や概念を学ぶことで、「教育」という営みについての考えをまとめ、現代のさまざまな教育問題・課題について考察していく。				
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は以下の2点である。第1に、これまでに受けてきた自らの「教育経験」を振り返り、「教育」と呼ばれる営みの意味を、教育学的見地から再考できるようになることである。第2に、さまざまな教育問題・課題に対する他者の考えを聴き、自分の考えを他者に伝えるというワークを通して、「教える」、「学ぶ」といった教育学の基礎概念を体験によって学ぶことである。それによって「教育とは何か」についての認識を一層深め、教育と学習のよりよいあり方に関して、客観性と説得力のある議論ができるようになることを目標とする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(1)(2)(5)、A-4(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーションおよびガイダンス ー自らの教育・学習経験を振り返る				
2	「教育」とは何か？ー教育概念の歴史の変遷と教育思想史（プラトン、ソクラテスからデューイ、ロジャーズまで）				
3	発達と教育 ー「教えない」教育(児童中心主義の落とし穴)				
4	「教え」と「学び」の概念的関係と教育的意図 ー「教育」の範囲				
5	何を「教え」、何を「学ぶ」のか？ーコメニウスの「学校教育」構想からルソー、ペスタロッチの教育思想へ				
6	人はどのように「学ぶ」のか？ ー状況に埋め込まれた学習				
7	教育における「評価」とは？ ー指導と評価				
8	学校教育における「評価」の意味 ー教員は「評価」抜きに「相談」できるか？				
9	「教え」と「学び」を支える教育関係 ー教育関係論				
10	どのように「教え」るべきか？ ー教育思想と教授法				
11	教師の役割と専門性 ーソクラテスから現代の教育思想にいたるまで				
12	親の役割と責任 ー家庭教育と学校教育（不登校からみる学校化社会）				
13	「教え」と「学び」を支える教育環境 ー生涯学習社会における「教育」と「学習」、教育の情報化				
14	特別支援教育と個性に応じた教育 ー「個に応じる」の意味とMI理論				
15	何が「よくて」、何が「わるい」のか？ ー道徳教育と教育的価値				
期末	試験実施せず				
討議する時間を多く設け、ワークシートに書き込みながら、考えを深められるように構成します。授業内容に関する疑問や質問については、授業中にとりあげて議論したり、ワークシートの記述を授業内でとりあげてフィードバックします。					
評価方法及び評価基準	ワークシート(45%)、課題(35%)、自己評価(20%)として評価します。				
事前・事後学習の内容	講義で扱う予定の内容に関するテキストの該当箇所を事前に読んでおくこと。また、講義で触れなかった部分を読んで復習し、考えを深めること。テキストや配布プリントを用いて予習・復習(各回につき4時間が目安)をしてください。				
履修上の注意	各講義では、それまでに学習した内容を前提とした話をする場合があります。欠席した場合には、講義の内容についてテキストで自学しておくこと。				
テキスト	木村元・小玉重夫・船橋一男〔著〕『教育学をつかむ』 有斐閣			978-4-641-17711-6	
ー					
ー					
参考文献	講義の中で、適宜紹介します。				

科 目 名	教育実習I		副題			
担 当 者	岩本 親憲、菅谷 正美					
開講期	集中	単位数	2	配当年次	4	
授業の概要	実習校における教育実習である。実習校でのオリエンテーション、講話、観察・見学、参加実習(学習指導、生徒指導、学級経営)、課外活動等への参加などがある。教職課程で学んできた知識や技術が、実際の教育現場ではどのように実践されているのかを確認し、自らの教師としての資質能力、実践的指導力を高めることを目指していく。					
授業のねらい・到達目標	①教師の行う多様な仕事を観察し、その一部を直接経験することで、教職の深さと責任の重さ、やりがいを実感すること。 ②実践を通して自らに足りない知識や技術を確認し、教師としての職務を遂行するうえで必要とされる最低限の知識と技能を身につけること。 ③児童・生徒の実態に応じた学習指導計画の立案および教育実践とその評価を通して、学習指導の在り方や計画と実践の関係を理解すること。 ④学習指導、道徳・人権教育、健康・安全教育、特別活動、教育相談・生徒指導等が、学習指導要領および学校における教育目標に基づいて行われていることを理解すること。 ⑤学級担任、校務分掌等の各種業務が、学校の組織的運営のもとに行われていることを理解すること。 ⑥学校教育が、家庭や地域との密接なかかわりのもとに行われていることを理解すること。 上記の6つの目標(共通課題)の他に、「教職実践演習」のための「履修ファイル」を用いて、これまでの大学における学修を振り返り、教育実習での学びをよりよいものにするために、「自己課題」を設定して教育実習に臨むことになります。 【履修ファイル対応項目:B-1(7),C-1(2),C2-(4),C-3(1)～(5),C-4(1)～(8),D-(1),D-2(1)～(7),D-3(1)～(5),D-4(1)～(6),D-5(1)～(3)】					
授業の方法・授業計画・補足説明						
上記「授業のねらい・到達目標」が達成されるよう、実習校でのオリエンテーション、講話、観察・見学、参加実習(学習指導、生徒指導、学級経営)、課外活動等への参加をとおして、教師としての資質能力、実践的指導力を高めることを目指していく。						
評価方法及び評価基準	実習校による評価、学生による自己評価、実習日誌、履修ファイル等を用いて、総合的に評価を行う。					
事前・事後学習の内容	教育課程およびこれまでの学習を整理し、充分な準備をして実習に臨むことが必要である。特に、授業計画(指導案)については、事前に充分研究し、指導教員の指導を受けてから、授業に臨むことが不可欠である。また、指導教員から受けた指導を日々振り返り、自己課題を整理し、必要な事柄を自ら学んでいくことが重要である。					
履修上の注意	目標を定め、自らの課題を意識しながら教育実習を経験してください。そして、教育実習を経験しながらも、その日の実践を振り返り、次の実習に活かせるよう、目標と課題を常に振り返るよう努めてください。					
テキスト	本学「教育実習の手引き」(教育実習指導で配付する)、本学「履修ファイル」、本学「実習ハンドブック」(本学ダイアリー)					
—						
—						
参考文献	特になし					

科 目 名	教育実習II		副題			
担 当 者	岩本 親憲、菅谷 正美					
開講期	集中	単位数	2	配当年次	4	
授業の概要	実習校における教育実習(中学校社会科)である。実習校でのオリエンテーション、講話、観察・見学、参加実習(学習指導、生徒指導、学級経営)、課外活動等への参加などがある。教職課程で学んできた知識や技術が、実際の教育現場ではどのように実践されているのかを確認し、自らの教師としての資質能力、実践的指導力を高めることを目指していく。					
授業のねらい・到達目標	①教師の行う多様な仕事を観察し、その一部を直接経験することで、教職の深さと責任の重さ、やりがいを実感すること。 ②実践を通して自らに足りない知識や技術を確認し、教師としての職務を遂行するうえで必要とされる最低限の知識と技能を身につけること。 ③児童・生徒の実態に応じた学習指導計画の立案および教育実践とその評価を通して、学習指導の在り方や計画と実践の関係を理解すること。 ④学習指導、道徳・人権教育、健康・安全教育、特別活動、教育相談・生徒指導等が、学習指導要領および学校における教育目標に基づいて行われていることを理解すること。 ⑤学級担任、校務分掌等の各種業務が、学校の組織的運営のもとに行われていることを理解すること。 ⑥学校教育が、家庭や地域との密接なかかわりのもとに行われていることを理解すること。 上記の6つの目標(共通課題)の他に、「教職実践演習」のための「履修ファイル」を用いて、これまでの大学における学修を振り返り、教育実習での学びをよりよいものにするために、「自己課題」を設定して教育実習に臨むことになります。 【履修ファイル対応項目:B-1(7),C-1(2),C2-(4),C-3(1)～(5),C-4(1)～(8),D-(1),D-2(1)～(7),D-3(1)～(5),D-4(1)～(6),D-5(1)～(3)】					
授業の方法・授業計画・補足説明						
上記「授業のねらい・到達目標」が達成されるよう、実習校でのオリエンテーション、講話、観察・見学、参加実習(学習指導、生徒指導、学級経営)、課外活動等への参加をとおして、教師としての資質能力、実践的指導力を高めることを目指していく。						
評価方法及び評価基準	実習校による評価、学生による自己評価、実習日誌、履修ファイル等を用いて、総合的に評価を行う。					
事前・事後学習の内容	教育課程およびこれまでの学習を整理し、充分な準備をして実習に臨むことが必要である。特に、授業計画(指導案)については、事前に充分研究し、指導教員の指導を受けてから、授業に臨むことが不可欠である。また、指導教員から受けた指導を日々振り返り、自己課題を整理し、必要な事柄を自ら学んでいくことが重要である。					
履修上の注意	目標を定め、自らの課題を意識しながら教育実習を経験してください。そして、教育実習を経験しながらも、その日の実践を振り返り、次の実習に活かせるよう、目標と課題を常に振り返るよう努めてください。					
テキスト	本学「教育実習の手引き」(教育実習指導で配付する)、本学「履修ファイル」、本学「実習ハンドブック」(本学ダイアリー)					
—						
—						
参考文献	特になし					

科 目 名	教育実習指導			副題	
担 当 者	岩本 親憲、菅谷 正美				
開講期	通年	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	事前指導として、教育実習の目的と内容および諸注意・心得について講義を行い、教育実習に行く前に準備しておくべき事柄と教育実習に必要な基礎知識を学ぶ。また、実習校との事前のやり取り、教育実習における実習校における振る舞い等、マナーや基本的な態度についても指導する。そして、教育実習を有意義なものとするために、教職への意識を高められるよう、「履修ファイル」を用いて、教師として必要な資質・能力について確認していく。 事後指導においては、実習報告と討議をおこない、レポートを提出してもらうことで教育実習の経験を批判的に振り返り、自らの足りない知識や技術等の課題を理解させる。				
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は、以下の3点である。第1に、教育実習を行う意味を理解すること。その為に、教育実習のガイダンスおよびオリエンテーションを行う。事前指導として、実習期間を有効に活用するための準備についての意識を向上させる。第2に、教育実習において学校教育現場を直接観察・参加することで、教職の意義ややりがいを知ると同時に教職の大変さを知ることとなる。それによって、教員となるための自らの資質を確かめ、教職への意欲を高められるよう指導する。第3に、これまで生徒・学生の視点からみてきた「教育」という営みを、教師の視点から捉えられるようになることを目標とする。 【「履修ファイル」の対応項目：B－1(7)、C－1(2)、C－2(4)、C－3(1)～(5)、C－4(1)～(8)、D－1(1)、D－2(1)～(7)、D－3(1)～(5)、D－4(1)～(6)、D－5(1)～(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、教育実習の意義と目的			16	実習の報告と反省(実習における自己課題の確認、グループディスカッション)、実習日誌・記録と課題の確認
2	教育実習とは何か、教育実習の基礎知識			17	実習の自己評価、実習現場の評価と自己評価との比較検討
3	実習内規の説明、実習の日程と配当等について			18	実習を通しての自己課題のレポート提出・グループディスカッション
4	実習の心構え、留意点、「望ましい教育実習生」とは			19	
5	実習に対する抱負についてレポート提出・グループディスカッション			20	
6	実習現場の理解(現場の教員による講演)			21	
7	実習校でのオリエンテーションの受け方等について			22	
8	実習のねらいと内容、自己課題の設定			23	
9	安全への配慮と事故への対応			24	
10	学習指導案、実習の評価について			25	
11	実習テーマ(自己課題)と履修ファイルについて			26	
12	実習日誌の書き方、手引きの活用、記録等について			27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法及び評価基準	受講態度(30%)・授業における課題(60%)・自己評価(10%)をもとに、総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	教育実習に関する資料や文献、手引き、履修ファイル等を用いて、事前準備をしっかりとってから実習に臨むことが必要です。また、自己課題については、特に、自ら資料等を調べ、教員に質問しに行き、実習を有効にするための学習が不可欠です。事後指導においても、実習の課題について、授業外の時間に「履修ファイル」を用いて自ら振り返る時間を設けることが必要です。授業の事前事後学習については、各回1.0時間(予習0.5時間、0.5時間)が目安となります。				
履修上の注意	事後指導においては、個別面談による実習の振り返りの時間を設けます。				
テキスト	本学の教育実習の手引き、教育実習日誌、履修ファイルを使用する。				
－					
－					
参考文献	教育実習を考える会 編、『新編 教育実習の常識―事例にもとづく必須66項』、蒼丘書林 柴田義松・木内剛 編著(2011)、『教育実習ハンドブック[改訂版]』、学文社 高野和子・岩田康之 編(2010)、『教育実習 〔教師教育テキストシリーズ15〕』、学文社 その他にも、講義のテーマに関係する参考書および参考資料を授業の中で適宜紹介する。				

科 目 名	教育心理学		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	子どもを取り巻く環境が変化し、学びの質がより問われるようになった今日、教育の理解や改善のために教育心理学が果たすべき役割はますます高まっている。本講義では、教育の対象である子どもの発達や学習に関する理解を深め、子どもの学びを支える環境(指導や評価、学級経営のあり方など)について学習する。				
授業のねらい・到達目標	本講義では、教育に関する心理学的知見を広く紹介し、子どもの心身の発達および学びの過程について基礎的な知識を身につけ、各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解することを目標とする。 ＜到達目標＞ 1)子どもの心身の発達に対する外的及び内的要因の相互作用、発達に関する代表的理論を踏まえ、発達の概念及び教育における発達理解の意義について説明することができる。 2) 乳幼児期から青年期の各時期における運動・言語・認知・社会性の発達について、その具体的な内容について説明することができる。 3) 様々な学習の形態や概念及びその過程を説明する代表的理論の基礎について説明することができる。 4) 主体的学習を支える動機づけ・集団づくり・学習評価の在り方について、発達の特徴と関連付けて説明することができる。 5) 幼児、児童及び生徒の心身の発達を踏まえ、主体的な学習活動を支える指導の基礎となる考え方について整理して述べることができる。 【履修ファイル対応項目】A-4(3),B-1(1)(3)～(7),B-2(1)～(6)				
授業の方法・授業計画					
1	教育心理学とは				
2	発達段階と発達課題				
3	発達を規程する要因一かえるの子はかえる？一				
4	動機づけ一無気力を防いで意欲を高めるには？一				
5	学習のメカニズム(1)行動主義				
6	学習のメカニズム(2)認知主義・状況主義				
7	社会性を育む一子どもは人間関係のなかでどのように発達するのか？一				
8	学級集団一クラスはどのようにしてまとまるのか？一				
9	授業の心理学(1)学習指導の理論				
10	授業の心理学(2)協同学習				
11	授業の心理学(3)主体的・対話的で深い学びを実現するために				
12	教育評価を指導に活かす				
13	個別のニーズへの対応(1)不適応と心理臨床				
14	個別のニーズへの対応(2)特別支援教育				
15	教育心理学を実践に活かすには				
期末	試験実施				
基本的には講義形式で行うが、グループワークやディスカッション等の能動的な学修方法も取り入れる。予習の状況および理解度の確認のために、小テストを実施する。小テストについては、事後の授業で講評するので、定期試験の準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末試験の結果(70%)に、リアクションペーパー・小テストの得点(30%)を加点して評価する。				
事前・事後学習の内容	＊ 授業計画に基づき、事前に教科書を読んでおくこと。また必要な下調べや課題を作成するなど、予習を充分に行うこと。各回につき、2時間が目安となる。 ＊ また、授業後には、教科書と配付資料を読み、知識の定着を図ること。各回につき、2時間が目安となる。				
履修上の注意	授業への積極的な参加を求めます。				
テキスト	『実践につながる教育心理学』 櫻井茂男(監修)黒田祐二(編著)(北樹出版)				4779303257
－					
－					
参考文献	講義の中で、適宜紹介する。				

科 目 名	教育心理学		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	子どもを取り巻く環境が変化し、学びの質がより問われるようになった今日、教育の理解や改善のために教育心理学が果たすべき役割はますます高まっている。本講義では、教育の対象である子どもの発達や学習に関する理解を深め、子どもの学びを支える環境(指導や評価、学級経営のあり方など)について学習する。				
授業のねらい・到達目標	本講義では、教育に関する心理学的知見を広く紹介し、子どもの心身の発達および学びの過程について基礎的な知識を身につけ、各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解することを目標とする。 ＜到達目標＞ 1)子どもの心身の発達に対する外的及び内的要因の相互作用、発達に関する代表的理論を踏まえ、発達の概念及び教育における発達理解の意義について説明することができる。 2) 乳幼児期から青年期の各時期における運動・言語・認知・社会性の発達について、その具体的な内容について説明することができる。 3) 様々な学習の形態や概念及びその過程を説明する代表的理論の基礎について説明することができる。 4) 主体的学習を支える動機づけ・集団づくり・学習評価の在り方について、発達の特徴と関連付けて説明することができる。 5) 幼児、児童及び生徒の心身の発達を踏まえ、主体的な学習活動を支える指導の基礎となる考え方について整理して述べることができる。 【履修ファイル対応項目】A-4(3),B-1(1)(3)～(7),B-2(1)～(6)				
授業の方法・授業計画					
1	教育心理学とは				
2	発達段階と発達課題				
3	発達を規程する要因一かえるの子はかえる？一				
4	動機づけ一無気力を防いで意欲を高めるには？一				
5	学習のメカニズム(1)行動主義				
6	学習のメカニズム(2)認知主義・状況主義				
7	社会性を育む一子どもは人間関係のなかでどのように発達するのか？一				
8	学級集団一クラスはどのようにしてまとまるのか？一				
9	授業の心理学(1)学習指導の理論				
10	授業の心理学(2)協同学習				
11	授業の心理学(3)主体的・対話的で深い学びを実現するために				
12	教育評価を指導に活かす				
13	個別のニーズへの対応(1)不適応と心理臨床				
14	個別のニーズへの対応(2)特別支援教育				
15	教育心理学を実践に活かすには				
期末	試験実施				
基本的には講義形式で行うが、グループワークやディスカッション等の能動的な学修方法も取り入れる。予習の状況および理解度の確認のために、小テストを実施する。小テストについては、事後の授業で講評するので、定期試験の準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末試験の結果(70%)に、リアクションペーパー・小テストの得点(30%)を加えて評価する。				
事前・事後学習の内容	＊ 授業計画に基づき、事前に教科書を読んでおくこと。また必要な下調べや課題を作成するなど、予習を充分に行うこと。各回につき、2時間が目安となる。 ＊ また、授業後には、教科書と配付資料を読み、知識の定着を図ること。各回につき、2時間が目安となる。				
履修上の注意	授業への積極的な参加を求めます。				
テキスト	『実践につながる教育心理学』 櫻井茂男(監修)黒田祐二(編著)(北樹出版)				4779303257
－					
－					
参考文献	講義の中で、適宜紹介する。				

科 目 名	教育相談		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	不登校、いじめ、発達障害など、近年の学校現場には課題が山積しており、教育相談へのニーズは高まる一方である。教育相談は、子どもが自己理解を深め、好ましい人間関係を築きながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性を伸長し、人格を成長させることを支援する教育活動である。本講義では、教育相談に必要な基礎的な知識や概念について、体験的なワークやVTR視聴などを通して学び、子どもと教育をめぐる諸問題についての考察を深める。また保護者対象の相談や他機関との連携や協働的チーム援助のあり方についてもその特徴や留意点について検討していく。				
授業のねらい・到達目標	学校における教育相談の意義を理解し、教師として必要なカウンセリングの基礎的知識とスキルを修得し、子どもたちの抱える諸問題に対し、適切な対応ができるようになることを目標とする。 ＜到達目標＞ (1)学校における教育相談の意義と理論について説明することができる。 (2)教育相談を進める際に必要な基礎的知識(カウンセリングの理論や技法)について説明することができる。 (3)教育相談の具体的な進め方やポイント組織的な取り組みや連携の必要性について説明することができる。 【履修ファイル対応項目：A-3(2),B-2(2),D-1(2)】				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション				
2	教師に求められる臨床的視点				
3	教育相談とは何かー教師の行う教育相談の役割・特徴				
4	相談援助の理論				
5	相談援助の技術ー聴き方の基本的な心構えー				
6	相談援助の技術ー保護者対応の基本と相談の実際ー				
7	子ども理解ー発達の視点から子どもを理解するー				
8	子ども理解ー問題のアセスメントー				
9	子ども理解3ー問題行動のとらえ方ー				
10	いじめ問題への対応				
11	不登校への対応				
12	特別な支援を要する子どもへの対応ー支援の基本ー				
13	特別な支援を要する子どもへの対応ー支援の実際ー				
14	協働的チーム援助の実際				
15	まとめ				
期末	試験実施				
基本的には講義形式で授業を行うが、ロールプレイ、ディスカッションやプレゼンテーション等の能動的な学修方法も取り入れる。授業内で実施した課題については、事後の授業で出題の意図について説明し講評するので、定期試験の準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末試験(70%)およびリアクションペーパー・提出課題(30%)によって総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	＊ 授業計画に基づき、事前に教科書を読んでおくこと。また必要な下調べや課題を作成するなど、予習を充分に行うこと。各回につき、2時間が目安となる。 ＊ また、授業後には、教科書と配付資料を読み復習を行い、知識の定着を図ること。各回につき、2時間が目安となる。				
履修上の注意	日頃から、教育現場における課題に関心を持ち、積極的な参加を求めます。				
テキスト	西本絹子 『教師のための初等教育相談 日常から子どもに向き合うインクルーシブな発達支援』 萌文書林				978-4-89347-211-3
－					
－					
参考文献	授業中に指示する。				

科 目 名	教育相談		副題		
担 当 者	下山 晃司				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	本講義(複数の実習も含む)では学校心理学における「3段階の援助サービスモデル」に基づき、心理教育的な援助を必要とする児童・生徒に対する有効な支援の提供について、体系的に説明します。原則として学校現場を想定して講義を行います。家庭や職場等、どのような対人援助場面においても役立つ内容が含まれます。				
授業のねらい・到達目標	背景の全く異なる一人一人の問題に対して援助を提供する側の立場になった際、シンプルかつスピーディに援助プラン(何をすべきで、そのうち何が自分にはできるか)を立てられるようになることを目標とします。言い換えれば、「何をすればよいか分からないまま時間だけが過ぎる」ことがないようにすることです。 6・3・3と「教育を受けてきた側」の知識・経験を、今後の対人援助に活かせるようになることも目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	3段階の援助サービス				
3	1次的援助サービス(実習:「ダメだ、ダメだ」だけではダメ)				
4	2次的援助サービス1(実習:情報収集の枠組み)				
5	2次的援助サービス2(実習:みる・きく・はかるのアセスメント)				
6	2～3次的援助サービス(実習:褒めるピラミッド)				
7	3次的援助サービス1(実習:4種類のサポート)				
8	3次的援助サービス2(実習:スマートな援助計画)				
9	中間まとめ				
10	ノンバーバルの世界				
11	いじめ:被害者への対応				
12	いじめ:加害者への対応				
13	発達障害1(LD・ADHD)				
14	発達障害2(ASD)				
15	レポートフィードバック				
期末	試験実施なし				
講義および実習形式で行います。感想・質問等のリアクションペーパーを毎回配布します。次回授業の冒頭でいくつかを紹介し、コメントします。					
評価方法及び評価基準	中間試験(50%):前半の授業内容の理解度を測定する試験を実施します。 期末レポート(50%):課題内容や形式、評価の観点は授業内で説明します。 私語や学生証不携帯等、授業運営に非協力的な学生の受講もしくは単位は認定しません。 2/3以上の出席をしなかった学生についても単位を認定しません。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、該当部分の下調べをすること(目安として1時間)。 また、授業資料を用いて授業内容を復習し、課題に取り組むこと(目安として1時間)。				
履修上の注意	講義だけではなく、グループワーク、グループディスカッションも行います。コミュニケーション抜きでの対人援助はありませんので、知識のインプットだけでなく、積極的なアウトプット(質問・発言・リアクションペーパーへの記入)が歓迎されます。 6・3・3と「教育を受けた側」としての知識・経験をフル活用し、授業内容を自らの経験と結びつけて理解することを心がけてください。				
テキスト	授業内で指示します。				
—					
—					
参考文献	石隈利紀『学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』 誠信書房 文部科学省『平成29年度告示幼稚園教育要領解説』 文部科学省『平成29年度告示幼稚園連携型認定こども園教育・保育要領解説』				

科 目 名	教育相談		副題		
担 当 者	下山 晃司				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	本講義(複数の実習も含む)では学校心理学における「3段階の援助サービスモデル」に基づき、心理教育的な援助を必要とする児童・生徒に対する有効な支援の提供について、体系的に説明します。原則として学校現場を想定して講義を行います。家庭や職場等、どのような対人援助場面においても役立つ内容が含まれます。				
授業のねらい・到達目標	背景の全く異なる一人一人の問題に対して援助を提供する側の立場になった際、シンプルかつスピーディに援助プラン(何をすべきで、そのうち何が自分にはできるか)を立てられるようになることを目標とします。言い換えれば、「何をすればよいか分からないまま時間だけが過ぎる」ことがないようにすることです。 6・3・3と「教育を受けてきた側」の知識・経験を、今後の対人援助に活かせるようになることも目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	3段階の援助サービス				
3	1次的援助サービス(実習:「ダメだ、ダメだ」だけではダメ)				
4	2次的援助サービス1(実習:情報収集の枠組み)				
5	2次的援助サービス2(実習:みる・きく・はかるのアセスメント)				
6	2～3次的援助サービス(実習:褒めるピラミッド)				
7	3次的援助サービス1(実習:4種類のサポート)				
8	3次的援助サービス2(実習:スマートな援助計画)				
9	中間まとめ				
10	ノンバーバルの世界				
11	いじめ:被害者への対応				
12	いじめ:加害者への対応				
13	発達障害1(LD・ADHD)				
14	発達障害2(ASD)				
15	レポートフィードバック				
期末	試験実施なし				
講義および実習形式で行います。感想・質問等のリアクションペーパーを毎回配布します。次回授業の冒頭でいくつかを紹介し、コメントします。					
評価方法及び評価基準	中間試験(50%):前半の授業内容の理解度を測定する試験を実施します。 期末レポート(50%):課題内容や形式、評価の観点は授業内で説明します。 私語や学生証不携帯等、授業運営に非協力的な学生の受講もしくは単位は認定しません。 2/3以上の出席をしなかった学生についても単位を認定しません。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、該当部分の下調べをすること(目安として1時間)。 また、授業資料を用いて授業内容を復習し、課題に取り組むこと(目安として1時間)。				
履修上の注意	講義だけではなく、グループワーク、グループディスカッションも行います。コミュニケーション抜きでの対人援助はありませんので、知識のインプットだけでなく、積極的なアウトプット(質問・発言・リアクションペーパーへの記入)が歓迎されます。 6・3・3と「教育を受けた側」としての知識・経験をフル活用し、授業内容を自らの経験と結びつけて理解することを心がけてください。				
テキスト	授業内で指示します。				
—					
—					
参考文献	石隈利紀『学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』 誠信書房 文部科学省『平成29年度告示幼稚園教育要領解説』 文部科学省『平成29年度告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』				

科 目 名	教育の原理		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	教育は誰もが通り抜けてきているものでありながら、その本質に迫ろうとすると私たちの理解をすり抜けていく。教育は日々、具体的な問題に向き合う実践であるが、この答えのない本質に対する問いかけを欠いた途端、空虚なルーティンワークへと落ち込んでしまう危険性を秘めている。 本講義では教育の歴史やそうした歴史を創り上げてきた代表的な教育思想家たちの思想、理念を学ぶ。さらに現代の教育を巡る具体的な論点について吟味する中で、受講者一人ひとりが自分が体験してきた教育を相対化し、教育の本質について問うてもらうことを目的とする。 「教育の本質とは何か？」 これは解答のない問いではあるが、ソクラテスによる無知の知の提唱に見られるように、知っているつもりになっていた自分の無知を自覚し、問いを発することが実は教育の本質に近づくための唯一の手段なのではないか。受講生には教育に対する先入観を一度脇に置き、素朴な気持ちで問いを発してもらいたい。				
授業のねらい・到達目標	・教育の歴史やその歴史を築いてきた教育思想家たちの思想、理念を学び、理解すること。 ・学校、学習、子ども、家庭など、現代の教育を巡る諸問題について、それらの背後にある理論的な問題にまで考察を深め、理解すること。 ・上記のプロセスの中で自らの体験としての教育を相対化し、「教育の本質とはなにか？」という問いに向き合うこと。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(1)(2),A-4(1)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、受講生の教育に対する意識調査				
2	教育とは何か？-教育の目的-				
3	学びと学校				
4	教えることと学ぶこと				
5	教育の歴史① -ソクラテスの無知の知と教育-				
6	教育の歴史② -プラトンの理想国家と教育-				
7	教育の歴史③-近代の教育思想(ロックからフレーベルまで)と近代教育制度-				
8	教育の歴史④-家庭と仕事の関係の変質、デューイの教育学-				
9	教育の歴史⑤-デューイと民主主義の教育、新教育運動-				
10	教育と子どもの誕生				
11	教育と市場				
12	教育と権力-近代の教育装置としての学校-				
13	教育と子どもの自由-A. S. ニールの自由学校、ヴィゴツキーの遊び理論を手がかりに-				
14	反省的実践家としての教師(保育者)				
15	授業のまとめ				
期末	試験実施なし				
毎回の授業におけるワークシートは提出を課し、適宜コメントやポイントとなる記述にアンダーラインを付すなどして返却する。中間レポートと最終レポートはその結果が評価の中で大きなウェイトを占めることから、各自入念な準備が必要となる。					
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、ワークシートの記入などを含む授業中の活動(45%)と中間レポート(25%)、学期末レポート(30%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて紹介するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。 事前学習に1時間、事後学習に3時間が必要な目安となる。				
履修上の注意	講義科目ではあるが知識の獲得よりは受講者自身が毎回のトピックについて考え、学び合うことを重視する。そのため、毎回の授業にグループワークを設ける。積極的な参加を期待する。				
テキスト	文部科学省『平成29年告示幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』				
—					
—					
参考文献	西平直 『教育人間学のために』 東京大学出版会 プラトン 『メノン』 岩波文庫 中岡哲郎 『教師と生徒』 三一新書 その他、授業の中で適宜紹介する。				

科 目 名	教育の原理		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	教育は誰もが通り抜けてきているものでありながら、その本質に迫ろうとすると私たちの理解をすり抜けていく。教育は日々、具体的な問題に向き合う実践であるが、この答えのない本質に対する問いかけを欠いた途端、空虚なルーティンワークへと落ち込んでしまう危険性を秘めている。 本講義では教育の歴史やそうした歴史を創り上げてきた代表的な教育思想家たちの思想、理念を学ぶ。さらに現代の教育を巡る具体的な論点について吟味する中で、受講者一人ひとりが自分が体験してきた教育を相対化し、教育の本質について問うてもらうことを目的とする。 「教育の本質とは何か？」 これは解答のない問いではあるが、ソクラテスによる無知の知の提唱に見られるように、知っているつもりになっていた自分の無知を自覚し、問いを発することが実は教育の本質に近づくための唯一の手段なのではないか。受講生には教育に対する先入観を一度脇に置き、素朴な気持ちで問いを発してもらいたい。				
授業のねらい・到達目標	・教育の歴史やその歴史を築いてきた教育思想家たちの思想、理念を学び、理解すること。 ・学校、学習、子ども、家庭など、現代の教育を巡る諸問題について、それらの背後にある理論的な問題にまで考察を深め、理解すること。 ・上記のプロセスの中で自らの体験としての教育を相対化し、「教育の本質とはなにか？」という問いに向き合うこと。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(1)(2),A-4(1)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、受講生の教育に対する意識調査				
2	教育とは何か？-教育の目的-				
3	学びと学校				
4	教えることと学ぶこと				
5	教育の歴史① -ソクラテスの無知の知と教育-				
6	教育の歴史② -プラトンの理想国家と教育-				
7	教育の歴史③-近代の教育思想(ロックからフレーベルまで)と近代教育制度-				
8	教育の歴史④-家庭と仕事の関係の変質、デューイの教育学-				
9	教育の歴史⑤-デューイと民主主義の教育、新教育運動-				
10	教育と子どもの誕生				
11	教育と市場				
12	教育と権力-近代の教育装置としての学校-				
13	教育と子どもの自由-A. S. ニールの自由学校、ヴィゴツキーの遊び理論を手がかりに-				
14	反省的実践家としての教師(保育者)				
15	授業のまとめ				
期末	試験実施なし				
毎回の授業におけるワークシートは提出を課し、適宜コメントやポイントとなる記述にアンダーラインを付すなどして返却する。 中間レポートと最終レポートはその結果が評価の中で大きなウェイトを占めることから、各自入念な準備が必要となる。					
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、ワークシートの記入などを含む授業中の活動(45%)と中間レポート(25%)、学期末レポート(30%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて紹介するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。 事前学習に1時間、事後学習に3時間が必要な目安となる。				
履修上の注意	講義科目ではあるが知識の獲得よりは受講者自身が毎回のトピックについて考え、学び合うことを重視する。そのため、毎回の授業にグループワークを設ける。積極的な参加を期待する。				
テキスト	文部科学省『平成29年告示幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』				
—					
—					
参考文献	西平直 『教育人間学のために』 東京大学出版会 プラトン 『メノン』 岩波文庫 中岡哲郎 『教師と生徒』 三一新書 その他、授業の中で適宜紹介する。				

科 目 名	教育方法と技術			副題	
担 当 者	岩本 親憲、番匠 一雅				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	現在、私たちの身のまわりではIT化が急速に進展しており、教育の世界においても「情報化」が強力に進められてきています。しかし、ただ単に「情報機器」を使用して授業をすればよいではありません。教育の目的と学習者の実態等に応じて教育方法を工夫できることが重要です。 本講座は、教職を目指す学生が、将来教師として創造的な授業を生み出すことができるよう、教育方法および技術に関する基礎理論を理解し、基本的な教授方法を習得し、ICT(Information and Communication Technology)を活用して授業ができるようになることを目指します。				
授業のねらい・到達目標	・教育方法の基礎概念と諸理論を理解し、説明できるようになること ・個々のニーズに応じた適切な課題・宿題等を設定する方法を理解し、作成できるようになること ・主としてPCを使用した教材を作成し、教具(PCを含む)を活用するスキルを習得すること ・基本的な学習指導法・集団組織の方法を習得し、指導できるようになること ・PCを利用した学習指導法を習得し、指導できるようになること ・学習指導案・学習教材を製作できるようになること ・自作教材を利用した模擬授業の実演ができるようになること ・指導に応じた評価方法を理解し、評価できるようになること ・教育機器を活用する意義と、情報管理の重要性を理解すること 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)、D-2(1)～(7)、D-3(1)～(5)、D-4(1)～(6)、D-5(1)～(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	「教育方法」とは何か(岩本・番匠)			16	視聴覚教材の作成方法(番匠・岩本)
2	「授業」、「学習指導」とは何か(岩本)			17	視聴覚教材の作成(番匠)
3	教授理論(ソクラテス、コメニウス、ルソー)(岩本)			18	黒板、ホワイトボード、スライド、PCの使い方と学習指導(番匠)
4	教授理論(ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイ)(岩本)			19	プレゼンテーション技法(番匠)
5	カリキュラムの類型と教育方法(岩本)			20	プレゼンテーション技法の実演(番匠)
6	「授業」の設計、「教える」ことの意味(岩本)			21	表計算ソフトを活用した学習指導と情報管理(番匠)
7	「授業」の組織とクラス運営(岩本)			22	視聴覚メディアを活用した学習指導(番匠)
8	学習における個人差と教育方法(岩本)			23	PCを活用した学習指導、CAI(コンピューター支援による教授法)およびeラーニングシステムの理解(番匠)
9	授業における教師の基本的な役割と基礎技術(岩本)			24	教育メディアの活用を含んだ学習指導案の作成方法(番匠)
10	教授方法(講義法:教師中心の指導方法)(岩本)			25	模擬授業の実演①(グループ1)(番匠)
11	教授方法(グループ学習、討議法、劇化法:学習者中心の指導方法)(岩本)			26	模擬授業の実演②(グループ2)(番匠)
12	教育方法とメディア(視聴覚教育の方法)(岩本)			27	模擬授業の実演③(グループ3)(番匠)
13	教師中心の授業案作成(岩本)			28	学習指導と教育課程(番匠)
14	学習者中心の授業案作成(岩本)			29	学習指導の評価方法(番匠)
15	教育方法の理論に関するまとめ(岩本)			30	教育方法と技術:総括(番匠)
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
課題については授業内でチェックし、必要に応じて改善点を指導します。授業内にとどまらず、授業外の時間でも、担当教員の研究室を訪れ、適宜フィードバックを受けながら、課題をすすめてください。また、課題によっては、PCメール(添付ファイルを含む)等によって提出させ、授業内およびPCを通じてフィードバックします。					
評価方法及び評価基準	授業に臨む態度(20%)、授業中の作成物およびワークシート(30%)、模擬授業の実演(50%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	シラバスを読み、教科書で関連する箇所を事前に予習しておくことが基本である。PCで利用するアプリケーションは、授業時間外でも定期的に操作を行い、機能やメニュー構成を理解するよう心がけること。また、毎回、ワークシートか課題を出す。授業時間内に課題が完成しない場合には、翌週の授業の前日までに課題をEメールにて提出しておくこと。それぞれの授業の前後には、予習・復習(合わせて1.0時間程度)をし、必要な課題を必ず済ませてから授業に臨むこと。				
履修上の注意	取得希望の免許種に応じた『学習指導要領』を参照しながら、受講すること。				
テキスト	『教育の方法と技術』平沢茂 図書文化 定価2,100円				978-4810064643
—					
—					
参考文献	中学校、高等学校、特別支援学校等の取得希望免許に関する『学習指導要領』及び『学習指導要領解説』				

科 目 名	教職概論		副題		
担 当 者	犬塚 典子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	職業としての保育者（保育士・幼稚園教諭）について、関係法令を知るとともに、その制度的位置づけを確認する。また、保育・教育職として、その仕事の内容や責務について理解する。さらに、保育者の専門性について考え、保育者同士が協働し合い、保護者や地域社会・専門機関等と連携しながら成長するありようについて学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	1. 保育士・幼稚園教諭の制度的位置づけおよびその役割と意義について理解できる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(2)(4),A-4(1)】 2. 保育者の職務内容および専門性について理解できる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(4),A-4(1)(3),C-1(1)(2)】 3. 専門職としての保育者について各々の保育者像を形成し、成長し続ける姿勢の意義を認識できる。 【「履修ファイル」の対応項目：C-1(1)】				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション（保育者の役割） *【履修ファイル】持参				
2	保育者の倫理				
3	保育者の資格と責務				
4	養護と教育				
5	保育者の資質と能力				
6	専門的な知識・技術・判断				
7	保育の省察				
8	保育課程にかかわる保育者の専門性				
9	保育者の専門性と自己評価				
10	園での協働				
11	専門機関との連携				
12	保護者および地域社会との協働				
13	家庭的保育者等との連携				
14	保育者の専門性の発達				
15	保育者のキャリア形成				
期末	試験実施				
講義を中心とするが、配付資料の読み取りやテーマに関する検討などの際、グループでの話し合いなども行う予定である。また、自らの保育者像を形成していくために、テーマについての意見をリアクションペーパーを用いて記述する機会を適宜設ける。					
評価方法及び評価基準	授業中の活動、期末試験を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習としては、授業計画からテキストの該当箇所を予習し、事後学習としては、配付資料の復習やテキストの内容確認を行うこと（各回につき、事前・事後学習4時間を目安とする）。こうした学習の過程で、自らの保育観・保育者観を磨くことが期待される。				
履修上の注意	・授業後は、配付資料の整理・確認を行うこと。 ・欠席授業分の資料が欲しい場合は、各自の責任において対応すること。 ・日頃から保育・教育に関する社会の出来事や情報に積極的な関心をもって生活し、自分なりの意見をもつことが望ましい。				
テキスト	児童育成協会監修・矢野誠慈郎・天野珠路編『保育者論 第2版』（中央法規出版、2017年） 文部科学省『幼稚園園教育要領（H29年公示）解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領（H29年公示）解説』 厚生労働省『「保育所保育指針（H29年公示）解説』				978-4-8058-5604-8 C3036
—					
—					
参考文献	田園調布学園大学教職課程委員会編『田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科履修ファイル』* 大学より全員に配布				

科 目 名	教職概論		副題		
担 当 者	犬塚 典子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	職業としての保育者（保育士・幼稚園教諭）について、関係法令を知るとともに、その制度的位置づけを確認する。また、保育・教育職として、その仕事の内容や責務について理解する。さらに、保育者の専門性について考え、保育者同士が協働し合い、保護者や地域社会・専門機関等と連携しながら成長するありようについて学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	1. 保育士・幼稚園教諭の制度的位置づけおよびその役割と意義について理解できる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(2)(4),A-4(1)】 2. 保育者の職務内容および専門性について理解できる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(4),A-4(1)(3),C-1(1)(2)】 3. 専門職としての保育者について各々の保育者像を形成し、成長し続ける姿勢の意義を認識できる。 【「履修ファイル」の対応項目：C-1(1)】				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション（保育者の役割） *【履修ファイル】持参				
2	保育者の倫理				
3	保育者の資格と責務				
4	養護と教育				
5	保育者の資質と能力				
6	専門的な知識・技術・判断				
7	保育の省察				
8	保育課程にかかわる保育者の専門性				
9	保育者の専門性と自己評価				
10	園での協働				
11	専門機関との連携				
12	保護者および地域社会との協働				
13	家庭的保育者等との連携				
14	保育者の専門性の発達				
15	保育者のキャリア形成				
期末	試験実施				
講義を中心とするが、配付資料の読み取りやテーマに関する検討などの際、グループでの話し合いなども行う予定である。また、自らの保育者像を形成していくために、テーマについての意見をリアクションペーパーを用いて記述する機会を適宜設ける。					
評価方法及び評価基準	授業中の活動、期末試験を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習としては、授業計画からテキストの該当箇所を予習し、事後学習としては、配付資料の復習やテキストの内容確認を行うこと（各回につき、事前・事後学習4時間を目安とする）。こうした学習の過程で、自らの保育観・保育者観を磨くことが期待される。				
履修上の注意	・授業後は、配付資料の整理・確認を行うこと。 ・欠席授業分の資料が欲しい場合は、各自の責任において対応すること。 ・日頃から保育・教育に関する社会の出来事や情報に積極的な関心をもって生活し、自分なりの意見をもつことが望ましい。				
テキスト	児童育成協会監修・矢野誠慈郎・天野珠路編『保育者論 第2版』（中央法規出版、2017年） 文部科学省『幼稚園園教育要領（H29年公示）解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領（H29年公示）解説』 厚生労働省『「保育所保育指針（H29年公示）解説』				978-4-8058-5604-8 C3036
—					
—					
参考文献	田園調布学園大学教職課程委員会編『田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科履修ファイル』* 大学より全員に配布				

科 目 名	教職概論		副題		
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	教職を目指すうえで必要な基礎知識を学びながら、自らの適性を確かめ、意欲を高めていくことができるようにワークを取り入れていく。教職の意義、教員の役割、職務内容、教員に求められる資質・能力、服務制度・身分保障、教育専門職としての倫理、学校の教育活動の目標・内容、研修制度、教員養成と採用、学校教育の課題等を理解することで、教職への関心と理解を深めることができる内容とする。				
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は、以下の2点である。第1に「教職」がどのような職業であるのか理解し、説明できるようになることである。第2に、教師文化および教師の専門性について学ぶことで教職に対する自らの適性を考え、積極的に教職課程を履修していくこと、教育実習および教員採用試験にむけて主体的に学習していくことの重要性を理解できるようになることである。 【「履修ファイル」の対応項目：A－2(2)(4)、A－4(3)、B－3(3)、C－1(1)】				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション、教職への道①：大学で何を学ぶべきか				
2	教職への道②：教師になることの意味、教員養成のカリキュラム				
3	教職の歴史：教師像の変遷と教師論				
4	教育実習で何を学ぶのか：その歴史・改革・実際				
5	教師教育の制度①：教員養成と教員採用				
6	教師教育の制度②：教員研修の意義・種類・体系				
7	教師教育の制度③：初任者研修の制度、教員研修の課題				
8	教師の勤務と服務：教師の任用、身分保障、服務、職務と役割				
9	教師の日常世界①：新任教師が学ぶこと、教師文化				
10	教師の日常世界②：自己管理(ストレスコントロール)				
11	教師の専門性と力量				
12	教師の専門性とその変容				
13	学校と教師①：学校経営、アカウンタビリティ				
14	学校と教師②：新しいタイプの学校と教師				
15	まとめと討論				
期末	試験実施せず				
討議する時間を多く設け、ワークシートに書き込みながら、考えを深められるように構成します。授業内容に関する疑問や質問については、授業中にとりあげて議論したり、ワークシートの記述を授業内でとりあげてフィードバックします。					
評価方法及び評価基準	ワークシート(75%)、課題(15%)、自己評価(10%)として評価します。				
事前・事後学習の内容	講義で扱う予定の内容に関するテキストの該当箇所を事前に読んでおくこと。また、講義で触れなかった部分を読んで復習し、考えを深めること。テキストや配布プリントを用いて予習・復習(各回につき4時間が目安)をしてください。				
履修上の注意					
テキスト	小島弘道, 比神正行, 平井貴美代〔著〕『教師の条件——授業と学校をつくる力——』学文社				4-7620-1144-4
—					
—					
参考文献	授業の中で、適宜紹介します。				

科 目 名	教職実践演習(中・高)		副題			
担 当 者	岩本 親憲、菅谷 正美					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	4	
授業の概要	最初に「履修カルテ」や「ライフコース図」(これまで受けてきた教育歴やライフイベントと、今後の予想を図示したもの)を用いて、4年間の教職課程での履修および自らの人生を振り返る作業を行う。また、自己分析の一環として、「話し方、きき方」に関するワークシートや「エゴグラム」等を用いて、コミュニケーション能力および性格の分析を行う。 ①教師としての責任感・意欲・愛情、②社会性や人間関係能力、③スクールカウンセリング(生徒理解と相談)に関する基本的知識と技能、④学校運営、学級経営等の技能、⑤「知ること」や「教えること」への意欲や自信(学習指導の技能)の観点から、自己評価、学生同士の相互評価、指導教員による形成的評価を随時行い、最後にレポートを作成させ総括的に評価する。					
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は以下の2点である。第1に、これまでの教職課程の履修と自らの人生経験を振り返る作業を通して、4年間の履修の総括および自己分析(課題、長所・短所、コミュニケーションスキルの分析)を行い、客観的に自己評価ができるようになること。第2に、自己分析の結果と教師に必要な資質能力とを照らし合わせながら自らの教職への適性を考え、今後のキャリア形成における課題(不足している知識や技能等)と、その課題を解決するために必要な事柄を説明できるようになること。 【「履修ファイル」の対応項目: 全て】					
授業の方法・授業計画						
1	イントロダクションおよび構成的エンカウンター。「履修カルテ」を用いた振り返り(自己分析)と、教育実習の課題の確認。(岩本、菅谷)					
2	「ライフコース図」を用いた振り返り(自己分析)と自らの人生の課題の確認。「話し方、きき方」ワークシートによるコミュニケーションスキルの確認と訓練。(岩本)					
3	社会性・人間関係能力について (講義、討論、訓練) (岩本)					
4	教師に必要なとされる資質能力とは何か(講義、ペアワーク、討論) (岩本、菅谷)					
5	教師としての責任感・意欲・愛情とは① (教育実習で感じたこと、討論) (菅谷)					
6	教師としての責任感・意欲・愛情とは② (事例検討、討論) (菅谷)					
7	スクールカウンセリングに関する基本的知識と技能① (学級経営等の集団指導、特別支援教育とチーム援助、教育相談面接、守秘義務の扱い方) (岩本)					
8	スクールカウンセリングに関する基本的知識と技能② (アサーション、傾聴訓練、校内連携の方法、保護者対応、クレーム対応、) (岩本)					
9	教科指導に関する技能① (講義、教育実習での経験についてスピーチ) (菅谷)					
10	教科指導に関する技能② (講義、教育実習での経験についてスピーチ、討論) (菅谷)					
11	模擬授業(授業観察の方法、教師役・生徒役でのロールプレイ) (岩本、菅谷)					
12	模擬授業(教師役・生徒役でのロールプレイ、授業案の検討) (岩本、菅谷)					
13	模擬授業の授業分析と討論 (岩本、菅谷)					
14	ゲストティーチャー(現職の教員又は教員勤務経験者)による講話 (岩本、菅谷、ゲストティーチャー)					
15	「履修ファイル」の再確認および各自の課題と履修のまとめ (岩本、菅谷)					
期末	試験実施せず					
一人ひとりが自分の課題を確認しながら不十分な知識と技能を補うことができるように、VTRや実際の授業の観察、傾聴訓練のペアワーク、ワークシートによる作業、少人数での討論、プレゼンテーション、模擬授業等の多様な学習方法を組み合わせて学んでいく。課題については授業内でチェックし、必要に応じて改善点を指導します。授業内にとどまらず、授業外の時間でも、担当教員の研究室を訪れ、適宜フィードバックを受けながら、課題をすすめてください。						
評価方法及び評価基準	筆記試験は実施しない。受講態度(発言、発表、ペアワーク、コミュニケーションスキルの訓練、模擬授業、ロールプレイ)とレポートを基にして総合的に評価を行う。					
事前・事後学習の内容	授業および、教育実習と教職課程全体の記録(「履修ファイル」、成績評価)等を振り返り、自らに足りない課題を補う学習を随時すすんで行うこと。授業外の時間に「履修ファイル」を用いて自ら振り返る時間を設けることが必要です。それぞれの授業の前後には、予習・復習(合わせて1.0時間程度)をし、必要な課題を必ず済ませてから授業に臨むこと。					
履修上の注意	「教職実践演習」を受講できるのは、中学校社会、高校公民、高校福祉のいずれかの教育実習が修了している学生(もしくは、その見込み)に限られる。					
テキスト	原田恵理子・森山賢一編著『自己成長を目指す教職実践演習テキスト』(北樹出版、2014年)				978-4-7793-0406-4	
—	本学「履修ファイル」および教育実習に関する書類(教育実習の手引き、教育実習日誌や記録等)					
—						
参考文献	授業時に教材プリント・資料を配布する。また、講義のテーマに関係する参考書および参考資料を、授業の中で適宜紹介する。					

科 目 名	経済学		副題			
担 当 者	國見 真理子					
開講期	半期	単位数	2		配当年次	1
授業の概要	日常生活を取り巻く経済現象を理解するために必要な経済学の基礎概念に対する理解を深めます。その上で、ネット情報等を活用して個人や企業といった経済主体がどのように行動し、モノの値段はどのように決定されるのかといったミクロ経済学の基本を学びます。また、景気変動や失業率増加とその対策といったマクロ経済学の考え方を学びます。					
授業のねらい・到達目標	本講義では、第一に経済学の基礎概念の学習を通じて経済問題への興味をもつこと、第二に日本社会の現状に対する理解を深めること、そして第三にグローバル化が進む中で国際社会に対する関心を高めることという3点それぞれができるようになることを目標とします。 【履修ファイルの対応項目 A-5-(1)、(3)】					
授業の方法・授業計画						
1	はじめに					
2	経済学とは何か					
3	市場と競争-総論					
4	市場と競争2-各論:完全競争と不完全競争					
5	市場の失敗-総論					
6	市場の失敗2-各論:環境問題、政府規制の役割					
7	競争と戦略					
8	企業経済(ネットを活用して、日経平均株価を調べてみよう)					
9	日本経済(政府統計を利用して、日本経済の現状を知ろう)					
10	マクロ経済とは					
11	財政と金融-総論					
12	財政と金融2-各論:財政赤字(日本政府の赤字額について知ろう)					
13	国際経済-総論					
14	国際経済2-各論:比較優位と絶対優位					
15	経済社会の展望					
期末	試験実施					
講義を中心に、適宜、演習や視聴覚教材を取り入れます。						
評価方法及び評価基準	試験や課題提出による評価。					
事前・事後学習の内容	事前学習として、日頃から新聞、ネットやテレビの経済ニュースに目を通しておくこと(必要時間の目安は1.5時間)。そして、事後学習として、授業で学んだことや自分で入手した各種情報を活用しながら、経済について自分で考える姿勢を身に付けるように努めることを期待します(必要時間の目安は2.5時間)。					
履修上の注意						
テキスト						
—						
—						
参考文献	新井明・柳川範之・新井紀子『経済の考え方がわかる本』(岩波書店)					

科 目 名	経済学		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日常生活を取り巻く経済現象を理解するために必要な経済学の基礎概念に対する理解を深めます。その上で、ネット情報等を活用して個人や企業といった経済主体がどのように行動し、モノの値段はどのように決定されるのかといったミクロ経済学の基本を学びます。また、景気変動や失業率増加とその対策といったマクロ経済学の考え方を学びます。				
授業のねらい・到達目標	本講義では、第一に経済学の基礎概念の学習を通じて経済問題への興味をもつこと、第二に日本社会の現状に対する理解を深めること、そして第三にグローバル化が進む中で国際社会に対する関心を高めることという3点それぞれができるようになることを目標とします。 【履修ファイルの対応項目 A-5-(1)、(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	経済学とは何か				
3	市場と競争-総論				
4	市場と競争2-各論:完全競争と不完全競争				
5	市場の失敗-総論				
6	市場の失敗2-各論:環境問題、政府規制の役割				
7	競争と戦略				
8	企業経済(ネットを活用して、日経平均株価を調べてみよう)				
9	日本経済(政府統計を利用して、日本経済の現状を知ろう)				
10	マクロ経済とは				
11	財政と金融-総論				
12	財政と金融2-各論:財政赤字(日本政府の赤字額について知ろう)				
13	国際経済-総論				
14	国際経済2-各論:比較優位と絶対優位				
15	経済社会の展望				
期末	試験実施				
講義を中心に、適宜、演習や視聴覚教材を取り入れます。					
評価方法及び評価基準	試験や課題提出による評価。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、日頃から新聞、ネットやテレビの経済ニュースに目を通しておくこと(必要時間の目安は1.5時間)。そして、事後学習として、授業で学んだことや自分で入手した各種情報を活用しながら、経済について自分で考える姿勢を身に付けるように努めることを期待します(必要時間の目安は2.5時間)。				
履修上の注意					
テキスト					
—					
—					
参考文献	新井明・柳川範之・新井紀子『経済の考え方がわかる本』(岩波書店)				

科 目 名	公民科教育法Ⅰ		副題			
担 当 者	一柳 武					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3	
授業の概要	「公民科教育法Ⅰ」においては、高等学校学習指導要領に示された公民科各科目、現代社会、倫理、政治・経済それぞれの目標・内容・内容の取扱いについて理解し、公民科教育のあり方について考える。					
授業のねらい・到達目標	高等学校公民科の現代社会、倫理、政治・経済の各科目の目標・内容・内容の取扱いについて理解し、高等学校公民科教員として必要な基礎的知識を身につけることができる。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド A-4 教育の理念 (1)(3)(4) C-2 気配り (4) C-3 コミュニケーション (2) D-1 求められる応答性 (1) D-2 教育計画 D-3 教科指導の基本 部分に相当する。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション「公民科教育法Ⅰ」の概観					
2	公民科とは何か・公民科の歴史					
3	学習指導要領					
4	中学校学習指導要領との関連、高等学校公民科各科目の内容・連携					
5	新聞、インターネット、実物教材等の扱い方					
6	ディベート、討論、プレゼンテーション等様々な学習形態に関して					
7	主権者教育とは？					
8	「現代社会」の内容と学習指導① 現代社会の特質					
9	「現代社会」の内容と学習指導② グローバル化する現代社会					
10	「倫理」の内容と学習指導① 「倫理」教育の諸問題・論争点					
11	「倫理」の内容と学習指導② 人生における宗教のもつ意義 日本人の宗教観					
12	「政治・経済」の内容と学習指導① 「政治・経済」教育の諸問題・論争点					
13	「政治・経済」の内容と学習指導② 政治的な見方・考え方 経済的な見方・考え方					
14	評価の現状と課題					
15	まとめ 総合的学習との関連 授業評価と自己評価					
期末	試験実施せず					
①授業内で提出する提出物は、その授業内での重要事項について説明したり、それに対する自分の意見や考えをまとめるものである。						
②最終レポートについては、授業内で学習したことがらから課題を出し、それに関する自分の意見や考えをまとめるものである。授業中にしっかりノートを取り、要点をまとめておけば十分対応できる。改めて調べ直したりする必要はない。						
評価方法及び評価基準	レポート 毎授業ごとの提出物(50点) 最終レポート(50点)					
事前・事後学習の内容	・ 指導計画にて講義内容を確認し、高等学校公民科学習指導要領の該当部分を読む。(必要な事前学習については、1.5時間が目安となる。) ・ 講義内容を整理し、高等学校公民科教員として必要な基礎知識の定着をはかる。(必要な事後学習については、2.5時間が目安となる。)					
履修上の注意	・ 公民科教育法Ⅱを必ず履修すること ・ 毎授業ごとにリアクションペーパーもしくは課題を提出するので、欠席をするとその分のポイントが加算されない。					
テキスト	高等学校学習指導要領解説 公民編 教育出版 テキストは必ず購入すること。				978-4-316-30023-8	
—						
—						
参考文献	高等学校公民科教科書 現代社会 倫理 政治・経済(いずれも貸与する)					

科 目 名	公民科教育法Ⅱ		副題			
担 当 者	一柳 武					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3	
授業の概要	「公民科教育法Ⅱ」においては、履修者全員が現代社会、倫理、政治・経済の各科目について学習指導案を作成し、模擬授業を行うことにある。 なお、履修者の数により、学習指導案作成の時間を減らし、模擬授業の時間を増やす場合がある。					
授業のねらい・到達目標	公民科各科目の学習指導案を作成し、それに基づいて模擬授業を行い、高等学校公民科教育における実践的な指導力を身につけることができる。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド C-2 気配り (4) C-3 コミュニケーション (2) D-1 求められる応答性 (1) D-2 教育計画 D-3 教科指導の基本 D-4 生徒の興味・関心を活かした指導 部分に相当する。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション「公民科教育法Ⅱ」の概観					
2	学習指導案と授業の組み立て方					
3	学習指導案(現代社会) 教材研究					
4	学習指導案(現代社会) 指導案の作成					
5	模擬授業(現代社会)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ1)					
6	模擬授業(現代社会)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ2)					
7	学習指導案(倫理) 教材研究					
8	学習指導案(倫理) 指導案作成					
9	模擬授業(倫理)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ1)					
10	模擬授業(倫理)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ2)					
11	学習指導案(政治・経済) 教材研究					
12	学習指導案(政治・経済) 指導案作成					
13	模擬授業(政治・経済)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ1)					
14	模擬授業(政治・経済)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ2)					
15	まとめ 自己評価					
期末	試験実施せず					
①学習指導案の作成については、授業内ですべて作成することは不可能であり、各自が十分な教材研究をした上で指導案作成に臨みたい。						
②受講生同士で模擬授業を見学し、「模擬授業相互評価表」に記入することで、それぞれの良かった点や問題点等を指摘し合い、指導技術の向上に努める。						
評価方法 及び評価基準	学習指導案 及び 模擬授業					
事前・事後 学習の内容	・ 模擬授業をいかに組み立てていくか、教材研究および指導案作成に取り組む。(必要な事前学習については、3時間が目安となる。) ・ 模擬授業を通して、良かった点、悪かった点を「模擬授業反省」表に整理し、実習に行くまでの自己改善点を見出す。(必要な事後学習については、1時間が目安となる。)					
履修上の注意	公民科教育法Ⅰを必ず履修すること					
テキスト	高等学校学習指導要領解説 公民編 教育出版				973-4-316-30023-8	
—	テキストは必ず購入すること					
—						
参考文献	高等学校公民科教科書 現代社会 倫理 政治・経済(いずれも貸与する)					

科 目 名	高齢者福祉論I		副題			
担 当 者	今井 伸					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1	
授業の概要	超高齢社会到来の状況、高齢者の置かれた生活状況、生きがいの喪失や介護問題、高齢者の孤立など高齢者が直面している問題を学ぶ。そして、介護保険制度等の高齢者を支援する制度・施策、具体的な諸サービスを学ぶことにより、高齢者福祉実現への取組みを考えるきっかけにする。					
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、高齢者の置かれた生活状況と生活課題を理解し、高齢者を支援する制度・施策・支援方法を学ぶことを通して、望ましい高齢者福祉のあり方を考える糸口を得ることである。到達目標は、(1)日本の超高齢化の状況を理解し説明できる(2)高齢者の置かれた生活状況、生活課題を理解し説明できる(3)高齢者を支援する制度・施策・具体的サービスを理解し説明できる。					
授業の方法・授業計画						
1	少子高齢社会と介護問題					
2	高齢者・家族の生活実態と問題状況					
3	高齢者施策の発展過程					
4	高齢者介護の概念・対象・介護予防					
5	介護保険制度の概要(1)保険者・被保険者・財源等					
6	介護保険制度の概要(2)要介護認定・居宅介護支援等					
7	介護保険制度における国・市町村等の役割と実際					
8	高齢者への具体的サービス(1)居宅サービス・施設サービス					
9	高齢者への具体的サービス(2)地域密着型サービスその他					
10	老人福祉法、年金、医療制度等関連法制度					
11	就労・生きがい対策					
12	高齢者虐待の防止					
13	高齢者の移動の円滑化、居住の安定確保					
14	個人情報保護、情報開示・透明性の確保					
15	まとめ					
期末	試験実施					
講義を中心に行うが、できるだけ学生とのコミュニケーションを図る他、節目で小テストを行い、理解度を確認する。						
評価方法及び評価基準	試験による評価を行う(授業中に実施する小テストを含む)。授業中の態度(15%)、授業中に提出したレポート(15%)を評価し、試験結果(70%)に加点する。					
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、ノートを整理するなどして、知識の定着を図ること。なお、事前学習として1.5時間、事後学習として2.5時間を必要とする。					
履修上の注意	私語厳禁、携帯電話の使用を禁ずる。					
テキスト	2018年度版 みんなのあんしん介護保険 現代けんこう出版					
—						
—						
参考文献	わかる・みえる社会保障論 今井伸 みらい					

科 目 名	高齢者福祉論II		副題		
担 当 者	金 井 守				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	介護保険制度その他の高齢者を支援する制度・施策、具体的な諸サービスの内容、各組織や専門職の役割を理解し、具体的支援方法を学ぶことにより、利用者との関わりや多職種との協働を促進し、活用することができる。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、高齢者を支援する制度・サービス・支援方法を学ぶことを通して、福祉実践に反映でき、高齢者福祉の向上に貢献できることである。到達目標は、(1)高齢者を支援する制度・施策・具体的サービスが理解でき、説明できる、(2)関係する各組織や専門職の役割が理解でき、説明できる、(3)高齢者支援の具体的方法が理解でき、説明できる、(4)高齢者福祉の今後のあり方を考えることができ、説明できる、ことである。				
授業の方法・授業計画					
1	介護保険制度の仕組み				
2	介護保険制度における組織・団体、専門職の役割と実際				
3	介護保険制度におけるサービス(居宅、施設、地域密着型)				
4	介護報酬と介護保険財政				
5	地域包括支援センターの役割と実際				
6	介護過程の展開				
7	認知症ケア				
8	ターミナルケア				
9	自立に向けた介護方法				
10	高齢者のケアマネジメント				
11	介護と住環境				
12	老人福祉法その他関連法制度				
13	高齢者サービスの質の評価				
14	高齢者に対する支援の実際(事例)				
15	まとめ				
期末 試験実施					
授業内で実施した小テストやレポートは、添削して返却する。その際、講評を加えるので、定期試験に役立てること。					
評価方法及び評価基準	試験により評価を行う(授業中に実施する小テストを含む)。 小テスト(15%)、授業中に提出したレポート(15%)を評価し、試験結果(70%)に加点する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、テキストの通読やその他の下調べをしてから授業に出席すること。(1.5時間)授業後は、ノートの整理、疑問点に関する調べをするなどして知識の定着・拡大を図ること。(2.5時間)				
履修上の注意	毎回の授業にテキストを持ってくる。ノートを取る。				
テキスト	『社会福祉士シリーズ 第13巻 高齢者に対する支援と介護保険制度 第4版』 福祉臨床シリーズ編集委員会、東康祐、渡辺道代編集 弘文堂				9784335611797
—					
—					
参考文献	適宜提示する				

科 目 名		国語Ⅰ(日本語と子ども)		副題		日本語を知る	
担 当 者		染谷 裕子					
開講期		半期	単位数	2		配当年次	3
授業の概要		現代日本語の音声、文字、語彙、文法について、その成り立ちや基本的なしくみについて講義する。これらの知識を子どもの言語の発達と関連づけた上で、母語としての知識の獲得、語彙や表現の育成のために、自分たちの体験や現場での実例を参考にして、具体的にどのような教育方法が効果的であるかを考えていく。					
授業のねらい・到達目標		①子どものことばの成長を手助けするという重要な役割を担う者として、日本語の基本的な知識を習得し、活用できるようになる。 ②日本語に対する理解を含め他者とのコミュニケーションに活用できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】					
授業の方法・授業計画							
1	オリエンテーションー世界の中の日本語						
2	日本語の音1「しじみ」と「ちぢみ」						
3	日本語の音2「箸を持って橋の端を渡っておいで」						
4	日本語の音3 日本語の音を利用した遊び						
5	日本語の文字1「さくら」「サクラ」「桜」「櫻」「SAKURA」						
6	日本語の文字2「おおかみ」？「おうかみ」？「うなずく」？「うなづく」？						
7	日本語の文字3「漢字」の話流入の歴史、その利点と問題点、漢字教育など						
8	日本語の語彙1 泊まるなら「やどや」「旅館」「ホテル」？						
9	日本語の語彙2 味は「さっぱり」？「あっさり」？「すっきり」？						
10	日本語の語彙3 語彙を「増やす」ということ						
11	日本語のしくみ1 日本語は「主語」がない？						
12	日本語のしくみ2「彼が来た」と「彼は来た」						
13	日本語のしくみ3「ちょっと待った」の「た」は過去？						
14	ことば遊びの実践 指導案を書いてみよう						
15	まとめと総復習						
期末 試験実施せず							
講義形式の授業だが、一方的な授業で終わることはなく、毎回受講者の知識を確認したり、意見を聞いたりするので、積極的に授業にのぞむこと。原則として毎回授業内容についてのコメントを書いてもらい、事後の授業において紹介、講評する。授業内で実施した小テストは採点のうえ、事後の授業で返却するので十分に復習すること。							
評価方法及び評価基準		授業への参加度(10%)、毎回のコメントシート(30%)、レポート(20%)、小テスト(40%)で総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容		授業計画で必ず授業内容を確認し、下調べしてから授業に臨むこと。必要な事前学習は1.5時間程度である。授業後は、講義ノートを整理し、十分な復習を行い、知識の定着をはかり、小テストやまとめテストに備えること。事後学習にはおおむね2.5時間を要する。					
履修上の注意		「国語Ⅱ」と合わせて取ることが望ましい。					
テキスト		プリントを配付する。					
－							
－							
参考文献		『幼稚園教育要領』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 『実用国語辞典ポケット版』高橋書店					

科 目 名	国語II(文学と子ども)		副題	昔話・童話を読む	
担 当 者	鳶田 明子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	子どもの感性や表現力を豊かにするという保育の課題を考えるにあたって、文学作品を様々な視点をもってより深く理解し、鑑賞する能力を養うことは重要である。 本講義では、絵本・昔話・童話などをとりあげ、考察していく。作品の背景や関連作品についても紹介し、理解を深めていく。その過程において、作品の魅力を発見し、考え、表現する能力を身につける。				
授業のねらい・到達目標	1. 日本児童文学史の知識を習得し、代表作を読むことで、文学作品への理解を深めることができるようになる。 2. 子どもの実態や保育・教育のねらいに基づき、教材研究を適切に行うことができるようになる。 3. グループ活動を行うことによって、他の参加者と協力して、目的を達成することができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3), D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 文学・児童文学と子ども時代				
2	絵本を読む(絵と文の分類)				
3	日本児童文学史1(明治～大正)				
4	昔話を読む「桃太郎」				
5	童話を読む1 芥川龍之介作「蜘蛛の糸」				
6	童話を読む2 小川未明作「野ばら」				
7	童話を読む3 浜田廣介作「りゅうの目のなみだ」				
8	発表準備1 物語の魅力を伝える(内容紹介の方法)				
9	発表準備2 物語の魅力を伝える(解釈・鑑賞)				
10	発表1 物語の魅力を伝える(Aグループの発表と相互批評)				
11	発表2 物語の魅力を伝える(Bグループの発表と相互批評)				
12	発表3 物語の魅力を伝える(Cグループの発表と相互批評)				
13	日本児童文学史2(大正～昭和)				
14	児童文学を読む 中川李枝子作「いいいやえん」				
15	まとめ・総復習				
期末	期末試験実施なし				
・原則として、授業内で授業に関するコメントを書く。事後の授業にて、紹介及び講評する。 ・発表者に対する相互批評は、事後の授業において、紹介及び講評する。					
評価方法及び評価基準	授業内評価 授業への参加度10% レポート20% コメントシート30パーセント 小テスト40パーセントの総合で評価する。ただし、小テストを受験できる者は、全授業の2／3以上出席した者とする。				
事前・事後学習の内容	・授業計画にて講義内容を確認し、当該作品を読み、考察しておくこと。また、発表の準備を行うこと。(必要な事前学習については、1.5時間が目安となる。) ・授業後には、配付プリントを復習し、知識の定着をはかること。(必要な事後学習については、1.5時間が目安となる。) ・参考文献の『日本の童話名作選 昭和篇』を読み、レポートの準備をしておくこと。(必要な事前学習については、1時間が目安となる。)				
履修上の注意	プリント類を整理するためのファイルを用意すること。				
テキスト	授業中にプリントを配布する。				
—					
—					
参考文献	・芥川龍之介作『蜘蛛の糸・杜子春』(新潮文庫) ・『幼稚園教育要領解説』 ・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』				

科 目 名		国際関係論		副題	
担 当 者		藤森 智子			
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「国際関係論」は戦争と平和の問題を扱う総合的な学問といえるだろう。本講義では、国際社会における国家、集団、個々人が織りなす政治的・経済的・法的、さらには文化的諸関係などの今日的構造を考察するとともに、これらの歴史の実態を分析することに主眼を置く。国際政治・経済の構造を検討し、日本と諸外国との個別の関係をとり上げ考察する。				
授業のねらい・到達目標	国際政治や国際経済などの社会科学的方法を主としながら、文化論的・歴史学的アプローチを取り入れ、今日の国際社会の諸相を多角的に考察する視点を持てるようにする。				
授業の方法・授業計画					
1	国家・民族・「グローバリゼーション」				
2	19世紀の世界―「産業革命」・近代化・植民地				
3	20世紀の世界①―資本主義・社会主義				
4	20世紀の世界②―第一次大戦、第二次大戦				
5	米ソ冷戦からポスト冷戦へ				
6	朝鮮戦争				
7	ベトナム戦争				
8	地域紛争への視角				
9	地域紛争の現状				
10	宗教と紛争				
11	移民問題				
12	テロリズム				
13	日米関係				
14	日本と東アジア				
15	総括				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。					
評価方法及び評価基準	授業内の小テスト、リアクションペーパー、課題などの合計を60%、レポートを40%とする。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、該当する部分の下調べをしてから授業に臨むこと。関連する新聞記事やニュースに目を通すこと。授業後は、配布プリントを活用し、十分な復習を行い、知識の定着をはかること。各回の授業の予習に1.5時間、復習に2.5時間が目安となる。				
履修上の注意	「政治学」「民族と国家」の内容を踏まえた授業を行う。これら科目を履修していることが望ましい。				
テキスト	特になし。				
－					
－					
参考文献	原彬久『国際関係学講義 第5版』有斐閣,2016				

科 目 名	国際福祉論/国際福祉論II		副題		
担 当 者	引馬 知子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	本授業のねらいは、地球社会や世界の国々と人々がおかれた状況について、基礎的な用語やデータを把握した上で包括的に理解し、説明ができるようになることである。その上で、グローバル化時代における共同体、国、国際などを含むソーシャルガバナンスのあり方や、貧困及び格差問題をはじめとする国際福祉課題について興味と知識を深め、これらに関わり具体的な問題提起ができるようになる。 課題に対する先駆的な取り組み、その背景にある理論やモデルを学び、現代の福祉の限界や到達点を国際的な視野から考察できるようになる。				
授業のねらい・到達目標	グローバル化の進行に伴い、ヒト・モノ・カネ・情報は国境を越えて移動し、世界の国々の経済的・社会的な相互依存関係は高まりをみせている。また、“福祉国家”の恩恵を受ける人々がいる一方で、これらの制度の枠外にいる人々も多く、国際貧困ライン以下で暮らす人々は世界人口の1割以上を占めている。くわえて、地球全体でも一国内でも、貧困や社会参加(教育や労働等)における人々の間の格差が拡大している。 国境を越えて協働しなければ緩和および解決できない、さまざまな福祉課題が顕在化するなか、これに対してどのような新たな考え、動き、試みがあり、国際福祉からのアプローチは何を貢献しうるだろうか。事例や調査結果、いくつかの具体的な取り組みに触れつつ、授業を通じて皆で考えていきたい。				
授業の方法・授業計画					
1	国際福祉とは ―オリエンテーション				
2	世界のさまざまな地図から考えよう				
3	国際福祉と貧困・格差 ―現状把握				
4	国際福祉と貧困・格差 ―原因と課題				
5	国際社会福祉と債務				
6	国際社会福祉と国際組織				
7	国際福祉と人権				
8	国際福祉と支援				
9	国際福祉と人の移動(貿易、難民・避難民を含む)				
10	国際福祉の一課題を検討する ―児童労働(問題提起)				
11	国際福祉の一課題を検討する ―児童労働(取り組みの検討)				
12	国際社会福祉と国境を越えた取り組み ―EU				
13	国際福祉と国境を超えた取り組み ―日本と世界				
14	国際福祉と内なる国際化				
15	まとめ ガバナンスとアクティブシチズンシップ				
期末	試験実施せず				
社会問題や国際問題に興味をもって、日々のニュースや新聞等から学ぶこと。授業で課題が出された場合には、次の授業までに行うこと。					
評価方法及び評価基準	授業中の提出物30%、授業中の態度20%、期末レポート50%				
事前・事後学習の内容	予習として授業で指示のあった資料を熟読し、課題を行うこと。復習として、参考に配布した資料、紹介した本、ノートなどを再読して、学習内容の積み重ねを行うこと。毎回、予習1. 5時間、復習2. 5時間を行うことが目安となる。				
履修上の注意	ディスカッションに積極的に参加すること。				
テキスト	特になし				
―					
―					
参考文献	OECDの日本語翻訳出版物シリーズ(https://www.oecd.org/tokyo/publications/japanese-translations.htm) 国連やその専門機関の年次報告等				

科 目 名	子どもと運動I		副題			
担 当 者	茗井 香保里					
開講期	半期	単位数	1		配当年次	1
授業の概要	本授業では、乳幼児期の子どもの運動発達の重要性を理解し、様々な遊具の特性や活用方法および保育環境の留意点を学ぶことによって、楽しく運動するための知識や技術を身につける。 また、自らが実際に身体を動かす運動遊びの体験的な理解を通して、子どもの発育発達に即した身体活動を活発に展開できる態度・構えを養う。					
授業のねらい・到達目標	①乳幼児期の運動発達の重要性と基礎理論を理解し、説明できる。 ②運動遊びの活動を実際に体験し、理解を深め、実践に役立てることができる。 ③運動遊びの実際を体験し、支援者に必要な態度や構えを養い、表現できる。 ④運動遊びの場において、危険や安全について意識を向けることができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3),D-3(4)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション、基本の運動					
2	簡単なルールのある運動遊び					
3	短縄を使った運動遊びの体験的理解					
4	長縄を使った運動遊びの体験的理解					
5	フープを使った遊びの体験的理解					
6	ボールを使った運動遊びの体験的理解					
7	生活用品を使った運動遊びの体験的理解					
8	マットを使った運動遊びの体験的理解					
9	乳幼児の運動遊びの探求 グループワーク、ディスカッション					
10	様々な運動遊びの考案 グループワーク、ディスカッション					
11	活動案の作成					
12	活動案の発表(幼児)					
13	活動案の発表(乳児)					
14	活動案の修正、実践活動に向けて					
15	まとめ 生涯健康と運動遊び					
期末	試験実施なし					
*リアクションペーパーは、授業において適宜その重要箇所や問題点に触れ、受講生全体の授業理解へと繋げる。 *課題発表後は、理解の不十分な点や問題点について適宜フィードバックすると共に、必要に応じた補足を行う。						
評価方法及び評価基準	平常点(授業態度・提出物など)40%、授業内課題30%、レポート提出30%を基本とし得点の分布によっては配分を調整することがある。					
事前・事後学習の内容	事前: 日頃から子供を観察を行い、教科書の該当ページを熟読する。(毎回20分以上) 事後: 授業内容を振り返り、教科書やその他の文献を参考に、各自の授業ノートに書きまとめる。(毎回40分以上) また、保育・教育現場にいかすためにはどうしたら良いかを想像し、実践へ繋げられるよう心掛ける。					
履修上の注意	* 1回目は講義形式で行う。(1回目のみシューズ・着替え不要) * 体調管理には十分気を付け、休まず授業に参加できるよう心掛けること。(活動中のマスク着用はNG) * 運動着を基本として、運動にふさわしい服装で参加すること。(上衣のフード付き、下衣のジーンズ等はNG) * 装飾品ははずし、肩にかかる髪は必ず結び、爪の長さに留意し、安全に活動できるようにすること。 * 体育館では運動用シューズを持参すること。(教室移動の際には指示に注意) * 授業内容によって教室移動・服装などを変更することがあるため、教員の指示に注意すること。					
テキスト	茗井 香保里、『幼児の運動・身体表現―生涯健康とライフキャリア発達』、推敲舎					978-4-908107-13-9
―						
―						
参考文献	必要に応じて、授業内にて紹介する。					

科 目 名	子どもと運動I		副題		
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	本授業では、乳幼児期の子どもの運動発達の重要性を理解し、様々な遊具の特性や活用方法および保育環境の留意点を学ぶことによって、楽しく運動するための知識や技術を身につける。 また、自らが実際に身体を動かす運動遊びの体験的な理解を通して、子どもの発育発達に即した身体活動を活発に展開できる態度・構えを養う。				
授業のねらい・到達目標	①乳幼児期の運動発達の重要性と基礎理論を理解し、説明できる。 ②運動遊びの活動を実際に体験し、理解を深め、実践に役立てることができる。 ③運動遊びの実際を体験し、支援者に必要な態度や構えを養い、表現できる。 ④運動遊びの場において、危険や安全について意識を向けることができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、基本の運動				
2	簡単なルールのある運動遊び				
3	短縄を使った運動遊びの体験的理解				
4	長縄を使った運動遊びの体験的理解				
5	フープを使った遊びの体験的理解				
6	ボールを使った運動遊びの体験的理解				
7	生活用品を使った運動遊びの体験的理解				
8	マットを使った運動遊びの体験的理解				
9	乳幼児の運動遊びの探求 グループワーク、ディスカッション				
10	様々な運動遊びの考案 グループワーク、ディスカッション				
11	活動案の作成				
12	活動案の発表(幼児)				
13	活動案の発表(乳児)				
14	活動案の修正、実践活動に向けて				
15	まとめ 生涯健康と運動遊び				
期末	試験実施なし				
*リアクションペーパーは、授業において適宜その重要箇所や問題点に触れ、受講生全体の授業理解へと繋げる。 *課題発表後は、理解の不十分な点や問題点について適宜フィードバックすると共に、必要に応じた補足を行う。					
評価方法及び評価基準	平常点(授業態度・提出物など)40%、授業内課題30%、レポート提出30%を基本とし得点の分布によっては配分を調整することがある。				
事前・事後学習の内容	事前: 日頃から子供を観察を行い、教科書の該当ページを熟読する。(毎回20分以上) 事後: 授業内容を振り返り、教科書やその他の文献を参考に、各自の授業ノートに書きまとめる。(毎回40分以上) また、保育・教育現場にいかすためにはどうしたら良いかを想像し、実践へ繋げられるよう心掛ける。				
履修上の注意	* 1回目は講義形式で行う。(1回目のみシューズ・着替え不要) * 体調管理には十分気を付け、休まず授業に参加できるよう心掛けること。(活動中のマスク着用はNG) * 運動着を基本として、運動にふさわしい服装で参加すること。(上衣のフード付き、下衣のジーンズ等はNG) * 装飾品ははずし、肩にかかる髪は必ず結び、爪の長さに留意し、安全に活動できるようにすること。 * 体育館では運動用シューズを持参すること。(教室移動の際には指示に注意) * 授業内容によって教室移動・服装などを変更することがあるため、教員の指示に注意すること。				
テキスト	茗井 香保里、『幼児の運動・身体表現―生涯健康とライフキャリア発達』、推敲舎			978-4-908107-13-9	
―					
―					
参考文献	必要に応じて、授業内にて紹介する。				

科 目 名	子どもと運動I		副題		
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	本授業では、乳幼児期の子どもの運動発達の重要性を理解し、様々な遊具の特性や活用方法および保育環境の留意点を学ぶことによって、楽しく運動するための知識や技術を身につける。 また、自らが実際に身体を動かす運動遊びの体験的な理解を通して、子どもの発育発達に即した身体活動を活発に展開できる態度・構えを養う。				
授業のねらい・到達目標	①乳幼児期の運動発達の重要性と基礎理論を理解し、説明できる。 ②運動遊びの活動を実際に体験し、理解を深め、実践に役立てることができる。 ③運動遊びの実際を体験し、支援者に必要な態度や構えを養い、表現できる。 ④運動遊びの場において、危険や安全について意識を向けることができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、基本の運動				
2	簡単なルールのある運動遊び				
3	短縄を使った運動遊びの体験的理解				
4	長縄を使った運動遊びの体験的理解				
5	フープを使った遊びの体験的理解				
6	ボールを使った運動遊びの体験的理解				
7	生活用品を使った運動遊びの体験的理解				
8	マットを使った運動遊びの体験的理解				
9	乳幼児の運動遊びの探求 グループワーク、ディスカッション				
10	様々な運動遊びの考案 グループワーク、ディスカッション				
11	活動案の作成				
12	活動案の発表(幼児)				
13	活動案の発表(乳児)				
14	活動案の修正、実践活動に向けて				
15	まとめ 生涯健康と運動遊び				
期末	試験実施なし				
*リアクションペーパーは、授業において適宜その重要箇所や問題点に触れ、受講生全体の授業理解へと繋げる。 *課題発表後は、理解の不十分な点や問題点について適宜フィードバックすると共に、必要に応じた補足を行う。					
評価方法及び評価基準	平常点(授業態度・提出物など)40%、授業内課題30%、レポート提出30%を基本とし得点の分布によっては配分を調整することがある。				
事前・事後学習の内容	事前: 日頃から子供を観察を行い、教科書の該当ページを熟読する。(毎回20分以上) 事後: 授業内容を振り返り、教科書やその他の文献を参考に、各自の授業ノートに書きまとめる。(毎回40分以上) また、保育・教育現場にいかすためにはどうしたら良いかを想像し、実践へ繋げられるよう心掛ける。				
履修上の注意	* 1回目は講義形式で行う。(1回目のみシューズ・着替え不要) * 体調管理には十分気を付け、休まず授業に参加できるよう心掛けること。(活動中のマスク着用はNG) * 運動着を基本として、運動にふさわしい服装で参加すること。(上衣のフード付き、下衣のジーンズ等はNG) * 装飾品ははずし、肩にかかる髪は必ず結び、爪の長さに留意し、安全に活動できるようにすること。 * 体育館では運動用シューズを持参すること。(教室移動の際には指示に注意) * 授業内容によって教室移動・服装などを変更することがあるため、教員の指示に注意すること。				
テキスト	茗井 香保里、『幼児の運動・身体表現―生涯健康とライフキャリア発達』、推敲舎			978-4-908107-13-9	
―					
―					
参考文献	必要に応じて、授業内にて紹介する。				

科 目 名	子どもと運動II【エントリー】			副題	
担 当 者	外川 重信				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	アウトドアスポーツの中のキャンプの基本的な技術及び理論を学修する。学内で理論とその応用、集中授業としての学外でのキャンプでは、テントに宿泊し、自炊しながら、キャンプのゲーム、キャンプファイアー、登山、思い出作りなどのプログラムをおこなうことができるようにする。				
授業のねらい・到達目標	子どもを対象に、子どもの興味・関心を惹きつけて、キャンプ活動の意欲を高め、安全で楽しいキャンプ指導ができることとする。日本キャンプ協会公認のキャンプインストラクターの資格取得に準拠しており、資格試験も実施する。学内では、テキスト「キャンプ指導者入門」を用いて、その技術と理論を学ぶ。集中授業では、特に、飯ごう炊飯、キャンプファイアー、集団登山、思い出作りが指導できるようにする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(授業説明、服装など)			16	キャンプの指導1(理論:インストラクターの役割、カウンセリング)
2	キャンプの特性1(理論:目的と意義、組織と種類)			17	キャンプの指導2(理論:コミュニケーションスキル)
3	キャンプの特性2(理論:ルールとマナー、環境教育)			18	キャンプの指導3(理論:観察と記録)
4	キャンプの対象1(理論:人間と自然)			19	キャンプの安全1(理論:考え方、実技:危険予知とその対処)
5	キャンプの対象2(理論:人間理解、自然理解)			20	キャンプの安全2(理論:安全管理と実際、事故判例)
6	キャンプの生活技術1(実技:ロープワーク、天気予報)			21	キャンプの安全3(実技:ファーストエイド、フィールド調査)
7	キャンプの生活技術2(実技:テント設営、工具及び道具の使用法)			22	日本キャンプ協会公認キャンプインストラクターの資格試験について
8	キャンプの生活技術3(実技:ガス器具による野外炊事)			23	全体のまとめと反省会
9	様々なアクティビティ1(実技:キャンプファイアーの進め方)			24	学外集中に充当(キャンプ生活の実際)
10	様々なアクティビティ2(実技:キャンプファイアーのゲーム)			25	学外集中に充当(コミュニケーション作りのためのゲーム)
11	様々なアクティビティ3(実技:キャンプファイアーの歌)			26	学外集中に充当(薪による野外炊事)
12	様々なアクティビティ4(実技:アイスブレイクゲーム)			27	学外集中に充当(日帰り登山:地図の見方、コンパスの使い方等の実践)
13	様々なアクティビティ5(実技:イニシアティブゲーム)			28	学外集中に充当(日帰り登山:集団登山の実践)
14	様々なアクティビティ6(実技:トラストゲーム)			29	学外集中に充当(キャンプファイアーの指導実践)
15	集中授業のオリエンテーション			30	学外集中に充当(思い出作りの工作)
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
授業内容の順番は、適時変更する場合がある。 また毎回、授業の始まりと終わりに「あいさつ」を実施する。学外集中では、8月中旬に2泊3日でおこない、その分後期の後半7回分は授業を実施しない。経費は、学内活動費(食事代など)、集中2泊3日キャンプ経費(交通費除く)で約8000円必要です。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習態度、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	(事前)授業計画にて授業内容を確認し、テキストで理論及び技術を熟読しておくこと。(事後)必ず復習をしておくこと。特に安全への配慮をしっかりとマスターすること。事前・事後の学習は、それぞれ0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	①体育館シューズを持参すること。②また日本キャンプ協会公認のキャンプインストラクターの資格取得の希望する学生は、別途15000円(予定)がかかります。				
テキスト	キャンプ指導者入門(監修)星野敏男、神崎清一、(社)日本キャンプ協会。必ず最新版を購入のこと。				
—					
—					
参考文献	必要に応じて配付する				

科 目 名	子どもと運動Ⅲ【エントリー】			副題	「指導」を考える
担 当 者	藤原 隆詞				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	講義・実技・指導実践・ディスカッション等を展開していく中で、こどもの発育発達や特徴を知り、接し方や伝え方(話し方や見せ方)・指導現場での留意事項等、さまざまな角度から「指導」に必要なことを考えます。 ※前期は主に知識を得ること(インプット)を中心とした展開、後期は主に知識を活用していくこと／表現していくこと(アウトプット)を中心とした展開になります。 ※川崎フロンターレスクールへの見学も予定しています。				
授業のねらい・到達目標	本授業を通じて、指導者になるための意識や心構えを身につけてください。 主要な到達目標は次の2点です。 ・自分の考えを伝えるために、事前の準備から発表に至るまで努力が出来る。 ・こどもの興味・関心を惹きつけて、活動への意欲を高めさせるための努力が出来る。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	前期ガイダンス＋実技 ゲーム			16	後期ガイダンス＋実技 ゲーム
2	実技 コミュニケーション			17	講義 コミュニケーションスキル(必要性／問答のスキル)
3	講義 こどもへの指導(環境の変化／指導の実際)			18	講義 コミュニケーションスキル(説明・報告・分析のスキル)
4	実技 動きづくり			19	実技 ボールフィーリング(蹴る)
5	講義 こどもへの指導(発育発達／特徴)			20	講義 スピーチトレーニング(論理的に話す)
6	実技 鬼ごっこ			21	講義 スピーチトレーニング(発表)
7	講義 コーチング法			22	講義 スピーチトレーニング(発表／まとめ)
8	実技 ボールフィーリング(ボールを扱う)			23	講義 指導実践に向けて(指導案作成)
9	実技 ボールフィーリング(運ぶ)			24	指導実践＋ディスカッション(Aグループ発表)
10	講義 熱中症とケガの処置			25	指導実践＋ディスカッション(Bグループ発表)
11	講義 いろいろな遊びを考えてみよう			26	指導実践＋ディスカッション(Cグループ発表)
12	実技 グループ指導実践			27	指導実践＋ディスカッション(Dグループ発表)
13	講義 前期テストに向けて			28	指導実践＋ディスカッション(Eグループ発表)
14	筆記テスト			29	指導実践(まとめ)
15	実技 ゲーム			30	実技 ゲーム
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
筆記テスト・スピーチ・指導実践等、アウトプットしてもらった内容に関しては、適宜、授業内でフィードバックしていきます。					
評価方法及び評価基準	授業へ積極的に取り組むことを前提として、実技・筆記テスト・スピーチ・指導実践・ディスカッション等を考慮し、総合的に判断します。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、必要な下調べをした上で目的意識をもって参加してください(事前学習)。 また、今後の実習や将来を見据えて、学んだことを身につけるようノートを作成、知識を定着させるために記録してください(事後学習)。 ※事前・事後学習にそれぞれ0.5時間程度を必要とします。				
履修上の注意	運動のできる服装、室内シューズを必ず用意してください。				
テキスト	特になし				
－					
－					
参考文献	「平成29年告示幼稚園教育要領解説」及び「平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」を参照してください。また、その他必要に応じて、随時授業中に紹介します。				

科 目 名	子どもと身体表現I		副題		
担 当 者	茗 井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	「感じること」を大切にしつつ、表現素材であり、表現媒体でもある自己の身体を知る。 幼児の身体表現や、その発達を理解する。また、身体表現の知識、技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための保育者に必要な感性を豊かにする。 具体的には、子どもの身体表現遊びを体験的に理解し、遊びの考案と実践を行う。				
授業のねらい ・到達目標	・保育者としてふさわしい身体感覚を身につけ、自らが楽しんで体で表現することができる。 ・幼児の豊かな身体表現活動を育む技術と方法を理解し、指導できる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション-子どもの身体表現とは				
2	表現素材であり、表現媒体である自己の身体を知る				
3	「曲線」を題材とした身体表現(一人、二人、四人、八人)				
4	題材「直線」による身体表現				
5	形と動き、静止と運動				
6	幼児のダンス-振付ダンス				
7	身体表現遊びの基本-動きのリズム				
8	身体表現遊びの基本-即興				
9	変身を楽しむ(玩具)				
10	変身を楽しむ(働く乗り物)				
11	「身近な自然」を題材にした身体表現(主題)				
12	「身近な自然」を題材にした身体表現(多様な表現)				
13	「身近な自然」を題材にした身体表現(構成)				
14	「身近な自然」を題材にした身体表現(発表)				
15	まとめ-実践につなげるための留意点(情報機器の活用)				
期末	試験実施なし				
リズムあそびや表現あそびを自ら体験しながら、現場での実践方法を探る実技授業である。 受講生にあたっては、童心に戻って素直に体を動かし仲間と積極的に関わること。 授業内で提出した課題は適宜フィードバックする。					
評価方法 及び評価基準	・学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合的に評価する。 授業での活動状況(60%)、課題(20%)、レポート(20%)として評価する。なお、授業への主体的かつ積極的な取り組み姿勢を重視する。				
事前・事後 学習の内容	事前学習は、教科書の該当ページを読む。 事後学習は、個人でノートを用意し、授業で学習したことについて、教科書や参考書を使用してまとめる。 毎回の予習・復習はそれぞれ30分以上を目安とする。				
履修上の注意	運動着(ジャージ等)に着替え、肩にかかる髪はまとめ、爪の長さに留意すること。 また、装飾品は取り外して各自管理すること。				
テキスト	『幼児の運動・身体表現－生涯健康とライフキャリア発達』 茗 井 香保里(著) 推敲舎				978-4-908107-13-9
－					
－					
参考文献	西洋子、本山益子編著『子どもの身体表現』市村出版				

科 目 名	子どもと身体表現I		副題		
担 当 者	茗 井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	「感じること」を大切にしつつ、表現素材であり、表現媒体でもある自己の身体を知る。 幼児の身体表現や、その発達を理解する。また、身体表現の知識、技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための保育者に必要な感性を豊かにする。 具体的には、子どもの身体表現遊びを体験的に理解し、遊びの考案と実践を行う。				
授業のねらい ・到達目標	・保育者としてふさわしい身体感覚を身につけ、自らが楽しんで体で表現することができる。 ・幼児の豊かな身体表現活動を育む技術と方法を理解し、指導できる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション-子どもの身体表現とは				
2	表現素材であり、表現媒体である自己の身体を知る				
3	「曲線」を題材とした身体表現(一人、二人、四人、八人)				
4	題材「直線」による身体表現				
5	形と動き、静止と運動				
6	幼児のダンス-振付ダンス				
7	身体表現遊びの基本-動きのリズム				
8	身体表現遊びの基本-即興				
9	変身を楽しむ(玩具)				
10	変身を楽しむ(働く乗り物)				
11	「身近な自然」を題材にした身体表現(主題)				
12	「身近な自然」を題材にした身体表現(多様な表現)				
13	「身近な自然」を題材にした身体表現(構成)				
14	「身近な自然」を題材にした身体表現(発表)				
15	まとめ-実践につなげるための留意点(情報機器の活用)				
期末	試験実施なし				
リズムあそびや表現あそびを自ら体験しながら、現場での実践方法を探る実技授業である。 受講生にあたっては、童心に戻って素直に体を動かし仲間と積極的に関わること。 授業内で提出した課題は適宜フィードバックする。					
評価方法 及び評価基準	・学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合的に評価する。 授業での活動状況(60%)、課題(20%)、レポート(20%)として評価する。なお、授業への主体的かつ積極的な取り組み姿勢を重視する。				
事前・事後 学習の内容	事前学習は、教科書の該当ページを読む。 事後学習は、個人でノートを用意し、授業で学習したことについて、教科書や参考書を使用してまとめる。 毎回の予習・復習はそれぞれ30分以上を目安とする。				
履修上の注意	運動着(ジャージ等)に着替え、肩にかかる髪はまとめ、爪の長さに留意すること。 また、装飾品は取り外して各自管理すること。				
テキスト	『幼児の運動・身体表現－生涯健康とライフキャリア発達』 茗 井 香保里(著) 推敲舎				978-4-908107-13-9
—					
—					
参考文献	西洋子、本山益子編著『子どもの身体表現』市村出版				

科 目 名	子どもと身体表現I		副題		
担 当 者	茗 井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	「感じること」を大切にしつつ、表現素材であり、表現媒体でもある自己の身体を知る。 幼児の身体表現や、その発達を理解する。また、身体表現の知識、技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための保育者に必要な感性を豊かにする。 具体的には、子どもの身体表現遊びを体験的に理解し、遊びの考案と実践を行う。				
授業のねらい ・到達目標	・保育者としてふさわしい身体感覚を身につけ、自らが楽しんで体で表現することができる。 ・幼児の豊かな身体表現活動を育む技術と方法を理解し、指導できる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション-子どもの身体表現とは				
2	表現素材であり、表現媒体である自己の身体を知る				
3	「曲線」を題材とした身体表現(一人、二人、四人、八人)				
4	題材「直線」による身体表現				
5	形と動き、静止と運動				
6	幼児のダンス-振付ダンス				
7	身体表現遊びの基本-動きのリズム				
8	身体表現遊びの基本-即興				
9	変身を楽しむ(玩具)				
10	変身を楽しむ(働く乗り物)				
11	「身近な自然」を題材にした身体表現(主題)				
12	「身近な自然」を題材にした身体表現(多様な表現)				
13	「身近な自然」を題材にした身体表現(構成)				
14	「身近な自然」を題材にした身体表現(発表)				
15	まとめ-実践につなげるための留意点(情報機器の活用)				
期末	試験実施なし				
リズムあそびや表現あそびを自ら体験しながら、現場での実践方法を探る実技授業である。 受講生にあたっては、童心に戻って素直に体を動かし仲間と積極的に関わること。 授業内で提出した課題は適宜フィードバックする。					
評価方法 及び評価基準	・学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合的に評価する。 授業での活動状況(60%)、課題(20%)、レポート(20%)として評価する。なお、授業への主体的かつ積極的な取り組み姿勢を重視する。				
事前・事後 学習の内容	事前学習は、教科書の該当ページを読む。 事後学習は、個人でノートを用意し、授業で学習したことについて、教科書や参考書を使用してまとめる。 毎回の予習・復習はそれぞれ30分以上を目安とする。				
履修上の注意	運動着(ジャージ等)に着替え、肩にかかる髪はまとめ、爪の長さに留意すること。 また、装飾品は取り外して各自管理すること。				
テキスト	『幼児の運動・身体表現－生涯健康とライフキャリア発達』 茗 井 香保里(著) 推敲舎				978-4-908107-13-9
－					
－					
参考文献	西洋子、本山益子編著『子どもの身体表現』市村出版				

科 目 名	子どもと身体表現II【エントリー】			副題	
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	前期は、自分の身体を知ることを中心に活動する。さらに身体表現による表現力やコミュニケーション力を高める。 後期は、表現遊びの教材研究を通して、より実践的な幼児身体表現活動に展開する可能性を探る。終盤には創作活動も行い、幼児の豊かな表現を育むための技術や姿勢を身につける。				
授業のねらい ・到達目標	・自らの身体感覚を磨き、他者とからだでコミュニケーションがとれるようになる。 ・幼児の豊かで多様な身体表現を引き出す指導ができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション・発達と身体表現			16	幼児の身体表現(視聴覚機材の活用)
2	ストレッチ入門～リラクゼーションからの身体意識			17	手あそびの教材研究(3～4歳児対象)
3	ストレッチ入門～身体部位の意識			18	手あそびの教材研究(4～5歳児対象)
4	ボディーワーク～正しい立位姿勢と歩き方			19	表現あそびの教材研究(3～4歳児対象)
5	ボディーワーク～体の歪みを知る			20	表現あそびの教材研究(4～5歳児対象)
6	他者とのコミュニケーション～グループワーク			21	幼児ダンスの教材研究(3～4歳児対象)
7	クラスのコミュニケーション～発表と鑑賞及びコメント			22	幼児ダンスの教材研究(4～5歳児対象)
8	ダンスの基礎～軽快なステップ			23	幼児ダンスの創作～身近な動きの発見
9	ダンスの基礎～多様なジャンプ			24	幼児ダンスの創作～動きにふさわしい選曲
10	ダンスの基礎～リズムを感じて踊る			25	幼児ダンスの創作～作品構成と空間
11	ダンス応用～音楽を感じて表現する			26	幼児ダンスの創作～仕上げと踊り込み
12	ダンス応用～空間意識を広げる			27	発表会～リハーサルと運営(情報機器の活用)
13	ダンス創作～動きのデッサン			28	発表会～全グループの発表と鑑賞
14	ダンス創作～動きとイメージ(グループワーク)			29	映像の鑑賞と相互評価
15	ダンス創作～作品発表と相互評価(ディスカッション)			30	まとめ-ディスカッション(身体表現の引き出し方)
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
受講生は、積極的に体を動かして表現し、仲間と関わること。 授業内で提出した課題に関しては、適宜フィードバックするので、次回授業に活かすこと。					
評価方法 及び評価基準	学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。 授業での活動状況(40%)、課題(30%)、レポート(30%)として評価する。なお、授業への意欲を重視する。				
事前・事後 学習の内容	事前学習は、教科書の該当ページを読む。 事後学習は、個人でノートを用意し、授業で学習したことについて、教科書や参考書を使用してまとめる。 毎回の予習・復習はそれぞれ30分以上を目安とする。				
履修上の注意	運動着(ジャージ等)に着替え、肩にかかる髪はまとめ、装飾品は取り外して各自保管すること。				
テキスト	『幼児の運動・身体表現－生涯健康とライフキャリア発達』 茗井 香保里(著) 推敲舎				978-4-908107-13-9
－					
－					
参考文献	松本千代栄編著「こどもと教師でひらく表現の世界」大修館書店 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館、2018年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館、2018年)その他、授業時に紹介する。				

科 目 名	子どもと造形表現I			副題	
担 当 者	三政 洋一				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	幼児の創造性を育み、表現活動を支援するために必要な基礎的造形力を養成する。造形活動における基本を実習し、素材に対する知識と技能を習得する。前期授業では絵画表現を中心とした平面による表現、後期授業では紙工作など立体による表現を中心に実践的に学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは造形活動の実践を積み重ねながら、基礎的な造形力を獲得するとともに、以下の到達目標の達成を目指すことにある。 到達目標 ①創造する喜びや感動を幼児と共有できる美的感性を深める ②生活の中から造形活動に繋がる要素を発見して、創作に結び付ける感性を錬磨する。 ③幼児の表現活動を適切に援助できる基礎的・汎用的造形力を獲得する。 ④造形の基本的な知識を獲得する。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3).D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	◆オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	◆後期授業オリエンテーション・授業に関する諸注意
2	◆基礎デッサン(手を描く)			17	◆工作一紙を使って1(ちぎり絵)
3	◆基礎デッサン(果物を描く)			18	◆工作一紙を使って2(紙を用いたからくり)
4	◆基礎デッサン(自画像を描く)			19	◆工作一紙を使って3(ジャバラ折りの切り紙)
5	◆絵の具を用いた技法1(フィンガーペインティング、デカルコマニー)			20	◆工作一紙を使って4(紋切りの基礎)
6	◆絵の具を用いた技法2(にじみ、ぼかし)			21	◆工作一紙を使って5(自分の家紋を創作する)
7	◆絵の具を用いた技法3(ドリップング、スパッタリング)			22	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・構想とパーツの制作)
8	◆絵の具を用いた技法4(フロッタージュ)			23	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・張り付けと仕上げ)
9	◆絵の具を用いた技法5(パチック、スクラッチ)			24	◆工作一紙粘土を使って1 (形態の構想・粘土荒付け)
10	◆絵の具を用いた技法6(コラージュ)			25	◆工作一紙粘土を使って2 (着色・仕上げ)
11	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・構想と下描き)			26	◆工作一身近にある素材を使って(自然から素材を見つける)
12	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・着色と仕上げ)			27	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・構想と下描き)
13	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・構想と下描き)			28	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・技法の工夫と着色)
14	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・着色と仕上げ)			29	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・仕上げと発表)
15	◆総括			30	◆まとめ
期末	[試験実施]			期末	[試験実施]
評価方法及び評価基準	原則として、授業への姿勢・取り組み(30%)、作品課題(30%)、試験(40%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	※授業計画にて演習内容を確認し、制作に必要なと思われる情報を調べておくこと。また、必要な材料、道具類も事前に準備しておくこと。(必要な事前学習については0. 5時間が目安となる) ※授業後には、演習内容を再確認し、制作物や配布されたプリントを整理し、工夫した点や改善すべき点等について考察すること。(必要な事後学習は0. 5時間が目安となる)				
履修上の注意	絵の具や粘土などの造形材料を用いるので、運動性があり汚れてもよい服装で授業に臨むこと。 授業に際しては、大きさF6・画用紙20ページ以上のスケッチブック等、オリエンテーション時に説明する制作用具を各自準備し授業に臨むこと。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	おかもとみわこ・大沢裕(編著)『造形表現』 一藝社 その他、必要に応じて参考となる図書を授業時に紹介する。				

科 目 名	子どもと造形表現I			副題	
担 当 者	三政 洋一				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	幼児の創造性を育み、表現活動を支援するために必要な基礎的造形力を養成する。造形活動における基本を実習し、素材に対する知識と技能を習得する。前期授業では絵画表現を中心とした平面による表現、後期授業では紙工作など立体による表現を中心に実践的に学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは造形活動の実践を積み重ねながら、基礎的な造形力を獲得するとともに、以下の到達目標の達成を目指すことにある。 到達目標 ①創造する喜びや感動を幼児と共有できる美的感性を深める ②生活の中から造形活動に繋がる要素を発見して、創作に結び付ける感性を錬磨する。 ③幼児の表現活動を適切に援助できる基礎的・汎用的造形力を獲得する。 ④造形の基本的な知識を獲得する。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3).D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	◆オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	◆後期授業オリエンテーション・授業に関する諸注意
2	◆基礎デッサン(手を描く)			17	◆工作一紙を使って1(ちぎり絵)
3	◆基礎デッサン(果物を描く)			18	◆工作一紙を使って2(紙を用いたからくり)
4	◆基礎デッサン(自画像を描く)			19	◆工作一紙を使って3(ジャバラ折りの切り紙)
5	◆絵の具を用いた技法1(フィンガーペインティング、デカルコマニー)			20	◆工作一紙を使って4(紋切りの基礎)
6	◆絵の具を用いた技法2(にじみ、ぼかし)			21	◆工作一紙を使って5(自分の家紋を創作する)
7	◆絵の具を用いた技法3(ドリップング、スパッタリング)			22	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・構想とパーツの制作)
8	◆絵の具を用いた技法4(フロッターージュ)			23	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・張り付けと仕上げ)
9	◆絵の具を用いた技法5(パチック、スクラッチ)			24	◆工作一紙粘土を使って1 (形態の構想・粘土荒付け)
10	◆絵の具を用いた技法6(コラージュ)			25	◆工作一紙粘土を使って2 (着色・仕上げ)
11	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・構想と下描き)			26	◆工作一身近にある素材を使って(自然から素材を見つける)
12	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・着色と仕上げ)			27	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・構想と下描き)
13	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・構想と下描き)			28	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・技法の工夫と着色)
14	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・着色と仕上げ)			29	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・仕上げと発表)
15	◆総括			30	◆まとめ
期末	[試験実施]			期末	[試験実施]
評価方法及び評価基準	原則として、授業への姿勢・取り組み(30%)、作品課題(30%)、試験(40%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	※授業計画にて演習内容を確認し、制作に必要と思われる情報を調べておくこと。また、必要な材料、道具類も事前に準備しておくこと。(必要な事前学習については0. 5時間が目安となる) ※授業後には、演習内容を再確認し、制作物や配布されたプリントを整理し、工夫した点や改善すべき点等について考察すること。(必要な事後学習は0. 5時間が目安となる)				
履修上の注意	絵の具や粘土などの造形材料を用いるので、運動性があり汚れてもよい服装で授業に臨むこと。 授業に際しては、大きさF6・画用紙20ページ以上のスケッチブック等、オリエンテーション時に説明する制作用具を各自準備し授業に臨むこと。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	おかもとみわこ・大沢裕(編著)『造形表現』 一藝社 その他、必要に応じて参考となる図書を授業時に紹介する。				

科 目 名	子どもと造形表現I			副題	
担 当 者	三政 洋一				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	幼児の創造性を育み、表現活動を支援するために必要な基礎的造形力を養成する。造形活動における基本を実習し、素材に対する知識と技能を習得する。前期授業では絵画表現を中心とした平面による表現、後期授業では紙工作など立体による表現を中心に実践的に学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは造形活動の実践を積み重ねながら、基礎的な造形力を獲得するとともに、以下の到達目標の達成を目指すことにある。 到達目標 ①創造する喜びや感動を幼児と共有できる美的感性を深める ②生活の中から造形活動に繋がる要素を発見して、創作に結び付ける感性を錬磨する。 ③幼児の表現活動を適切に援助できる基礎的・汎用的造形力を獲得する。 ④造形の基本的な知識を獲得する。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3).D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	◆オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	◆後期授業オリエンテーション・授業に関する諸注意
2	◆基礎デッサン(手を描く)			17	◆工作一紙を使って1(ちぎり絵)
3	◆基礎デッサン(果物を描く)			18	◆工作一紙を使って2(紙を用いたからくり)
4	◆基礎デッサン(自画像を描く)			19	◆工作一紙を使って3(ジャバラ折りの切り紙)
5	◆絵の具を用いた技法1(フィンガーペインティング、デカルコマニー)			20	◆工作一紙を使って4(紋切りの基礎)
6	◆絵の具を用いた技法2(にじみ、ぼかし)			21	◆工作一紙を使って5(自分の家紋を創作する)
7	◆絵の具を用いた技法3(ドリップング、スパッタリング)			22	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・構想とパーツの制作)
8	◆絵の具を用いた技法4(フロッターージュ)			23	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・張り付けと仕上げ)
9	◆絵の具を用いた技法5(パチック、スクラッチ)			24	◆工作一紙粘土を使って1 (形態の構想・粘土荒付け)
10	◆絵の具を用いた技法6(コラージュ)			25	◆工作一紙粘土を使って2 (着色・仕上げ)
11	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・構想と下描き)			26	◆工作一身近にある素材を使って(自然から素材を見つける)
12	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・着色と仕上げ)			27	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・構想と下描き)
13	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・構想と下描き)			28	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・技法の工夫と着色)
14	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・着色と仕上げ)			29	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・仕上げと発表)
15	◆総括			30	◆まとめ
期末	[試験実施]			期末	[試験実施]
評価方法及び評価基準	原則として、授業への姿勢・取り組み(30%)、作品課題(30%)、試験(40%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	※授業計画にて演習内容を確認し、制作に必要と思われる情報を調べておくこと。また、必要な材料、道具類も事前に準備しておくこと。(必要な事前学習については0. 5時間が目安となる) ※授業後には、演習内容を再確認し、制作物や配布されたプリントを整理し、工夫した点や改善すべき点等について考察すること。(必要な事後学習は0. 5時間が目安となる)				
履修上の注意	絵の具や粘土などの造形材料を用いるので、運動性があり汚れてもよい服装で授業に臨むこと。 授業に際しては、大きさF6・画用紙20ページ以上のスケッチブック等、オリエンテーション時に説明する制作用具を各自準備し授業に臨むこと。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	おかもとみわこ・大沢裕(編著)『造形表現』 一藝社 その他、必要に応じて参考となる図書を授業時に紹介する。				

科 目 名	子どもと造形表現I			副題	
担 当 者	平原 奈津美				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	幼児の創造性を育み、表現活動を支援するために必要な基礎的造形力を養成する。造形活動における基本を実習し、素材に対する知識と技能を習得する。前期授業では絵画表現を中心とした平面による表現、後期授業では紙工作など立体による表現を中心に実践的に学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは造形活動の実践を積み重ねながら、基礎的な造形力を獲得するとともに、以下の到達目標の達成を目指すことにある。 到達目標 ①創造する喜びや感動を幼児と共有できる美的感性を深める ②生活の中から造形活動に繋がる要素を発見して、創作に結び付ける感性を錬磨する。 ③幼児の表現活動を適切に援助できる基礎的・汎用的造形力を獲得する。 ④造形の基本的な知識を獲得する。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3).D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	◆オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	◆後期授業オリエンテーション・授業に関する諸注意
2	◆基礎デッサン(手を描く)			17	◆工作－紙を使って1(ちぎり絵)
3	◆基礎デッサン(果物を描く)			18	◆工作－紙を使って2(紙を用いたからくり)
4	◆基礎デッサン(自画像を描く)			19	◆工作－紙を使って3(ジャバラ折りの切り紙)
5	◆絵の具を用いた技法1(フィンガーペインティング、デカルコマニー)			20	◆工作－紙を使って4(紋切りの基礎)
6	◆絵の具を用いた技法2(にじみ、ぼかし)			21	◆工作－紙を使って5(自分の家紋を創作する)
7	◆絵の具を用いた技法3(ドリップング、スパッタリング)			22	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・構想とパーツの制作)
8	◆絵の具を用いた技法4(フロッタージュ)			23	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・張り付けと仕上げ)
9	◆絵の具を用いた技法5(パッチク、スクラッチ)			24	◆工作－紙粘土を使って1
10	◆絵の具を用いた技法6(コラージュ)			25	◆工作－紙粘土を使って2
11	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・構想と下描き)			26	◆工作－身近にある素材を使って(自然から素材を見つけて)
12	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・着色と仕上げ)			27	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・構想と下描き)
13	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・構想と下描き)			28	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・技法の工夫と着色)
14	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・着色と仕上げ)			29	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・仕上げと発表)
15	◆総括			30	◆まとめ
期末	[試験実施]			期末	[試験実施]
評価方法及び評価基準	原則として、授業への姿勢・取り組み(30%)、作品課題(30%)、試験(40%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	※授業計画にて演習内容を確認し、制作に必要なと思われる情報を調べておくこと。また、必要な材料、道具類も事前に準備しておくこと。(必要な事前学習については0.5時間が目安となる) ※授業後には、演習内容を再確認し、制作物や配布されたプリントを整理し、工夫した点や改善すべき点等について考察すること。(必要な事後学習は0.5時間が目安となる)				
履修上の注意	絵の具や粘土などの造形材料を用いるので、運動性があり汚れてもよい服装で授業に臨むこと。 授業に際しては、大きさF6・画用紙20ページ以上のスケッチブック等、オリエンテーション時に説明する制作用具を各自準備し授業に臨むこと。				
テキスト					
－					
－					
参考文献	授業内で適宜紹介する。				

科 目 名	子どもと造形表現I			副題	
担 当 者	平原 奈津美				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	幼児の創造性を育み、表現活動を支援するために必要な基礎的造形力を養成する。造形活動における基本を実習し、素材に対する知識と技能を習得する。前期授業では絵画表現を中心とした平面による表現、後期授業では紙工作など立体による表現を中心に実践的に学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは造形活動の実践を積み重ねながら、基礎的な造形力を獲得するとともに、以下の到達目標の達成を目指すことにある。 到達目標 ①創造する喜びや感動を幼児と共有できる美的感性を深める ②生活の中から造形活動に繋がる要素を発見して、創作に結び付ける感性を錬磨する。 ③幼児の表現活動を適切に援助できる基礎的・汎用的造形力を獲得する。 ④造形の基本的な知識を獲得する。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3).D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	◆オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	◆後期授業オリエンテーション・授業に関する諸注意
2	◆基礎デッサン(手を描く)			17	◆工作－紙を使って1(ちぎり絵)
3	◆基礎デッサン(果物を描く)			18	◆工作－紙を使って2(紙を用いたからくり)
4	◆基礎デッサン(自画像を描く)			19	◆工作－紙を使って3(ジャバラ折りの切り紙)
5	◆絵の具を用いた技法1(フィンガーペインティング、デカルコマニー)			20	◆工作－紙を使って4(紋切りの基礎)
6	◆絵の具を用いた技法2(にじみ、ぼかし)			21	◆工作－紙を使って5(自分の家紋を創作する)
7	◆絵の具を用いた技法3(ドリップング、スパッタリング)			22	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・構想とパーツの制作)
8	◆絵の具を用いた技法4(フロッタージュ)			23	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・張り付けと仕上げ)
9	◆絵の具を用いた技法5(パッチク、スクラッチ)			24	◆工作－紙粘土を使って1
10	◆絵の具を用いた技法6(コラージュ)			25	◆工作－紙粘土を使って2
11	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・構想と下描き)			26	◆工作－身近にある素材を使って(自然から素材を見つける)
12	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・着色と仕上げ)			27	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・構想と下描き)
13	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・構想と下描き)			28	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・技法の工夫と着色)
14	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・着色と仕上げ)			29	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・仕上げと発表)
15	◆総括			30	◆まとめ
期末	[試験実施]			期末	[試験実施]
評価方法及び評価基準	原則として、授業への姿勢・取り組み(30%)、作品課題(30%)、試験(40%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	※授業計画にて演習内容を確認し、制作に必要なと思われる情報を調べておくこと。また、必要な材料、道具類も事前に準備しておくこと。(必要な事前学習については0.5時間が目安となる) ※授業後には、演習内容を再確認し、制作物や配布されたプリントを整理し、工夫した点や改善すべき点等について考察すること。(必要な事後学習は0.5時間が目安となる)				
履修上の注意	絵の具や粘土などの造形材料を用いるので、運動性があり汚れてもよい服装で授業に臨むこと。 授業に際しては、大きさF6・画用紙20ページ以上のスケッチブック等、オリエンテーション時に説明する制作用具を各自準備し授業に臨むこと。				
テキスト					
－					
－					
参考文献	授業内で適宜紹介する。				

科 目 名	子どもと造形表現I			副題	
担 当 者	平原 奈津美				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	幼児の創造性を育み、表現活動を支援するために必要な基礎的造形力を養成する。造形活動における基本を実習し、素材に対する知識と技能を習得する。前期授業では絵画表現を中心とした平面による表現、後期授業では紙工作など立体による表現を中心に実践的に学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは造形活動の実践を積み重ねながら、基礎的な造形力を獲得するとともに、以下の到達目標の達成を目指すことにある。 到達目標 ①創造する喜びや感動を幼児と共有できる美的感性を深める ②生活の中から造形活動に繋がる要素を発見して、創作に結び付ける感性を錬磨する。 ③幼児の表現活動を適切に援助できる基礎的・汎用的造形力を獲得する。 ④造形の基本的な知識を獲得する。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3).D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	◆オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	◆後期授業オリエンテーション・授業に関する諸注意
2	◆基礎デッサン(手を描く)			17	◆工作－紙を使って1(ちぎり絵)
3	◆基礎デッサン(果物を描く)			18	◆工作－紙を使って2(紙を用いたからくり)
4	◆基礎デッサン(自画像を描く)			19	◆工作－紙を使って3(ジャバラ折りの切り紙)
5	◆絵の具を用いた技法1(フィンガーペインティング、デカルコマニー)			20	◆工作－紙を使って4(紋切りの基礎)
6	◆絵の具を用いた技法2(にじみ、ぼかし)			21	◆工作－紙を使って5(自分の家紋を創作する)
7	◆絵の具を用いた技法3(ドリップング、スパッタリング)			22	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・構想とパーツの制作)
8	◆絵の具を用いた技法4(フロッタージュ)			23	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・張り付けと仕上げ)
9	◆絵の具を用いた技法5(パッチク、スクラッチ)			24	◆工作－紙粘土を使って1
10	◆絵の具を用いた技法6(コラージュ)			25	◆工作－紙粘土を使って2
11	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・構想と下描き)			26	◆工作－身近にある素材を使って(自然から素材を見つける)
12	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像の世界を描く・着色と仕上げ)			27	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・構想と下描き)
13	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・構想と下描き)			28	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・技法の工夫と着色)
14	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・着色と仕上げ)			29	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・仕上げと発表)
15	◆総括			30	◆まとめ
期末	[試験実施]			期末	[試験実施]
評価方法及び評価基準	原則として、授業への姿勢・取り組み(30%)、作品課題(30%)、試験(40%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	※授業計画にて演習内容を確認し、制作に必要なと思われる情報を調べておくこと。また、必要な材料、道具類も事前に準備しておくこと。(必要な事前学習については0.5時間が目安となる) ※授業後には、演習内容を再確認し、制作物や配布されたプリントを整理し、工夫した点や改善すべき点等について考察すること。(必要な事後学習は0.5時間が目安となる)				
履修上の注意	絵の具や粘土などの造形材料を用いるので、運動性があり汚れてもよい服装で授業に臨むこと。 授業に際しては、大きさF6・画用紙20ページ以上のスケッチブック等、オリエンテーション時に説明する制作用具を各自準備し授業に臨むこと。				
テキスト					
－					
－					
参考文献	授業内で適宜紹介する。				

科 目 名		子どもと造形表現Ⅱ【エントリー】		副題		
担 当 者		河原 眞利				
開講期		通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要		子どもと造形表現Ⅰ（図画工作Ⅰ）で習得した造形力を基に新たな造形素材や技法に取り組み、一歩進んだ自分らしい創作活動を発展させていながら、身近な素材や日常生活の中で子どもとともに楽しむ造形活動を自ら創出できる発想力を養うため、素材研究や共同制作も行います。				
授業のねらい・到達目標		本授業では、様々な素材や造形技法にふれ、実践することで、子どもの造形活動を適切に支援出来る知識と造形力を獲得していきます。また創造する楽しさや素晴らしさを感じ、保育現場で子どもと共にいきいきと楽しめる造形課題を自ら発想出来る感性を養うことを目標とします。				
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	石膏による手形制作1（型取り）	
2	版画1ステンシル（構想・原画制作）			17	石膏による手形制作2（着色）	
3	版画2ステンシル（型紙制作）			18	風船はりこによる造形1（デッサン・構想）	
4	版画3ステンシル（着色）			19	風船はりこによる造形2（貼りこみ）	
5	版画4紙はんが			20	風船はりこによる造形3（部品制作）	
6	染色1マーブリング・折り染め			21	風船はりこによる造形4（着色）	
7	染色2藍染			22	共同制作1（題材設定・構想）	
8	塑造1（デッサン）			23	素材研究2-1羊毛フェルト（フェルトボール制作）	
9	塑造2（芯棒制作）			24	素材研究2-2羊毛フェルト（部品制作）	
10	塑造3（粘土づけ）			25	素材研究2-3羊毛フェルト（ニードルによる造形）	
11	塑造4（着色）			26	素材研究2-4羊毛フェルト（組み立て）	
12	素材研究1-1身近な素材から（素材研究・構想）			27	共同制作2（演出計画）	
13	素材研究1-2身近な素材から（部品制作）			28	共同制作3（背景・部品制作）	
14	素材研究1-3身近な素材から（組み立て）			29	共同制作4（制作発表会）	
15	前期のまとめ・作品発表と講評			30	まとめ・作品発表と講評・ファイル提出	
期末	前期試験は実施しない 造形あそびのレポートを提出			期末	期末試験は実施しない	
課題ごとに配布されるプリントをその課題終了時に記入し作品写真を貼って提出する。 返却されたプリントは順番にクリアファイルに保管し、一年間で造形表現アイデアBOOKとして完成させる。						
評価方法及び評価基準		自己課題への取り組み姿勢とその成果、レポート提出、提出作品を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容		授業計画にて予め各回の内容を確認し、指定された必要な材料・道具・資料等を用意して授業に臨むこと。 授業後は、完成作品を写真で記録するとともに、講義内容を整理し、技法や活動について考察する。 また、保育現場へのフィードバックや発展の仕方について具体的に考えレポートする。 以上の事柄について記録をファイリングし、まとめておくこと。 事前・事後学習については、各課題ごとにそれぞれ0.5時間程度が目安となる。				
履修上の注意		F6程度のスケッチブック、B4ファイル（20ポケット程度） 水彩えのぐ、はさみ、カッターナイフ、のりなど、課題ごとに指示された必要な材料や道具を準備すること。 運動性があり汚れてもよい服装でのぞむこと。 詳細に関してはオリエンテーションで説明します。				
テキスト		特になし				
－						
－						
参考文献		日本文教出版 小学校図画工作 日本文教出版 図画工作・美術 forme 開隆堂出版 図画工作 他				

科 目 名	子どもと造形表現II【エントリー】			副題	
担 当 者	河原 眞利				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	子どもと造形表現Ⅰ（図画工作Ⅰ）で習得した造形力を基に新たな造形素材や技法に取り組み、一歩進んだ自分らしい創作活動を発展させていながら、身近な素材や日常生活の中で子どもとともに楽しむ造形活動を自ら創出できる発想力を養うため、素材研究や共同制作も行います。				
授業のねらい・到達目標	本授業では、様々な素材や造形技法にふれ、実践することで、子どもの造形活動を適切に支援出来る知識と造形力を獲得していきます。また創造する楽しさや素晴らしさを感じ、保育現場で子どもと共にいきいきと楽しめる造形課題を自ら発想出来る感性を養うことを目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	石膏による手形制作1（型取り）
2	版画1ステンシル（構想・原画制作）			17	石膏による手形制作2（着色）
3	版画2ステンシル（型紙制作）			18	風船はりこによる造形1（デッサン・構想）
4	版画3ステンシル（着色）			19	風船はりこによる造形2（貼りこみ）
5	版画4紙はんが			20	風船はりこによる造形3（部品制作）
6	染色1マーブリング・折り染め			21	風船はりこによる造形4（着色）
7	染色2藍染			22	共同制作1（題材設定・構想）
8	塑造1（デッサン）			23	素材研究2-1羊毛フェルト（フェルトボール制作）
9	塑造2（芯棒制作）			24	素材研究2-2羊毛フェルト（部品制作）
10	塑造3（粘土づけ）			25	素材研究2-3羊毛フェルト（ニードルによる造形）
11	塑造4（着色）			26	素材研究2-4羊毛フェルト（組み立て）
12	素材研究1-1身近な素材から（素材研究・構想）			27	共同制作2（演出計画）
13	素材研究1-2身近な素材から（部品制作）			28	共同制作3（背景・部品制作）
14	素材研究1-3身近な素材から（組み立て）			29	共同制作4（制作発表会）
15	前期のまとめ・作品発表と講評			30	まとめ・作品発表と講評・ファイル提出
期末	前期試験は実施しない 造形あそびのレポートを提出			期末	期末試験は実施しない
課題ごとに配布されるプリントをその課題終了時に記入し作品写真を貼って提出する。 返却されたプリントは順番にクリアファイルに保管し、一年間で造形表現アイデアBOOKとして完成させる。					
評価方法 及び評価基準	自己課題への取り組み姿勢とその成果、レポート提出、提出作品を総合して評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業計画にて予め各回の内容を確認し、指定された必要な材料・道具・資料等を用意して授業に臨むこと。 授業後は、完成作品を写真で記録するとともに、講義内容を整理し、技法や活動について考察する。 また、保育現場へのフィードバックや発展の仕方について具体的に考えレポートする。 以上の事柄について記録をファイリングし、まとめておくこと。 事前・事後学習については、各課題ごとにそれぞれ0.5時間程度が目安となる。				
履修上の注意	F6程度のスケッチブック、B4ファイル(20ポケット程度) 水彩えのぐ、はさみ、カッターナイフ、のりなど、課題ごとに指示された必要な材料や道具を準備すること。 運動性があり汚れてもよい服装でのぞむこと。 詳細に関してはオリエンテーションで説明します。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	日本文教出版 小学校図画工作 日本文教出版 図画工作・美術 forme 開隆堂出版 図画工作 他				

科 目 名	子どもの遊び		副題			
担 当 者	和田 靖子					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1	
授業の概要	幼稚園教育において保育の基本とされている「遊びを通しての総合的な指導」を実践していくために、鬼遊び、わらべ歌遊びなどの伝承遊びを実際に体験しながら、子どもの成長と発達を促す遊びについての理解を深める。 子どもと関わるための遊びとして遊び歌を実施する。年齢に応じた様々な遊び歌を行うことで、一人ひとりの発達に応じた指導について理解する。遊び歌の創意工夫を経て、遊び歌を創作し、実演する。					
授業のねらい・到達目標	様々な遊びを体得し、得意な分野を見出すと共に、新しい遊びも創作する。 遊びの種類と発達の道筋について理解を深めながら、年齢や状況にふさわしい遊びの援助を考えることができるようになる。					
授業の方法・授業計画						
1	遊びを通しての総合的指導の意義					
2	子どもと関わるための遊び(1)コミュニケーションを図る遊び歌 / グループ活動(1)伝承遊びの企画					
3	子どもと関わるための遊び(2)ストーリー性のある遊び歌／グループ活動(2)伝承遊びの実践準備					
4	子どもと関わるための遊び(3)遊び歌の創意工夫／グループ活動(3)伝承遊びの実践準備					
5	伝承遊び(1)鬼遊びで遊ぼう					
6	伝承遊び(2)新聞紙を使って遊ぼう					
7	伝承遊び(3)わらべうたで遊ぼう					
8	伝承遊び(4)縄遊びで遊ぼう					
9	子どもの遊びの種類と発達のみちすじについて理解する					
10	子どもと関わるための遊び(4)季節の遊び歌					
11	子どもと関わるための遊び(5)タオル人形作りと乳児の遊ばせ歌					
12	遊び歌の創作					
13	「子どものあそびうた」冊子作製 遊び歌実技発表の準備					
14	遊び歌の実技発表					
15	年齢や発達に即した遊びの援助					
期末	試験実施なし					
グループ及び個人による作品発表や実技発表については、授業内においてフィードバックを行う。						
評価方法及び評価基準	実技発表:40%、提出物:30%、授業中の活動状況:30%					
事前・事後学習の内容	事前に示された課題について、下調べをして授業に臨むこと。 毎回授業終了後には、授業内容を振り返り、必ずノートに記録すること。またそのノートをもとに復習し、知識、技術の習得を図ること。 下調べに費やす時間、復習に費やす時間は共に1時間が目安となる。					
履修上の注意	上履きを持参し、動きやすい服装で授業に臨むこと。					
テキスト	『改訂うたっておどっておもちゃ箱2』 鈴木恵津子編著 教育芸術社					
—						
—						
参考文献	『幼稚園教育要領』(平成29年) 文部科学省 フレーベル館 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』(平成29年)内閣府・文部科学省・厚生労働省 フレーベル館 『保育所保育指針』(平成29年)厚生労働省 フレーベル館					

科 目 名	子どもの遊び		副題			
担 当 者	和田 靖子					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1	
授業の概要	幼稚園教育において保育の基本とされている「遊びを通しての総合的な指導」を実践していくために、鬼遊び、わらべ歌遊びなどの伝承遊びを実際に体験しながら、子どもの成長と発達を促す遊びについての理解を深める。 子どもと関わるための遊びとして遊び歌を実施する。年齢に応じた様々な遊び歌を行うことで、一人ひとりの発達に応じた指導について理解する。遊び歌の創意工夫を経て、遊び歌を創作し、実演する。					
授業のねらい・到達目標	様々な遊びを体得し、得意な分野を見出すと共に、新しい遊びも創作する。 遊びの種類と発達の道筋について理解を深めながら、年齢や状況にふさわしい遊びの援助を考えることができるようになる。					
授業の方法・授業計画						
1	遊びを通しての総合的指導の意義					
2	子どもと関わるための遊び(1)コミュニケーションを図る遊び歌 / グループ活動(1)伝承遊びの企画					
3	子どもと関わるための遊び(2)ストーリー性のある遊び歌／グループ活動(2)伝承遊びの実践準備					
4	子どもと関わるための遊び(3)遊び歌の創意工夫／グループ活動(3)伝承遊びの実践準備					
5	伝承遊び(1)鬼遊びで遊ぼう					
6	伝承遊び(2)新聞紙を使って遊ぼう					
7	伝承遊び(3)わらべうたで遊ぼう					
8	伝承遊び(4)縄遊びで遊ぼう					
9	子どもの遊びの種類と発達のみちすじについて理解する					
10	子どもと関わるための遊び(4)季節の遊び歌					
11	子どもと関わるための遊び(5)タオル人形作りと乳児の遊ばせ歌					
12	遊び歌の創作					
13	「子どものあそびうた」冊子作製 遊び歌実技発表の準備					
14	遊び歌の実技発表					
15	年齢や発達に即した遊びの援助					
期末	試験実施なし					
グループ及び個人による作品発表や実技発表については、授業内においてフィードバックを行う。						
評価方法及び評価基準	実技発表:40%、提出物:30%、授業中の活動状況:30%					
事前・事後学習の内容	事前に示された課題について、下調べをして授業に臨むこと。 毎回授業終了後には、授業内容を振り返り、必ずノートに記録すること。またそのノートをもとに復習し、知識、技術の習得を図ること。 下調べに費やす時間、復習に費やす時間は共に1時間が目安となる。					
履修上の注意	上履きを持参し、動きやすい服装で授業に臨むこと。					
テキスト	『改訂うたっておどっておもちゃ箱2』 鈴木恵津子編著 教育芸術社					
—						
—						
参考文献	『幼稚園教育要領』(平成29年) 文部科学省 フレーベル館 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』(平成29年)内閣府・文部科学省・厚生労働省 フレーベル館 『保育所保育指針』(平成29年)厚生労働省 フレーベル館					

科 目 名	コンピュータ・リテラシー			副題	
担 当 者	番匠 一雅				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	現在、私たちの身のまわりでは、IT 化が急速に進展しています。教育の世界でも、大学を始め、高・中・小学校にいたるまで「教育の情報化」が強力に進められています。本講座は、大学生として必要不可欠な情報技術を身に着けるとともに、保育を志す学生が将来、創造的な保育を生み出すことができるよう、パソコンを利用した教材作成の理論・技術を修得すること、および、それを保育で有効に活用する能力を育成することを主なねらいとします。				
授業のねらい・到達目標	・情報および基礎的なコンピュータの概念が習得できるようになること ・キーボード操作、周辺機器の利用、学内ネットワークが利用できるようになること ・PCを利用した保育に関する資料の収集・活用に関する技能が習得できるようになること ・PCを利用して、素材・イラストが作成できるできるようになること ・自作の保育教材の製作および自作教材を利用したプレゼンテーションができるようになること 【「履修ファイル」の対応項目：A-1(1)(4)(6)】				
授業の方法・授業計画					
1	授業概要と学内システムの説明、個人情報について			16	オリエンテーション
2	電子メールの基礎と送受信、メール作成のマナー			17	データベース基礎
3	インターネットの基礎と情報検索			18	データベース応用
4	文書作成1(文書作成ソフトの基礎)			19	スライド教材の作成1(テキスト作成)
5	文書作成2(文書の書式設定)			20	スライド教材の作成2(スライドのビジュアル化)
6	文書作成3(文章の書式設定)			21	スライド教材の作成3(アニメーション)
7	文書作成4(表作成と図の挿入)			22	プレゼンテーション準備
8	文書作成5(イラスト作成基礎)			23	プレゼンテーション技法
9	文書作成6(イラスト作成応用)			24	保育園紹介スライドの作成1(テキスト作成)
10	表計算1(基本操作)			25	保育園紹介スライドの作成2(作成)
11	表計算2(出席管理)			26	保育園紹介スライドの作成3(公開と活用)
12	表計算3(成績管理)			27	自作スライドによる発表1(テキストの評価)
13	表計算4(グラフ作成)			28	自作スライドによる発表2(ビジュアルの評価)
14	表計算5(データ分析)			29	自作スライドによる発表3(表現方法の評価)
15	文章作成7(レポート作成)			30	まとめ
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
本科目では、毎回復習課題を出題する。授業のフィードバックとして課題に取り組み翌週の授業までに課題を完成させること。授業内でキーボード入力の測定テストを複数回行う。単位習得には一定以上の入力速度が必要となるため、授業の空き時間、夏期休暇期間等を利用してキーボード入力の練習を行う事。					
評価方法及び評価基準	授業に臨む態度(20%)、授業中の作成物(30%)、レポート課題(50%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	毎回事前にテキストの該当部分について熟読のうえ授業に臨むこと。利用するアプリケーションは、授業時間外でも定期的に操作を行い、機能やメニュー構成を理解するよう心がけること(予習1時間程度)。授業時間内に出題された課題は復讐として翌週の授業までに完成させておくこと(復習1時間)。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	『保育者のためのパソコン講座 Windows7 Office2007/2010/2013対応版』 萌文書林 定価2,000円+税				978-4-89347-190-1
—					
—					
参考文献	『教育の方法と技術』平沢茂 図書文化				

科 目 名	コンピュータ・リテラシー			副題	
担 当 者	番匠 一雅				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	現在、私たちの身のまわりでは、IT 化が急速に進展しています。教育の世界でも、大学を始め、高・中・小学校にいたるまで「教育の情報化」が強力に進められています。本講座は、大学生として必要不可欠な情報技術を身に着けるとともに、保育を志す学生が将来、創造的な保育を生み出すことができるよう、パソコンを利用した教材作成の理論・技術を修得すること、および、それを保育で有効に活用する能力を育成することを主なねらいとします。				
授業のねらい・到達目標	・情報および基礎的なコンピュータの概念が習得できるようになること ・キーボード操作、周辺機器の利用、学内ネットワークが利用できるようになること ・PCを利用した保育に関する資料の収集・活用に関する技能が習得できるようになること ・PCを利用して、素材・イラストが作成できるできるようになること ・自作の保育教材の製作および自作教材を利用したプレゼンテーションができるようになること 【「履修ファイル」の対応項目：A-1(1)(4)(6)】				
授業の方法・授業計画					
1	授業概要と学内システムの説明、個人情報について			16	オリエンテーション
2	電子メールの基礎と送受信、メール作成のマナー			17	データベース基礎
3	インターネットの基礎と情報検索			18	データベース応用
4	文書作成1(文書作成ソフトの基礎)			19	スライド教材の作成1(テキスト作成)
5	文書作成2(文書の書式設定)			20	スライド教材の作成2(スライドのビジュアル化)
6	文書作成3(文章の書式設定)			21	スライド教材の作成3(アニメーション)
7	文書作成4(表作成と図の挿入)			22	プレゼンテーション準備
8	文書作成5(イラスト作成基礎)			23	プレゼンテーション技法
9	文書作成6(イラスト作成応用)			24	保育園紹介スライドの作成1(テキスト作成)
10	表計算1(基本操作)			25	保育園紹介スライドの作成2(作成)
11	表計算2(出席管理)			26	保育園紹介スライドの作成3(公開と活用)
12	表計算3(成績管理)			27	自作スライドによる発表1(テキストの評価)
13	表計算4(グラフ作成)			28	自作スライドによる発表2(ビジュアルの評価)
14	表計算5(データ分析)			29	自作スライドによる発表3(表現方法の評価)
15	文章作成7(レポート作成)			30	まとめ
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
本科目では、毎回復習課題を出題する。授業のフィードバックとして課題に取り組み翌週の授業までに課題を完成させること。授業内でキーボード入力の測定テストを複数回行う。単位習得には一定以上の入力速度が必要となるため、授業の空き時間、夏期休暇期間等を利用してキーボード入力の練習を行う事。					
評価方法及び評価基準	授業に臨む態度(20%)、授業中の作成物(30%)、レポート課題(50%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	毎回事前にテキストの該当部分について熟読のうえ授業に臨むこと。利用するアプリケーションは、授業時間外でも定期的に操作を行い、機能やメニュー構成を理解するよう心がけること(予習1時間程度)。授業時間内に出題された課題は復讐として翌週の授業までに完成させておくこと(復習1時間)。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	『保育者のためのパソコン講座 Windows7 Office2007/2010/2013対応版』 萌文書林 定価2,000円+税				978-4-89347-190-1
—					
—					
参考文献	『教育の方法と技術』平沢茂 図書文化				

科 目 名	コンピュータ・リテラシー			副題	
担 当 者	番匠 一雅				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	現在、私たちの身のまわりでは、IT 化が急速に進展しています。教育の世界でも、大学を始め、高・中・小学校にいたるまで「教育の情報化」が強力に進められています。本講座は、大学生として必要不可欠な情報技術を身に着けるとともに、保育を志す学生が将来、創造的な保育を生み出すことができるよう、パソコンを利用した教材作成の理論・技術を修得すること、および、それを保育で有効に活用する能力を育成することを主なねらいとします。				
授業のねらい ・到達目標	・情報および基礎的なコンピュータの概念が習得できるようになること ・キーボード操作、周辺機器の利用、学内ネットワークが利用できるようになること ・PCを利用した保育に関する資料の収集・活用に関する技能が習得できるようになること ・PCを利用して、素材・イラストが作成できるできるようになること ・自作の保育教材の製作および自作教材を利用したプレゼンテーションができるようになること 【「履修ファイル」の対応項目：A-1(1)(4)(6)】				
授業の方法・授業計画					
1	授業概要と学内システムの説明、個人情報について			16	オリエンテーション
2	電子メールの基礎と送受信、メール作成のマナー			17	データベース基礎
3	インターネットの基礎と情報検索			18	データベース応用
4	文書作成1(文書作成ソフトの基礎)			19	スライド教材の作成1(テキスト作成)
5	文書作成2(文書の書式設定)			20	スライド教材の作成2(スライドのビジュアル化)
6	文書作成3(文章の書式設定)			21	スライド教材の作成3(アニメーション)
7	文書作成4(表作成と図の挿入)			22	プレゼンテーション準備
8	文書作成5(イラスト作成基礎)			23	プレゼンテーション技法
9	文書作成6(イラスト作成応用)			24	保育園紹介スライドの作成1(テキスト作成)
10	表計算1(基本操作)			25	保育園紹介スライドの作成2(作成)
11	表計算2(出席管理)			26	保育園紹介スライドの作成3(公開と活用)
12	表計算3(成績管理)			27	自作スライドによる発表1(テキストの評価)
13	表計算4(グラフ作成)			28	自作スライドによる発表2(ビジュアルの評価)
14	表計算5(データ分析)			29	自作スライドによる発表3(表現方法の評価)
15	文章作成7(レポート作成)			30	まとめ
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
本科目では、毎回復習課題を出題する。授業のフィードバックとして課題に取り組み翌週の授業までに課題を完成させること。授業内でキーボード入力の測定テストを複数回行う。単位習得には一定以上の入力速度が必要となるため、授業の空き時間、夏期休暇期間等を利用してキーボード入力の練習を行う事。					
評価方法 及び評価基準	授業に臨む態度(20%)、授業中の作成物(30%)、レポート課題(50%)として評価する。				
事前・事後 学習の内容	毎回事前にテキストの該当部分について熟読のうえ授業に臨むこと。利用するアプリケーションは、授業時間外でも定期的に操作を行い、機能やメニュー構成を理解するよう心がけること(予習1時間程度)。授業時間内に出題された課題は復讐として翌週の授業までに完成させておくこと(復習1時間)。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	『保育者のためのパソコン講座 Windows7 Office2007/2010/2013対応版』 萌文書林 定価2,000円+税				978-4-89347-190-1
—					
—					
参考文献	『教育の方法と技術』平沢茂 図書文化				

科 目 名	コンピュータ・リテラシーI/コンピュータ・リテラシー			副題	
担 当 者	番匠 一雅				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	現代社会ではコンピュータは情報収集、整理、分析、報告のために必要不可欠な道具である。また、大学での学習活動においても十分に活用できる能力を身につけることが望まれている。情報機器を安全に利用するため、技術的な説明や基本的な使用方法を講義するとともに、身につけた知識を実践力にすべく演習を通して主体的に学ぶことを繰り返し行っていく。				
授業のねらい・到達目標	情報および基礎的なコンピュータの概念を身につけることができ、大学生活で必要な情報機器を活用するための学内ネットワークの知識、様々なコンピュータソフトの利用方法などを知ることができる。 インターネットの様々なサービスの安全な利用方法、インターネットや電子メール等のネットワーク活用方法、レポート作成やビジネス文書などの文書作成方法、数式や関数を利用した計算とグラフ作成など表計算ソフトの利用方法、プレゼンテーション技法やソフトの活用方法など、知識と技術を習得することができる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業概要と学内システムの説明、SNS利用について			16	表計算ソフトの概要と計算式に必要な数学の復習
2	電子メールの基礎と送受信、メール作成のマナー			17	表計算1)データ入力と編集、数式
3	インターネットの基礎と情報検索			18	表計算2)相対参照と絶対参照
4	文書作成1)文書作成ソフトの基礎(入力と編集)			19	表計算3)セルの書式設定、罫線
5	文書作成2)文書の書式設定(ページレイアウト、印刷など)			20	表計算4)グラフ作成1(用途と基本構成)
6	文書作成3)文章の書式設定(箇条書き、行間、文字修飾)			21	表計算5)グラフ作成2(グラフの設定変更)
7	文書作成4)表作成と図の挿入			22	表計算6)関数1(合計、平均、最大、最小、カウント)
8	文書作成5)レポート作成サポート			23	表計算7)関数2(順位、四捨五入、判定など)
9	プレゼンテーション1)情報整理法と発表技法			24	表計算8)関数3(条件による集計、表の検索)
10	プレゼンテーション2)PCプレゼンテーション基礎			25	表計算9)データベースと集計(データ並替え、抽出)
11	プレゼンテーション3)PCプレゼンテーション応用			26	表計算応用1)アンケート作成とデータ
12	文書応用1)広報紙のデザイン			27	表計算応用2)アンケートデータ単純集計
13	文書応用2)広報紙の作成			28	表計算応用3)アンケートデータクロス集計
14	文書作成の総合演習問題1(ビジネス文書)			29	総合演習問題1(表計算総括)
15	文書作成の総合演習問題2(レポート作成)			30	総合演習問題2(文書作成と表計算の複合)
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
本科目の総括として実施する総合演習問題に際しては、結果が評価の中で大きな割合を占めることから、各自入念な準備学習が必要となる。また、厳格な姿勢をもって臨むこと。					
評価方法及び評価基準	授業内評価 授業への取組み姿勢および課題(40%)、総合演習問題等(60%)によって評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分のテキストを予習した上で授業に臨むこと。授業後は、テキストの内容確認や実習課題に取り組むなど十分な復習を行い、知識・技術の定着をはかること。事前・事後学習には合わせて1時間程度を必要とする。				
履修上の注意	Microsoft Office2016を使用して授業を行う。				
テキスト	『30時間アカデミック 情報リテラシー Office2016』(実教出版)				978-4-407-34023-5
—					
—					
参考文献	必要に応じてプリントを配付する。				

科 目 名	視覚障害者指導法		副題			
担 当 者	鈴木 文治					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	視覚に障害のある児童生徒は、障害の状況によって盲と弱視に分けられ、その指導方法は異なっている。就学の場合も盲学校、弱視の特別支援学級、通級指導教室があり、インクルージョンの時代を迎えて、通常の学級で学ぶ者も増えてきている。このような状況にある視覚障害教育のシステムや指導法を学ぶ。また、視覚障害の歴史や今日的課題を見すえ、特別支援教育時代の視覚障害教育のあり方を探る。					
授業のねらい・到達目標	視覚障害教育の教育課程の編成を学び、具体的な指導方法・指導内容について理解する。また、視覚障害教育の歴史を探り、今日的な課題について整理して説明することができる。					
授業の方法・授業計画						
1	目の機能と視覚障害					
2	視覚障害教育の歴史					
3	視覚障害児童生徒の教育と就学支援					
4	教育課程と指導計画					
5	盲児や弱視児への指導					
6	視覚障害児のための教材教具、補償機器					
7	盲学校における指導					
8	視覚障害者と共生社会					
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
期末	試験実施せず					
教科書やレジュメによる講義形式						
評価方法及び評価基準	授業における小テストによる評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分な復習を行うこと。各回の授業ごとに予習、復習それぞれ1時間程度必要とする。					
履修上の注意	配付資料をファイルして繰り返し読むこと。					
テキスト	特になし					
—						
—						
参考文献	視覚障害に携わる方のために 香川邦生 慶応大学出版					

科 目 名	肢体不自由児教育I		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	特殊教育は特別支援教育へと大きな転換が図られ、個別のニーズに合わせた指導が求められている。従来の肢体不自由教育の理論や実践を学びつつ、これからの肢体不自由教育の課題を探る。				
授業のねらい・到達目標	肢体不自由教育の歴史、障害観の変遷を概観し、教育課程の編成を理解する。肢体不自由教育の指導内容・指導方法について、特に障害の多様化・重度重複化に応じた指導のあり方を主体的に学ぶことができる。 【履修ファイルの対応項目:A-4(2)(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	肢体不自由教育の歴史①歴史上の課題について				
2	肢体不自由教育の歴史②社会的背景について				
3	肢体不自由教育の現状と課題				
4	特殊教育から特別支援教育へ(ICIDHからICFへ)				
5	教育課程と指導上の特徴				
6	学習指導要領と教育課程の編成				
7	特別支援学校の役割				
8	自立活動の概要				
9	高等部の教育				
10	個別の指導計画の作成と活用				
11	授業づくり				
12	指導案づくり				
13	個別の教育支援計画の作成と活用				
14	インクルーシブ教育への展望				
15	障害者の人権・まとめ				
期末	期末試験				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	試験による評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分な復習を行うこと。各回の授業ごとに予習、復習それぞれ2時間を必要とする。				
履修上の注意	肢体不自由教育Ⅰを履修した者は、肢体不自由教育Ⅱを履修すること				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	肢体不自由教育の基本とその展開 日本肢体不自由教育研究会 慶応大学出版				

科 目 名	肢体不自由児教育Ⅱ		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	特殊教育は特別支援教育へと大きく転換し、個別のニーズに合わせた教育が求められている。従来の肢体不自由教育の理論や実践を学びつつ、特に個々の課題を見据えた指導法のあり方を探る。				
授業のねらい・到達目標	肢体不自由の自立活動に焦点を当てた指導のあり方を学ぶ。特に肢体不自由特別支援学校の授業見学において学んだ指導の実践を課題別に研究することができる。 【履修ファイルの対応項目：B-2(1)～(6),C-2(3),D-2(1)～(7),D-3(1)～(5),D-4(1)～(6)】				
授業の方法・授業計画					
1	コミュニケーション能力のアセスメント				
2	コミュニケーション意欲向上の指導				
3	教材教具の工夫と開発①教材教具の開発の意義				
4	教材教具の工夫と開発②自作教材教具の活用				
5	肢体不自由特別支援学校の教育①小学部				
6	肢体不自由特別支援学校の教育②中学部				
7	肢体不自由特別支援学校の教育③高等部				
8	肢体不自由特別支援学校の教育④地域支援				
9	他障害を併せ持つ子どもの指導				
10	動作法の活用				
11	芸術活動の取組				
12	補助具・自具の活用				
13	小児マヒ児の指導				
14	難治性てんかん児の指導				
15	移行支援教育・まとめ				
期末	期末試験				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	試験による評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分な復習を行うこと。各回の授業ごとに予習、復習をそれぞれ2時間必要とする。				
履修上の注意	肢体不自由教育Ⅱを履修する者は、肢体不自由教育Ⅰを履修すること				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	インクルージョンをめざす学校 鈴木文治 大門印刷				

科 目 名	肢体不自由者の心理		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	肢体不自由児の発達の一般的特徴を各発達領域にわけて講義する。また脳性まひ児、進行性筋ジストロフィー児の心理的特徴について講義する。さらには、中途障害児者への心理的適応と支援、肢体不自由児の家族への支援、介助者の心理などについても事例の検討を交えながら講義する。				
授業のねらい・到達目標	肢体不自由児の心理的特性と発達支援のあり方について、心理学的な視点から理解を深める。 ＜到達目標＞ 1. 肢体不自由児の発達とその特徴について説明することができる。 2. 肢体不自由児の心理的特徴に基づいた支援のあり方について説明することができる。 3. 肢体不自由児の家族への心理的援助について説明することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：B-2(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	肢体不自由とは				
2	肢体不自由児の発達(1)発達のとらえ方				
3	肢体不自由児の発達(2)発達を支える人的環境				
4	肢体不自由児の発達(3)発達を支える物的環境(教材・教具)				
5	肢体不自由児の心理的特性と指導(1)コミュニケーションの発達				
6	肢体不自由児の心理的特性と指導(2)コミュニケーションの指導				
7	肢体不自由児の心理的特性と指導(3)情緒・社会性の発達				
8	肢体不自由児の心理的特性と指導(4)視知覚認知の発達				
9	肢体不自由児の心理的特性と指導(5)ボディイメージの発達				
10	肢体不自由児の心理的特性と指導(6)動作法				
11	脳性まひ児の心理的特徴				
12	進行性筋ジストロフィー児の心理的特徴				
13	中途障害児(者)の心理的特徴				
14	肢体不自由児の家族の支援(1)親				
15	肢体不自由児の家族への支援(2)きょうだい				
期末	試験実施なし				
基本的には講義形式で行うが、ディスカッションやプレゼンテーション等の能動的な学修方法も取り入れる。 授業内で提出した提出物については、事後の授業で出題の意図について説明し講評するので、期末レポートの準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末レポート(60%)、課題(30%)、授業内での活動(10%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	初回の授業で、参考文献を紹介するので、各授業前に該当する文献を読んでおくことが望ましい(必要な事前学習の時間については、1時間が目安となる。)また授業で配布される資料に基づき復習をし、発展的な学習を行うこと(必要な事後学習については、3時間が目安となる)。疑問点があれば次回の授業で質問をすること。				
履修上の注意	配布資料が多いため、資料を整理するためのファイルを用意するとよい。				
テキスト	授業中にプリントを配布する。				
－					
－					
参考文献	筑波大学付属桐ヶ丘特別支援学校 2008『肢体不自由のある子どもの教科指導Q&A』 ジアース教育新社 竹田契一(監修)里見恵子・河内清美・石井喜代香(著) 2005『実践インリアル・アプローチ事例集』 日本文化科学社 坂口しおり 2006『障害の重い子どものコミュニケーション評価と目標設定』 ジアース教育新社				

科 目 名	肢体不自由者の生理・病理		副題			
担 当 者	宮崎 敦子					
開講期	半期	単位数	2		配当年次	2
授業の概要	肢体不自由児・者が持つ、生活上あるいは学習上の困難性を理解し、療育、教育、支援に必要な発達の知識とその障害、脳病理、リハビリテーションなどについて概説する。さらに、肢体不自由の代表的疾患とした脳性麻痺を中心に脳疾患の合併症、後遺症、病的に随伴しやすい障害を詳細に取り上げ、リハビリテーションについての考え方も含め解説する。					
授業のねらい・到達目標	肢体不自由児・者の病的・生理的特徴を知り、行動特性、生活実態といった現状及び動向を理解する。さらに、彼らの発達支援に必要な事柄を理解することで、障害を配慮した知識や対応策を身につけることができる。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション、講義の目的、内容、進め方、評価方法、参考書について 肢体不自由についての概説					
2	運動と発達(1) 骨格器					
3	運動と発達(2) 反射・神経					
4	肢体不自由者の理解(1) 肢体不自由の定義と肢体不自由の起因疾患について					
5	肢体不自由者の理解(2) 脳性麻痺について、肢体不自由児に重複してみられる障害とその病理について					
6	肢体不自由児の理解(3) 筋ジストロフィー、二分脊椎等の病理について、肢体不自由との重複障害児の生理・病理					
7	肢体不自由児の教育(1) 脳損傷性肢体不自由と生理、病理に応じた自立活動の実際					
8	肢体不自由児の教育(2) 非脳損傷性肢体不自由と生理、病理に応じた自立活動の実際					
9	肢体不自由児の教育(3) 様々な合併症及び知的障害と病弱の重複障害児の病理・生理・心理に応じた指導について					
10	病理・生理の特徴から見た医療的ケアの基本的な考え方					
11	障害児者に関する法律と制度					
12	障害児・者のQOL (quality of life 生活の質)					
13	リハビリテーション医療の現状					
14	バリアフリー 肢体不自由の心理・生理・病理を踏まえた物理的、社会的、心理的バリアについて					
15	まとめ					
期末	テスト					
座学。単元ごとにテキスト内のまとめ課題を用いた小テストによりフィードバックを行う。						
評価方法及び評価基準	授業への参加度と期末テストに基づいて評価する。					
事前・事後学習の内容	事後学習 宿題として出された課題に取り組むこと。 事前学習 事前に提示された課題について下調べを行うこと。 参考文献等を用いて自分のノートをまとめておくこと。事前・事後学習にそれぞれ0.5時間程度を必要とする。					
履修上の注意						
テキスト	肢体不自由児、病弱・身体虚弱児教育のためのやさしい医学・生理学/ジアース教育新社/竹田一則					
—						
—						
参考文献	講義使用の際に文献を提示する。					

科 目 名	実用英語I/実用英語【エントリー】			副題	
担 当 者	印藤 京子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	この講座では、有名なポップソングを教材として、リスニングはもちろん、文法やリーディングを通して高校までに学習した基本事項を復習する。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらい: 英語の歌に親しみながら英語の基礎力を充実させ、人として必要な教養ならびに汎用的な知識を培う。 到達目標: ① 取り上げる歌の歌詞を理解し、それぞれの内容を説明できる。 ② 取り上げる歌の作詞者・歌手について説明できる。				
授業の方法・授業計画					
1	日本語と英語			16	I Need to Be in Love (Lyrics & Grammar)
2	Stand by Me (Lyrics & Grammar)			17	I Need to Be in Love (Reading & Listening)
3	Stand by Me (Reading & Listening)			18	Top of the World (Lyrics & Grammar)
4	Blowin' in the Wind (Lyrics & Grammar)			19	Top of the World (Reading & Listening)
5	Blowin' in the Wind (Reading & Listening)			20	Honesty (Lyrics & Grammar)
6	Puff, the Magic Dragon (Lyrics & Grammar)			21	Honesty (Reading & Listening)
7	Puff, the Magic Dragon (Reading & Listening)			22	Happy Xmas (Lyrics & Grammar)
8	I've Gotta Get a Message to You (Lyrics & Grammar)			23	Happy Xmas (Reading & Listening)
9	I've Gotta Get a Message to You(Reading & Listening)			24	I Just Called to Say I Love You (Lyrics & Grammar)
10	Bridge Over Troubled Water (Lyrics & Grammar)			25	I Just Called to Say I Love You(Reading & Listening)
11	Bridge Over Troubled Water (Reading & Listening)			26	A Place in the Sun (Lyrics & Grammar)
12	Take Me Home, Country Roads (Lyrics & Grammar)			27	A Place in the Sun (Reading & Listening)
13	Take Me Home, Country Roads (Reading & Listening)			28	Pride (Lyrics & Grammar)
14	Imagine (Lyrics & Grammar)			29	Pride (Reading & Listening)
15	Imagine (Reading & Listening)			30	A song by request
期末	試験なし			期末	試験実施
毎回の授業で「予習確認テスト」と「復習テスト」を行い、知識の定着をはかる。 それぞれのテストは、模範解答を提示して解説し、採点終了後返却する。 なお、授業では随時補足プリントを配付する。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内実施テスト(80%)と後期末試験(20%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習: 授業計画にて授業内容を確認し、「予習確認テスト」に備える。(予習には1時間以上かかると想定される。) 事後学習: 十分な復習をして知識の定着をはかり、「復習テスト」に備える。(復習には30分以上かかると想定される。)				
履修上の注意	遅刻(早退)3回で欠席1回とみなす。				
テキスト	関戸 冬彦他、Enjoying English through Pop Songs、朝日出版社				978-4-255-15599-9
—					
—					
参考文献	必要に応じて授業中に指示する。				

科 目 名	児童文化I		副題	子どもの幸せを考える児童文化	
担 当 者	宮崎 麻子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	「児童文化」とは何か、そのことばの概念や歴史、児童文化がもたらす意義などを学ぶ。 また絵本・児童文学などの作品を具体的に考察して、子ども文化に親しみ、その特性とは何かについて学ぶ。 その上で、子どもをとりまく社会・文化の状況や内包する問題を検討して、子どもがすこやかに主体的に育つことへの知見を深めてゆく。				
授業のねらい・到達目標	本授業のねらいは、主に次の3点である。 1) 子どもが出会う児童文化財(絵本・童謡・遊び・児童文学)を鑑賞・再体験することができる。 2) 児童文化のゆたかな世界への理解を深めると共に、保育者としての感性を磨き、想像力を養うことができる。 3) 「文化」の視点から子どもと社会(世界)とのかかわりを探り、時代が子どもにどのようなまなざしを向けているか理解して、説明できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目: A-4(3),D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション／「児童文化」とは何か				
2	絵本／絵本概論と赤ちゃん絵本				
3	絵本／絵本のジャンルとバリアフリー絵本				
4	絵本／表現のひろがり				
5	絵本／古典と現代の作品				
6	おもちゃ／子どもと遊び・おもちゃづくりと自己表現				
7	昔話と子どもの成長				
8	子どもの歌／わらべうたと日本の童謡史				
9	子どもの歌／幼年童謡・子ども讃歌・遊び歌				
10	児童文学／児童文学入門・物語とは何か				
11	児童文学／テーマとジャンルについて				
12	児童文学／日本の作品				
13	児童文学／英米の作品				
14	子どもとメディア／子ども像・子ども観の変容				
15	まとめ／「児童文化」のこれからについて考える				
期末	試験実施なし				
講義形式ではあるが、小課題の執筆と発表、製作なども行う。					
評価方法及び評価基準	平常点(40点／授業態度・リアクションペーパー)とレポート(60点)を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前: 絵本や昔話、児童文学の作品をなるべくたくさん読むことが望ましい。 事後: 授業内容を復習して、知識の定着をはかること。 授業前には2.5時間、復習には1.5時間を目安とする。				
履修上の注意	絵本の読み聞かせや遊び歌などでは、実技を行う。動きやすい服装で積極的に取り組むこと。				
テキスト	適宜プリントを配布する。				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館, 2015年)、その他、授業内で紹介する。				

科 目 名	児童文化I		副題	子どもの幸せを考える児童文化	
担 当 者	宮崎 麻子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	「児童文化」とは何か、そのことばの概念や歴史、児童文化がもたらす意義などを学ぶ。 また絵本・児童文学などの作品を具体的に考察して、子ども文化に親しみ、その特性とは何かについて学ぶ。 その上で、子どもをとりまく社会・文化の状況や内包する問題を検討して、子どもがすこやかに主体的に育つことへの知見を深めてゆく。				
授業のねらい・到達目標	本授業のねらいは、主に次の3点である。 1) 子どもが出会う児童文化財(絵本・童謡・遊び・児童文学)を鑑賞・再体験することができる。 2) 児童文化のゆたかな世界への理解を深めると共に、保育者としての感性を磨き、想像力を養うことができる。 3) 「文化」の視点から子どもと社会(世界)とのかかわりを探り、時代が子どもにどのようなまなざしを向けているか理解して、説明できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目: A-4(3),D-2(2)(3),D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション／「児童文化」とは何か				
2	絵本／絵本概論と赤ちゃん絵本				
3	絵本／絵本のジャンルとバリアフリー絵本				
4	絵本／表現のひろがり				
5	絵本／古典と現代の作品				
6	おもちゃ／子どもと遊び・おもちゃづくりと自己表現				
7	昔話と子どもの成長				
8	子どもの歌／わらべうたと日本の童謡史				
9	子どもの歌／幼年童謡・子ども讃歌・遊び歌				
10	児童文学／児童文学入門・物語とは何か				
11	児童文学／テーマとジャンルについて				
12	児童文学／日本の作品				
13	児童文学／英米の作品				
14	子どもとメディア／子ども像・子ども観の変容				
15	まとめ／「児童文化」のこれからについて考える				
期末	試験実施なし				
講義形式ではあるが、小課題の執筆と発表、製作なども行う。					
評価方法及び評価基準	平常点(40点／授業態度・リアクションペーパー)とレポート(60点)を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前: 絵本や昔話、児童文学の作品をなるべくたくさん読むことが望ましい。 事後: 授業内容を復習して、知識の定着をはかること。 授業前には2.5時間、復習には1.5時間を目安とする。				
履修上の注意	絵本の読み聞かせや遊び歌などでは、実技を行う。動きやすい服装で積極的に取り組むこと。				
テキスト	適宜プリントを配布する。				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館, 2015年)、その他、授業内で紹介する。				

科 目 名	社会科教育法Ⅰ		副題			
担 当 者	一柳 武					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3	
授業の概要	「社会科教育法Ⅰ」においては、中学校学習指導要領に示された社会科の地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標・内容・内容の取扱いについて理解し、社会科教育のあり方について考える。					
授業のねらい・到達目標	中学校社会科の地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標・内容・内容の取扱いについて理解し、中学校社会科教員として必要な基礎的知識を身につけることができる。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド A-4 教育の理念(1)(3)(4)、 C-2 気配り (4) C-3 コミュニケーション (2) D-1求められる応答性 (1) D-2 教育計画 D-3 教科指導の基本 部分に相当する。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション「社会科教育法Ⅰ」の概観					
2	社会科とは何か・社会科の歴史					
3	記憶に残る社会科の授業と教師					
4	社会科における様々な学習形態・学習方法					
5	学習指導要領					
6	小学校学習指導要領との関連、教材研究と教科書					
7	地理的見方・考え方					
8	地図の見方・読み方					
9	歴史的見方・考え方					
10	モノ教材の活用、人物・文化遺産の扱い					
11	主権者教育とは？					
12	政治や経済の見方・考え方					
13	現代社会の課題の扱い					
14	評価の現状と課題					
15	まとめ、総合的学習との関係 授業評価と自己評価					
期末	試験実施なし					
①授業内で提出する提出物は、その授業内での重要事項について説明したり、それに対する自分の意見や考えをまとめるものである。 ②最終レポートについては、授業内で学習したことがらから課題を出し、それに関する自分の意見や考えをまとめるものである。授業中にしっかりノートを取り、要点をまとめておけば十分対応できる。改めて調べ直したりする必要はない。						
評価方法及び評価基準	レポート 毎授業ごとの提出物：(50点) 最終レポート:50点					
事前・事後学習の内容	・ 授業計画にて講義内容を確認し、中学校学習指導要領の該当部分を読む。(必要な事前学習については1.5時間が目安となる。) ・ 講義内容を整理し、中学校社会科教員として必要な基礎知識の定着をはかる。(必要な事後学習については2.5時間が目安となる。)					
履修上の注意	・ 社会科教育法Ⅱを必ず履修すること。 ・ 毎授業ごとにリアクションペーパーもしくは課題を出すので、欠席をするとその分のポイントが加算されない。					
テキスト	中学校指導要領解説 社会編 日本文教出版 テキストは必ず購入すること				978-4-536-59005-1	
—						
—						
参考文献	中学校社会科教科書 地理的分野 歴史的分野 公民的分野(いずれも貸与する)					

科 目 名	社会科教育法Ⅱ		副題			
担 当 者	一柳 武					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3	
授業の概要	「社会科教育法Ⅱ」においては、履修者全員が中学校社会科の地理的分野、歴史的分野、公民的分野のそれぞれについて学習指導案を作成し、模擬授業を行うことにある。 なお、履修者の数により、学習指導案作成の時間を減らし、模擬授業の時間を増やす場合がある。					
授業のねらい・到達目標	中学校社会科の各分野の学習指導案を作成し、それに基づいて模擬授業を行い、中学校社会科教育における実践的な指導力を身につけることができる。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド C－2 気配り（４） C－3 コミュニケーション（２） D－１ 求められる応答性（１） D－２ 教育計画 D－３ 教科指導の基本 D－４ 生徒の興味・関心を活かした指導部分に相当する。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション「社会科教育法Ⅱ」の概観					
2	学習指導案と授業の組み立て方					
3	学習指導案(地理的分野) 教材研究					
4	学習指導案(地理的分野) 指導案の作成					
5	模擬授業(地理的分野)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ1)					
6	模擬授業(地理的分野)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ2)					
7	学習指導案(歴史的分野) 教材研究					
8	学習指導案(歴史的分野) 指導案の作成					
9	模擬授業(歴史的分野)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ1)					
10	模擬授業(歴史的分野)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ2)					
11	学習指導案(公民的分野) 教材研究					
12	学習指導案(公民的分野) 指導案の作成					
13	模擬授業(公民的分野)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ1)					
14	模擬授業(公民的分野)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。(グループ2)					
15	まとめ 自己評価					
期末	試験実施なし					
①学習指導案の作成については、授業内ですべて作成することは不可能であり、各自が十分な教材研究をした上で指導案作成に臨みたい。						
②受講生同士で模擬授業を見学し、「模擬授業相互評価表」に記入することで、それぞれの良かった点や問題点等を指摘し合い、指導技術の向上に努める。						
評価方法及び評価基準	学習指導案 及び 模擬授業					
事前・事後学習の内容	・ 模擬授業をいかに組み立てていくか、教材研究および指導案作成に取り組む。(必要な事前学習については、3時間が目安となる) ・ 模擬授業を通して、良かった点、悪かった点を「模擬授業反省」表に整理し、実習にいくまでの自己改善点を見い出す。(必要な事後学習については、1時間が目安となる。)					
履修上の注意	社会科教育法Ⅰを必ず履修すること					
テキスト	中学校指導要領解説 社会編 日本文教出版 テキストは必ず購入すること				978-4-536-59005-1	
—						
—						
参考文献	中学校社会科教科書 地理的分野 歴史的分野 公民的分野(いずれも貸与する)					

科 目 名	社会学		副題	事例と理論を研究論文から学ぼう	
担 当 者	藤原 亮一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本科目の目的は、社会学の研究方法を理解すること、ならびに社会学の得意とする研究分野について事例にあたり考察することにある。複数の研究者の論文をまとめた図書をテキストとして使用しており、テキストの章ごとの詳細な検討を通じて、社会学のテーマ、研究方法、使用データ、分析枠組みや理論を学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	本科目のねらいは、現代社会論の研究テーマ、現代社会の存立の構造、「現代」を成り立たせる諸特徴を理解することである。また、社会学を学ぶことを通じて、人間と社会についての知見を増やすこと、また客観的なものの見方・考え方を身に付けることができるようにする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 一講義ノート、読書ノートの作り方				
2	社会学の起源 一哲学から科学に歩みをすすめたA. コント				
3	社会学の理論 一作業概念から一般概念へ、中範囲の理論				
4	社会学の方法 一量的研究法と質的研究法				
5	社会学のデータ 一研究課題とデータの関係				
6	研究1. 無縁社会と社会関係				
7	研究2. デュルケームの『自殺論』				
8	研究3. 若者と仕事の意味				
9	研究4. 日本の家族はどう変わってきたか				
10	研究5. 少子高齢化問題と国際人口移動				
11	研究6. 地域社会の変化と地域づくり				
12	研究7. 現代日本のノスタルジアと地域の記憶				
13	研究8. ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』				
14	総括: 社会学の現代的意義				
15	総括: 社会学の将来				
期末	試験実施				
読書ノートと講義ノートを作成すること。でんでんぱん掲示はかならず読むこと。でんでんぱんを通じたフィードバックのほか、小テストの返却、読書ノートの点検によりフィードバックを行う。					
評価方法及び評価基準	定期試験50%、クラス内小テスト30%、読書ノート20%の割合にて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習としては、課題資料を読んで読書ノートを作ること。事後学習では、講義ノートの内容を読書ノートに反映させ、読書ノートのバージョンアップを試みる。事前学習、事後学習あわせて4.0時間かけることを目安とする。				
履修上の注意	クラス内小テストは不定期で複数回行うものとする。				
テキスト	今泉礼右『グローバル時代の社会学ー社会学の視点で読み解く現代社会の諸相』みらい 2016			9784860152970	
ー					
ー					
参考文献	高根正昭『創造の方法学』講談社 2014 船津衛他『21世紀の社会学』日本放送出版協会 2008 見田宗介『現代社会の理論』岩波 2003 ほか、必要に応じて紹介する。				

科 目 名	社会調査法		副題			
担 当 者	藤原 亮一					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2	
授業の概要	社会調査の基礎理論ならびに技法について紹介する。具体的には、社会調査の歴史、量的・質的調査法、また福祉や教育の現場でよく用いられる事例研究、観察、生活史法などについて学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	社会調査法を学ぶことを通じて、人間と社会についての問いかけを、科学的・客観的に行えるようになること。そして、社会調査についての概念や用語を理解することで、社会調査ならびにその結果の賢い消費者になること。以上の二つがこの科目のねらい、もしくは目標である。					
授業の方法・授業計画						
1	社会調査とはなにか					
2	社会調査の歴史					
3	研究と社会調査					
4	社会調査の対象と方法					
5	既存の資料・データの収集と活用					
6	質的調査の種類と考え方					
7	インタビュー調査					
8	フィールドワークの方法と倫理					
9	調査の手順					
10	母集団と標本					
11	調査票の作成					
12	調査票の点検とデータ作成					
13	変数間の関係を把握する					
14	母集団を推測する					
15	社会調査と現代社会					
期末	試験実施					
小テストの返却によるフィードバックを行う。						
評価方法及び評価基準	定期試験50%、クラス内小テスト50%の割合にて総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	事前学習としては、各回の授業テーマについて下調べを行うこと。下調べの内容をノートにまとめることをすすめる。事後学習では、前回の講義内容の理解を前提として次のクラスの講義は進められるので講義ノートをもとに知識の整理をおこなうことをすすめる。事前学習と事後学習あわせて4.0時間かけることを目安とする。					
履修上の注意	クラス内小テストは不定期で複数回行うものとする。					
テキスト	北川由紀彦ほか「社会調査の基礎」放送大学教育振興会 2015				9784595315564	
—						
—						
参考文献	林知木夫 2011「調査の科学」筑摩書房 浜嶋朗他 2009「新版増補版 社会学小事典」有斐閣 佐藤郁也 2007「フィールドワーク増訂版 書を持って街へ出よう」新曜社					

科 目 名	社会福祉学総論I		副題			
担 当 者	相澤 哲					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2	
授業の概要	この授業では、現代社会における社会福祉の意義、福祉政策の課題、社会福祉の歴史的展開、社会福祉の基底にある理念や思想、等について概観する。 なお、理念や理論の話から授業をはじめると、内容が抽象的であるため、多くの学生諸君にとって「とっつきにくい」ということがしばしば起こる。そこでこの授業では、まず社会福祉の歴史を概観し、その内容から理論や概念の話につなげていく、という工夫を試みる。					
授業のねらい・到達目標	・社会福祉の分野における個人と社会をめぐるさまざまな分野の知識を習得し、援助の実践の場でそれらを活用することができる。 ・社会福祉の原理や歴史に関して、包括的かつ体系的に説明できる。					
授業の方法・授業計画						
1	この授業の主題					
2	社会福祉のはじまり					
3	近代的な社会福祉への転換					
4	福祉国家への歩み(1) イギリス					
5	福祉国家への歩み(2) ドイツ、アメリカ、スウェーデン					
6	福祉国家の諸相					
7	福祉国家の揺らぎ					
8	グローバリゼーションと社会福祉					
9	各国の社会福祉の動向					
10	日本の近代化と慈善事業					
11	社会事業の時代					
12	戦後日本の社会福祉					
13	福祉改革の行方					
14	社会福祉の現代的課題					
15	この授業で何を学んできたのか					
期末	試験実施					
授業内小試験については、事後の授業において解説等のフィードバックを行う。						
評価方法及び評価基準	期末試験(95%)、および授業中に実施する小試験(5%)の得点の合計により評価する。					
事前・事後学習の内容	・授業計画で講義内容を確認し、テキストやプリントの該当部分を読む等の予習をすること。(学習に必要な時間の目安は、1.5時間である) ・授業後には、講義の要点をノートに整理する等十分な復習を行い、知識の定着をはかること。(学習に必要な時間の目安は、2.5時間である)					
履修上の注意	基本的なルールを守れない学生に対しては、厳しく対応する。					
テキスト	『精神保健福祉士・社会福祉士養成基礎セミナー 4 社会福祉原論 ― 現代社会と福祉』 へるす出版				ISBN978-4-89269-653-4	
―						
―						
参考文献	授業中に指示する。					

科 目 名	社会福祉学総論II		副題		
担 当 者	相澤 哲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	この授業では、社会福祉と福祉政策に関する概念と理論、近年の社会福祉に関する諸論点、福祉政策の現代的課題、福祉政策の国際比較、福祉と関連する諸領域における政策、といった分野について学習する。				
授業のねらい・到達目標	・社会福祉の分野における個人と社会をめぐるさまざまな分野の知識を習得し、援助の実践の場でそれらを活用することができる。 ・社会福祉および福祉政策の原理や基盤に関する主要な議論について、包括的かつ体系的に説明できる。				
授業の方法・授業計画					
1	この授業で学ぶこと				
2	社会福祉と社会政策に関する概念				
3	社会福祉と社会政策に関する理論				
4	社会福祉の思想				
5	社会福祉における必要と資源				
6	福祉政策の諸論点(1) 社会的排除と社会的包摂、普遍主義と選別主義				
7	福祉政策の諸論点(2) 自立と依存、自己選択とパターナリズム				
8	福祉政策の諸過程と政策評価				
9	福祉政策における政府の役割				
10	福祉政策における市場の役割				
11	日本の社会福祉における新たな動向				
12	社会福祉の供給部門と供給過程				
13	福祉政策の国際比較				
14	福祉政策の関連領域				
15	この授業で何を学んできたのか				
期末	試験実施				
試験結果については「でんでんぱん」で、誤答が多かった設問についての解説等をフィードバックする。					
評価方法及び評価基準	期末試験の得点によって評価する。				
事前・事後学習の内容	・授業計画で講義内容を確認し、テキストやプリントの該当部分を読む等の予習をすること。(学習に必要な時間の目安は、1.5時間である) ・授業後には、講義の要点をノートに整理する等十分な復習を行い、知識の定着をはかること。(学習に必要な時間の目安は、2.5時間である)				
履修上の注意	基本的なルールを守れない学生に対しては、厳しく対応する。				
テキスト	『精神保健福祉士・社会福祉士養成基礎セミナー 4 社会福祉原論 ― 現代社会と福祉』 へるす出版			ISBN978-4-89269-653-4	
－					
－					
参考文献	授業中に指示する。				

科 目 名	社会保障論I		副題			
担 当 者	宮寺 良光					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2	
授業の概要	この授業は、国民生活にとって不可欠なものとなった社会保障制度の意義、目的、制度内容を学び、私たちの暮らしのなかでどのように社会保障制度が組み込まれているのか、また、日本の雇用システム、税制、男女の働き方や暮らし方など、経済社会の構造とどのようにかかわっているのかを理解することを目的とする。					
授業のねらい・到達目標	社会保障制度は、生活上の困難に遭遇した人々の生活を支えるものであるため、まずは受講者が自分自身のためにどう活かしていけるかを理解することが求められる。そのため以下を本授業の到達目標とする。 社会福祉の専門職として、社会保障制度について、対象者（クライアント）への適切な説明ができる。 権利擁護につながるような知識を身に付け、説明できる。					
授業の方法・授業計画						
1	現代社会における社会保障制度の課題（1）人口動態の変化、少子・高齢・人口減少社会					
2	現代社会における社会保障制度の課題（2）労働・雇用環境の変化					
3	現代社会における社会保障制度の課題（3）格差・貧困と社会保障の課題					
4	社会保障の歴史（1）欧米における歴史的展開①					
5	社会保障の歴史（2）欧米における歴史的展開②					
6	社会保障の歴史（3）日本における歴史的展開①					
7	社会保障の歴史（4）日本における歴史的展開②					
8	社会保障の財源と費用（1）社会保障の財源及び給付費					
9	社会保障の財源と費用（2）国民負担率と財源・費用に関する国家的課題					
10	社会保障制度の体系（1）社会保険の概念と範囲					
11	社会保障制度の体系（2）社会扶助の概念と範囲					
12	諸外国における社会保障制度の概要（1）社会保障の国際比較					
13	諸外国における社会保障制度の概要（2）先進諸国における社会保障制度の概要①					
14	諸外国における社会保障制度の概要（3）先進諸国における社会保障制度の概要②					
15	まとめ					
期末	期末試験実施					
講義を中心に展開するが、グループワークを取り入れたり、映像学習を取り入れたりする予定である。 毎回の小課題については、次回の講義時にフィードバックする。 試験の結果については、でんでんばんで各問の平均点等を掲示し、フィードバックする。						
評価方法 及び評価基準	平常点30%（授業への参加度＋小課題）、レポート課題10%、期末試験60%					
事前・事後 学習の内容	予習は、事前に示した課題（用語の理解）に関する箇所を教科書あるいは参考文献から読み解き、事前課題の用紙に記述すること。復習は、事後に示した課題（論述による問題の整理）に関して考察し、事後課題の用紙に記述すること。 なお、毎回の予習は1.5時間、復習は2.5時間が学習時間の目安となる。					
履修上の注意	授業の中でグループワークを取り入れる時があるので、積極的な参加を期待する。					
テキスト	今井伸編『わかる・みえる社会保障論―事例でつかむ社会保障入門―』みらい、2016年				978-4-86015-386-1	
—						
—						
参考文献						

科 目 名	社会保障論II		副題		
担 当 者	宮寺 良光				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	この授業は、「社会保障論Ⅰ」で理解した社会保障制度の意義、目的等を踏まえて、具体的な制度について詳しく取り上げることでより理解を深めるとともに、相談援助の実践につながるように実務的な面にも目を向け、「活用」のための道筋を理解することを目的とする。				
授業のねらい・到達目標	社会保障制度は、生活上の困難に遭遇した人々の生活を支えるものであるため、まずは受講者が自分自身のためにどう活かしていけるかを理解することが求められる。そのため以下を本授業の到達目標とする。 社会福祉の専門職として、社会保障制度について、対象者(クライアント)への適切な説明ができる。 権利擁護につながるような知識を身に付け、説明できる。				
授業の方法・授業計画					
1	社会保障の目的と手段(社会保障論Ⅰの復習)				
2	年金保険制度(1) 年金保険制度の沿革と概要				
3	年金保険制度(2) 国民年金・厚生年金				
4	年金保険制度(3) 年金制度をめぐる最近の動向				
5	医療保険制度(1) 医療保険制度の沿革と最近の動向				
6	医療保険制度(2) 国民健康保険、健康保険と共済組合制度				
7	医療保険制度(3) 高齢者医療制度				
8	介護保険制度(1) 創設の経緯と介護保険制度をめぐる最近の動向				
9	介護保険制度(2) 介護保険制度の概要				
10	労働保険制度(1) 労働保険制度の沿革と最近の動向				
11	労働保険制度(2) 労働者災害補償保険(労災保険)				
12	労働保険制度(3) 雇用保険				
13	社会手当制度 児童手当、児童扶養手当、特別児童扶養手当等				
14	公的保険制度と民間保険制度の関係 民間保険に期待される役割と概要				
15	まとめ				
期末	期末試験実施				
講義を中心に展開するが、グループワークを取り入れたり、映像学習を取り入れたりする予定である。 毎回の小課題については、次回の講義時にフィードバックする。 試験の結果については、でんでんばんで各問の平均点等を掲示し、フィードバックする。					
評価方法及び評価基準	平常点30%(授業への参加態度＋小課題)、レポート課題10%、期末試験60%				
事前・事後学習の内容	予習は、事前に示した課題(用語の理解)に関する箇所を教科書あるいは参考文献から読み解き、事前課題の用紙に記述すること。復習は、事後に示した課題(論述による問題の整理)に関して考察し、事後課題の用紙に記述すること。 なお、毎回の予習は1.5時間、復習は2.5時間が学習時間の目安となる。				
履修上の注意	授業の中でグループワークを取り入れる時があるので、積極的な参加を期待する。				
テキスト	今井伸編『わかる・みえる社会保障論―事例でつかむ社会保障入門―』みらい、2016年			978-4-86015-386-1	
—					
—					
参考文献					

科 目 名	宗教学		副題		
担 当 者	江島 尚俊				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	①歴史的かつ同時代的な視点から宗教を理解できるようになる。 ②宗教を教養として学び、基礎的な知識を身につけることができる。 ③「世界史」を基盤としながら、歴史理論や宗教理論について理解できるようになる。				
	本授業は「世界史」という方法を重視しながら宗教を理解することを目指します。ただし、ここでいう「世界史」とは受験用に学んだような年号中心の世界史ではありません。 本授業での「世界史」とは、①現在を説明するための「世界史」であり、②なぜそのような歴史的事実が起こったのかを説明できる「世界史」を意味しています。				
授業のねらい・到達目標	この授業を通して学べる／獲得できる具体的な点としては、以下のものがある。 (1)宗教学的な基礎知識及び関心を持つことができるようになる。 (2)様々な宗教に対して、客観的な見識を身に付けることができるようになる。 (3)自身の立場と他者の立場の共通点と相違点を明確に意識できるようになる。 (4)上記3つを踏まえた上で、建学の精神「捨我精進」を如何にして実践できるようになるか、自身の考えを表明できるようになる。				
	教職課程対象者 【履修ファイル対応事項:B-1・2・3、C-1・4】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション ― 宗教の起源はどこにある？				
2	なぜユダヤ人はユダヤ教を構築したのか？				
3	儒教はどうやって中華の支配思想となったのか？				
4	仏教誕生と古代インドの政治・社会・経済状況				
5	キリスト教の誕生と弾圧、そして国教化				
6	東アジアと仏教東漸				
7	仏教はなぜ日本に導入された？				
8	ヨーロッパ世界に定着するキリスト教				
9	イスラームの誕生とアラブ民族				
10	日本中世の仏教と神道				
11	イスラーム世界の主導民族変遷史				
12	宗教改革の世界史的意義				
13	アメリカ建国の背景にキリスト教あり				
14	近現代日本の宗教状況				
15	全体の総括				
期末	レポート				
主に講義形式で行いますが、教員と学生のやり取りを重視していきます。 その際は、授業前半を講義時間にあて、後半を動画閲覧および課題に取り組む時間となります。授業内で提出した課題やリアクションペーパーについては、次週に必ずフィードバックを行います。それを踏まえて、よりよいリアクションペーパーの提出ができるよう心がけてください。 ゲスト・スピーカーを招聘し、異なる角度から宗教学を講義してもらう授業回を設定します。					
評価方法及び評価基準	授業への積極的参加(20%) 授業後のリアクションペーパー(30%) 期末レポート(50%)				
事前・事後学習の内容	毎回の授業前には、前回の配布資料やノートを熟読したのちに、シラバス上で今週の講義内容を確認し授業に臨むこと。なお、前回授業終了時に提示された課題は、次回授業開始時に提出すること。(事前学習の目安としては、1.5時間が必要となる) 毎回の授業後には、十分な復習を行うこと。その際には、授業で得た新しい知識を自身で再度学習し、知識の定着を心がけること。(事後学習の目安として、2.5時間が必要となる)				
履修上の注意	毎授業ごとにリアクションペーパーもしくは課題を示す。 なお、私語は厳禁。				
テキスト	授業中に資料を配布する。				
―	「世界史」を、過去の時代の遠い外国で起こった事実の羅列だと考えている学生がいたら、ぜひこの授業を受けてみてください。躍動する「世界史」の面白さと自分への活かし方が必ず獲得できるようになります。				
―					
参考文献	櫻井義秀・三木英編著『よくわかる宗教社会学』(ミネルヴァ書房、2007年) 井上順孝『現代日本の宗教社会学』(世界思想社、1994年)				

科 目 名	就労支援		副題		
担 当 者	引馬 知子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	「人が働くということ」を多角的に理解し、職を得て働き続けることを支える社会の仕組みを学びます。 働く意味、勤労の権利、就労を支援する日本の法政策や社会サービス、及び、これらと社会保障との交錯を、まず把握します。その上で、社会的に不利な立場に陥りやすい人々への、就労支援の現状と課題を具体的に論じます。 加えて、近年の諸外国の雇用・就労に関わる新たな取り組み(均等法政策など)や、先駆的なプログラム等の動向に触れ、その意義を検討します。				
授業のねらい・到達目標	本授業の目的は、社会的に不利な立場にある人々の就労を通じた社会経済的な参画と、これを支える社会の仕組みを理解することです。同時に、これらの仕組みが、個人の生活保障や、少子高齢社会における活力ある社会・経済の形成に関わることを把握します。さらに、福祉、労働、教育の有機的な連携が課題となっていることを学びます。				
授業の方法・授業計画					
1	人が働くということ　－オリエンテーション				
2	雇用・就労の動向と労働法政策				
3	雇用・就労と社会的支援が必要な人々				
4	就労支援制度の現状と課題　－障害者に焦点をあてて				
5	就労支援制度の現状と課題　－低所得者に焦点をあてて				
6	就労支援と教育・福祉・労働の連携　－職業指導、多様な就労形態、専門職の役割等				
7	就労支援と新たな試み　－均等待遇法政策を含む国際的動向				
8	社会的に不利な立場にある人々と就労支援　－まとめ				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	授業中の小テスト、授業中の提出物、授業態度を考慮して、総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業中に出された課題は、次の授業までに行うこと。指示に従い、予習・復習をすること。				
履修上の注意	8回の授業のため、さらに詳しい内容は、「就労支援各論(8回)」で続けて行います。				
テキスト	「就労支援サービス 第4版(新・社会福祉士養成講座)」2016年　中央法規			978-4805853047	
－					
－					
参考文献	授業で適宜案内する。				

科 目 名	障害児の心理・生理・病理		副題	神経発達症(発達障害)への援助に生かす心理・生理・病理の理解	
担 当 者	長田 洋和				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	障害児の定義は、世界共通というわけにはいかないのですが、少なくとも、わが国でも歴史的変遷があります。障害児を指導するにあたっては、定義、分類体系、支援法を詳細に学ぶことは不可欠です。また、教育だけではなく、福祉、医療、そして心理学分野の知識を併せ持つことも望まれます。心理学から言えば、カウンセリング・マインドを持って指導に当たることは、障害児教育に限らず、重要なことです。学際的領域から、障害児への理想的な関わりができるよう、様々な角度から知識を得ます。				
授業のねらい・到達目標	障害児の定義、分類、および支援体系を、わが国および世界的な基準を概観することで理解できるようになる。さらに、カウンセリング・マインドの必要性、重要性の理解ができるので、柔軟な態度で障害児教育・指導を担える人材となり得る知識を身につけることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	障害児の定義の変遷(わが国)				
2	障害児の定義の変遷(世界)				
3	知的能力障害(知的発達症)児の理解				
4	知的能力障害(知的発達症)児への支援				
5	限局性学習症児の理解				
6	限局性学習症児への支援				
7	注意欠如多動症児の理解				
8	注意欠如多動症児への支援				
9	自閉スペクトラム症児の理解				
10	自閉スペクトラム症児への支援				
11	コミュニケーション症児の理解				
12	コミュニケーション症児への支援				
13	視覚障害児の理解および支援				
14	聴覚障害児の理解および支援				
15	まとめと今後の障害児教育の展望				
期末	試験実施なし				
プレゼンテーション(PPT, Keynote)での講義を行います。 視聴覚教材を用いた講義の際には、課題を出します。					
評価方法及び評価基準	授業内レポート(60%)、平常点評価(40%)				
事前・事後学習の内容	事前:シラバスにて授業計画を確認の上、最低限の知識の整理を行う。 事後:配布プリントに従い授業を進めるので、授業中に指示する参考文献で補習する。 1回の講義ごとに、計4時間の事前・事後学習が必要。				
履修上の注意	試験の際は、配布プリントは持ち込み可とします。				
テキスト	プリントを配布します。				
—					
—					
参考文献	発達障害医学の進歩28 杉山登志郎(編)				

科 目 名	【専門基幹】障害者福祉論II/障害者福祉論詳説		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	障害児者をめぐる世界的な転換期を迎え、今後の障害者福祉のあり方が大きく変化する現況の中で、これからの障害の捉え方、対応について学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	インクルージョンの理念を通して、共生社会をめざす福祉のあり方や、障害そのものについての基礎的な知識や対応について学び、人権尊重の意識を育成し、障害者を支援する専門知識を説明することができる。				
授業の方法・授業計画					
1	ホームレスの現状と福祉の課題				
2	ホームレス障害者の事例（高齢者）				
3	ホームレス障害者の事例（若者）				
4	在日外国人の人権・貧困・障害				
5	視覚障害の理解と対応				
6	聴覚障害の理解と対応				
7	知的障害の理解と対応				
8	自閉症の理解と対応				
9	肢体不自由の理解と対応				
10	難病の理解と対応				
11	重症心身障害の理解と対応				
12	発達障害の理解と対応				
13	障害と犯罪				
14	障害と芸術				
15	インクルージョンの概要・まとめ				
期末	期末試験				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	試験による評価及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分な復習を行うこと。各回の授業ごとに予習、復習にそれぞれ2時間程度必要とする。				
履修上の注意	授業のレジュメをファイルして事後学習に努めること。				
テキスト	ホームレス障害者 鈴木文治著 日本評論社				
－					
－					
参考文献	排除する学校一特別支援学校生急増が意味するもの 鈴木文治著 明石書店				

科 目 名	人体の機能と日常生活		副題			
担 当 者	島田 今日子					
開講期	半期	単位数	2		配当年次	2
授業の概要	自立生活を支援するために必要なこととからだの基礎的な知識及び人体との関係を学び、介護実践に適切に活用できる能力を習得する。					
授業のねらい・到達目標	人体の構造と機能についての知識を、こととからだのしくみ、身じたく、移動・移乗、清潔保持、排泄、睡眠、死にゆく人の視点から理解し、生活支援技術に必要な基礎知識を身につける。					
授業の方法・授業計画						
1	「人体の機能と日常生活」のオリエンテーション、人間の欲求の基本的理解					
2	自己概念と尊厳、思考と感情、学習と記憶					
3	生命誕生、成長発達の理解					
4	こころのしくみの理解(1)心身の調和、生命の維持・恒常のしくみ、遺伝、脳・神経					
5	こころのしくみの理解(2)基礎的なことと脳のつながり					
6	身じたくに関連したこととからだのしくみ(1)感覚器					
7	身じたくに関連したこととからだのしくみ(2)基礎的な身じたくに関連する機能低下・障害					
8	活動・移動に関連したこととからだのしくみ					
9	食事に関連したこととからだのしくみ(1)消化・吸収					
10	食事に関連したこととからだのしくみ(2)基礎的な食事に関連する機能低下・障害					
11	入浴・清潔保持に関連したこととからだのしくみ					
12	排泄に関連したこととからだのしくみ					
13	睡眠に関連したこととからだのしくみ					
14	死にゆく人のこととからだのしくみ					
15	総括					
期末	試験実施					
小テスト後は、その都度フィードバックをする。						
評価方法及び評価基準	課題と小テスト(50%)、学期末試験(50%)により評価する。					
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、事前に該当部分の下調べを1.5時間を目安に実施し、授業に臨むこと。事後は復習を2.5時間を目安に行い、知識の定着をはかること。					
履修上の注意	こととからだのしくみの概要を理解するため、前向きな学習姿勢を期待する。					
テキスト	小坂橋喜久代他編集『こととからだのしくみ』メヂカルフレンド社					978-4-8392-3199-6
—						
—						
参考文献	各回のテーマに沿った書籍や論文等を紹介する。					

科 目 名	心理学		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本講義では、心理学の基礎的な理論を学び、さらにそれらの知見を生かした支援の方法について学ぶ。心理学は様々な近接領域と結びつくことで、領域が広がっており、それによって学ぶ内容も多岐にわたっている。感覚と知覚の心理、学習と思考の心理といった「心のしくみ」に関する内容から、社会における人間関係、心の発達、ストレスとメンタルヘルスなど、環境に適応していくうえで心がどのように役立っているのかといった「心と適応」に関する内容まで学ぶことになる。心理学の大枠を理解し、興味を深めることができるように、現代的なトピックスを交えながら解説していく。				
授業のねらい・到達目標	本講義では、心理学の基礎的な理論全般を学び、さらにそれらの知見を生かした支援法についても理解を深める。 ＜到達目標＞ (1)心理学とは何を学ぶ学問であるかを理解し、心理学全般にわたる知識を修得する。 (2)心理学の理論による人間の理解とその技法の基礎について説明できる。 (3)人の成長・発達と心理との関係について説明できる。 (4)日常生活と心の健康との関係について説明できる。 (5)心理的支援の方法と実際について説明できる。				
授業の方法・授業計画					
1	はじめにー心理学とは				
2	こころの発達ー赤ちゃんは大人とどう違うのか？ー				
3	ライフサイクルー人は生涯発達するー				
4	動機づけと情動ーやる気の心理学ー				
5	性格ー個人差をどう考えるのかー				
6	感覚・知覚のはたらき				
7	記憶ー覚えることと忘れることー				
8	知的能力とは何か				
9	学習ー経験から学ぶー				
10	思考ー論理と直感ー				
11	社会の中の人ー他者による影響と他者の認知ー				
12	心と社会ー協調と信頼ー				
13	ストレスとメンタルヘルス				
14	カウンセリングと心理療法				
15	まとめー心理学を活かしてー				
期末	試験実施				
授業は主として講義形式で行うが、簡単な実習課題、ディスカッションやプレゼンテーション等の能動的な学修方法も取り入れる。また理解度を確認するために、小テストを実施する。小テストについては、事後の授業で出題の意図について説明し講評するので、定期試験の準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末試験の結果(70%)に、リアクションペーパー・小テストの得点(30%)を加点して評価する。				
事前・事後学習の内容	＊ 授業計画に基づき、事前に教科書を読んでおくこと。また必要な下調べや課題を作成するなど、予習を充分に行うこと。各回につき、2時間が目安となる。 ＊ また、授業後には、授業内で指摘されたポイントを中心に教科書と配付資料を読み、知識の定着を図ること。各回につき、2時間が目安となる。				
履修上の注意	教科書を必ず持参すること。				
テキスト	『はじめて出会う心理学』長谷川寿一・東條正城・大島 尚・丹野義彦・廣中直行(有斐閣アルマ)				978-4-641-12345-8
—					
—					
参考文献	授業中に指示する。				

科 目 名	スキー・スポーツ		副題			
担 当 者	外川 重信					
開講期	集中	単位数	1	配当年次	1	
授業の概要	スノースポーツの一つであるスキーの基本的な技術及び理論を学修する。実技では、技術レベルに応じた班別の指導とする。夜の講義の理論では、スキーの構造と回転の仕組み、安全行動を学修し、基本的なマナーもしっかりできるようにする。事前のオリエンテーションもおこなう。					
授業のねらい・到達目標	スキーのもつ楽しさと、自然の美しさ・厳しさを感じながら、基本的な技術と安全行動を学修する。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
春休みに3泊4日の集中授業として実施する。「スノーボード・スポーツ」と並行しておこなうので、二つの集中授業を同時に履修することはできない。 スケジュール 1日目： バス移動 午後:実技講習 夜:講義 2日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義 3日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義 4日目:午前:実技講習 バス移動 <3日目に希望者のみSAJ公認バッチテストをおこなう> 実施期日:2月中旬から3月上旬 実施場所:未定 宿泊形態:旅館又はホテル 募集人数:約40名 持ち物:スキーはレンタルが可能、ウェアは大学にて無料貸出が可能。詳しいことは、事前オリエンテーションで説明する。						
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。					
事前・事後学習の内容	(事前)オリエンテーションに参加すること。安全なスキー上達のための理論をよく調べておくこと。(事後)スキーの理論及び反復練習によって技術の向上を図ること。					
履修上の注意	普段から体力作りをしていること。団体で宿泊し、生活時間も授業と考える。健康診断を受けていて、心身共に4日間の集中授業ができること。					
テキスト	「スキー場安全マニュアル」布目靖則(全国スキー安全対策協議会)					
—						
—						
参考文献	「日本スキー教程」全日本スキー連盟(スキージャーナル) 「日本スキー教程安全編」全日本スキー連盟(スキージャーナル) 「スキー場安全マニュアル」布目靖則(全国スキー安全対策協議会)					

科 目 名	スノーボード・スポーツ		副題			
担 当 者	外川 重信					
開講期	集中	単位数	1	配当年次	1	
授業の概要	スノースポーツの一つであるスノーボードの基本的な技術及び理論を学修する。実技では、技術レベルに応じた班別の指導とする。夜の講義の理論では、スノーボードの構造と回転の仕組み、安全行動を学修し、基本的なマナーもしっかりできるようにする。事前のオリエンテーションもおこなう。					
授業のねらい・到達目標	スノーボードのもつ楽しさと、自然の美しさ・厳しさを感じながら、基本的な技術と安全行動を学修する。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
春休みに3泊4日の集中授業として実施する。「スキー・スポーツ」と並行しておこなうので、二つの集中授業を同時に履修することはできない。 スケジュール 1日目: バス移動 午後:実技講習 夜:講義 2日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義 3日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義 4日目:午前:実技講習 バス移動 <3日目に希望者のみSAJ公認バッチテストをおこなう> 実施期日:2月中旬から3月上旬 実施場所:未定 宿泊形態:旅館又はホテル 募集人数:約40名 持ち物:スノーボードはレンタルが可能、ウェアは大学にて無料貸出が可能。詳しいことは、事前オリエンテーションで説明する。						
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。					
事前・事後学習の内容	(事前)オリエンテーションに参加すること。安全なスノーボード上達のための理論をよく調べておくこと。(事後)スノーボードの理論及び反復練習によって技術の向上を図ること。					
履修上の注意	普段から体力作りをしていることが望ましい。団体で宿泊し、生活時間も授業と考える。健康診断を受けていて、心身共に4日間の集中授業ができること。					
テキスト	特になし					
—						
—						
参考文献	「日本スノーボード教程」全日本スキー連盟(スキージャーナル) 「日本スキー教程安全編」全日本スキー連盟(スキージャーナル) 「スキー場安全マニュアル」布目靖則(全国スキー安全対策協議会)					

科 目 名	スポーツ・コミュニケーション【エントリー】		副題			
担 当 者	高橋 和孝					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1	
授業の概要	将来、スポーツを楽しんで実践するための授業とする。バレーボール、バスケットボール、バドミントン、フットサル、卓球などを主な教材として、理論と実技を併用した授業をおこなう。実技では、楽しみながら実践することを目的とするために、ゲームを中心におこなう。理論では、スポーツの概念と歴史、体カトレーニングの理論と方法などを学習する。また、個々のスポーツではルール、怪我の防止なども学習する。					
授業のねらい・到達目標	体カトレーニングの理論や様々なスポーツの基本的な技術を学び、体力の維持・向上に積極的に取り組むことができる。また、スポーツを通して、仲間とのコミュニケーション能力を養うことができる。					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション、スポーツの理論(概念と歴史)					
2	バレーボール1(基本技術:トスとサーブ)					
3	バレーボール2(基本技術:アタックとレシーブ)					
4	バレーボール3(男女別ゲーム)					
5	バレーボール4(男女混合ゲーム)					
6	バスケットボール1(基本技術:ドリブルとシュートとパス)					
7	バスケットボール2(ゲーム:マンツーマンディフェンス)					
8	バスケットボール3(ゲーム:ゾーンディフェンス)					
9	バドミントン1(基本技術:ハイクリアーとドライブなど)					
10	バドミントン2(シングルスとダブルスゲーム)					
11	卓球1(基本技術:サーブとラリー)					
12	卓球2(シングルスとダブルスゲーム)					
13	フットサル1(基本技術:ドリブルとシュート)					
14	フットサル2(ゲーム)					
15	スポーツの理論2(体カトレーニング)					
期末	試験実施せず					
スポーツ種目は適宜順番を変更する場合がある。						
評価方法及び評価基準	運動能力(40%)・学習意欲(25%)・学習態度(25%)および授業の理解度(10%)を総合して評価する。					
事前・事後学習の内容	【事前】ルール等をよく調べた上で授業に臨むこと。 【事後】反復練習によって技術の向上を図ること。 事前・事後で合計1時間程度の学習時間を求める。					
履修上の注意	①履修希望者が多い場合、人数制限をすることがある。 ②授業中は、スポーツウェアと体育館シューズを使用すること。 ③着替えは体育館更衣室でおこない、貴重品は必ず体育館アリーナに持ってくる。教員控室には、貴重品を入れるロッカーとその鍵がある。 ④更衣室に常時私物を置かないこと。 ⑤シャワーを使用したい時は、教員に連絡すること。 ⑥体育館は土足厳禁。					
テキスト	特になし					
－						
－						
参考文献	「アクティブスポーツ総合版」 大修館書店					

科 目 名	スポーツI			副題	
担 当 者	外川 重信				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	スポーツを楽しみ、実践するための授業とする。バレーボール、バスケットボール、バドミントン、フットサル、卓球、レクリエーションスポーツを主な教材として、理論と実技を併用した授業をおこなう。実技では、楽しみながら実践するので、ゲームを中心におこなう。理論では、そのスポーツの概念と歴史の他に、生涯スポーツをつづける上での基礎的理論を学修する。また幼稚園・保育園でおこなっている基本的な運動もできるようにする。				
授業のねらい・到達目標	メジャースポーツや様々なスポーツの基本的な技術の習得と、体力の維持・向上をめざす。また幼稚園・保育園でおこなうスポーツのマスターと指導ができるようにする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、スポーツの理論1(スポーツ概論と遊び)			16	スポーツの理論4(体カトレーニング論:筋カトレーニングの科学と方法)
2	スポーツの理論2(体カトレーニング論:ストレッチの科学と準備運動)			17	保育園/幼稚園でのスポーツ1(マット運動・鉄棒・フラフープ)
3	バレーボール1(基本技術:トスとサーブ)			18	バレーボール4(ゲームの役割と方法)
4	バレーボール2(基本技術:アタックとレシーブ)			19	バレーボール5(ゲームの運営)
5	バレーボール3(ゲーム)			20	保育園/幼稚園でのスポーツ2(竹馬・縄跳び)
6	バスケットボール1(基本技術:ドリブルとシュート)			21	バスケットボール4(ゲームの役割と方法)
7	バスケットボール2(基本技術:マンツーマンディフェンス)			22	バスケットボール5(ゲームの運営)
8	バスケットボール3(ゲーム)			23	保育園/幼稚園でのスポーツ3(スキルチェック)
9	フットサル1(基本技術:ドリブルとシュート)			24	フットサル4(ゲームの役割と方法)
10	フットサル2(基本技術:ルールとフォーメーション)			25	フットサル5(ゲームの運営)
11	フットサル3(ゲーム)			26	保育園/幼稚園でのスポーツ4(運動会の練習)
12	ラケットスポーツ1(卓球・バドミントンの基本)			27	保育園/幼稚園でのスポーツ5(運動会の運営)
13	ラケットスポーツ1(卓球・バドミントンのゲーム)			28	様々なレクリエーションスポーツ2(雪合戦など)
14	様々なレクリエーションスポーツ1(フリスビーなど)			29	様々なレクリエーションスポーツ3(フロアホッケーなど)
15	スポーツの理論3(体カトレーニング論:心拍数の科学とダイエット)			30	スポーツの理論5(スポーツと法律、まとめ)
期末	試験実施せず			期末	試験実施なし
スポーツ種目は適時順番を変更する場合がある。 また毎回、授業の始まりと終わりに「あいさつ」を実施する。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力・学習意欲・学習態度及び授業の理解度を総合して評価する。保育園/幼稚園でのスポーツ種目は、授業内でテストをおこなう。				
事前・事後学習の内容	(事前)授業計画にて授業内容を確認し、ルール等をよく調べた上で授業に臨むこと。(事後)反復練習によって技術の向上を図ること。事前・事後の学習は、それぞれ0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	①授業中は、スポーツウェアと体育館用シューズを使用すること。②着替えは体育館更衣室におこない、必ず貴重品は体育館フロアに持ってくる。教員控え室には、貴重品を入れるロッカーとその鍵がある。③更衣室に、常時私物を置かないこと。④シャワーを使用したい時は、教員に連絡すること。				
テキスト	必要に応じて配布する				
－					
－					
参考文献	「アクティブスポーツ総合版」大修館				

科 目 名	スポーツI			副題	
担 当 者	高橋 和孝				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	将来、スポーツを楽しみながら実践するための授業とする。バレーボール、バスケットボール、バドミントン、フットサル、卓球などを主な教材として、理論と実技を併用した授業をおこなう。実技では、楽しみながら実践することを目的とするため、ゲームを中心におこなう。理論では、そのスポーツの概念と歴史、体カトレーニングの理論と方法、指導者の役割、などを学習する。また幼稚園・保育園でおこなっている基本的な運動もできるようにする。				
授業のねらい・到達目標	様々なスポーツの基本的な技術の習得によって、体力の維持・向上をめざす。また幼稚園・保育園でおこなうスポーツに関して指導ができるようにする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、スポーツの理論1(スポーツの概論と遊び)			16	スポーツの理論4(体カトレーニング論:ジャンプトレーニング)
2	スポーツの理論2(体カトレーニング論:ストレッチの科学)、レクリエーションスポーツ			17	保育園・幼稚園でのスポーツ1(マット運動・跳び箱・鉄棒)
3	バレーボール1(トスとサーブ)			18	バレーボール4(ゲームの役割と方法)
4	バレーボール2(アタックとレシーブ)			19	バレーボール5(ゲームの運営)
5	バレーボール3(ゲーム)			20	保育園/幼稚園でのスポーツ2(フラフープ・縄跳び・竹馬)
6	バスケットボール1(ドリブルとシュート)			21	バスケットボール4(ゲームの役割と方法)
7	バスケットボール2(マンツーマンディフェンス)			22	バスケットボール5(ゲームの運営)
8	バスケットボール3(ゲーム)			23	保育園/幼稚園でのスポーツ3(実技テスト)
9	フットサル1(パス・ドリブル・シュート)			24	フットサル4(ゲームの役割と方法)
10	フットサル2(ゲーム)			25	フットサル5(ゲームの運営)
11	バドミントン1(ラリー、サーブ・レシーブ)			26	保育園/幼稚園でのスポーツ4(運動会の練習)
12	バドミントン2(ゲーム)			27	保育園/幼稚園でのスポーツ5(運動会の運営)
13	卓球1(ラリー、サーブ・レシーブ)			28	様々なレクリエーションスポーツ2(雪合戦など)
14	卓球2(ゲーム)			29	様々なレクリエーションスポーツ3(フロアホッケーなど)
15	スポーツの理論3(体カトレーニング論:筋カトレーニングの科学と方法)			30	スポーツの理論5(スポーツと法律、まとめ)
期末	試験実施せず			期末	試験実施なし
スポーツ種目は適時順番を変更する場合がある。 また毎回、授業の始まりと終わりに「あいさつ」を実施する。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力(40%)・学習意欲(25%)・学習態度(25%)および授業の理解度(10%)を総合して評価する。保育園・幼稚園でのスポーツ種目は、授業内で実技テストをおこなう。				
事前・事後学習の内容	【事前】授業計画にて授業内容を確認し、ルール等をよく調べた上で授業に臨むこと。 【事後】反復練習によって技術の向上を図ること。 事前・事後で合計1時間程度の学習時間を求める。				
履修上の注意	①授業中は、スポーツウェアと体育館用シューズを使用すること。 ②着替えは体育館更衣室でおこない、貴重品は必ず体育館アリーナに持ってくる。教員控室には、貴重品を入れるロッカーとその鍵がある。 ③更衣室に、常時私物を置かないこと。 ④シャワーを使用したい時は、教員に連絡すること。 ⑤体育館内は土足厳禁である。				
テキスト	必要に応じて配布する				
－					
－					
参考文献	「アクティブスポーツ総合版」大修館				

科 目 名	生活	副題	遊びの生活～遊びを通して学び、育つ子どもの姿		
担 当 者	清水 一豊				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	幼児期は「遊びの生活」といわれるように子どもは遊びを通して様々なことを学んでいる。遊びの具体的な事例や体験的な活動・表現的な活動を映像等で紹介したり、実際に、つくる、あそぶ、表現するなどの活動を取り入れ、幼児期の遊びの豊かな可能性に気づき、活動の意味を再認識するとともに、一人一人のよさを伸長する指導者のかかわりや役割を学ぶ。 また、幼稚園・保育園と小学校との交流の意義や幼稚園・保育園と小学校とを接続する入学期のスタートカリキュラムなどを通して、互恵性のある交流・連携の在り方を学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	・幼児期における遊びの価値について理解し、身近な自然や社会とのかかわりのなかで遊びが生まれ発展していく環境を工夫・構成することができる。 ・体験や具体的な活動に見られる幼児の試行錯誤や表現などの活動を気づきの視点から価値付け、指導者として適切な支援を考える工夫することができる。 ・幼稚園・保育園と小学校との交流や小学校の入学期のスタートカリキュラムについて具体的な事例を学び、連携・交流を積極的に推進しようとする意欲をもつことができる。				
授業の方法・授業計画					
1	子どもの遊び ～ 二つの遊びの分析				
2	子どもの遊びの発達と環境				
3	子どもが育つ「環境」 ～ 環境の概念・幼稚園の環境構成の事例				
4	幼児・児童期における体験の価値				
5	遊びが育てる力(1) ～ 環境構成				
6	遊びが育てる力(2) ～ 指導者のかかわり				
7	身近な自然や素材とかかわる ～ 遊ぶものをつくる・遊びをつくる～				
8	つくる・あそぶ・協同する活動が生まれる 環境構成の工夫				
9	自作絵本による自然・遊びへ誘うブックトーク				
10	子どもの空間認識 ～体験がつくる「子どもが見ている世界」				
11	体験や自然とのかかわりが形成する原風景 ～ 幼児期の体験の価値				
12	互恵性のある交流 ～ 小学校との授業記録から				
13	体験を通して学ぶ「生活」 ～領域「環境」との関連と指導原理				
14	体験を通して学ぶ「生活」 ～ 単元「夏とあそぼう」(1年)の授業記録から				
15	幼保・小の滑らかな接続・交流 ～ アプローチカリキュラムとスタートカリキュラム				
期末	試験実施なし				
課題としてのレポートの作成、作品の制作、毎回の授業の終了時の振り返りによるまとめについては、目標に対する達成状況を、理解状況をふまえ、以後の講義の中で理解を深められるようにしたり、発展的な課題や内容につなげたりしていく。					
評価方法及び評価基準	授業への参加度 レポート 作品 授業毎の振り返りの記録 30% 作品 40% レポート 30%				
事前・事後学習の内容	事前学習 課題に取り組んだり資料を読み込み、課題意識をもって臨むようにする。 事後学習 配布資料の再整理、課題について取り組み提出に備える 事前学習には2時間、事後学習には2時間が目安となります。				
履修上の注意	3～4回がユニットとして内容が構成されている。欠席時には講義内容や課題の把握に努め 授業に臨むこと				
テキスト	幼稚園教育要領解説				
—					
—					
参考文献	小学校学習指導要領解説 生活編				

科 目 名	政治学		副題		
担 当 者	藤森 智子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	人は、時に協力し、時に対立して社会を形成してきた。政治の主な機能は「社会の利害調整」であるといわれる。この講義では、政治学の基礎的概念を学習し、現代の日本社会や国際社会に対する理解を深め、同時に社会問題に対する観察力を養うことを目的とする。 授業では、政治学の基礎的知識と今日の日本の政治や国際政治について学習する。また政治が関わる具体的な社会問題を逐次取り上げ、検討する。				
授業のねらい・到達目標	受講学生には、政治学の基礎的概念を学ぶことで、政治意識を高め、現代社会や国際社会に対する関心・理解を深められるようになることを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	政治とは何か				
2	政治と権力				
3	民主主義				
4	議会政治の歴史と国会				
5	政治制度－議院内閣制と大統領制				
6	政党政治と選挙				
7	圧力団体、マスコミ				
8	地方自治				
9	官僚制				
10	現代政治の課題－行政国家、福祉国家				
11	国際連合と国際協力				
12	米ソ冷戦と冷戦後の国際社会(1)－冷戦の起源と展開				
13	米ソ冷戦と冷戦後の国際社会(2)－冷戦後の国際社会				
14	国家とナショナリズム				
15	総括				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。 授業終了時にその回の内容についての小テストを行う。					
評価方法及び評価基準	毎回の小テストの合計を60%、授業内テストを40%とする。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、該当する部分の下調べをしてから授業に臨むこと。関連する新聞記事やニュースに目を通すこと。授業後は、配布プリントを活用し、充分な復習を行い、知識の定着をはかること。各回の授業の予習に1.5時間、復習に2.5時間が目安となる。				
履修上の注意	欠席をすると、その回の小テストは受けられない。				
テキスト	特になし。				
－					
－					
参考文献	北山俊哉・久米郁男・真淵勝『はじめて出会う政治学 第3版』有斐閣、2009				

科 目 名	生徒指導論		副題			
担 当 者	菅谷 正美					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3	
授業の概要	生徒指導は、学習指導とともに学校教育で行われる教師の指導の大切な仕事である。生徒指導の意義と内容を理解するとともに、本授業では、学校教育の現場で起こっている生徒のさまざまな問題行動を取り上げ、その実態、背景、指導法等について学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	授業の到達目標として次の5点とする。 1 生徒指導と学習指導の違いを理解することができる。 2 生徒指導の意義と内容を理解することができる。 3 生徒指導の指導方法を理解し、実践力をもつことができる。 4 生徒指導上の具体的な問題について、自分の考えを持つことができる。 5 キャリア教育の視点から進路指導の意義を理解することができる。 (履修ファイルの対応項目は、B－3(6)である)					
授業の方法・授業計画						
1	生徒指導の意義と目的					
2	生徒指導と教育課程					
3	生徒の現状と問題行動の実態					
4	問題行動の原因と背景					
5	中学生の発達の特徴と生徒指導					
6	高校生の発達の特徴と生徒指導					
7	生徒理解の方法					
8	生徒指導の方法					
9	生徒指導と学級経営					
10	生徒指導の組織体制と家庭・地域等との連携					
11	問題行動(いじめ)への具体的対応					
12	問題行動(暴力行為)への具体的対応					
13	問題行動(不登校)への具体的対応					
14	問題行動(自殺等)への具体的対応					
15	進路指導の内容と方法					
期末	試験実施					
・ 各回の授業の内容について、学生が分担した内容について文献に当たり調査し、発表する。 ・ 発表の仕方、資料の提示方法、説明の仕方等について、全員で討議をする。						
評価方法及び評価基準	学期末試験の得点及び授業中の発表の内容、授業への参加意欲・態度等を総合して評価する。					
事前・事後学習の内容	分担された発表予定の内容については、文献にあたり調べておくこと。また、日頃から教育問題に関心をもち、自分の言葉で意見を述べるようにする。 学んだことは、将来の教師の職務に活かすために、事後の学習としてまとめておくこと。 毎回、予習は1.5時間、復習は2時間が目安になる。					
履修上の注意	受け身の授業参加ではなく、問題に対して積極的に自分の考えをもつこと					
テキスト	授業に必要なテキストは配布する。					
－						
－						
参考文献	文部科学省「生徒指導提要」教育図書 2011 文部科学省「中学校学習指導要領」 文部科学省「高等学校学習指導要領」					

科 目 名	世界史		副題		
担 当 者	田中 達実				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	各地域の文化圏の成立と発展を概観し、近代の主権国家の形成と国際社会の成立過程を学ぶ。そして、帝国主義列強による世界分割から、2つの世界大戦を経て21世紀へとつながる過程を考察して行く。				
授業のねらい・到達目標	主権国家間の対立や民族・宗教対立発生の歴史的背景を学ぶことにより、現代の国際問題を理解できるようになる。国際政治の中における日本の歴史を学ぶことにより、これからの日本の針路を考える力をもつことができる。				
授業の方法・授業計画					
1	世界史の時代区分				
2	古代の世界1(オリエントと地中海世界)				
3	古代の世界2(アジア・アメリカの古典文明)				
4	中世の世界1(西ヨーロッパの封建社会)				
5	中世の世界2(イスラム世界の発展)				
6	近代ヨーロッパの成立と発展				
7	ヨーロッパ主権国家体制の展開				
8	近代国民国家の成長と発展				
9	アジア帝国の発展と動揺				
10	帝国主義時代の世界				
11	2つの世界大戦				
12	戦後世界と東西対立				
13	多極化と国際経済の危機				
14	社会主義国家の崩壊と地域紛争				
15	21世紀の課題				
期末	試験実施				
歴史上の出来事や人物を憶えるだけでなく、なぜその出来事が起こったのか？その歴史的意義はなになのか？を学ぶとともに歴史の流れを把握し、これからの日本や世界を考察できる授業とする。					
評価方法及び評価基準	学期末試験の結果に授業への参加姿勢を加味します。				
事前・事後学習の内容	開講時に配付する講義プリントで、次回の講義内容を把握しておくこと。 受講後は、講義の内容を整理して、疑問点があれば、つぎの講義で質問すること。 事前・事後学習にそれぞれ2時間程度を必要とする。				
履修上の注意	出席および授業への参加態度を重視する。				
テキスト	授業中にプリントを配付する。				
－					
－					
参考文献	高校世界史教科書・図説など。そのほか必要に応じて、授業で紹介します。				

科 目 名	ソーシャルワークI		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この授業では、ソーシャルワークとは何かということ、ソーシャルワークの定義、歴史、機能と役割、実践領域、援助関係や面接技術等から幅広く学ぶ。 ソーシャルワークの講義科目は、ソーシャルワークI～IV、ソーシャルワーク総論I、IIからなっている。その一番基礎的な科目が本講義である。よって、人の幸せを支える学問であるソーシャルワークの基礎を理解するとともに、多種多様な場面で必要とされているソーシャルワークへの関心がより深まっていくことを目的としている。				
授業のねらい・到達目標	・現代社会が抱えるさまざまな問題から、ソーシャルワークの必要性を挙げることができる。 ・ソーシャルワークの定義、歴史、機能と役割、実践領域、援助関係などについて一定の基本的知識を説明することができる。 ・ソーシャルワークとは何か、人と環境との交互作用について等を例えなどを表しながら説明することができる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	ソーシャルワークの範囲・人間と環境の理解				
3	ソーシャルワークの定義(旧定義、社会変革～エンパワメント)				
4	ソーシャルワークの定義(社会正義～ウェルビーイング)				
5	ソーシャルワークの援助体系・歴史(SW前史～発展期)				
6	ソーシャルワークの歴史(モデル・アプローチ)				
7	ソーシャルワークの実践領域・専門職性・4要素				
8	中間テスト・倫理綱領				
9	中間テスト解説・ソーシャルワークの機能と役割(調整的機能、開発的機能)				
10	ソーシャルワークの機能と役割(代弁的機能、教育的機能)				
11	ソーシャルワークと援助関係(個別化～意図的な感情の表出)				
12	ソーシャルワークと援助関係(統制された情緒的関与～秘密保持)				
13	ソーシャルワークの援助過程				
14	ソーシャルワークの面接技術				
15	まとめ				
期末	試験実施				
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法及び評価基準	試験(中間、期末) 授業に臨む態度および提出物20%、試験80%(中間、期末含む)				
事前・事後学習の内容	毎回、テキストの当該部分は熟読し講義に臨むこと。テキストやレジュメをもとに復習しておくこと。 毎回、予習2時間、復習2時間を目安とする。				
履修上の注意	ソーシャルワークの一番基礎的な科目であり、ソーシャルワーク演習や実習とも深く関連している科目である。よって、真剣にかつ主体的に授業に臨むこと。尚、私語に対しては厳しく対処する。				
テキスト	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法II 岩間伸之他 ミネルヴァ書房			9784623053926	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法I 岩間伸之他 ミネルヴァ書房			9784623053919	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック 相談援助の基盤と専門職 大橋謙策他 ミネルヴァ書房			9784623053902	
参考文献	授業時、必要に応じ紹介				

科 目 名	ソーシャルワークII		副題			
担 当 者	小平 隆雄					
開講期	半期	単位数	2		配当年次	1
授業の概要	この授業ではソーシャルワークの基本的な視点と相談援助の理念を確認し、ソーシャルワークのプロセスを理解する。また個別援助から、グループを活用した援助、家族への援助と学習を進め、ソーシャルワークの総合的包括的な援助の意義と課題について学んでいく。					
授業のねらい・到達目標	・インテークから終結まで、事例を通してソーシャルワークの一連のプロセスを説明することができる。 ・グループを用いた支援、家族支援の考え方などを学ぶなかで、ミクロからマクロまでの視点を持ち、ソーシャルワークの全体像を説明することができる。 ・グループを使って個人の成長を支援していくグループ支援の意義と原則、展開過程やアプローチ等について説明することができる。 ・家族内のできごとや学校での体験、友達間でのできごと等、自身の体験に落としこんでソーシャルワークの多様性を理解し、説明できるようになる。具体的には家族の多様性や家族をシステムとしてみる方法、学校内でのいじめや不登校などの問題をソーシャルワークの視点から幅広く検討し、説明できるようになる。					
授業の方法・授業計画						
1	ソーシャルワークの形成過程					
2	ソーシャルワークが求められる背景					
3	総合的包括的援助について					
4	ソーシャルワークの援助プロセス					
5	ソーシャルワークのプロセスI（導入期）					
6	ソーシャルワークのプロセスII（事前評価）					
7	ソーシャルワークのプロセスIII（支援計画）					
8	ソーシャルワークのプロセスIV（評価・終結）					
9	グループ支援（グループワーク）の形成過程					
10	グループ支援の意義と課題					
11	グループ支援の実際と課題（事例から）					
12	グループ支援の実践原則					
13	グループ支援の展開過程					
14	家族支援の基本的視座					
15	家族支援の方法と課題					
期末	試験実施					
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。						
評価方法及び評価基準	試験 授業に臨む態度および提出物20%、試験80%					
事前・事後学習の内容	毎回テキストの当該部分は熟読し講義に臨むこと。テキストやレジュメをもとに復習をし、講義内容をまとめ、知識の定着をはかること。 毎回、予習2時間、復習2時間を目安とする。					
履修上の注意	ソーシャルワークの基盤科目であり、演習や実習とも深く関連している。そのため、真摯な態度で主体的に授業に取り組むこと。 なお、私語は厳禁。休んだ場合は個人の責任で授業レジュメや資料を教員のところに取りに来るか友人にコピーさせてもらうこと。					
テキスト	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法 I 岩間伸之他 ミネルヴァ書房				9784623053919	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法 II 岩間伸之他 ミネルヴァ書房				9784623053926	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック 相談援助の基盤と専門職 大橋謙策 他 ミネルヴァ書房				9784623053902	
参考文献	授業時に随時紹介する。					

科 目 名		ソーシャルワーク演習I		副題		
担 当 者		小平 隆雄				
開講期		通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要		相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Iにおいては、相談援助における基本的な価値、知識、技術を習得できるようにする。				
授業のねらい ・到達目標		・相談援助を実践するために必要なコミュニケーションや面接についての基本的な技術と共感的な姿勢を身につけ実践できるようになる。 ・社会福祉専門職として基本的な倫理・原則を習得し、相談援助場面等において適切な考え方や行動が判断できるようになる。 ・人々が抱える生活問題を発見し、その解決に向けた相談援助のプロセスについて理解し説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画						
1	ソーシャルワーク演習で学ぶことのオリエンテーション			16	前期の振り返りと後期の授業概要とスケジュールの説明	
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、技術の理解			17	記録の意義と目的	
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造			18	記録の種類と構成	
4	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ			19	記録の方法と留意点 記録の管理	
5	自己覚知 自分の価値観を知る			20	記録の方法と留意点 個人情報の保護	
6	自己覚知 自分の感情を認識する			21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インテーク面接	
7	他者理解 利用者の価値観を知る			22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント	
8	他者理解 生活歴から理解する			23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法	
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション			24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム	
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語のコミュニケーション			25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ	
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方			26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング	
12	基本的な面接技術の習得 話し方			27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施	
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定			28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング	
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験			29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価	
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する			30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結	
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし	
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。						
評価方法 及び評価基準		レポート 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、レポート等により総合的に評価				
事前・事後 学習の内容		授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、技術の習得を図ること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意		演習は段階的に学習していくので全出席を前提とする。また、演習への取り組み姿勢が重要なので真摯に取り組むこと。				
テキスト		以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6	
—						
—						
参考文献						

科 目 名		ソーシャルワーク演習I		副題	
担 当 者		金井 守			
開講期		通年	単位数	2	配当年次
2					
授業の概要		相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Iにおいては、相談援助における基本的な価値、知識、技術を習得できるようにする。			
授業のねらい ・到達目標		・相談援助を実践するために必要なコミュニケーションや面接についての基本的な技術と共感的な姿勢を身につけ実践できるようになる。 ・社会福祉専門職として基本的な倫理・原則を習得し、相談援助場面等において適切な考え方や行動が判断できるようになる。 ・人々が抱える生活問題を発見し、その解決に向けた相談援助のプロセスについて理解し説明できるようになる。			
授業の方法・授業計画					
1	ソーシャルワーク演習で学ぶことのオリエンテーション			16	前期の振り返りと後期の授業概要とスケジュールの説明
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、技術の理解			17	記録の意義と目的
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造			18	記録の種類と構成
4	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ			19	記録の方法と留意点 記録の管理
5	自己覚知 自分の価値観を知る			20	記録の方法と留意点 個人情報の保護
6	自己覚知 自分の感情を認識する			21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インテーク面接
7	他者理解 利用者の価値観を知る			22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント
8	他者理解 生活歴から理解する			23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション			24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語のコミュニケーション			25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方			26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング
12	基本的な面接技術の習得 話し方			27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定			28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験			29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する			30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法 及び評価基準		レポート 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、レポート等により総合的に評価			
事前・事後 学習の内容		授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、技術の習得を図ること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。			
履修上の注意		演習は段階的に学習していくので全出席を前提とする。また、演習への取り組み姿勢が重要なので真摯に取り組むこと。			
テキスト		以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—					
—					
参考文献					

科 目 名		ソーシャルワーク演習I		副題		
担 当 者		引馬 知子				
開講期		通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要		相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Iにおいては、相談援助における基本的な価値、知識、技術を習得できるようにする。				
授業のねらい ・到達目標		・相談援助を実践するために必要なコミュニケーションや面接についての基本的な技術と共感的な姿勢を身につけ実践できるようになる。 ・社会福祉専門職として基本的な倫理・原則を習得し、相談援助場面等において適切な考え方や行動が判断できるようになる。 ・人々が抱える生活問題を発見し、その解決に向けた相談援助のプロセスについて理解し説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画						
1	ソーシャルワーク演習で学ぶことのオリエンテーション			16	前期の振り返りと後期の授業概要とスケジュールの説明	
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、技術の理解			17	記録の意義と目的	
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造			18	記録の種類と構成	
4	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ			19	記録の方法と留意点 記録の管理	
5	自己覚知 自分の価値観を知る			20	記録の方法と留意点 個人情報の保護	
6	自己覚知 自分の感情を認識する			21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インテーク面接	
7	他者理解 利用者の価値観を知る			22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント	
8	他者理解 生活歴から理解する			23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法	
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション			24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム	
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語のコミュニケーション			25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ	
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方			26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング	
12	基本的な面接技術の習得 話し方			27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施	
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定			28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング	
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験			29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価	
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する			30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結	
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし	
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。						
評価方法 及び評価基準		レポート 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、レポート等により総合的に評価				
事前・事後 学習の内容		授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、技術の習得を図ること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意		演習は段階的に学習していくので全出席を前提とする。また、演習への取り組み姿勢が重要なので真摯に取り組むこと。				
テキスト		以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6	
—						
—						
参考文献						

科 目 名		ソーシャルワーク演習I		副題		
担 当 者		藤原 亮一				
開講期		通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要		相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Iにおいては、相談援助における基本的な価値、知識、技術を習得できるようにする。				
授業のねらい ・到達目標		・相談援助を実践するために必要なコミュニケーションや面接についての基本的な技術と共感的な姿勢を身につけ実践できるようになる。 ・社会福祉専門職として基本的な倫理・原則を習得し、相談援助場面等において適切な考え方や行動が判断できるようになる。 ・人々が抱える生活問題を発見し、その解決に向けた相談援助のプロセスについて理解し説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画						
1	ソーシャルワーク演習で学ぶことのオリエンテーション			16	前期の振り返りと後期の授業概要とスケジュールの説明	
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、技術の理解			17	記録の意義と目的	
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造			18	記録の種類と構成	
4	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ			19	記録の方法と留意点 記録の管理	
5	自己覚知 自分の価値観を知る			20	記録の方法と留意点 個人情報の保護	
6	自己覚知 自分の感情を認識する			21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インテーク面接	
7	他者理解 利用者の価値観を知る			22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント	
8	他者理解 生活歴から理解する			23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法	
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション			24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム	
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語のコミュニケーション			25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ	
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方			26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング	
12	基本的な面接技術の習得 話し方			27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施	
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定			28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング	
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験			29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価	
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する			30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結	
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし	
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。						
評価方法 及び評価基準		レポート 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、レポート等により総合的に評価				
事前・事後 学習の内容		授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、技術の習得を図ること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意		演習は段階的に学習していくので全出席を前提とする。また、演習への取り組み姿勢が重要なので真摯に取り組むこと。				
テキスト		以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6	
—						
—						
参考文献						

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅱ			副題	
担 当 者	相澤 哲				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげることに。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅱにおいては、具体的な課題別の相談援助事例等を活用し、総合的かつ包括的な援助について実践的に習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・相談援助の各展開過程において必要となる知識・技術を身につけ実践できるようになる。 ・利用者の自己決定の尊重や自立支援、権利擁護、生活の質の追求などの専門的な価値を、実践の中で反映する方法を理解し判断できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対する関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助について、地域の中での具体的な実践方法を理解し説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	本演習のねらいと授業方法・計画・到達目標について			16	ソーシャルワーク実習後の自己評価・自己覚知
2	専門的援助者としての価値・倫理			17	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
3	個別支援におけるインテーク(1) 援助関係の形成			18	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
4	個別支援におけるインテーク(2) アウトリーチの方法			19	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
5	個別支援におけるアセスメント(1) ニーズ把握の方法			20	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
6	個別支援におけるアセスメント(2) 記録の方法			21	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
7	個別支援におけるプランニング(1) 利用者主体の目標設定			22	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
8	個別支援におけるプランニング(2) 社会資源の活用・調整・開発			23	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
9	個別支援における支援の実施 チームアプローチとネットワーキング			24	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
10	個別支援におけるモニタリング、効果測定および終結・アフターケア			25	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(1) 多職種の連携
11	集団支援の展開方法(1) 準備、開始			26	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(2) 公私協働による社会資源の開発
12	集団支援の展開方法(2) 実施、評価・終結			27	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(1) 住民参加によるニーズ把握
13	地域支援におけるアウトリーチとニーズ把握			28	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(2) 計画の運営・管理
14	地域支援におけるネットワーキングと社会資源の活用・調整・開発			29	社会福祉施設・機関の運営管理とサービス評価
15	地域における総合的かつ包括的な援助の方法			30	専門的援助者としての自己評価
期末	試験実施			期末	試験実施
事例を教材として皆で輪読、その後、事例の問題を設定、その問題解決に沿ったグループワークを行う。 また事例を理解するために役割を設定し、ロールプレイングも行う。 さらに実践的な力を身につけるため、DVDなどの視聴覚教材を用い、面接場面を想定した練習なども行う。 授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法 及び評価基準	試験 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、期末試験等により総合的に評価する。				

事前・事後 学習の内容	事前に示された課題について下調べをすること。事後に演習で指摘を受けた内容や改善すべき点について考察・学習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。	
履修上の注意	社会福祉実践における価値・知識・方法・技術を体験的に学ぶ科目なので、全回出席を前提とする。	
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房	978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—		
—		
参考文献	演習内で随時紹介する。	

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅱ			副題	
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげることに。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅱにおいては、具体的な課題別の相談援助事例等を活用し、総合的かつ包括的な援助について実践的に習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・相談援助の各展開過程において必要となる知識・技術を身につけ実践できるようになる。 ・利用者の自己決定の尊重や自立支援、権利擁護、生活の質の追求などの専門的な価値を、実践の中で反映する方法を理解し判断できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対する関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助について、地域の中での具体的な実践方法を理解し説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	本演習のねらいと授業方法・計画・到達目標について			16	ソーシャルワーク実習後の自己評価・自己覚知
2	専門的援助者としての価値・倫理			17	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
3	個別支援におけるインテーク(1) 援助関係の形成			18	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
4	個別支援におけるインテーク(2) アウトリーチの方法			19	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
5	個別支援におけるアセスメント(1) ニーズ把握の方法			20	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
6	個別支援におけるアセスメント(2) 記録の方法			21	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
7	個別支援におけるプランニング(1) 利用者主体の目標設定			22	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
8	個別支援におけるプランニング(2) 社会資源の活用・調整・開発			23	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
9	個別支援における支援の実施 チームアプローチとネットワーキング			24	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
10	個別支援におけるモニタリング、効果測定および終結・アフターケア			25	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(1) 多職種の連携
11	集団支援の展開方法(1) 準備、開始			26	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(2) 公私協働による社会資源の開発
12	集団支援の展開方法(2) 実施、評価・終結			27	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(1) 住民参加によるニーズ把握
13	地域支援におけるアウトリーチとニーズ把握			28	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(2) 計画の運営・管理
14	地域支援におけるネットワーキングと社会資源の活用・調整・開発			29	社会福祉施設・機関の運営管理とサービス評価
15	地域における総合的かつ包括的な援助の方法			30	専門的援助者としての自己評価
期末	試験実施			期末	試験実施
事例を教材として皆で輪読、その後、事例の問題を設定、その問題解決に沿ったグループワークを行う。 また事例を理解するために役割を設定し、ロールプレイングも行う。 さらに実践的な力を身につけるため、DVDなどの視聴覚教材を用い、面接場面を想定した練習なども行う。 授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法 及び評価基準	試験 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、期末試験等により総合的に評価する。				

事前・事後 学習の内容	事前に示された課題について下調べをすること。事後に演習で指摘を受けた内容や改善すべき点について考察・学習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。	
履修上の注意	社会福祉実践における価値・知識・方法・技術を体験的に学ぶ科目なので、全回出席を前提とする。	
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房	978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—		
—		
参考文献	演習内で随時紹介する。	

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅱ			副題	
担 当 者	永田 隆二				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげることに。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅱにおいては、具体的な課題別の相談援助事例等を活用し、総合的かつ包括的な援助について実践的に習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・相談援助の各展開過程において必要となる知識・技術を身につけ実践できるようになる。 ・利用者の自己決定の尊重や自立支援、権利擁護、生活の質の追求などの専門的な価値を、実践の中で反映する方法を理解し判断できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対する関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助について、地域の中での具体的な実践方法を理解し説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	本演習のねらいと授業方法・計画・到達目標について			16	ソーシャルワーク実習後の自己評価・自己覚知
2	専門的援助者としての価値・倫理			17	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
3	個別支援におけるインテーク(1) 援助関係の形成			18	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
4	個別支援におけるインテーク(2) アウトリーチの方法			19	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
5	個別支援におけるアセスメント(1) ニーズ把握の方法			20	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
6	個別支援におけるアセスメント(2) 記録の方法			21	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
7	個別支援におけるプランニング(1) 利用者主体の目標設定			22	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
8	個別支援におけるプランニング(2) 社会資源の活用・調整・開発			23	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
9	個別支援における支援の実施 チームアプローチとネットワーキング			24	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
10	個別支援におけるモニタリング、効果測定および終結・アフターケア			25	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(1) 多職種の連携
11	集団支援の展開方法(1) 準備、開始			26	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(2) 公私協働による社会資源の開発
12	集団支援の展開方法(2) 実施、評価・終結			27	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(1) 住民参加によるニーズ把握
13	地域支援におけるアウトリーチとニーズ把握			28	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(2) 計画の運営・管理
14	地域支援におけるネットワーキングと社会資源の活用・調整・開発			29	社会福祉施設・機関の運営管理とサービス評価
15	地域における総合的かつ包括的な援助の方法			30	専門的援助者としての自己評価
期末	試験実施			期末	試験実施
事例を教材として皆で輪読、その後、事例の問題を設定、その問題解決に沿ったグループワークを行う。 また事例を理解するために役割を設定し、ロールプレイングも行う。 さらに実践的な力を身につけるため、DVDなどの視聴覚教材を用い、面接場面を想定した練習なども行う。 授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法 及び評価基準	試験 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、期末試験等により総合的に評価する。				

事前・事後 学習の内容	事前に示された課題について下調べをすること。事後に演習で指摘を受けた内容や改善すべき点について考察・学習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。	
履修上の注意	社会福祉実践における価値・知識・方法・技術を体験的に学ぶ科目なので、全回出席を前提とする。	
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房	978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—		
—		
参考文献	演習内で随時紹介する。	

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅱ			副題	
担 当 者	別府 政行				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげることに。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅱにおいては、具体的な課題別の相談援助事例等を活用し、総合的かつ包括的な援助について実践的に習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・相談援助の各展開過程において必要となる知識・技術を身につけ実践できるようになる。 ・利用者の自己決定の尊重や自立支援、権利擁護、生活の質の追求などの専門的な価値を、実践の中で反映する方法を理解し判断できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対する関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助について、地域の中での具体的な実践方法を理解し説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	本演習のねらいと授業方法・計画・到達目標について			16	ソーシャルワーク実習後の自己評価・自己覚知
2	専門的援助者としての価値・倫理			17	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
3	個別支援におけるインテーク(1) 援助関係の形成			18	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
4	個別支援におけるインテーク(2) アウトリーチの方法			19	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
5	個別支援におけるアセスメント(1) ニーズ把握の方法			20	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
6	個別支援におけるアセスメント(2) 記録の方法			21	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
7	個別支援におけるプランニング(1) 利用者主体の目標設定			22	低所得者やホームレスなど生活困窮者に対するソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
8	個別支援におけるプランニング(2) 社会資源の活用・調整・開発			23	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(1) インテークからアセスメント
9	個別支援における支援の実施 チームアプローチとネットワーキング			24	権利擁護活動を含むソーシャルワーク実践(2) プランニングから終結
10	個別支援におけるモニタリング、効果測定および終結・アフターケア			25	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(1) 多職種の連携
11	集団支援の展開方法(1) 準備、開始			26	地域における総合的かつ包括的なソーシャルワーク実践(2) 公私協働による社会資源の開発
12	集団支援の展開方法(2) 実施、評価・終結			27	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(1) 住民参加によるニーズ把握
13	地域支援におけるアウトリーチとニーズ把握			28	地域福祉計画に関するソーシャルワーク実践(2) 計画の運営・管理
14	地域支援におけるネットワーキングと社会資源の活用・調整・開発			29	社会福祉施設・機関の運営管理とサービス評価
15	地域における総合的かつ包括的な援助の方法			30	専門的援助者としての自己評価
期末	試験実施			期末	試験実施
事例を教材として皆で輪読、その後、事例の問題を設定、その問題解決に沿ったグループワークを行う。 また事例を理解するために役割を設定し、ロールプレイングも行う。 さらに実践的な力を身につけるため、DVDなどの視聴覚教材を用い、面接場面を想定した練習なども行う。 授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法 及び評価基準	試験 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、期末試験等により総合的に評価する。				

事前・事後 学習の内容	事前に示された課題について下調べをすること。事後に演習で指摘を受けた内容や改善すべき点について考察・学習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。	
履修上の注意	社会福祉実践における価値・知識・方法・技術を体験的に学ぶ科目なので、全回出席を前提とする。	
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房	978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—		
—		
参考文献	演習内で随時紹介する。	

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅲ		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅲにおいては、ソーシャルワーク実習での経験を踏まえ、相談援助に係る知識と技術について個別的な体験を一般化し、実践的な知識と技術として習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・実習等による個別的な体験で得た知識・技術を一般化し、個人や地域社会の多様な問題に対して、解決のために適したアプローチを判断できるようになる。 ・困難事例やジレンマ事例に関する検討を通して、事例検討会やスーパービジョン等の援助者としての資質向上の方法を理解し実践できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対して、地域の中で関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助を実施するための具体的な方法を理解し実践できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	事例のアセスメントで必要な技法の復習				
2	事例のプランニング、モニタリングで必要な技法の復習				
3	身体障害者・知的障害者の就労援助事例の検討				
4	精神障害者・難病患者の就労援助事例の検討				
5	高齢者の虐待事例の検討				
6	高齢者の介護問題事例の検討				
7	ホームレス事例(生活支援)の検討				
8	ホームレス事例(居住支援)の検討				
9	地域住民への支援実践事例の検討				
10	地域住民の組織化の検討				
11	複数問題を抱える家族事例の検討				
12	機能不全家族事例の検討				
13	社会福祉領域の職員が抱える問題(ジレンマ)へのスーパービジョン演習				
14	社会福祉領域の職員が抱える問題(自己覚知)へのスーパービジョン演習				
15	模擬ケア会議の実施				
期末	試験実施なし				
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法及び評価基準	レポート。 学習意欲、演習への取り組み姿勢、リアクションペーパー、及びレポートにより総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回のテーマについて、事前に調べておくこと。また、事例に関する資料が配付された場合は、授業に向けて読み込んでくこと。授業後は、その日のテーマについて必ず復習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	毎回出席と討議への積極的参加が前提である。				
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6	
—					
—					
参考文献					

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅲ		副題		
担 当 者	宮寺 良光				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅲにおいては、ソーシャルワーク実習での経験を踏まえ、相談援助に係る知識と技術について個別的な体験を一般化し、実践的な知識と技術として習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・実習等による個別的な体験で得た知識・技術を一般化し、個人や地域社会の多様な問題に対して、解決のために適したアプローチを判断できるようになる。 ・困難事例やジレンマ事例に関する検討を通して、事例検討会やスーパービジョン等の援助者としての資質向上の方法を理解し実践できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対して、地域の中で関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助を実施するための具体的な方法を理解し実践できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	事例のアセスメントで必要な技法の復習				
2	事例のプランニング、モニタリングで必要な技法の復習				
3	身体障害者・知的障害者の就労援助事例の検討				
4	精神障害者・難病患者の就労援助事例の検討				
5	高齢者の虐待事例の検討				
6	高齢者の介護問題事例の検討				
7	ホームレス事例(生活支援)の検討				
8	ホームレス事例(居住支援)の検討				
9	地域住民への支援実践事例の検討				
10	地域住民の組織化の検討				
11	複数問題を抱える家族事例の検討				
12	機能不全家族事例の検討				
13	社会福祉領域の職員が抱える問題(ジレンマ)へのスーパービジョン演習				
14	社会福祉領域の職員が抱える問題(自己覚知)へのスーパービジョン演習				
15	模擬ケア会議の実施				
期末	試験実施なし				
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法及び評価基準	レポート。 学習意欲、演習への取り組み姿勢、リアクションペーパー、及びレポートにより総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回のテーマについて、事前に調べておくこと。また、事例に関する資料が配付された場合は、授業に向けて読み込んでくこと。授業後は、その日のテーマについて必ず復習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	毎回出席と討議への積極的参加が前提である。				
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6	
—					
—					
参考文献					

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅲ		副題		
担 当 者	内藤 祐子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅲにおいては、ソーシャルワーク実習での経験を踏まえ、相談援助に係る知識と技術について個別的な体験を一般化し、実践的な知識と技術として習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・実習等による個別的な体験で得た知識・技術を一般化し、個人や地域社会の多様な問題に対して、解決のために適したアプローチを判断できるようになる。 ・困難事例やジレンマ事例に関する検討を通して、事例検討会やスーパービジョン等の援助者としての資質向上の方法を理解し実践できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対して、地域の中で関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助を実施するための具体的な方法を理解し実践できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	事例のアセスメントで必要な技法の復習				
2	事例のプランニング、モニタリングで必要な技法の復習				
3	身体障害者・知的障害者の就労援助事例の検討				
4	精神障害者・難病患者の就労援助事例の検討				
5	高齢者の虐待事例の検討				
6	高齢者の介護問題事例の検討				
7	ホームレス事例(生活支援)の検討				
8	ホームレス事例(居住支援)の検討				
9	地域住民への支援実践事例の検討				
10	地域住民の組織化の検討				
11	複数問題を抱える家族事例の検討				
12	機能不全家族事例の検討				
13	社会福祉領域の職員が抱える問題(ジレンマ)へのスーパービジョン演習				
14	社会福祉領域の職員が抱える問題(自己覚知)へのスーパービジョン演習				
15	模擬ケア会議の実施				
期末	試験実施なし				
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法及び評価基準	レポート。 学習意欲、演習への取り組み姿勢、リアクションペーパー、及びレポートにより総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回のテーマについて、事前に調べておくこと。また、事例に関する資料が配付された場合は、授業に向けて読み込んでくこと。授業後は、その日のテーマについて必ず復習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	毎回出席と討議への積極的参加が前提である。				
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6	
—					
—					
参考文献					

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅲ		副題		
担 当 者	永田 隆二				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 1. 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 2. 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(グループワーク、ディスカッション、ロールプレイング等)を中心とする演習形態により行うこと。 演習Ⅲにおいては、ソーシャルワーク実習での経験を踏まえ、相談援助に係る知識と技術について個別的な体験を一般化し、実践的な知識と技術として習得できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	・実習等による個別的な体験で得た知識・技術を一般化し、個人や地域社会の多様な問題に対して、解決のために適したアプローチを判断できるようになる。 ・困難事例やジレンマ事例に関する検討を通して、事例検討会やスーパービジョン等の援助者としての資質向上の方法を理解し実践できるようになる。 ・人々の生活課題や社会的環境が抱える問題に対して、地域の中で関連職種や関係機関と協働した総合的・包括的な援助を実施するための具体的な方法を理解し実践できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	事例のアセスメントで必要な技法の復習				
2	事例のプランニング、モニタリングで必要な技法の復習				
3	身体障害者・知的障害者の就労援助事例の検討				
4	精神障害者・難病患者の就労援助事例の検討				
5	高齢者の虐待事例の検討				
6	高齢者の介護問題事例の検討				
7	ホームレス事例(生活支援)の検討				
8	ホームレス事例(居住支援)の検討				
9	地域住民への支援実践事例の検討				
10	地域住民の組織化の検討				
11	複数問題を抱える家族事例の検討				
12	機能不全家族事例の検討				
13	社会福祉領域の職員が抱える問題(ジレンマ)へのスーパービジョン演習				
14	社会福祉領域の職員が抱える問題(自己覚知)へのスーパービジョン演習				
15	模擬ケア会議の実施				
期末	試験実施なし				
授業内で実施したリアクションペーパーや小課題については、事後の授業においてコメントを返す。					
評価方法及び評価基準	レポート。 学習意欲、演習への取り組み姿勢、リアクションペーパー、及びレポートにより総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回のテーマについて、事前に調べておくこと。また、事例に関する資料が配付された場合は、授業に向けて読み込んでくこと。授業後は、その日のテーマについて必ず復習すること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	毎回出席と討議への積極的参加が前提である。				
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法II』ミネルヴァ書房			978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6	
—					
—					
参考文献					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	伊東 秀幸					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	江島 尚俊					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	小平 隆雄					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題		
担 当 者	川名 正昭				
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。				
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。				
授業の方法・授業計画・補足説明					
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解					
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する				
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。				
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。				
テキスト	特に定めない				
—					
—					
参考文献	適宜提示				

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	引馬 知子					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	藤森 智子					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	藤原 亮一					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	宮寺 良光					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	村井 祐一					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	渡邊 由己					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することがソーシャルワーク実習の主たるねらいである。具体的には、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解、修得し、実践的な技術等を体得し実践できるようになる、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し実践できるようになる、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解し実践できるようになる、である。 到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行い現場で活用できるようになる、である。					
授業の方法・授業計画・補足説明						
・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う ・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成 ・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成 ・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価 ・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際 ・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解 ・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際 ・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解 ・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	実習施設・機関による実習評価、実習への取り組み等を総合的に評価する					
事前・事後学習の内容	実習中は実習指導者からのスーパービジョンや実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと(事後学習)。そしてそれら振り返りを通じた学び、発見を以降の実習に反映させていく準備を行うこと(事前学習)。					
履修上の注意	・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導I		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	実習の事前指導として、相談援助実習の意義、実習の概要、実習分野、実習施設の機能の理解等基礎的な部分の学習をするとともに、マナーや実習記録の書き方等も習得する。				
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することが本授業の主たるねらいである。具体的には、相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ实际的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得し実践できることをねらいとし、以下の4点を授業の到達目標とする。 ・実習の仕組み、意義を理解し説明できるようになる。 ・実習機関の役割及び機能を理解し説明できるようになる。 ・実習中の正しいマナーで行動できるよう意識でき、実践できるようになる。 ・自分自身の適性、将来の希望に沿って、実習機関を選択できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	実習及び実習指導の意義				
2	実習制度、実習構造の理解				
3	実習プロセス、実習方法の理解				
4	実習施設の選択方法				
5	実習施設の理解（高齢者、障害者施設等）				
6	実習施設の理解（児童施設、福祉事務所、社会福祉協議会等）				
7	確認テスト				
8	実習報告会への参加（合同授業）				
9	3年生との交流会（合同授業）				
10	実習先の希望について（自分自身の適性と将来の進路を考える）				
11	実習記録の作成方法（記録の意義、書き方）				
12	実習記録の作成方法（記録作成上の注意点）				
13	マナーについて（利用者への対応）				
14	マナーについて（職員への対応）				
15	まとめ(実習コンピテンス自己評価)				
期末	試験実施なし				
レポート及びリアクションペーパーは教員によりフィードバックされる。					
評価方法及び評価基準	レポート及び提出物(40%)、授業内の確認テスト(20%)、授業態度(40%)				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、知識及び技術の習得を図ること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	毎回出席し、積極的授業に参加すること				
テキスト	本学作成の「実習のてびき」				
－					
－					
参考文献					

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導I		副題			
担 当 者	引馬 知子					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2	
授業の概要	実習の事前指導として、相談援助実習の意義、実習の概要、実習分野、実習施設の機能の理解等基礎的な部分の学習をするとともに、マナーや実習記録の書き方等も習得する。					
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することが本授業の主たるねらいである。具体的には、相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ实际的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得し実践できることをねらいとし、以下の4点を授業の到達目標とする。 ・実習の仕組み、意義を理解し説明できるようになる。 ・実習機関の役割及び機能を理解し説明できるようになる。 ・実習中の正しいマナーで行動できるよう意識でき、実践できるようになる。 ・自分自身の適性、将来の希望に沿って、実習機関を選択できるようになる。					
授業の方法・授業計画						
1	実習及び実習指導の意義					
2	実習制度、実習構造の理解					
3	実習プロセス、実習方法の理解					
4	実習施設の選択方法					
5	実習施設の理解（高齢者、障害者施設等）					
6	実習施設の理解（児童施設、福祉事務所、社会福祉協議会等）					
7	確認テスト					
8	実習報告会への参加（合同授業）					
9	3年生との交流会（合同授業）					
10	実習先の希望について（自分自身の適性と将来の進路を考える）					
11	実習記録の作成方法（記録の意義、書き方）					
12	実習記録の作成方法（記録作成上の注意点）					
13	マナーについて（利用者への対応）					
14	マナーについて（職員への対応）					
15	まとめ(実習コンピテンス自己評価)					
期末	試験実施なし					
レポート及びリアクションペーパーは教員によりフィードバックされる。						
評価方法及び評価基準	レポート及び提出物(40%)、授業内の確認テスト(20%)、授業態度(40%)					
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、知識及び技術の習得を図ること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。					
履修上の注意	毎回出席し、積極的授業に参加すること					
テキスト	本学作成の「実習のてびき」					
—						
—						
参考文献						

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導I		副題		
担 当 者	藤原 亮一				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	実習の事前指導として、相談援助実習の意義、実習の概要、実習分野、実習施設の機能の理解等基礎的な部分の学習をするとともに、マナーや実習記録の書き方等も習得する。				
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することが本授業の主たるねらいである。具体的には、相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ实际的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得し実践できることをねらいとし、以下の4点を授業の到達目標とする。 ・実習の仕組み、意義を理解し説明できるようになる。 ・実習機関の役割及び機能を理解し説明できるようになる。 ・実習中の正しいマナーで行動できるよう意識でき、実践できるようになる。 ・自分自身の適性、将来の希望に沿って、実習機関を選択できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	実習及び実習指導の意義				
2	実習制度、実習構造の理解				
3	実習プロセス、実習方法の理解				
4	実習施設の選択方法				
5	実習施設の理解（高齢者、障害者施設等）				
6	実習施設の理解（児童施設、福祉事務所、社会福祉協議会等）				
7	確認テスト				
8	実習報告会への参加（合同授業）				
9	3年生との交流会（合同授業）				
10	実習先の希望について（自分自身の適性と将来の進路を考える）				
11	実習記録の作成方法（記録の意義、書き方）				
12	実習記録の作成方法（記録作成上の注意点）				
13	マナーについて（利用者への対応）				
14	マナーについて（職員への対応）				
15	まとめ(実習コンピテンス自己評価)				
期末	試験実施なし				
レポート及びリアクションペーパーは教員によりフィードバックされる。					
評価方法及び評価基準	レポート及び提出物(40%)、授業内の確認テスト(20%)、授業態度(40%)				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、知識及び技術の習得を図ること。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	毎回出席し、積極的授業に参加すること				
テキスト	本学作成の「実習のてびき」				
－					
－					
参考文献					

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導II			副題	
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	社会福祉士養成過程における最も重要な授業の1つであるソーシャルワーク実習指導Ⅱでは、実習を行うにあたって必要とされる知識や技術の習得を行う授業を展開する(前期)。そしてソーシャルワーク実習での体験を統合し現場での実践に備える(後期)。具体的内容は以下のとおりである。 ・実習の配属先決定後に実習施設・機関を理解し、具体的な実習課題を設定する ・対人援助を行うにあたって守るべき倫理について十分に理解する ・実習記録等の取り方を演習を通じて習得する ・実習報告会の準備及び実践、実習報告書作成等を通じて社会福祉士としての自己の形成を図る。				
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することが本授業の主たるねらいである。具体的には、相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ实际的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得し実践できることをねらいとし、以下の4項目を到達目標とする。 ・相談援助実習の意義について理解し、説明できるようになる。 ・相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得し、授業での演習や実習の場で実践できるようになる。 ・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し、授業での演習や実習の場で実践できるようになる。 ・具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養し、その能力を実習の場で検証し、説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 授業概要とスケジュールの説明			16	実習の振り返り
2	実習先の理解1 実習先の概要理解等			17	実習記録・体験を踏まえた課題の整理1 施設の役割等
3	実習先の理解2 実習先の利用者理解等			18	実習記録・体験を踏まえた課題の整理2 業務内容等
4	個人プロフィールの作成			19	実習記録・体験を踏まえた課題の整理3 利用者理解等
5	実習計画書の作成			20	実習記録・体験を踏まえた課題の整理4 相談援助技術等
6	実習先事前訪問と実習計画の三者協議に関する指導			21	実習の自己評価 実習教員による個別面接指導
7	「実習記録ノート」への記録内容に関する理解			22	実習総括レポートの作成準備
8	「実習記録ノート」への記録方法に関する理解			23	実習総括レポートの作成
9	実習先の社会福祉士の業務に関する理解			24	実習報告会の準備1 グループ形成、テーマ設定
10	実習先で必要とされる相談援助に係る知識と技術に関する理解			25	実習報告会の準備2 報告原稿・資料の作成
11	実習先で行われる介護や保育等の関連業務に関する基本的な理解			26	実習報告会の準備3 最終確認、リハーサル
12	実習先事前訪問・協議を踏まえた実習計画の調整			27	実習報告会1 報告する 合同授業
13	実習における個人情報プライバシーの保護と守秘義務等の理解			28	実習報告会2 報告を聞く 合同授業
14	実習前の最終確認指導 配属施設・機関の業務の確認			29	実習報告会の振り返り 実習総括レポートの完成
15	実習前の最終確認指導 巡回指導、帰校日等の確認等			30	実習総括レポートの発表
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
課題に対するフィードバックは、教員対学生のみならず、学生同士がお互いにフィードバックする機会を通じて行われる。					
評価方法及び評価基準	学習意欲、学習態度及び実習での学びの修得状況を総合的に評価する。 提出物、授業態度、レポートを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	実習の事前準備・事後学習には主体的な行動・学習が求められる。従って、事前学習では、次の授業に臨むにあたっていま何をすればよいか、これから何をするのか常に確認をし準備すること。事後学習では授業で学んだ内容を振り返り、知識の定着を行うこと。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	・欠席しないこと ・提出物等定められた期日に必ず提出すること				

	・演習科目であるので、特に主体的、協同的な授業参加を心がけること	
テキスト	特に定めない	
－		
－		
参考文献		

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ			副題	
担 当 者	引馬 知子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	社会福祉士養成過程における最も重要な授業の1つであるソーシャルワーク実習指導Ⅱでは、実習を行うにあたって必要とされる知識や技術の習得を行う授業を展開する(前期)。そしてソーシャルワーク実習での体験を統合し現場での実践に備える(後期)。具体的内容は以下のとおりである。 ・実習の配属先決定後に実習施設・機関を理解し、具体的な実習課題を設定する ・対人援助を行うにあたって守るべき倫理について十分に理解する ・実習記録等の取り方を演習を通じて習得する ・実習報告会の準備及び実践、実習報告書作成等を通じて社会福祉士としての自己の形成を図る。				
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することが本授業の主たるねらいである。具体的には、相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ实际的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得し実践できることをねらいとし、以下の4項目を到達目標とする。 ・相談援助実習の意義について理解し、説明できるようになる。 ・相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得し、授業での演習や実習の場で実践できるようになる。 ・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を 習得し、授業での演習や実習の場で実践できるようになる。 ・具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養し、その能力を実習の場で検証し、説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 授業概要とスケジュールの説明			16	実習の振り返り
2	実習先の理解1 実習先の概要理解等			17	実習記録・体験を踏まえた課題の整理1 施設の役割等
3	実習先の理解2 実習先の利用者理解等			18	実習記録・体験を踏まえた課題の整理2 業務内容等
4	個人プロフィールの作成			19	実習記録・体験を踏まえた課題の整理3 利用者理解等
5	実習計画書の作成			20	実習記録・体験を踏まえた課題の整理4 相談援助技術等
6	実習先事前訪問と実習計画の三者協議に関する指導			21	実習の自己評価 実習教員による個別面接指導
7	「実習記録ノート」への記録内容に関する理解			22	実習総括レポートの作成準備
8	「実習記録ノート」への記録方法に関する理解			23	実習総括レポートの作成
9	実習先の社会福祉士の業務に関する理解			24	実習報告会の準備1 グループ形成、テーマ設定
10	実習先で必要とされる相談援助に係る知識と技術に関する理解			25	実習報告会の準備2 報告原稿・資料の作成
11	実習先で行われる介護や保育等の関連業務に関する基本的な理解			26	実習報告会の準備3 最終確認、リハーサル
12	実習先事前訪問・協議を踏まえた実習計画の調整			27	実習報告会1 報告する 合同授業
13	実習における個人情報プライバシーの保護と守秘義務等の理解			28	実習報告会2 報告を聞く 合同授業
14	実習前の最終確認指導 配属施設・機関の業務の確認			29	実習報告会の振り返り 実習総括レポートの完成
15	実習前の最終確認指導 巡回指導、帰校日等の確認等			30	実習総括レポートの発表
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
課題に対するフィードバックは、教員対学生のみならず、学生同士がお互いにフィードバックする機会を通じて行われる。					
評価方法及び評価基準	学習意欲、学習態度及び実習での学びの修得状況を総合的に評価する。 提出物、授業態度、レポートを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	実習の事前準備・事後学習には主体的な行動・学習が求められる。従って、事前学習では、次の授業に臨むにあたっていま何をすればよいか、これから何をするのか常に確認をし準備すること。事後学習では授業で学んだ内容を振り返り、知識の定着を行うこと。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	・欠席しないこと ・提出物等定められた期日に必ず提出すること				

	・演習科目であるので、特に主体的、協同的な授業参加を心がけること	
テキスト	特に定めない	
－		
－		
参考文献		

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導II			副題	
担 当 者	宮寺 良光				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	社会福祉士養成過程における最も重要な授業の1つであるソーシャルワーク実習指導Ⅱでは、実習を行うにあたって必要とされる知識や技術の習得を行う授業を展開する(前期)。そしてソーシャルワーク実習での体験を統合し現場での実践に備える(後期)。具体的内容は以下のとおりである。 ・実習の配属先決定後に実習施設・機関を理解し、具体的な実習課題を設定する ・対人援助を行うにあたって守るべき倫理について十分に理解する ・実習記録等の取り方を演習を通じて習得する ・実習報告会の準備及び実践、実習報告書作成等を通じて社会福祉士としての自己の形成を図る。				
授業のねらい・到達目標	生活問題の解決に向けた相談援助を実践する能力を修得することが本授業の主たるねらいである。具体的には、相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ实际的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得し実践できることをねらいとし、以下の4項目を到達目標とする。 ・相談援助実習の意義について理解し、説明できるようになる。 ・相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得し、授業での演習や実習の場で実践できるようになる。 ・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得し、授業での演習や実習の場で実践できるようになる。 ・具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養し、その能力を実習の場で検証し、説明できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 授業概要とスケジュールの説明			16	実習の振り返り
2	実習先の理解1 実習先の概要理解等			17	実習記録・体験を踏まえた課題の整理1 施設の役割等
3	実習先の理解2 実習先の利用者理解等			18	実習記録・体験を踏まえた課題の整理2 業務内容等
4	個人プロフィールの作成			19	実習記録・体験を踏まえた課題の整理3 利用者理解等
5	実習計画書の作成			20	実習記録・体験を踏まえた課題の整理4 相談援助技術等
6	実習先事前訪問と実習計画の三者協議に関する指導			21	実習の自己評価 実習教員による個別面接指導
7	「実習記録ノート」への記録内容に関する理解			22	実習総括レポートの作成準備
8	「実習記録ノート」への記録方法に関する理解			23	実習総括レポートの作成
9	実習先の社会福祉士の業務に関する理解			24	実習報告会の準備1 グループ形成、テーマ設定
10	実習先で必要とされる相談援助に係る知識と技術に関する理解			25	実習報告会の準備2 報告原稿・資料の作成
11	実習先で行われる介護や保育等の関連業務に関する基本的な理解			26	実習報告会の準備3 最終確認、リハーサル
12	実習先事前訪問・協議を踏まえた実習計画の調整			27	実習報告会1 報告する 合同授業
13	実習における個人情報プライバシーの保護と守秘義務等の理解			28	実習報告会2 報告を聞く 合同授業
14	実習前の最終確認指導 配属施設・機関の業務の確認			29	実習報告会の振り返り 実習総括レポートの完成
15	実習前の最終確認指導 巡回指導、帰校日等の確認等			30	実習総括レポートの発表
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
課題に対するフィードバックは、教員対学生のみならず、学生同士がお互いにフィードバックする機会を通じて行われる。					
評価方法及び評価基準	学習意欲、学習態度及び実習での学びの修得状況を総合的に評価する。 提出物、授業態度、レポートを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	実習の事前準備・事後学習には主体的な行動・学習が求められる。従って、事前学習では、次の授業に臨むにあたっていま何をすればよいか、これから何をすることか常に確認をし準備すること。事後学習では授業で学んだ内容を振り返り、知識の定着を行うこと。毎回、予習0.5時間、復習0.5時間を目安とする。				
履修上の注意	・欠席しないこと ・提出物等定められた期日に必ず提出すること				

	・演習科目であるので、特に主体的、協同的な授業参加を心がけること	
テキスト	特に定めない	
－		
－		
参考文献		

科 目 名	知的障害児教育I		副題			
担 当 者	温泉 美雪					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2	
授業の概要	本授業では、知的障害の特性や発達過程について、行動・認知・心理面から理解を深める。その上で、個に応じた教育について具体的にイメージできることをねらいとする。 また、特別支援教育の変遷や実際について学び、今日的な課題に応じた教育のあり方について学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	1. 知的障害の特性とそれに応じた支援や教育について説明することができる。 2. 知的障害のある児童生徒に対する教育課程の特徴を説明することができる。 3. 特別支援教育における保護者や地域との連携について説明することができる。 【履修ファイルの対応項目：A-4(4)、B-2(1)～(6)、C-2(3)(4)】					
授業の方法・授業計画						
1	知的障害の特性					
2	知的障害の早期発見と早期療育					
3	知的障害に伴う行動上の問題の理解と支援					
4	自閉スペクトラム症の理解と支援					
5	家庭における教育支援					
6	親が障害を受容する過程					
7	知的障害児の言語発達とその支援					
8	知的障害児の遊びの発達とその支援					
9	知的障害児に対する特別支援教育					
10	知的障害に関連した障害の理解と支援①：注意欠如多動症					
11	知的障害に関連した障害の理解と支援②：読み書き障害					
12	知的障害に関連した障害の理解と支援③：算数障害					
13	知的障害児のキャリア支援					
14	知的障害児の地域支援					
15	まとめ					
期末	試験実施なし					
本授業では双方向的学習を行うため、積極的な参加を求めます。また、演習を多用し、知的障害児教育についての知識の定着と応用力の涵養を図ります。						
評価方法及び評価基準	授業中の活動(25%)、コメントシート(15%)、レポート課題(60%)					
事前・事後学習の内容	授業中に指示した事前・事後学習内容に取り組むこと。 必要な事前学習は1.5時間、事後学習は2.5時間が目安となる。					
履修上の注意	レポート課題は15回目の授業の中で提出を求める予定である。					
テキスト	なし					
—						
—						
参考文献	『特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領 高等部学習指導要領(文部科学省)』 その他、適宜紹介する。					

科 目 名	知的障害児教育II		副題		
担 当 者	温泉 美雪				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	本授業では、「知的障害児教育Ⅰ」で得た知識を応用し、知的障害児教育の実践について学ぶ。実習や現場などで活用できる実践的な知識を身につけることを目的とする。				
授業のねらい・到達目標	1. 知的障害児に対する検査や行動観察を通じたアセスメントの方法を理解する。 2. 知的障害児の特性に応じた教育的対応について理解する。 3. 特別支援学校などでの教育の実践について理解する。 【履修ファイルの対応項目：A-4(4)、D-2(1)～(7)、D-3(1)～(5)、D-4(1)～(6)】				
授業の方法・授業計画					
1	知的障害児に対する特別支援教育				
2	知的障害の実態把握の方法：行動観察、諸検査法				
3	自閉スペクトラムのある児童生徒に対する指導				
4	重複障害児に対する指導				
5	個別の教育支援計画の作成と展開				
6	キャリア教育をふまえた特別支援教育の展開				
7	領域・教科を合わせた指導①：日常生活の指導				
8	領域・教科を合わせた指導②：生活単元学習				
9	領域・教科を合わせた指導③：作業学習				
10	教科別の指導：国語、算数				
11	児童生徒の特性に応じた教材開発の方法				
12	個別の指導計画の作成と展開				
13	領域別の指導：自立活動				
14	学習指導案の作成と展開				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
本授業では双方向的学習を行うため、積極的な参加を求めます。また、演習を多用し、知的障害児教育についての知識の定着と応用力の涵養を図ります。					
評価方法及び評価基準	授業中の活動(25%)、コメントシート(15%)、レポート課題(60%)				
事前・事後学習の内容	授業中に指示した事前・事後学習内容に取り組むこと。 必要な事前学習は1.5時間、事後学習は2.5時間が目安となる。				
履修上の注意	レポート課題は15回目の授業の中で提出を求める予定である。 知的障害児教育Ⅰ（前期）において知的障害児の特性を充分理解している前提で授業を行う。このため、知的障害児教育Ⅰと合わせて履修することを強く勧めます。				
テキスト	なし				
—					
—					
参考文献	『特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領 高等部学習指導要領(文部科学省)』 その他、適宜紹介する。				

科 目 名	知的障害者の心理		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	知的障害児の心理特性に応じた教育のあり方について講義する。知的障害児の心理特性や発達に応じた教育を行うためには、能力の水準に応じて考えるべき問題と、能力の水準に関係なく蓄積されていく知識や経験の異同について理解する必要がある。本講義では、その違いについて検討していく。また生涯発達の視点にたって、知的障害をもった人とその家族の生活を豊かにすることができるような支援のあり方について考える。				
授業のねらい・到達目標	知的障害のある人の心理的特性と発達支援のあり方について、心理学的な視点から理解を深める。 ＜到達目標＞ 1. 知的障害の定義と分類について説明することができる。 2. 知能検査等の心理検査によるアセスメントの活かし方について説明することができる。 3. 知的障害のある人の心理的特性と発達支援のあり方について説明することができる。 4. 知的障害のある人の家族への心理的援助のあり方について説明することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：B-2(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	知的障害とは				
2	知的障害の早期発見・早期療育				
3	心理アセスメントの概要(知能検査・発達検査)				
4	心理アセスメントの活かし方				
5	知的障害児の心理的特性と発達支援(1)認知機能の特徴と学習過程				
6	知的障害児の心理的特性と発達支援(2)記憶の特徴と学習過程				
7	知的障害児の心理的特性と発達支援(3)学習―行動変容の理論―				
8	知的障害児の心理的特性と発達支援(4)学習―行動変容の実践―				
9	知的障害児の心理的特性と発達支援(5)動機づけ・パーソナリティ特性				
10	知的障害児の心理特性と発達支援(6)コミュニケーションの特徴				
11	知的障害児の心理特性と発達支援(7)コミュニケーションの支援の実践				
12	知的障害と関連する障害の理解(1)自閉症				
13	知的障害と関連する障害の理解(2)ダウン症				
14	知的障害と関連する障害の理解(3)LD・ADHD				
15	知的障害者の生涯発達と家族への心理的援助				
期末	試験実施なし				
基本的には講義形式で行うが、心理検査の実習やディスカッションやプレゼンテーション等の能動的な学修方法も取り入れる。 授業内で実施した課題については、事後の授業で出題の意図について説明し講評するので、期末レポートの準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末レポート(60%)、課題(30%)、授業内での活動(10%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	＊ 授業計画および授業時のアナウンスに基づき、必要な下調べや課題を作成するなど、予習を充分に行うこと。各回につき、2時間が目安となる。 ＊ また事後学習としては、プリント、ノート、参考文献などを読み、充分に復習を行い、知識の定着を図ること。各回につき、2時間が目安となる。				
履修上の注意	授業への積極的な参加を求めます。				
テキスト	授業時にプリントを配布します。				
－					
－					
参考文献	小池 敏英・北島 善夫 2001 『知的障害の心理学―発達支援からの理解』 北大路書房 吉見 礼司 (イラスト)・くどう のぞみ (イラスト)・原 仁 (監修) 2007 『ふしぎだね!?知的障害のおともだち (発達と障害を考える本)』 ミネルヴァ書房 昇地 勝人・長野 恵子・蘭 香代子・吉川 昌子 (編集) 2006 『障害特性の理解と発達援助―教育・心理・福祉のためのエッセンス』 ナカニシヤ出版				

科 目 名	知的障害者の生理・病理		副題	知的能力障害(知的発達症)を有する人への援助のための生理・病理の理解	
担 当 者	長田 洋和				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	知的障害(intellectual disability)は、その用語ですら、いまだ流動的であり、世界中での理解が統一されていないと言えます。例えば、アメリカ精神医学会のDSM-5では知的能力障害(知的発達症／知的発達障害)とされている一方、アメリカの公法では精神遅滞(mental retardation)とされています。世界保健機構のICD-11では、知的能力障害とされています。診断基準も徐々に改訂が進んでいます。知的障害の生理・病理についての現在のおよび発展しつつある理解と社会の中での人々の生活に影響を与える要因を取り入れるためにも、世界的な基準をもとに知的障害の生理・病理を理解し、知的障害を有する児・者をよりよく援助するための知識を得ます。				
授業のねらい・到達目標	知的障害児・者の定義、分類を世界的な基準をもとに理解できるようになる。世界保健機構の理論的モデルの理解から、診断基準、分類(分類体系および病因と予防)に焦点を当て、知識が獲得できるようになる。さらに、知的障害医療の現状についても把握できるようになる他、病理・生理の実際を視聴覚教材から主体的に学ぶことで実践的な理解もできる。				
授業の方法・授業計画					
1	講義方針の確認				
2	知的障害の定義				
3	理論的モデルの理解				
4	知的障害の操作的定義				
5	知的障害の定義の変遷				
6	知的障害の多次元性				
7	知的障害の病因				
8	診断のための知能評価法				
9	診断のための適応行動評価法				
10	知的障害の分類体系				
11	知的障害の病因論(危険因子)				
12	知的障害の病因(行動的表現型)				
13	知的障害児・者にみられる身体的健康の障害				
14	知的障害児・者にみられる精神障害				
15	まとめと最新研究動向				
期末	試験実施なし				
プレゼンテーション(PPT, Keynote)での講義を行います。 視聴覚教材を用いた講義の際には、課題を出します。					
評価方法及び評価基準	授業内レポート(60%)、平常点評価(40%)				
事前・事後学習の内容	事前:シラバスにて授業計画を確認の上、最低限の知識の整理を行う。 事後:配布プリントに従い授業を進めるので、授業中に指示する参考文献で補習する。 1回の講義ごとに、計4時間の事前・事後学習が必要。				
履修上の注意	試験の際は、配布プリントは持ち込み可とします。				
テキスト	プリントを配布します。				
－					
－					
参考文献	知っておきたい知的障害者の医療と保健衛生 基礎編―正しい理解と適切な支援のために 日本知的障害者福祉協会(編著)				

科 目 名	聴覚障害者指導法		副題			
担 当 者	鈴木 文治					
開講期	半期	単位数	1		配当年次	3
授業の概要	聴覚に障害のある児童生徒の指導は、従来は聾学校を中心とする教育制度の中に位置づけられてきた。しかし、特別支援機養育の時代を迎えて、その様相が大きく変わってきている。聴覚障害教育の歴史を探り、今日的意義と課題を明らかにする。					
授業のねらい・到達目標	聴覚障害教育の教育課程の編成を理解し、その指導方法や指導内容を学ぶ。また、聴覚障害の歴史を学び、今日的な課題を説明することができる。					
授業の方法・授業計画						
1	聴覚障害教育の歴史					
2	聴覚障害の言語とコミュニケーション					
3	手話と日本語					
4	手話コミュニケーション					
5	特別支援教育における聴覚障害教育					
6	聾学校の教育①幼稚部の指導					
7	聾学校の教育②小・中学部の指導					
8	聾学校の教育③高等部・専攻科の指導					
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
期末						
教科書やレジュメによる講義形式						
評価方法及び評価基準	授業における小テストによる評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分な復習を行うこと。各回の授業ごとに予習、復習をそれぞれ1時間程度必要とする。					
履修上の注意	特になし					
テキスト	特になし					
—						
—						
参考文献	聴覚障害教育の基本と実際 中野善達他 田研出版					

科 目 名	重複障害者教育指導法		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	1975年「特殊教育の改善に対する調査研究会」による報告書に「重度・重複障害児」の名称が初めて使用された。それは障害を2つ以上併せもつ者、重度の知的障害と重度の肢体不自由を併せ持つ者、及び重度の知的障害と重度の行動障害を併せ持つ者、という3つの面から重度・重複障害児は定義される。とりわけ、障害の状況は個々異なるため、個別のニーズに応じた指導が何より求められている。この障害の特性と指導のあり方を学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	重度・重複障害児教育における教育課程の編成を理解し、その指導方法や指導内容を学ぶ。重度・重複障害児教育の歴史を探り、今日的な課題を整理して説明ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	肢体不自由児の特性				
2	運動発達の道すじ				
3	重度・重複障害児の特性				
4	重度・重複障害児の指導				
5	専門的指導法				
6	重度・重複障害児の教育課程				
7	医療的ケア				
8	訪問指導				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末					
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	授業における小テストによる評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分な復習を行うこと。各回の授業ごとに予習、復習をそれぞれ1時間程度必要とする。				
履修上の注意	配付資料をファイルして繰り返し読むこと。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	特別支援学校における重度・重複障害児の教育 姉崎弘著 大学教育出版				

科 目 名		地理学		副題		
担 当 者		一柳 武				
開講期		半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要		地理学は、人間と自然環境との関わりを学ぶ。「地理学」の授業では、地表面における人間の存在や活動のあり方を、資源、産業、人口、文化などの視点から考察、また、その地域的特色や空間的構造をとらえることにある。 この授業では、高等学校で「地理A・B」を履修していなくても理解できるような平易なトピックを題材にして、日本や世界の地域の現状を学んでいく。				
授業のねらい・到達目標		・中学校社会科教員として基本的な地理的知識を身につけることができる。地理的事象に興味・関心をもち、人間と自然環境との関わりや地域や文化の違いを理解できるようになることが目標である。 ・日本や世界の諸地域を比較して関連づけ、それらの地域は相互に関連しあい、その特色には地方的特殊性と一般的共通性があり、変容していくものであることを理解し、説明できるようになる。 ・地図帳等の資料を活用して、地理的事象についての多面的、多角的考察をすることができるようになる。 履修ファイルの対応項目 D-3 教科指導の基本 (1)(2)				
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション 「地理学」とは？					
2	生活舞台としての地球1 地球 地球の大きさ 地球儀					
3	生活舞台としての地球2 方位 対蹠点 世界の時間 地域区分 国家とは？					
4	人種と民族1 人種とは 民族とは					
5	人種と民族2 民族と宗教					
6	人口問題1 人口問題とは 産業別人口構成					
7	人口問題2 人口ピラミッドの作成 年齢別人口構成 日本の人口					
8	エネルギー資源、鉱産資源と産業					
9	環境問題					
10	グローバリゼーション					
11	東南アジアとアフリカ					
12	ヨーロッパ					
13	アメリカ					
14	日本と東京					
15	まとめ 授業評価と自己評価					
期末	試験実施なし					
講義中心 ① 授業内で提出する提出物は、その授業での重要事項について説明したり、それに対する自分の意見や考えをまとめた りするものである。 ② 期末の最終レポートについては、授業内で学習したことがらから課題を出すので、授業中にしっかりノートを取り、要点をまとめてお けば十分対応できる。改めて調べ直す必要はない。						
評価方法 及び評価基準		レポート 毎授業ごとの提出物:50点 最終レポート:50点				
事前・事後 学習の内容		・ 授業計画にて講義内容を確認し、テキストの該当部分を見て、下調べをする。(必要な事前学習については1.5時間 が目安となる。) ・ 講義内容を整理し、中学校社会科教員として基本的な知識の定着をはかり、人間と自然環境との関わりを考察す る。(必要な事後学習については2.5時間が目安となる。)				
履修上の注意		毎授業ごとにリアクションペーパーもしくは課題を出すので、欠席をするとその分のポイントが加算されない。 最終レポートは、テキストの中から課すので、テキストは必ず購入すること。				
テキスト		現代地図帳 二宮書店 2018-2019				
—						
—						
参考文献		「中学校学習指導要領解説 社会編」 文部科学省				

科 目 名	道徳教育の指導法		副題			
担 当 者	岩本 親憲					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2	
授業の概要	「道徳」とは何かを考察し、「道徳教育」の歴史的経緯を確認する。そして、現代社会における道徳教育の在り方について討議した後に、道徳教育に関する代表的な思想と理論を確認し、道徳教育のさまざまな方法を体験しながら学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	価値が多文化化した現代社会における道徳教育とはどのようなものであるべきかについて考察し、道徳教育に携わる際の多様なアプローチを理解すること。そして、それぞれの方法の利点と欠点、およびそれらの方法の背景にある思想を理解することを目指す。さらに、単なる「徳目主義」とならないように、「道徳」を「教育する」ことの意味について、深く議論できるようになることをめざす。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(1)(5)、C-2(1)(4)、C-3(1)～(5)、D-1(1)、D-2(1)～(7)、D-3(1)～(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	イントロダクション：「道徳」とは何か。道徳教育の歴史					
2	現代社会における「道徳教育」の意義					
3	学習指導要領における「道徳教育」の位置づけ					
4	人間観(教育思想)と道徳教育に関する諸理論					
5	隠れたカリキュラムと道徳教育：機能としての道徳教育					
6	道徳性の発達：ピアジェ、コールバーグ、ギリガン					
7	道徳教育における様々なアプローチ①：価値の明確化					
8	道徳教育における様々なアプローチ②：エンカウンター、ピアカウンセリング					
9	道徳教育における様々なアプローチ③：モラルスキル・トレーニング					
10	道徳教育における様々なアプローチ④：VLF(思いやり育成プログラム)					
11	道徳教育における様々なアプローチ⑤：モラルジレンマ					
12	道徳教育における様々なアプローチ⑥：その他					
13	人権意識と道徳教育					
14	欧米諸国の道徳教育					
15	まとめ					
期末	試験実施せず					
討議する時間を多く設け、ワークシートに書き込みながら、考えを深められるように構成します。授業内容に関する疑問や質問については、授業中にとりあげて議論したり、ワークシートの記述を授業内でとりあげてフィードバックします。						
評価方法及び評価基準	ワークシートと授業における課題への取り組み(70%)、授業案の作成(20%)、自己評価(10%)として評価する。					
事前・事後学習の内容	講義で扱う予定の内容に関するテキストの該当箇所を事前に読んでおくこと。また、講義で触れなかった部分を読んで復習し、考えを深めること。テキストや配布プリントを用いて予習・復習(各回につき4時間が目安)をしてください。					
履修上の注意	講義の中で行うワークを大切にしてください。					
テキスト	諸富祥彦 編著『道徳授業の新しいアプローチ10』明治図書：受講者は全員購入			978-4188110188		
—	『中学校学習指導要領解説—道徳編—』文部科学省(日本文教出版)：中学校の免許希望者は購入			987-4-536-59004-4		
—	『高等学校学習指導要領解説—総則編—』文部科学省(東山書房)：高等学校の免許希望者は購入			978-4-8278-1480-4		
参考文献						

科 目 名	特別活動の指導法		副題			
担 当 者	菅谷 正美					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3	
授業の概要	中・高の領域である「特別活動」について、学習指導要領に書かれている意義や内容について、正しく理解できるようにする。また、今日の学校教育に望まれる教師力についても触れる。					
授業のねらい・到達目標	特別活動の指導法では、次のように目標を設定する。 1 特別活動の意義と目的を理解し、生徒を指導することができる。 2 学級活動(ホームルーム)の内容を理解し、実践することができる。 3 生徒会活動の意義と内容を理解することができる。 4 学校行事についての目的と内容を理解し、指導することができる。 5 課外活動の意義を理解することができる。 6 特別活動の指導計画を立案し、実践することができる。 (履修ファイルの対応項目は、A-4(3)である)					
授業の方法・授業計画						
1	授業ガイダンス					
2	特別活動の意義と目的 望ましい集団とはどのような集団であるかを学ぶ					
3	学級活動と学級づくり 学級担任の役割とはどのようなことかを学ぶ					
4	学級活動の指導について 日常生活と健康安全についてどのように指導するかを学ぶ					
5	学級活動の指導について 生徒指導や健全育成の指導方法について学ぶ					
6	学級活動の指導について 進路指導と給食指導等の実践例に基づいて学ぶ					
7	生徒会活動の意義と目的 生徒会および委員会の指導内容について学ぶ					
8	学校行事の意義と内容の理解 安全指導の指導内容・方法について学ぶ					
9	遠足・集団宿泊的行事の内容構成と計画の作成方法を学ぶ					
10	遠足的行事を実施し、計画に基づき指導方法を身に付ける					
11	遠足的行事を実施し、実施時の企画や計画等の反省を行う。					
12	儀式的行事、文化的行事についての意義と進め方について学ぶ					
13	健康安全・体育的行事の意義と進め方について学ぶ					
14	勤労生産・奉仕的行事の意義と進め方について学ぶ					
15	人権問題等へのかかわり方について学ぶ					
期末	試験実施					
・授業では、中学・高校の特別活動の実際の授業の形式を取り入れて行う。 そのため、各自が分担した内容について準備(授業略案・作成資料・板書計画等)を行うこと。 ・授業では、担当した内容について発表し、その内容及び説明の仕方等について全員で討議を行う。						
評価方法及び評価基準	学期末試験の結果に、授業中の討議意欲等を加えて総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	中学校、高等学校ならびに特別支援学校にかかわる教育の話題へ興味関心をもち、「なぜ」をそのままにしないようにすること。何事についても自分の考えを持つこと。 毎回、予習は1, 5時間、復習には2時間が目安になる。					
履修上の注意	学級にかかわる内容を話題とするので、積極的に討議・討論に参加すること。					
テキスト	授業のプリントは毎回配布する。					
—						
—						
参考文献	文部科学省「中学校学習指導要領解説特別活動」海文堂出版 2008 文部科学省「高等学校学習指導要領解説特別活動」海文堂出版 2010					

科 目 名	特別支援教育実習		副題			
担 当 者	鈴木 文治					
開講期	集中	単位数	2	配当年次	4	
授業の概要	学校現場で学校教育を実体験しながら、教員としての資質や欠けている点等を自己検証する機会である。教職志望者にとって、キャリア教育の頂点である。 授業や課外活動を通しての児童生徒との関わり方、授業における他の教員とのチームアプローチのあり方、教員としての職務や服務等について主体的に関わり、教職への道を探るものである。					
授業のねらい・到達目標	教育実習を通して、学校現場の現状を知ることができる。 教壇に立って、学校教育の実践的知識や技術を習得することができる。 教職に対する自らの適性、教師としての心構えを学ぶことができる。 教育実習に対する評価を踏まえ、教師としての課題を知ることができる。 【履修ファイル対応項目：B-1(7),C-1(2),C2-(4),C-3(1)～(5),C-4(1)～(8),D-(1),D-2(1)～(7),D-3(1)～(5),D-4(1)～(6),D-5(1)～(3)】					
授業の方法・授業計画・補足説明						
教育実習は、授業観察、参加実習、授業実習があるが、大学で学んだ指導理論や指導技術を、実際に児童生徒を対象に発揮することへの課題を探る。 主な学習課題は以下の通りである。 ・学校の組織と教員の役割 ・児童生徒の発達段階に対する理解 ・授業のあり方への理解の深化 ・実践記録の書き方 ・指導教員の指導や助言への考察						
評価方法及び評価基準	実習校による評価、学生の自己評価を踏まえて総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	大学内外の学習をよく整理して、十分な準備の上実習に臨むことが望まれる。実習校の指導者の指導を受けて、日々研鑽し、事後指導につなげることが必要である。					
履修上の注意	実習校への感謝と教職をめざす学生としての自覚を持ち、真摯な態度で実習に取り組むこと。					
テキスト	特別支援教育実習 実習の手引き(特別支援教育実習指導で配布)					
－						
－						
参考文献	適宜紹介する。					

科 目 名	特別支援教育実習指導		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	これまでの講義や養護学校での授業体験・ボランティア体験を通して学んできた知識・技能を活かして、学校での教育実習のあり方を学ぶ。特別支援学校の教育課程、障害児への指導、特に学習指導案づくりに向けて学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	特別支援学校における教育実習のために必要な知識や技術について深く学び、とりわけ児童生徒を念頭に置いた適切な学習指導案の作成ができる。 【履修ファイル対応項目：A-2, A-5(1)(2), D-5(1)～(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	特別支援学校の教育課程				
3	特別支援学校における教育の実際：知的障害				
4	特別支援学校における教育の実際：肢体不自由				
5	特別支援学校の学習指導案：知的障害				
6	特別支援学校の学習指導案：肢体不自由				
7	特別支援学校の学習指導案：略案作り				
8	特別支援学校の教材研究：文献を通して学ぶ				
9	特別支援学校の教材研究：知的障害の教材づくり				
10	特別支援学校の教材研究：肢体不自由の教材づくり				
11	特別支援学校における教員の職務				
12	特別支援学校における教員の服務				
13	教育実習の事前準備				
14	実習先の情報収集・分析				
15	まとめ				
期末	期末試験なし				
演習					
評価方法及び評価基準	レポート、授業での成果によって総合的に評価				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分復習すること。教育実習に備えて、予習、復習にそれぞれ2時間の学習を必要とする。				
履修上の注意	積極的な授業参加が望まれる。				
テキスト	特別支援教育実習 実習の手引き(配布)				
－					
－					
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	日本国憲法		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日本国憲法は、主権者である国民によって確定された最高法規である。我が国は法治国家であるが、憲法は、「国民主権」「平和主義」「基本的人権の保障」の基本原理を掲げて、これらの法律の頂点に位置している。本講義では、わたしたち国民によって作られ、わたしたちのための日本国憲法について、深く学ぶことを予定している。				
授業のねらい・到達目標	本学は人生のはじめから終焉までの各段階の社会福祉を担う人材を育てる大学であるが、社会福祉とは、人間の生活そのものに接することで人々に幸せをもたらす、社会に密着した分野といえる。社会福祉を担う人材の育成にあたっては、我が国社会の仕組みの根幹を定める日本国憲法全般、中でも第25条に定める「社会福祉」について学ぶことは必要不可欠である。そこで、本講義では、日本国憲法に関して深い理解ができるようになることを目的とする。 【履修ファイルの対応項目A-4-(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	法の本質				
3	日本国憲法の歴史				
4	日本国憲法における基本三原理(国民主権・平和主義・基本的人権の保障)				
5	日本国憲法の「前文」の意義				
6	基本的人権保障の意義				
7	基本的人権の保障―権利主体、自由権など				
8	基本的人権の保障―第25条に定める「社会福祉」の意義				
9	基本的人権の保障―その他				
10	日本国憲法が定める国家・社会の仕組みと制度―「天皇」「三権分立」「地方自治」「その他」				
11	国の立法権―国会				
12	国の行政権―内閣				
13	国の司法権―裁判所				
14	地方自治				
15	ここまでの確認。憲法の意義とは				
期末	試験実施なし				
講義を中心に、演習や視聴覚教材などを組み合わせて授業を行う。					
評価方法及び評価基準	期末課題、コメントシート及び授業内の活動の得点を総合評価。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席するようにすること(必要学習時間の目安は1.5時間)。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること(必要学習時間の目安は2.5時間)。				
履修上の注意	自分達によって作られ、自分達のための日本国憲法を、より広く、より深く理解しようという熱意で、本科目に取り組むことを期待する。指定テキストは、授業の際に必ず持参するようにすること。				
テキスト	『法学六法』最新版(信山社) 初宿正典他編著『目で見る憲法』最新版(有斐閣)				
—					
—					
参考文献	授業の進行、必要に応じ適宜紹介します。				

科 目 名	日本国憲法		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日本国憲法は、主権者である国民によって確定された最高法規である。我が国は法治国家であるが、憲法は、「国民主権」「平和主義」「基本的人権の保障」の基本原理を掲げて、これらの法律の頂点に位置している。本講義では、わたしたち国民によって作られ、わたしたちのための日本国憲法について、深く学ぶことを予定している。				
授業のねらい・到達目標	本学は人生のはじめから終焉までの各段階の社会福祉を担う人材を育てる大学であるが、社会福祉とは、人間の生活そのものに接することで人々に幸せをもたらす、社会に密着した分野といえる。社会福祉を担う人材の育成にあたっては、我が国社会の仕組みの根幹を定める日本国憲法全般、中でも第25条に定める「社会福祉」について学ぶことは必要不可欠である。そこで、本講義では、日本国憲法に関して深い理解ができるようになることを目的とする。 【履修ファイルの対応項目A-4-(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	法の本質				
3	日本国憲法の歴史				
4	日本国憲法における基本三原理(国民主権・平和主義・基本的人権の保障)				
5	日本国憲法の「前文」の意義				
6	基本的人権保障の意義				
7	基本的人権の保障―権利主体、自由権など				
8	基本的人権の保障―第25条に定める「社会福祉」の意義				
9	基本的人権の保障―その他				
10	日本国憲法が定める国家・社会の仕組みと制度―「天皇」「三権分立」「地方自治」「その他」				
11	国の立法権―国会				
12	国の行政権―内閣				
13	国の司法権―裁判所				
14	地方自治				
15	ここまでの確認。憲法の意義とは				
期末	試験実施なし				
講義を中心に、演習や視聴覚教材などを組み合わせて授業を行う。					
評価方法及び評価基準	期末課題、コメントシート及び授業内の活動の得点を総合評価。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席するようにすること(必要学習時間の目安は1.5時間)。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること(必要学習時間の目安は2.5時間)。				
履修上の注意	自分達によって作られ、自分達のための日本国憲法を、より広く、より深く理解しようという熱意で、本科目に取り組むことを期待する。指定テキストは、授業の際に必ず持参するようにすること。				
テキスト	『法学六法』最新版(信山社) 初宿正典他編著『目で見る憲法』最新版(有斐閣)				
—					
—					
参考文献	授業の進行、必要に応じ適宜紹介します。				

科 目 名	日本史		副題			
担 当 者	田中 達実					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1	
授業の概要	日本の歴史を概観して、日本という国がどのように生まれ、成長してきたのかを学びます。そして、19世紀後半に近代国家となった日本が、第1次世界大戦後に「一等国」となり、列強の仲間入りを果たした背景を考え、戦争への道を進んだ原因を考察します。第2次世界大戦後の「ゼロからの出発」から、再び先進国となっ行く過程をたどり、国際社会とどのような交流・接触を経てきたのかを学びます。					
授業のねらい・到達目標	日本史の知識を深めるとともに、中等教育で扱う歴史的事項を理解します。 日本が歩んできた歴史を探究することにより、21世紀の日本の針路を考える力をつけます。 高等学校の教科書の出来事を掘り下げることにより、歴史学の研究方法を学びます。					
授業の方法・授業計画						
1	日本文化のあけぼの					
2	ヤマト政権の誕生					
3	律令国家の形成					
4	平安時代の貴族政治					
5	中世社会の成立					
6	武家社会の成長					
7	幕藩体制の確立					
8	幕藩体制の展開と動揺					
9	近代国家の成立					
10	近代日本とアジア					
11	大正デモクラシーと恐慌の時代					
12	軍部の台頭と第2次世界大戦					
13	占領時代の日本					
14	朝鮮戦争と主権回復					
15	高度経済成長と経済大国への道					
期末	試験実施					
歴史的出来事や人物の名を憶えるだけでなく、歴史の流れの中で、それらのことがどのような意義を持つかを考察する。						
評価方法及び評価基準	学期末試験の結果に、授業への参加姿勢を加味します。					
事前・事後学習の内容	開講時に配付する講義プリントで、次回の講義内容を把握しておくこと。 受講後は、講義の内容を整理して、疑問点があれば、つぎの講義で質問すること。 事前・事後学習にそれぞれ2時間程度を必要とする。					
履修上の注意	出席と授業への参加態度を重視する。					
テキスト	授業でプリントを配付する。					
－						
－						
参考文献	高校日本史・資料など。そのほか必要に応じて、授業で紹介します。					

科 目 名	乳幼児発達心理学		副題		
担 当 者	横尾 暁子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	乳幼児期は心身ともに著しく変化の大きい時期である。本講義では、子どもの「育ち」に関する心理学の知見を紹介する。様々な角度から子どもの発達の特徴をとらえ、サポートのあり方を考える機会とする。				
授業のねらい・到達目標	・乳幼児期の子どもの心身の発達の特徴を理解する。 ・子どもの育ちを取り巻く環境に関して理解することができる。 ・子どもの発達の個人差について理解し、それぞれの子どもの発達の様子をとらえることができる。 ・それぞれの子どもに適したサポートのあり方を考えることができる。 「履修ファイル」の対応項目 :A-3(1)～(3), B-1(1)～(7)				
授業の方法・授業計画					
1	乳幼児発達心理学とは				
2	発達理論				
3	運動の発達				
4	自己認知				
5	思考の発達・因果性の理解				
6	愛着の個人差と文化差				
7	情動の発達				
8	ことばの発達とコミュニケーション				
9	心の理論・子どもの嘘				
10	遊びの発達と仲間関係				
11	道徳性の発達				
12	食の発達				
13	発達のつまずきとそのサポート				
14	子どもを取り巻く環境				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
授業中に実施した課題については、出題意図を説明するとともに全般的な傾向について紹介し、講評する。					
評価方法及び評価基準	授業内の提出課題や授業内テスト、授業への参加態度等により総合的に評価します				
事前・事後学習の内容	事前に、授業内容を確認し、事前配布資料に目を通してから授業に出席すること。(事前学習は、毎回1.5時間が目安となる) 事後は、配布資料、ノートを再読し学習を深めること。(事後学習は、毎回2.5時間が目安となる) また、乳幼児と接する機会には、子どものことをよく観察することを心がけ、実体験をもって乳幼児の発達についての理解を深めることを期待する。				
履修上の注意	基本的には講義形式であるが、ワークシートや発表等も取り入れる予定である。積極的な参加が求められる。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	「エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学」 岡本依子・菅野幸恵・塚田城みちる 新曜社 その他、適宜紹介する。				

科 目 名	発達心理学		副題		
担 当 者	横尾 暁子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	人は生涯をかけて、発達し続ける。 本講義では、人の発達の各時期における特徴や障がいについて概観する。人の心や身体、そしてそれを取り巻く環境が、段階を経てどのように変化するのかについて学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	・各発達段階の発達の特徴や課題がわかる。 ・発達における遺伝と環境の影響を理解する。 ・発達における初期経験の重要性、周囲との関わり的重要性を理解し、保育のあり方を考えることができる。 ・これらの学びを踏まえて、子どもの年齢や個人差に応じた適切なサポートのあり方を考えることができる。 「履修ファイル」の対応項目：A-3(1)～(3), B-1(1)～(7)				
授業の方法・授業計画					
1	発達心理学とは				
2	発達の法則性、発達段階				
3	発達の要因(遺伝と環境)				
4	周生期(胎児・新生児の行動発達)				
5	乳児期(赤ちゃんの能力・愛着)				
6	幼児期(認知の発達)				
7	幼児期(仲間関係と遊び)				
8	児童期(社会性の発達)				
9	児童期(自己認知)				
10	発達障がいの理解とその支援				
11	青年期(アイデンティティ)				
12	青年期(性役割・親子関係・友人関係)				
13	成人前期(キャリア発達、夫婦・親としての発達)				
14	成人後期(アイデンティティの見直し)				
15	老年期(死の受容・自己実現)				
期末 試験実施					
授業内で行なう小テストについては、添削して返却する。出題の意図についても説明し、講評するので、期末試験の準備に役立てること。					
評価方法及び評価基準	参加態度(30%)、小テスト(20%)、期末試験(50%)から総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	事前課題には必ず取り組んでから授業に臨むこと(事前学習については、毎回1.5時間が目安となる)。事後は毎回必ず配布資料とノートを見直し、要点はノートにまとめることにより、知識の定着をはかること(事後学習については、毎回2.5時間が目安となる)。授業で学んだ知識や考え方をもとに、自分のこれまでの成長を振り返ったり、今後について考える機会をもつことを期待する。				
履修上の注意	授業形態は講義が主であるが、知識の整理と定着をはかるため、授業中にワークシートや小テストの実施も予定している。				
テキスト	特になし。				
－					
－					
参考文献	「スタンダード発達心理学」 櫻井茂男・佐藤有耕 (編) サイエンス社				

科 目 名	病弱教育論		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	何らかの病気のために入院・加療しながら教育を受けている病弱児の教育のあり方を学ぶ。病弱教育の歴史を学び、現在の課題を探る。病院などで教育を受けている病弱児の教育は、学校・家庭・医療機関との密接な連携が必要になるが、望ましい連携のあり方についても学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	病弱・虚弱児の教育課程の編成を理解し、具体的な指導内容・指導方法について学ぶ。対象となる疾患の理解とそれに応じた適切な指導のあり方について説明することができる。 【履修ファイルの対応項目：A-3(1)(2)】				
授業の方法・授業計画					
1	主要疾患とその指導法(1)悪性腫瘍、循環器疾患				
2	主要疾患とその指導法(2)腎疾患、呼吸器系疾患、糖尿病				
3	主要疾患とその指導法(3)膠原病、てんかん				
4	特別支援教育時代の新たな疾患①心身症、拒食症				
5	特別支援教育時代の新たな疾患②不登校				
6	子どもの虐待と病弱教育				
7	病弱・虚弱児の学校教育(1)病弱・虚弱教育の歴史				
8	病弱・虚弱児の学校教育(2)指導の実際				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末	試験実施せず				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	授業における小テスト、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて指導内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は配付した資料を基に十分な復習をすること。予習・復習にはそれぞれ0.5時間程度を必要とする。				
履修上の注意	配付資料をファイルして繰り返し読むこと。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	病弱・虚弱児の医療・療育・教育 宮本信也他 金芳堂				

科 目 名	福祉科教育法Ⅰ		副題		
担 当 者	相澤 哲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「福祉科教育法Ⅰ」では、教科「福祉」の目標と各科目の内容、学習指導要領の理解と展開、教育課程の編成、指導計画と学習指導案の枠組み、といった事項について講義を行い、検討する。				
授業のねらい・到達目標	・教科に関する学習指導要領の基本的な内容を整理して述べることができる。 ・教育目標・教育内容に応じた指導計画や指導案を作成できる。 ・必要な際は関係諸機関とも連携して、教科についての教育実践に取り組むことができる。 「履修ファイル」の対応項目：A-4(1)、D-1(1)、D-2(1)～(7)、D-3(1)～(4)				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	教科「福祉」のねらいと全体構造				
3	各科目の概要と指導の展開モデル(1) — 「社会福祉基礎」				
4	各科目の概要と指導の展開モデル(2) — 「介護福祉基礎」				
5	各科目の概要と指導の展開モデル(3) — 「コミュニケーション技術」				
6	各科目の概要と指導の展開モデル(4) — 「生活支援技術」				
7	各科目の概要と指導の展開モデル(5) — 「介護過程」				
8	各科目の概要と指導の展開モデル(6) — 「介護総合演習」「介護実習」				
9	各科目の概要と指導の展開モデル(7) — 「こころとからだの理解」				
10	各科目の概要と指導の展開モデル(8) — 「福祉情報活用」				
11	「指導計画」とは何か				
12	教育実習と学習指導案				
13	学習指導案の作成				
14	学習指導案の細目				
15	「授業をする」とはどういうことか — ふり返りと総括				
期末	試験実施				
授業中の「報告・発表」に対する評価等のフィードバックを、授業内もしくは事後の授業において行う。					
評価方法及び評価基準	学期末試験(95%)、及び授業中の「報告・発表」(5%)の得点により評価する。				
事前・事後学習の内容	・授業中に次回の講義の概要について伝えるので、テキストの該当部分を読んで予習すること。(学習に必要な時間の目安は、1.5時間である) ・授業後には、講義の要点をノートに整理する等十分な復習を行い、知識の定着をはかること。(学習に必要な時間の目安は、2.5時間である)				
履修上の注意	教職に就きたいと希望する者が遵守すべき当然のルールも守れないような学生には、厳しく対応する。				
テキスト	保住芳美編著『高等学校新学習指導要領の展開 福祉科編』明治図書出版株式会社				ISBN978-4-18-850919-7
—					
—					
参考文献	「高等学校学習指導要領解説 福祉編」 文部科学省				

科 目 名	福祉科教育法II		副題		
担 当 者	相澤 哲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「福祉科教育法Ⅰ」の学習内容を前提とし、教科「福祉」の教育法の理解をさらに深め、教材研究や指導案・授業計画の作成等についてより具体的・実地的に学ぶこと、またそれを踏まえた模擬授業の実践を通して、来るべき教育実習に備えることを眼目とした授業である。				
授業のねらい ・到達目標	・教育目標・教育内容に応じた指導計画や指導案を作成できる。 ・作成した指導案に基づいて、適切に授業を行うことができる。 ・必要な際は関係諸機関とも連携して、教科についての教育実践に取り組むことができる。 「履修ファイル」の対応項目：A-4(1)、D-1(1)、D-2(1)～(7)、D-3(1)～(4)				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	教材研究と授業展開例(1) 社会福祉基礎				
3	教材研究と授業展開例(2) 介護福祉基礎				
4	教材研究と授業展開例(3) コミュニケーション技術				
5	教材研究と授業展開例(4) 生活支援技術				
6	教材研究と授業展開例(5) 介護過程				
7	教材研究と授業展開例(6) こころとからだの理解				
8	模擬授業の実践(1) 社会福祉基礎				
9	模擬授業の実践(2) 介護福祉基礎				
10	模擬授業の実践(3) コミュニケーション技術				
11	模擬授業の実践(4) 生活支援技術				
12	模擬授業の実践(5) 介護過程				
13	模擬授業の実践(6) こころとからだの理解				
14	模擬授業の振り返り				
15	教育実習に向けて				
期末	試験実施なし				
学生が行う模擬授業に対する評価等のフィードバックは、授業内もしくは事後の授業において実施する。					
評価方法 及び評価基準	授業中に提示する各種課題への取り組み(10%)、模擬授業(90%)として、総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	・授業中に次回の講義の概要について伝えるので、テキストや配布プリントの該当部分を読む等の予習をすること。(学習に必要な時間の目安は、1.5時間である) ・授業後には、講義の要点をノートに整理する等十分な復習を行い、知識の定着をはかること。(学習に必要な時間の目安は、2.5時間である)				
履修上の注意	教職に就きたいと希望する者が遵守すべき当然のルールも守れないような学生には、厳しく対応する。				
テキスト	保住芳美編著『高等学校新学習指導要領の展開 福祉科編』明治図書出版株式会社			ISBN978-4-18-850919-7	
－					
－					
参考文献	「高等学校学習指導要領解説 福祉編」 文部科学省				

科 目 名	福祉マインド実践講座			副題	
担 当 者	村井 祐一、小平 隆雄				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本講座は、これから社会福祉を広く学ぶ学生に対する具体的・実践的な「福祉マインド」を醸成するための導入教育であり、座学と実践的なフィールドワークを織り交ぜた授業である。 毎回の講義で地域の福祉活動の紹介やボランティア募集が行われる。				
授業のねらい・到達目標	様々な形態による社会貢献活動への参加を通じて、「地域に深く根ざした大学」に通う学生としての自覚と責任感を持ち、さらには「他者との連帯」や「我欲・利己を捨てて奉仕する心」といった、福祉を学ぶ者としての重要な資質を早期に身につける。 また、早期に福祉現場と関わることで、将来の進路に対する理解を深め、福祉人材としての意識の向上と実践力を高める。 到達目標は以下の通りである。 ・多様な人々とコミュニケーションを取り、協力して活動できるようなる。 ・現代社会の福祉課題に気付き、その状況と必要な取り組みについて説明できるようになる。 ・ボランティア活動など地域貢献活動に主体的に参加できるようになる。 【履修ファイルの対応項目:C-1(1)、C-4(1)～(8)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(授業の構成)			16	ボランティア活動報告 ※これまでの振り返りとこれからに向けて
2	ボランティア活動について(心構え)			17	まちづくりを考える ※麻生区役所との連携講義
3	ボランティア活動について(対象と領域)			18	外部講師招聘による福祉マインド醸成講義
4	福祉って何だろう(自分の中の福祉マインド)			19	福祉マインド実践講座のまとめに向けて
5	認知症サポーターになろう (認知症サポーター養成講座)			20	ミニたまゆりの参加に向けて
6	地域活動への参加に向けて ※麻生区の認知症カフェへの参加など			21	ミニたまゆりの実践
7	本学の地域貢献活動1 (ミニたまゆり)			22	
8	本学の地域貢献活動2 (その他)			23	
9	夏期ボランティア活動について (自由選択ボランティア)			24	
10				25	
11				26	
12				27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末				期末	期末試験実施
本科目の総括として実施する定期試験は、毎回の授業内容、授業中に配布したプリント、学内・学外活動などを整理して記述する内容となっている。このため、各自しっかりと記録を取り、入念な事後学習(毎回の授業の振り返り)を行っておくことが望ましい。					
評価方法及び評価基準	期末試験(40%)、授業態度(30%)、活動報告書(30%)を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、授業の方法・授業計画に示された内容について教員・図書館・インターネットなどを活用して情報収集しておく。 事後学習として、ボランティア活動後の活動記録作成を必ず行い整理しておく。 事前・事後の学修は、毎回それぞれ0.5時間が目安となる。				
履修上の注意	授業が不定期であるため、でんでんぱんの掲示に留意すること。				
テキスト	関係資料を毎回の授業で配布する。				
—					
—					
参考文献	「福祉マインド教育実践論」ナカニシヤ出版 2007年 「ボランティア論「広がり」から「深まり」へ」 みらい 2010年				

科 目 名	保育・教職実践演習(幼稚園)		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	保育者として必要な知識・技能の修得を総合的に目指すために、子ども理解、保育内容、保育教材、保育技術、保育の環境構成、指導計画、保育者の役割と援助、担任業務と学級運営、現代社会において求められる幼稚園・保育所・施設の機能と役割、保育者として必要な対人関係能力、保育者の責任と使命の自覚などを主な学習項目として、受講生同士の主体的な協議・検討を通じて、協働的・実践的に学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	保育に関する理論的学習と実習をはじめとする実践的学びとの統合を図り、保育現場に臨む意識・意欲を高めながら、保育者としての資質をより一層確実に形成することを目的とする。 この目的に対し、以下の目標を設定する。 1. これまでの保育実践を振り返り、自己の課題や保育に関するテーマを明確にできる。 2. 保育実践力の向上のために、その課題やテーマに対して、他者と協働しながらさまざまな角度や視点から取り組むことができるようになる。 3. 保育者の職務内容への理解を深め、保育者としての使命と責任についての自覚をもつことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：本科目は全項目と密接なかかわりを持つ】				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：本科目の意義と目的、授業計画の説明、保育の主要テーマに関するグループ討議【合同授業】				
2	事例検討①各自の実習体験事例に関するグループ討議				
3	グループ研究①課題の抽出および研究テーマの確認				
4	グループ研究②グループ別テーマの検討・テーマに関する基本的知識の復習				
5	グループ研究③グループ別テーマの検討・テーマに関する事例の検討				
6	グループ研究④グループ別テーマの検討・テーマに関する事例に基づく討議				
7	グループ研究⑤グループ研究報告会中間報告				
8	グループ研究⑥グループ研究報告会におけるプレゼン方法・資料の再検討				
9	グループ研究報告会：グループ研究の成果を発表・報告【合同授業】				
10	グループ研究報告会の振り返り①研究結果から導き出される課題の抽出				
11	グループ研究報告会の振り返り②研究結果から導き出される課題に関する検討				
12	事例検討②各自の実習体験事例の再検討				
13	ロールプレイングとグループ討議				
14	授業のまとめ①保育者の多様な職務内容について【合同授業】				
15	授業のまとめ②保育者としての責任と使命について				
期末	試験実施なし				
授業の方法として、グループ討議による事例検討、グループ研究および報告会、ロールプレイングとグループ討議、グループワークなどを取り入れる。 特に、一連のグループ研究においては、随時、研究の進捗状況を確認する提出課題を課し、次回授業までに、添削・指導を行うため、その指導を確実に各自のグループ研究へ反映させていくことが望まれる。					
評価方法及び評価基準	授業態度、提出物、課題およびグループ研究への取り組みなどを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業前は、授業計画にて授業内容を確認し、必要な準備を十分に行ってから授業に参加すること。授業後は、その都度「履修ファイル」の該当する部分で自己の課題について明確にし、保育実践力の向上のために必要な努力を怠らないこと。特にグループ研究への取組み中は、授業時間外にグループメンバーと協力し、事前・事後学習として各自で研究を進めること。各回の授業の事前・事後学習に4時間程度は必要となる。				
履修上の注意	・グループワークを中心とした演習科目であるので、積極的に参加する姿勢が求められる。特に、グループ研究に関しては、授業時間外でもグループ作業が必要となるので留意すること。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科「履修ファイル」、 「幼稚園教育要領解説」「保育所保育指針解説書」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」 各自の全実習日誌、ほか授業において適宜紹介する。				

科 目 名	保育・教職実践演習(幼稚園)		副題		
担 当 者	内藤 知美				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	保育者として必要な知識・技能の修得を総合的に目指すために、子ども理解、保育内容、保育教材、保育技術、保育の環境構成、指導計画、保育者の役割と援助、担任業務と学級運営、現代社会において求められる幼稚園・保育所・施設の機能と役割、保育者として必要な対人関係能力、保育者の責任と使命の自覚などを主な学習項目として、受講生同士の主体的な協議・検討を通じて、協働的・実践的に学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	保育に関する理論的学習と実習をはじめとする実践的学びとの統合を図り、保育現場に臨む意識・意欲を高めながら、保育者としての資質をより一層確実に形成することを目的とする。 この目的に対し、以下の目標を設定する。 1. これまでの保育実践を振り返り、自己の課題や保育に関するテーマを明確にできる。 2. 保育実践力の向上のために、その課題やテーマに対して、他者と協働しながらさまざまな角度や視点から取り組むことができるようになる。 3. 保育者の職務内容への理解を深め、保育者としての使命と責任についての自覚をもつことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：本科目は全項目と密接なかかわりを持つ】				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション:本科目の意義と目的、授業計画の説明、保育の主要テーマに関するグループ討議【合同授業】				
2	事例検討①各自の実習体験事例に関するグループ討議				
3	グループ研究①課題の抽出および研究テーマの確認				
4	グループ研究②グループ別テーマの検討・テーマに関する基本的知識の復習				
5	グループ研究③グループ別テーマの検討・テーマに関する事例の検討				
6	グループ研究④グループ別テーマの検討・テーマに関する事例に基づく討議				
7	グループ研究⑤グループ研究報告会中間報告				
8	グループ研究⑥グループ研究報告会におけるプレゼン方法・資料の再検討				
9	グループ研究報告会:グループ研究の成果を発表・報告【合同授業】				
10	グループ研究報告会の振り返り①研究結果から導き出される課題の抽出				
11	グループ研究報告会の振り返り②研究結果から導き出される課題に関する検討				
12	事例検討②各自の実習体験事例の再検討				
13	ロールプレイングとグループ討議				
14	授業のまとめ①保育者の多様な職務内容について【合同授業】				
15	授業のまとめ②保育者としての責任と使命について				
期末	試験実施なし				
授業の方法として、グループ討議による事例検討、グループ研究および報告会、ロールプレイングとグループ討議、グループワークなどを取り入れる。					
特に、一連のグループ研究においては、随時、研究の進捗状況を確認する提出課題を課し、次回授業までに、添削・指導を行うため、その指導を確実に各自のグループ研究へ反映させていくことが望まれる。					
評価方法及び評価基準	授業態度、提出物、課題およびグループ研究への取り組みなどを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業前は、授業計画にて授業内容を確認し、必要な準備を十分に行ってから授業に参加すること。授業後は、その都度「履修ファイル」の該当する部分で自己の課題について明確にし、保育実践力の向上のために必要な努力を怠らないこと。特にグループ研究への取組み中は、授業時間外にグループメンバーと協力し、事前・事後学習として各自で研究を進めること。各回の授業の事前・事後学習に4時間程度は必要となる。				
履修上の注意	・グループワークを中心とした演習科目であるので、積極的に参加する姿勢が求められる。特に、グループ研究に関しては、授業時間外でもグループ作業が必要となるので留意すること。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科「履修ファイル」、 「幼稚園教育要領解説」「保育所保育指針解説書」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」 各自の全実習日誌、ほか授業において適宜紹介する。				

科 目 名	保育・教職実践演習(幼稚園)		副題		
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	保育者として必要な知識・技能の修得を総合的に目指すために、子ども理解、保育内容、保育教材、保育技術、保育の環境構成、指導計画、保育者の役割と援助、担任業務と学級運営、現代社会において求められる幼稚園・保育所・施設の機能と役割、保育者として必要な対人関係能力、保育者の責任と使命の自覚などを主な学習項目として、受講生同士の主体的な協議・検討を通じて、協働的・実践的に学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	保育に関する理論的学習と実習をはじめとする実践的学びとの統合を図り、保育現場に臨む意識・意欲を高めながら、保育者としての資質をより一層確実に形成することを目的とする。 この目的に対し、以下の目標を設定する。 1. これまでの保育実践を振り返り、自己の課題や保育に関するテーマを明確にできる。 2. 保育実践力の向上のために、その課題やテーマに対して、他者と協働しながらさまざまな角度や視点から取り組むことができるようになる。 3. 保育者の職務内容への理解を深め、保育者としての使命と責任についての自覚をもつことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：本科目は全項目と密接なかかわりを持つ】				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：本科目の意義と目的、授業計画の説明、保育の主要テーマに関するグループ討議【合同授業】				
2	事例検討①各自の実習体験事例に関するグループ討議				
3	グループ研究①課題の抽出および研究テーマの確認				
4	グループ研究②グループ別テーマの検討・テーマに関する基本的知識の復習				
5	グループ研究③グループ別テーマの検討・テーマに関する事例の検討				
6	グループ研究④グループ別テーマの検討・テーマに関する事例に基づく討議				
7	グループ研究⑤グループ研究報告会中間報告				
8	グループ研究⑥グループ研究報告会におけるプレゼン方法・資料の再検討				
9	グループ研究報告会：グループ研究の成果を発表・報告【合同授業】				
10	グループ研究報告会の振り返り①研究結果から導き出される課題の抽出				
11	グループ研究報告会の振り返り②研究結果から導き出される課題に関する検討				
12	事例検討②各自の実習体験事例の再検討				
13	ロールプレイングとグループ討議				
14	授業のまとめ①保育者の多様な職務内容について【合同授業】				
15	授業のまとめ②保育者としての責任と使命について				
期末	試験実施なし				
授業の方法として、グループ討議による事例検討、グループ研究および報告会、ロールプレイングとグループ討議、グループワークなどを取り入れる。 特に、一連のグループ研究においては、随時、研究の進捗状況を確認する提出課題を課し、次回授業までに、添削・指導を行うため、その指導を確実に各自のグループ研究へ反映させていくことが望まれる。					
評価方法及び評価基準	授業態度、提出物、課題およびグループ研究への取り組みなどを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業前は、授業計画にて授業内容を確認し、必要な準備を十分に行ってから授業に参加すること。授業後は、その都度「履修ファイル」の該当する部分で自己の課題について明確にし、保育実践力の向上のために必要な努力を怠らないこと。特にグループ研究への取組み中は、授業時間外にグループメンバーと協力し、事前・事後学習として各自で研究を進めること。各回の授業の事前・事後学習に4時間程度は必要となる。				
履修上の注意	・グループワークを中心とした演習科目であるので、積極的に参加する姿勢が求められる。特に、グループ研究に関しては、授業時間外でもグループ作業が必要となるので留意すること。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科「履修ファイル」、 「幼稚園教育要領解説」「保育所保育指針解説書」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」 各自の全実習日誌、ほか授業において適宜紹介する。				

科 目 名	保育・教職実践演習(幼稚園)		副題		
担 当 者	望月 隆之				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	保育者として必要な知識・技能の修得を総合的に目指すために、子ども理解、保育内容、保育教材、保育技術、保育の環境構成、指導計画、保育者の役割と援助、担任業務と学級運営、現代社会において求められる幼稚園・保育所・施設の機能と役割、保育者として必要な対人関係能力、保育者の責任と使命の自覚などを主な学習項目として、受講生同士の主体的な協議・検討を通じて、協働的・実践的に学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	保育に関する理論的学習と実習をはじめとする実践的学びとの統合を図り、保育現場に臨む意識・意欲を高めながら、保育者としての資質をより一層確実に形成することを目的とする。 この目的に対し、以下の目標を設定する。 1. これまでの保育実践を振り返り、自己の課題や保育に関するテーマを明確にできる。 2. 保育実践力の向上のために、その課題やテーマに対して、他者と協働しながらさまざまな角度や視点から取り組むことができるようになる。 3. 保育者の職務内容への理解を深め、保育者としての使命と責任についての自覚をもつことができる。 【「履修ファイル」の対応項目：本科目は全項目と密接なかわりを持つ】				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション: 本科目の意義と目的、授業計画の説明、保育の主要テーマに関するグループ討議【合同授業】				
2	事例検討①各自の実習体験事例に関するグループ討議				
3	グループ研究①課題の抽出および研究テーマの確認				
4	グループ研究②グループ別テーマの検討・テーマに関する基本的知識の復習				
5	グループ研究③グループ別テーマの検討・テーマに関する事例の検討				
6	グループ研究④グループ別テーマの検討・テーマに関する事例に基づく討議				
7	グループ研究⑤グループ研究報告会中間報告				
8	グループ研究⑥グループ研究報告会におけるプレゼン方法・資料の再検討				
9	グループ研究報告会: グループ研究の成果を発表・報告【合同授業】				
10	グループ研究報告会の振り返り①研究結果から導き出される課題の抽出				
11	グループ研究報告会の振り返り②研究結果から導き出される課題に関する検討				
12	事例検討②各自の実習体験事例の再検討				
13	ロールプレイングとグループ討議				
14	授業のまとめ①保育者の多様な職務内容について【合同授業】				
15	授業のまとめ②保育者としての責任と使命について				
期末	試験実施なし				
授業の方法として、グループ討議による事例検討、グループ研究および報告会、ロールプレイングとグループ討議、グループワークなどを取り入れる。 特に、一連のグループ研究においては、随時、研究の進捗状況を確認する提出課題を課し、次回授業までに、添削・指導を行うため、その指導を確実に各自のグループ研究へ反映させていくことが望まれる。					
評価方法及び評価基準	授業態度、提出物、課題およびグループ研究への取り組みなどを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業前は、授業計画にて授業内容を確認し、必要な準備を十分に行ってから授業に参加すること。授業後は、その都度「履修ファイル」の該当する部分で自己の課題について明確にし、保育実践力の向上のために必要な努力を怠らないこと。特にグループ研究への取組み中は、授業時間外にグループメンバーと協力し、事前・事後学習として各自で研究を進めること。各回の授業の事前・事後学習に4時間程度は必要となる。				
履修上の注意	・グループワークを中心とした演習科目であるので、積極的に参加する姿勢が求められる。特に、グループ研究に関しては、授業時間外でもグループ作業が必要となるので留意すること。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科「履修ファイル」、 「幼稚園教育要領解説」「保育所保育指針解説書」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」(フレーベル館)、各自の全実習日誌、ほか授業において適宜紹介する。				

科 目 名		保育実践入門		副題		子ども理解とフィールドワーク	
担 当 者		内藤 知美					
開講期		通年		単位数		1	
				配当年次		1	
授業の概要		「保育」とは、一人ひとりの子どもの育ちを支え、援助していく営みであり、そこには、それぞれの子どもの内面を捉え、その子どもにとって必要な援助を探ることのできる「保育者のまなざし」が求められます。そのため、本授業では、実際の保育実践の場における演習を中心に、子どもと出会う経験を通して得た自分なりの「気づき」を他者と共有することで、子どもや保育の持つ魅力や奥深さに触れていくことを期待しています。また、子どもとかかわる経験を重ねながら、一人ひとりの子どもの行為の持っている「意味」を探り、自分のかかわりを振り返るという「保育のプロセス」を体験していきます。					
授業のねらい・到達目標		・「田園調布学園大学みらいこども園」における演習を通して、保育実践の場に自ら参加し、子どもとかかわる経験を重ね、自らの気づきや具体的な事例を基にグループカンファレンスを行う中で、子どもへの理解を深め、多角的に考察できるようになる。また、自らのかかわりを振り返り、反省的に考察できるようになる。 ・今後の学外実習に向けて、保育実践の場において求められる基本的な姿勢や心構えについて知り、そのことの意味を理解できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-1(1),A-5(1)(2)(3),C-1(1)(2),C-2(3)(4),D-1(1)(2)(3)】					
授業の方法・授業計画							
1	オリエンテーション【合同授業】				16	学外演習②参加～個々の子どもとのかかわりを通して学ぶ～	
2	学外演習①事前指導【合同授業】				17	学外演習②参加～背景から子どもを理解する姿勢を学ぶ～	
3	学外演習①参加～子どもの姿、保育者の姿から学ぶ～				18	学外演習②事後指導（Ⅰ．具体的事例を基にしたグループカンファレンス）	
4	学外演習①参加～環境から学ぶ～				19	学外演習②事後指導（Ⅱ．体験を通して探る「遊び」の意義）	
5	学外演習①事後指導（子どもとの出会いから生まれた気づきの共有化）				20	実践に生きる記録とは～エピソード記録の書き方と留意点～	
6	「子ども理解」について～子どもの行為の「意味」を探る～				21	実践に生きる記録の探究～各自のエピソード記録の問い直し～	
7	子どもへのかかわりを振り返る～子どもにとっての「意味」を探る～／記録とカンファレンスの意義／学外演習②事前指導				22	外部講師による講演【合同授業】	
8					23	まとめ	
9					24		
10					25		
11					26		
12					27		
13					28		
14					29		
15					30		
期末	試験実施なし				期末	試験実施なし	
※授業は全体で行うものとグループ単位で行うものがあります。 ※「学外演習」では、グループ単位で「田園調布学園大学みらいこども園」に赴き、日常の保育実践への参加を通して、子どもとかかわる演習を行います。演習は規定の時間割以外の曜日・時限に設定されることもあるため注意が必要です。 ※「学外演習」後に提出する課題は、その後の授業内において共有し、グループカンファレンスをする際に活用されるため、期限を守って提出することが求められます。							
評価方法及び評価基準		授業及び演習への参加態度、課題の提出状況などを総合的に評価します。					
事前・事後学習の内容		授業での指示に従い、学外演習に対する事前学習・事前準備を確実に進めることが望まれます。また、授業内容への理解を深めるために配布資料やワークシート等で復習し、学外演習の課題にも確実に取り組むことが期待されます。なお、各回の事前・事後学習については最低でも1時間程度が必要となります。					
履修上の注意		学外での演習を主とした科目であるため、初回授業において、授業履修上必要な諸注意やスケジュールの説明を行います。その指示に従って履修してください。					
テキスト		特になし					
—							
—							
参考文献		幼稚園教育要領（平成29年告示） 保育所保育指針（平成29年告示） 幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示） その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配付します。					

科 目 名		保育実践入門		副題		子ども理解とフィールドワーク	
担 当 者		横尾 暁子					
開講期		通年	単位数	1	配当年次	1	
授業の概要		「保育」とは、一人ひとりの子どもの育ちを支え、援助していく営みであり、そこには、それぞれの子どもの内面を捉え、その子どもにとって必要な援助を探ることのできる「保育者のまなざし」が求められます。そのため、本授業では、実際の保育実践の場における演習を中心に、子どもと出会う経験を通して得た自分なりの「気づき」を他者と共有することで、子どもや保育の持つ魅力や奥深さに触れていくことを期待しています。また、子どもとかかわる経験を重ねながら、一人ひとりの子どもの行為の持っている「意味」を探り、自分のかかわりを振り返るという「保育のプロセス」を体験していきます。					
授業のねらい・到達目標		・「田園調布学園大学みらいこども園」における演習を通して、保育実践の場に自ら参加し、子どもとかかわる経験を重ね、自らの気づきや具体的な事例を基にグループカンファレンスを行う中で、子どもへの理解を深め、多角的に考察できるようになる。また、自らのかかわりを振り返り、反省的に考察できるようになる。 ・今後の学外実習に向けて、保育実践の場において求められる基本的な姿勢や心構えについて知り、そのことの意味を理解できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-1(1),A-5(1)(2)(3),C-1(1)(2),C-2(3)(4),D-1(1)(2)(3)】					
授業の方法・授業計画							
1	オリエンテーション【合同授業】				16	学外演習②参加～個々の子どもとのかかわりを通して学ぶ～	
2	学外演習①事前指導【合同授業】				17	学外演習②参加～背景から子どもを理解する姿勢を学ぶ～	
3	学外演習①参加～子どもの姿、保育者の姿から学ぶ～				18	学外演習②事後指導（Ⅰ．具体的事例を基にしたグループカンファレンス）	
4	学外演習①参加～環境から学ぶ～				19	学外演習②事後指導（Ⅱ．体験を通して探る「遊び」の意義）	
5	学外演習①事後指導（子どもとの出会いから生まれた気づきの共有化）				20	実践に生きる記録とは～エピソード記録の書き方と留意点～	
6	「子ども理解」について～子どもの行為の「意味」を探る～				21	実践に生きる記録の探究～各自のエピソード記録の問い直し～	
7	子どもへのかかわりを振り返る～子どもにとっての「意味」を探る～／記録とカンファレンスの意義／学外演習②事前指導				22	外部講師による講演【合同授業】	
8					23	まとめ	
9					24		
10					25		
11					26		
12					27		
13					28		
14					29		
15					30		
期末	試験実施なし				期末	試験実施なし	
※授業は全体で行うものとグループ単位で行うものがあります。 ※「学外演習」では、グループ単位で「田園調布学園大学みらいこども園」に赴き、日常の保育実践への参加を通して、子どもとかかわる演習を行います。演習は規定の時間割以外の曜日・時限に設定されることもあるため注意が必要です。 ※「学外演習」後に提出する課題は、その後の授業内において共有し、グループカンファレンスをする際に活用されるため、期限を守って提出することが求められます。							
評価方法及び評価基準		授業及び演習への参加態度、課題の提出状況などを総合的に評価します。					
事前・事後学習の内容		授業での指示に従い、学外演習に対する事前学習・事前準備を確実に進めることが望まれます。また、授業内容への理解を深めるために配布資料やワークシート等で復習し、学外演習の課題にも確実に取り組むことが期待されます。なお、各回の事前・事後学習については最低でも1時間程度が必要となります。					
履修上の注意		学外での演習を主とした科目であるため、初回授業において、授業履修上必要な諸注意やスケジュールの説明を行います。その指示に従って履修してください。					
テキスト		特になし					
—							
—							
参考文献		幼稚園教育要領（平成29年告示） 保育所保育指針（平成29年告示） 幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示） その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配付します。					

科 目 名	保育内容(環境I)		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼児教育において「環境を通して行う教育」という表現が通例化して用いられている。この表現には保育者の願いや意図を環境を通して実現するという意味合いも込められているが、保育における環境は第一義的には子ども自身によって経験され、意味を与えられるものであると言える。保育者の環境構成に込める教育的意図や価値も子どもにとっての環境の意味を踏まえて初めて意味をもつ。 そこで、本授業においても子どもの側から環境の意味を考えることが主たる方針となる。子どもがそれをいかに経験するかという観点から実践事例や文献の検討を通して保育における環境の問題について考えていく。				
授業のねらい・到達目標	・ 保育における環境を子どもがいかにそれを経験するかという視点から考えることができるようになる。 ・ 子どもによる環境の経験を充実させるという観点から保育者のあり方を考えることができるようになる。 ・ 保育の実践事例や保育現場の環境構成の事例を通して具体的な環境構成の方法について考えることができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)、C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション/ 領域「環境」の位置づけ				
2	環境の中で生き、学ぶということ				
3	保育環境の中での子どもの経験とその評価				
4	子どもの側から環境の意味を考えるとどのようなことか(1) 人的環境としての保育者				
5	子どもの側から環境の意味を考えるとどのようなことか(2) 園が子どもの居場所となること				
6	保育理念を表現した環境構成の事例				
7	子どもと自然-生命とのかかわりの事例-				
8	砂場における子どもの遊びと学び				
9	子どもと文字、数量、図形				
10	子ども自身が創り上げる環境				
11	海外の保育環境に学ぶ				
12	環境としての文化				
13	グループ研究準備				
14	グループ研究発表前半-環境を通して行う教育とは何か-				
15	グループ研究発表後半-環境を通して行う教育とは何か-、授業のまとめ				
期末	試験実施なし				
・ グループ研究発表の内容に対しては授業の中で口頭でコメントを行う。 ・ 毎回の授業におけるワークシートは提出を課し、適宜コメントやポイントとなる記述にアンダーラインを付すなどして返却する。 ・ 中間レポート、最終レポートについては結果が評価の中で大きなウェイトを占めることから各自入念な準備が求められる。					
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、ワークシートの記入などを含む授業中の活動(45%)、グループ研究発表(25%)、学期末レポート(30%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて紹介するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。 事前学習、事後学習にそれぞれ0.5時間が目安となる。				
履修上の注意	受講者自身が考え、学び合っていくことを重視し、グループワークを毎回取り入れていく。積極的な参加を期待したい。				
テキスト	厚生労働省『平成29年告示保育所保育指針解説』				
—					
—					
参考文献	文部科学省『平成29年告示幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館 その他、授業内で適宜紹介する。				

科 目 名	保育内容(環境I)		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼児教育において「環境を通して行う教育」という表現が通例化して用いられている。この表現には保育者の願いや意図を環境を通して実現するという意味合いも込められているが、保育における環境は第一義的には子ども自身によって経験され、意味を与えられるものであると言える。保育者の環境構成に込める教育的意図や価値も子どもにとっての環境の意味を踏まえて初めて意味をもつ。 そこで、本授業においても子どもの側から環境の意味を考えることが主たる方針となる。子どもがそれをいかに経験するかという観点から実践事例や文献の検討を通して保育における環境の問題について考えていく。				
授業のねらい・到達目標	・ 保育における環境を子どもがいかにそれを経験するかという視点から考えることができるようになる。 ・ 子どもによる環境の経験を充実させるという観点から保育者のあり方を考えることができるようになる。 ・ 保育の実践事例や保育現場の環境構成の事例を通して具体的な環境構成の方法について考えることができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)、C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション/ 領域「環境」の位置づけ				
2	環境の中で生き、学ぶということ				
3	保育環境の中での子どもの経験とその評価				
4	子どもの側から環境の意味を考えるとどのようなことか(1) 人的環境としての保育者				
5	子どもの側から環境の意味を考えるとどのようなことか(2) 園が子どもの居場所となること				
6	保育理念を表現した環境構成の事例				
7	子どもと自然-生命とのかかわりの事例-				
8	砂場における子どもの遊びと学び				
9	子どもと文字、数量、図形				
10	子ども自身が創り上げる環境				
11	海外の保育環境に学ぶ				
12	環境としての文化				
13	グループ研究準備				
14	グループ研究発表前半-環境を通して行う教育とは何か-				
15	グループ研究発表後半-環境を通して行う教育とは何か-、授業のまとめ				
期末	試験実施なし				
・ グループ研究発表の内容に対しては授業の中で口頭でコメントを行う。 ・ 毎回の授業におけるワークシートは提出を課し、適宜コメントやポイントとなる記述にアンダーラインを付すなどして返却する。 ・ 中間レポート、最終レポートについては結果が評価の中で大きなウェイトを占めることから各自入念な準備が求められる。					
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、ワークシートの記入などを含む授業中の活動(45%)、グループ研究発表(25%)、学期末レポート(30%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて紹介するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。 事前学習、事後学習にそれぞれ0.5時間が目安となる。				
履修上の注意	受講者自身が考え、学び合っていくことを重視し、グループワークを毎回取り入れていく。積極的な参加を期待したい。				
テキスト	厚生労働省『平成29年告示保育所保育指針解説』				
—					
—					
参考文献	文部科学省『平成29年告示幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館 その他、授業内で適宜紹介する。				

科 目 名	保育内容(環境II)		副題		
担 当 者	福田 篤子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	保育内容(環境Ⅰ)で習得した基礎的な知識を発展させ、保育の現場で実践するための力を養っていきます。 そのために、保育内容(環境Ⅰ)を復習し、基礎的な知識の定着を図ります。その後、実践力を養うために、事例の検討、「ねらい」を達成するための「内容」を指導計画に結びつけて考えていきます。授業の最後では、実践をもとに、保育室の環境について理解を深め、自分たちで理想的な環境構成を考え形にしていきます。 授業計画は予定であり状況に応じて変更することもあります。				
授業のねらい・到達目標	1. 領域(環境)についての理解を深め、保育の現場で活用することができるようになる。 2. 発達に応じた環境や個々の探究心や好奇心を育てるための環境を適切に整えていけるようになる。 3. 領域(環境)の視点から、指導計画や指導案の考え方や具体的な展開方法を身につけ実践できるようになる。 4. 実践をもとに、省察し、保育者の意図と子どもの主体性を組み合わせた、理論的で理想的な環境を自分達で構成することができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目:A-4(2)、C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション・保育内容(環境)について				
2	保育の基本と環境・領域(環境)ねらいと内容				
3	子どもを取り巻く自然環境①(ねらいの設定と保育内容の具体的展開)				
4	子どもを取り巻く自然環境②(事例の検討)				
5	子どもを取り巻く物的環境①(環境構成について)				
6	子どもを取り巻く物的環境②(理想の保育室作り・グループワーク)				
7	子どもを取り巻く物的環境③(理想の保育室作り・発表)				
8	子どもを取り巻く文化的環境①(図形と数量)				
9	子どもを取り巻く文化的環境②(標識と文字)				
10	子どもを取り巻く社会的環境①(文化と行事について)				
11	子どもを取り巻く社会的環境②(文化と行事について・グループワーク)				
12	子どもを取り巻く社会的環境③(事例の検討)				
13	日本の風土を利用した保育実践の紹介				
14	絵本からの展開・グループワーク				
15	まとめ・発表				
期末	試験実施なし				
授業内や授業後の課題についてのフィードバックは返却時に全体に向けて講評を行います。					
評価方法及び評価基準	授業参加態度:10%、課題提出、グループワークへの参加及び発表:50%、テスト(まとめ):40%などから総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	各回の事前・事後学習に最低でも0.5時間程度は必要です。				
履修上の注意	グループワークや、ディスカッション、個別・グループ発表などを取り入れ、保育実践に必要な、「仲間との協働する力」や、「自分の意図を相手に伝える力」も身につけてもらいたいと考えています。授業では主体的に考え、協力的な態度で臨むようにしてください。				
テキスト	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2018年				
—					
—					
参考文献	内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定子ども園』フレーベル館,2018年 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館,2018年				

科 目 名	保育内容(環境II)		副題		
担 当 者	福田 篤子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	保育内容(環境Ⅰ)で習得した基礎的な知識を発展させ、保育の現場で実践するための力を養っていきます。 そのために、保育内容(環境Ⅰ)を復習し、基礎的な知識の定着を図ります。その後、実践力を養うために、事例の検討、「ねらい」を達成するための「内容」を指導計画に結びつけて考えていきます。授業の最後では、実践をもとに、保育室の環境について理解を深め、自分たちで理想的な環境構成を考え形にしていきます。 授業計画は予定であり状況に応じて変更することもあります。				
授業のねらい・到達目標	1. 領域(環境)についての理解を深め、保育の現場で活用することができるようになる。 2. 発達に応じた環境や個々の探究心や好奇心を育てるための環境を適切に整えていけるようになる。 3. 領域(環境)の視点から、指導計画や指導案の考え方や具体的な展開方法を身につけ実践できるようになる。 4. 実践をもとに、省察し、保育者の意図と子どもの主体性を組み合わせた、理論的で理想的な環境を自分達で構成することができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目:A-4(2)、C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション・保育内容(環境)について				
2	保育の基本と環境・領域(環境)ねらいと内容				
3	子どもを取り巻く自然環境①(ねらいの設定と保育内容の具体的展開)				
4	子どもを取り巻く自然環境②(事例の検討)				
5	子どもを取り巻く物的環境①(環境構成について)				
6	子どもを取り巻く物的環境②(理想の保育室作り・グループワーク)				
7	子どもを取り巻く物的環境③(理想の保育室作り・発表)				
8	子どもを取り巻く文化的環境①(図形と数量)				
9	子どもを取り巻く文化的環境②(標識と文字)				
10	子どもを取り巻く社会的環境①(文化と行事について)				
11	子どもを取り巻く社会的環境②(文化と行事について・グループワーク)				
12	子どもを取り巻く社会的環境③(事例の検討)				
13	日本の風土を利用した保育実践の紹介				
14	絵本からの展開・グループワーク				
15	まとめ・発表				
期末	試験実施なし				
授業内や授業後の課題についてのフィードバックは返却時に全体に向けて講評を行います。					
評価方法及び評価基準	授業参加態度:10%、課題提出、グループワークへの参加及び発表:50%、テスト(まとめ):40%などから総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	各回の事前・事後学習に最低でも0.5時間程度は必要です。				
履修上の注意	グループワークや、ディスカッション、個別・グループ発表などを取り入れ、保育実践に必要な、「仲間との協働する力」や、「自分の意図を相手に伝える力」も身につけてもらいたいと考えています。授業では主体的に考え、協力的な態度で臨むようにしてください。				
テキスト	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2018年				
—					
—					
参考文献	内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定子ども園』フレーベル館,2018年 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館,2018年				

科 目 名	保育内容(健康I)		副題		
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	子どもの生活と遊びを基盤とした、保育における健康の考え方と実際について、領域特性と他領域との関連性を考慮に入れつつ学ぶ。 さらに、乳幼児期の心身の育ちに関する理解を基礎とし、この期の 具体的な身体活動を伴う子どもの生活や遊びとその援助について、相互の関連性を考慮しながら、子どもの育ちを支える保育者のあり方を考えていく。				
授業のねらい ・到達目標	・乳幼児期の心身の発達に即した、具体的な遊びや生活の援助について考察できる。 ・保育者として安全に配慮しつつ、子どもと関わることの視点と方法に繋がる実践について考えることができる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-3(1)～(3) C-2(3)(4) D-2(1)(2)(3)(5)(6),D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	心身の健康に関する領域・健康の意味 グループワーク、プレゼンテーション				
2	保育内容健康と他領域との関連性、総合性について				
3	子ども理解、保育者の役割と領域健康				
4	発達のとらえ方・子どもにとっての心身の発達				
5	身体および運動の発達の基礎知識				
6	基本的生活習慣の形成と獲得と安全能力の育成				
7	子どもの安全教育と危険(リスクとハザード)ー安全意識、安全態度を育むことの重要性				
8	防災・防犯と危機管理ー「備えること」「守ること」の重要性				
9	安全指導の計画立案 グループワーク、ディスカッション				
10	安全指導の教材研究				
11	運動遊びの計画立案 グループワーク、ディスカッション				
12	運動遊びの教材研究				
13	子どもと健康と食生活				
14	指導計画(安全指導・運動遊び・食育)の作成と検討 グループワーク、プレゼンテーション				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
講義ノートを用意し、自主的にノート作成をすること。自分なりの書き方を確立し、使いやすいノートを作り上げることが望ましい。					
評価方法 及び評価基準	学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して判断する。 授業態度及び授業中の活動(40%)、課題(30%)、レポート(30%)として評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、事前学習として、テキストの該当部分を熟読の上授業に臨むこと。授業後は、参考文献等を用いて自分のノートをまとめること。事前・事後学習にそれぞれ0.5時間程度を必要とする				
履修上の注意	授業は、講義および演習形式で行う。このため、主体的に参加し、自ら考える姿勢での出席が望ましい。 また、子どもの姿についての検討にあつては、映像資料を参考にすることがある。				
テキスト	[改訂新版]『保育内容「健康」～生きる力を育む健やかな心とからだ～』 宮下恭子編著、大学図書出版				978-4-907166-68-7
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2018年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館, 2018年) その他、授業時に紹介する。				

科 目 名	保育内容(健康I)		副題		
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	子どもの生活と遊びを基盤とした、保育における健康の考え方と実際について、領域特性と他領域との関連性を考慮に入れつつ学ぶ。 さらに、乳幼児期の心身の育ちに関する理解を基礎とし、この期の 具体的な身体活動を伴う子どもの生活や遊びとその援助について、相互の関連性を考慮しながら、子どもの育ちを支える保育者のあり方を考えていく。				
授業のねらい ・到達目標	・乳幼児期の心身の発達に即した、具体的な遊びや生活の援助について考察できる。 ・保育者として安全に配慮しつつ、子どもと関わることの視点と方法に繋がる実践について考えることができる。 【「履修ファイル」の対応項目：A-3(1)～(3) C-2(3)(4) D-2(1)(2)(3)(5)(6),D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	心身の健康に関する領域・健康の意味 グループワーク、プレゼンテーション				
2	保育内容健康と他領域との関連性、総合性について				
3	子ども理解、保育者の役割と領域健康				
4	発達のとらえ方・子どもにとっての心身の発達				
5	身体および運動の発達の基礎知識				
6	基本的生活習慣の形成と獲得と安全能力の育成				
7	子どもの安全教育と危険(リスクとハザード)ー安全意識、安全態度を育むことの重要性				
8	防災・防犯と危機管理ー「備えること」「守ること」の重要性				
9	安全指導の計画立案 グループワーク、ディスカッション				
10	安全指導の教材研究				
11	運動遊びの計画立案 グループワーク、ディスカッション				
12	運動遊びの教材研究				
13	子どもと健康と食生活				
14	指導計画(安全指導・運動遊び・食育)の作成と検討 グループワーク、プレゼンテーション				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
講義ノートを用意し、自主的にノート作成をすること。自分なりの書き方を確立し、使いやすいノートを作り上げることが望ましい。					
評価方法 及び評価基準	学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して判断する。 授業態度及び授業中の活動(40%)、課題(30%)、レポート(30%)として評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、事前学習として、テキストの該当部分を熟読の上授業に臨むこと。授業後は、参考文献等を用いて自分のノートをまとめること。事前・事後学習にそれぞれ0.5時間程度を必要とする				
履修上の注意	授業は、講義および演習形式で行う。このため、主体的に参加し、自ら考える姿勢での出席が望ましい。 また、子どもの姿についての検討にあつては、映像資料を参考にすることがある。				
テキスト	[改訂新版]『保育内容「健康」～生きる力を育む健やかな心とからだ～』 宮下恭子編著、大学図書出版				978-4-907166-68-7
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2018年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2018年) その他、授業時に紹介する。				

科 目 名	保育内容(健康Ⅱ)		副題			
担 当 者	有川 いずみ					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	子どもの心と身体の健康を守り育てるために必要な活動についての理解を深める。 それらを保育活動の中で、安全に活用するための実践方法や知識を学ぶ。 指導計画や指導案を作成し、実践、応用展開できるようにする。					
授業のねらい・到達目標	1. 保育における、健康指導と健康管理の役割と実践方法を学ぶ。 2・子どもの心と身体の健康を維持・促進するために、保育目標や発育・発達に応じた指導案を作成する。 3. 作成した指導案に基づいて、適切に活動を行うことができるようにする。 4. 模擬保育で保育者と子どもそれぞれの立場に立ち、安全の確認、子どもの興味や関心を引き出す働きかけ、子ども同士の学び合いの工夫など、指導方法を検討し理解する。 5. 保育環境や保育教材を、子どもの状況に応じて柔軟に対応し、発展的に応用展開できる力をつける。 6. 保育者として、保育活動を行う上での自分の特性、特技を発見する。 【「履修ファイル」の対応項目: A-3(1)～(3), C-2(4),D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション 保育者としての健康管理と、子どもの心と身体の健康指導					
2	エクササイズ 生活の中での健康指導					
3	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(0～2歳児)					
4	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(3～4歳児)					
5	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(5～6歳児)					
6	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(まとめ)					
7	エクササイズ発表(健康につながる身体の動かし方)					
8	ビデオによる子どもの活動研究					
9	グループで教材・指導案作り					
10	模擬指導Ⅰ 指導と援助方法の検討 (身体をたくさん動かせる遊び)					
11	模擬指導Ⅱ 指導と援助方法の検討 (リズムに乗って一緒に遊ぼう)					
12	模擬指導Ⅲ 指導と援助方法の検討 (リング・ボールを使った遊び)					
13	模擬指導Ⅳ 指導援助方法の検討 (なわ・その他体育教材を使った遊び)					
14	模擬指導Ⅴ 指導と援助方法の検討 (しんぶんしなど生活教材を使った遊び)					
15	まとめ					
期末	無し					
第2～6回(発育・発達からみた健康指導)では、授業の課題をグループで実践し、グループの実践内容の検討、今後の課題、他のグループへの感想を指定用紙に書いて提出する。 第10～14回(模擬指導)では、担当グループで指導案を作成し、模擬保育後その指導と援助方法を全員で検討し、指定用紙に反省、感想、改善点を書いて提出する。 授業内で発表、提出されたものについては、授業において適宜フィードバックし、課題のポイントについて説明する。						
評価方法及び評価基準	学習意欲・受講態度・毎回の授業の理解度(35%) 模擬指導・教材作成(35%)、実技試験(30%)として評価する。					
事前・事後学習の内容	事前に示した課題について、下調べをする(1時間程度)。 授業で取り組んだ課題について、工夫した点、改善する点などをまとめる(1時間程度)。					
履修上の注意	活動にふさわしい服装(体育着・体育館履きなど)、及び筆記用具など指示に従ってください。 必要に応じて資料を配布するので、ファイリング保存すること。					
テキスト	特になし					
—						
—						
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2015年)					

科 目 名	保育内容(健康Ⅱ)		副題			
担 当 者	有川 いずみ					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	子どもの心と身体の健康を守り育てるために必要な活動についての理解を深める。 それらを保育活動の中で、安全に活用するための実践方法や知識を学ぶ。 指導計画や指導案を作成し、実践、応用展開できるようにする。					
授業のねらい・到達目標	1. 保育における、健康指導と健康管理の役割と実践方法を学ぶ。 2・子どもの心と身体の健康を維持・促進するために、保育目標や発育・発達に応じた指導案を作成する。 3. 作成した指導案に基づいて、適切に活動を行うことができるようにする。 4. 模擬保育で保育者と子どもそれぞれの立場に立ち、安全の確認、子どもの興味や関心を引き出す働きかけ、子ども同士の学び合いの工夫など、指導方法を検討し理解する。 5. 保育環境や保育教材を、子どもの状況に応じて柔軟に対応し、発展的に応用展開できる力をつける。 6. 保育者として、保育活動を行う上での自分の特性、特技を発見する。 【「履修ファイル」の対応項目: A-3(1)～(3), C-2(4),D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション 保育者としての健康管理と、子どもの心と身体の健康指導					
2	エクササイズ 生活の中での健康指導					
3	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(0～2歳児)					
4	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(3～4歳児)					
5	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(5～6歳児)					
6	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(まとめ)					
7	エクササイズ発表(健康につながる身体の動かし方)					
8	ビデオによる子どもの活動研究					
9	グループで教材・指導案作り					
10	模擬指導Ⅰ 指導と援助方法の検討 (身体をたくさん動かせる遊び)					
11	模擬指導Ⅱ 指導と援助方法の検討 (リズムに乗って一緒に遊ぼう)					
12	模擬指導Ⅲ 指導と援助方法の検討 (リング・ボールを使った遊び)					
13	模擬指導Ⅳ 指導援助方法の検討 (なわ・その他体育教材を使った遊び)					
14	模擬指導Ⅴ 指導と援助方法の検討 (しんぶんしなど生活教材を使った遊び)					
15	まとめ					
期末	無し					
第2～6回(発育・発達からみた健康指導)では、授業の課題をグループで実践し、グループの実践内容の検討、今後の課題、他のグループへの感想を指定用紙に書いて提出する。 第10～14回(模擬指導)では、担当グループで指導案を作成し、模擬保育後その指導と援助方法を全員で検討し、指定用紙に反省、感想、改善点を書いて提出する。 授業内で発表、提出されたものについては、授業において適宜フィードバックし、課題のポイントについて説明する。						
評価方法及び評価基準	学習意欲・受講態度・毎回の授業の理解度(35%) 模擬指導・教材作成(35%)、実技試験(30%)として評価する。					
事前・事後学習の内容	事前に示した課題について、下調べをする(1時間程度)。 授業で取り組んだ課題について、工夫した点、改善する点などをまとめる(1時間程度)。					
履修上の注意	活動にふさわしい服装(体育着・体育館履きなど)、及び筆記用具など指示に従ってください。 必要に応じて資料を配布するので、ファイリング保存すること。					
テキスト	特になし					
—						
—						
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2015年)					

科 目 名	保育内容(言葉I)		副題		
担 当 者	内藤 知美				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	子どもの総合的発達における言葉の領域について、0歳から就学前までの子どもの言葉の発達や学びの過程をとらえ、言葉での関わりのもちにくい子どもも含めて、子どもの生活・遊びと言語の関わりや保育者の援助のあり方について、映像資料や事例等を通して具体的に検討する。また言葉を育てる指導計画を作成し、環境を構成する方法を学ぶとともに、多様な言葉の獲得を促す絵本・紙芝居などの児童文化財の活用について理解を深める。				
授業のねらい・到達目標	本授業では、幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「言葉」のねらいと内容を理解する。また子どもの言葉の発達や学びの過程を理解するとともに、言葉での関わりのもちにくい子どもを含めて、保育者の言葉掛けや言葉を育てる援助のあり方を具体的な場面を想定しつつ学ぶ。さらに言葉を育てる保育を、児童文化財等を活用しつつ構想・計画し、模擬保育を通して実践力を養うことを目指している。 【「履修ファイル」の対応項目:C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	「領域 言葉」のねらいと内容				
2	言葉の発達と学びの過程(0歳期):信頼関係と非言語コミュニケーション				
3	言葉の発達と学びの過程(1歳期):1語・2語発話の時期の関わり				
4	言葉の発達と学びの過程(2歳・3歳期):生活や人間関係と言語				
5	言葉の発達と学びの過程(4歳・5歳期):イメージの共有・遊びを通した言葉				
6	就学前と移行期の言葉:言葉による伝え合いや文字への関心				
7	保育の中の言葉(1)話すことと聞くこと				
8	保育の中の言葉(2)言葉の美しさ、多様な言語への関心				
9	事例検討(1)共感的・受容的な言葉かけ				
10	事例検討(2)思考を育てる言葉かけ				
11	言葉での関わりのもちにくい子どもと援助(1)障害児				
12	言葉での関わりのもちにくい子どもと援助(2)外国籍の子ども				
13	指導案の作成と模擬保育(1)児童文化財を活用して				
14	指導案の作成と模擬保育(2)児童文化財を活用して				
15	模擬保育の振り返りとまとめ				
期末	試験実施なし				
ワークシートについては、指定する時期に提出すること。返却したワークシートは各自で保管し、自主的な学びに役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末レポート(50%)、小レポート(50%)				
事前・事後学習の内容	・事前学習については授業計画を確認し、授業内容の下調べ等を行うこと。(事前学習は0.5時間が目安) ・事後学習についてはワークシート等を用いて授業内容を振り返ること。(事後学習は0.5時間が目安)				
履修上の注意	授業中に配布するワークシートを整理、活用して、各自が主体的に学びを深めること。				
テキスト	『コンパス 保育内容 言葉』内藤知美・新井美保子編著(建帛社)				978-4-7679-5050-1
—					
—					
参考文献	『保育所保育指針(29年告示)』『幼稚園教育要領(平成29年告示)』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)』				

科 目 名	保育内容(言葉I)		副題		
担 当 者	内藤 知美				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	子どもの総合的発達における言葉の領域について、0歳から就学前までの子どもの言葉の発達や学びの過程をとらえ、言葉での関わりのもちにくい子どもも含めて、子どもの生活・遊びと言語の関わりや保育者の援助のあり方について、映像資料や事例等を通して具体的に検討する。また言葉を育てる指導計画を作成し、環境を構成する方法を学ぶとともに、多様な言葉の獲得を促す絵本・紙芝居などの児童文化財の活用について理解を深める。				
授業のねらい・到達目標	本授業では、幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「言葉」のねらいと内容を理解する。また子どもの言葉の発達や学びの過程を理解するとともに、言葉での関わりのもちにくい子どもを含めて、保育者の言葉掛けや言葉を育てる援助のあり方を具体的な場面を想定しつつ学ぶ。さらに言葉を育てる保育を、児童文化財等を活用しつつ構想・計画し、模擬保育を通して実践力を養うことを目指している。 【「履修ファイル」の対応項目:C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	「領域 言葉」のねらいと内容				
2	言葉の発達と学びの過程(0歳期):信頼関係と非言語コミュニケーション				
3	言葉の発達と学びの過程(1歳期):1語・2語発話の時期の関わり				
4	言葉の発達と学びの過程(2歳・3歳期):生活や人間関係と言語				
5	言葉の発達と学びの過程(4歳・5歳期):イメージの共有・遊びを通した言葉				
6	就学前と移行期の言葉:言葉による伝え合いや文字への関心				
7	保育の中の言葉(1)話すことと聞くこと				
8	保育の中の言葉(2)言葉の美しさ、多様な言語への関心				
9	事例検討(1)共感的・受容的な言葉かけ				
10	事例検討(2)思考を育てる言葉かけ				
11	言葉での関わりのもちにくい子どもと援助(1)障害児				
12	言葉での関わりのもちにくい子どもと援助(2)外国籍の子ども				
13	指導案の作成と模擬保育(1)児童文化財を活用して				
14	指導案の作成と模擬保育(2)児童文化財を活用して				
15	模擬保育の振り返りとまとめ				
期末	試験実施なし				
ワークシートについては、指定する時期に提出すること。返却したワークシートは各自で保管し、自主的な学びに役立てること。					
評価方法及び評価基準	期末レポート(50%)、小レポート(50%)				
事前・事後学習の内容	・事前学習については授業計画を確認し、授業内容の下調べ等を行うこと。(事前学習は0.5時間が目安) ・事後学習についてはワークシート等を用いて授業内容を振り返ること。(事後学習は0.5時間が目安)				
履修上の注意	授業中に配布するワークシートを整理、活用して、各自が主体的に学びを深めること。				
テキスト	『コンパス 保育内容 言葉』内藤知美・新井美保子編著(建帛社)				978-4-7679-5050-1
—					
—					
参考文献	『保育所保育指針(29年告示)』『幼稚園教育要領(平成29年告示)』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)』				

科 目 名	保育内容(人間関係I)		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼稚園教育要領や保育所保育指針における保育内容の基本的な捉え方を踏まえつつ、領域「人間関係」の意義や内容について学ぶ。その上で、多様な実践事例やビデオなどを通して、子どもたちが遊びや生活のなかで、人とのかかわりを広げ深めていく過程について理解を深める。また、個々の子どもの育ちを支えていく保育者の視点や援助について、グループワークなどを通して検討し、学びを深めていく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、以下の3点である。 ①保育における領域「人間関係」の意義と位置づけについて理解できるようになる。 ②子どもたちのかかわりや世界の広がりや深まりを読み解くための基本的な視点を獲得するとともに、それらの育ちを支える保育者の援助の在り方について考えることができるようになる。 ③子どもの育ちを支える保護者や地域社会、同僚との人間関係のあり方や保育を構想することについて考えることができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：B-1(4)(5)(6)(7),B-3(1)(2)(3)(4)(5),C-2(4),D-2(1)(2)(3)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育内容の捉え方と領域「人間関係」				
3	子どもを取り巻く人々と「人間関係」にかかわる現代的課題				
4	人とのかかわりを育てる保育実践(1)～乳児期を中心に～				
5	人とのかかわりを育てる保育実践(2)～幼児期を中心に～				
6	子どもたちの関係性を捉える保育者のまなざし(1)～自立を支える「心の拠り所」～				
7	子どもたちの関係性を捉える保育者のまなざし(2)～いざこざ・トラブル・葛藤～				
8	子どもたちの関係性を捉える保育者のまなざし(3)～イメージの共有・協働する経験～				
9	人とのかかわりを育てる保育者の役割(1)～保育における遊びと学び～				
10	人とのかかわりを育てる保育者の役割(2)～遊びを支える保育者の援助～				
11	「個」と「集団」の育ちを支える保育者の理解と援助～保育における両義性～				
12	保護者支援と保育者の役割～子どもの育ちを支える保護者との関係～				
13	地域、関係機関、小学校とのつながりと子どもの育ち				
14	子どものかかわりの世界を支える保育実践～省察を生み出す対話的關係、ホリスティックな保育実践をめざして～				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
授業内で提出した提出物、コメントシートは授業内で返却し、適宜フィードバックする。					
評価方法及び評価基準	・コメントシート(20%)、提出物(20%)、授業への参加度(20%)、授業内に実施する小テスト(40%)				
事前・事後学習の内容	事前学習については、授業計画の内容を確認し、自分なりの意見や疑問を持って授業に参加すること。また、授業後は十分な復習を行い、各自の理解を深めること。(事前学習には1.5時間、事後学習には2.5時間が目安となる。)				
履修上の注意	特になし				
テキスト					
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布します。				

科 目 名	保育内容(人間関係I)		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼稚園教育要領や保育所保育指針における保育内容の基本的な捉え方を踏まえつつ、領域「人間関係」の意義や内容について学ぶ。その上で、多様な実践事例やビデオなどを通して、子どもたちが遊びや生活のなかで、人とかかわりを広げ深めていく過程について理解を深める。また、個々の子どもの育ちを支えていく保育者の視点や援助について、グループワークなどを通して検討し、学びを深めていく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、以下の3点である。 ①保育における領域「人間関係」の意義と位置づけについて理解できるようになる。 ②子どもたちのかかわりや世界の広がりや深まりを読み解くための基本的な視点を獲得するとともに、それらの育ちを支える保育者の援助の在り方について考えることができるようになる。 ③子どもの育ちを支える保護者や地域社会、同僚との人間関係のあり方や保育を構想することについて考えることができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：B-1(4)(5)(6)(7),B-3(1)(2)(3)(4)(5),C-2(4),D-2(1)(2)(3)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育内容の捉え方と領域「人間関係」				
3	子どもを取り巻く人々と「人間関係」にかかわる現代的課題				
4	人とかかわりを育てる保育実践(1)～乳児期を中心に～				
5	人とかかわりを育てる保育実践(2)～幼児期を中心に～				
6	子どもたちの関係性を捉える保育者のまなざし(1)～自立を支える「心の拠り所」～				
7	子どもたちの関係性を捉える保育者のまなざし(2)～いざこざ・トラブル・葛藤～				
8	子どもたちの関係性を捉える保育者のまなざし(3)～イメージの共有・協働する経験～				
9	人とかかわりを育てる保育者の役割(1)～保育における遊びと学び～				
10	人とかかわりを育てる保育者の役割(2)～遊びを支える保育者の援助～				
11	「個」と「集団」の育ちを支える保育者の理解と援助～保育における両義性～				
12	保護者支援と保育者の役割～子どもの育ちを支える保護者との関係～				
13	地域、関係機関、小学校とのつながりと子どもの育ち				
14	子どものかかわりの世界を支える保育実践～省察を生み出す対話的關係、ホリスティックな保育実践をめざして～				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
授業内で提出した提出物、コメントシートは授業内で返却し、適宜フィードバックする。					
評価方法及び評価基準	・コメントシート(20%)、提出物(20%)、授業への参加度(20%)、授業内に実施する小テスト(40%)				
事前・事後学習の内容	事前学習については、授業計画の内容を確認し、自分なりの意見や疑問を持って授業に参加すること。また、授業後は十分な復習を行い、各自の理解を深めること。(事前学習には1.5時間、事後学習には2.5時間が目安となる。)				
履修上の注意	特になし				
テキスト					
－					
－					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布します。				

科 目 名	保育内容(人間関係Ⅱ)		副題			
担 当 者	清水 道代					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	乳幼児期における人とのかかわりが育つための保育者の援助や保育の在り方について、子どもを取り巻く環境の変化も視野に入れながら実践事例を通して理解を深めていく。事例検討では、グループディスカッションやロールプレイング等を行い、他領域との関係や保育者、保護者、地域の人々とのかかわりの重要性など総合的に学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは以下の3点である。 ①子どもの視点から人とのかかわりを捉えながら、生活や遊びを総合的に支えていける保育者の役割について理解できるようになる。 ②乳幼児が人とかわる力を身に着けていく過程や、「個」と「集団」の育ちを支える保育者の役割や援助について理解できるようになる。 ③子どものかかわりを育てる保護者や地域社会との関係や援助、具体的な保育を構想する保育者の専門性について理解できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目: B-1(4)～(7),B-3(1)～(5),C-2(4) D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション					
2	人と人の関係					
3	幼児教育の基本と領域「人間関係」					
4	子どもを取り巻く人々と人間関係					
5	乳児保育における人間関係					
6	子どもの遊びと人間関係①～遊びが支える人間関係～					
7	子どもの遊びと人間関係②～からだでつながる人間関係～					
8	子どもの遊びと人間関係③～遊び込む時間と場所と人間関係～					
9	子どものいざこざと人間関係					
10	子どものさまざまな感情と人間関係					
11	他への賞賛と人間関係					
12	個性的な子どもと人間関係～「個」と「集団」の育ち、健全な集団関係と子どもの育ち～					
13	領域「人間関係」からみた小学校との連携					
14	これからの幼児教育の展望と課題～領域「人間関係」の視点から～					
15	まとめ					
期末	試験実施なし					
授業内で提出した提出物、コメントシートは授業内で返却し、適宜フィードバックする。						
評価方法及び評価基準	・コメントシート(20%)、課題(20%)、授業への参加度等(20%)、授業内に実施する小テスト(40%)					
事前・事後学習の内容	・事前学習では、授業計画の内容を確認し、テキストの下調べをするなど自分なりの意見や疑問をもって参加すること。(事前学習については、毎回0.5時間が目安となる) ・事後学習では、授業後の資料や記録を振り返り理解を深めるようにすること。(事後学習については、毎回0.5時間が目安となる)					
履修上の注意	グループワークや実践的な演習など、積極的に参加し学びを深めること。					
テキスト	コンパス「保育内容人間関係」建帛社 文部科学省『幼稚園教育要領解説』 内閣府 文部科学省 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 厚生労働省『平成29年告示保育所保育指針解説』				978-4-7679-5061-7 C3037	
—						
—						
参考文献	授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布する。					

科 目 名	保育内容(人間関係Ⅱ)		副題			
担 当 者	清水 道代					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	乳幼児期における人とかかわりが育つための保育者の援助や保育の在り方について、子どもを取り巻く環境の変化も視野に入れながら実践事例を通して理解を深めていく。事例検討では、グループディスカッションやロールプレイング等を行い、他領域との関係や保育者、保護者、地域の人々とかかわりの重要性など総合的に学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは以下の3点である。 ①子どもの視点から人とかかわりを捉えながら、生活や遊びを総合的に支えていける保育者の役割について理解できるようになる。 ②乳幼児が人とかかわる力を身に着けていく過程や、「個」と「集団」の育ちを支える保育者の役割や援助について理解できるようになる。 ③子どものかかわりを育てる保護者や地域社会との関係や援助、具体的な保育を構想する保育者の専門性について理解できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目: B-1(4)～(7),B-3(1)～(5),C-2(4) D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション					
2	人と人の関係					
3	幼児教育の基本と領域「人間関係」					
4	子どもを取り巻く人々と人間関係					
5	乳児保育における人間関係					
6	子どもの遊びと人間関係①～遊びが支える人間関係～					
7	子どもの遊びと人間関係②～からだでつながる人間関係～					
8	子どもの遊びと人間関係③～遊び込む時間と場所と人間関係～					
9	子どものいざこざと人間関係					
10	子どものさまざまな感情と人間関係					
11	他への賞賛と人間関係					
12	個性的な子どもと人間関係～「個」と「集団」の育ち、健全な集団関係と子どもの育ち～					
13	領域「人間関係」からみた小学校との連携					
14	これからの幼児教育の展望と課題～領域「人間関係」の視点から～					
15	まとめ					
期末	試験実施なし					
授業内で提出した提出物、コメントシートは授業内で返却し、適宜フィードバックする。						
評価方法及び評価基準	・コメントシート(20%)、課題(20%)、授業への参加度等(20%)、授業内に実施する小テスト(40%)					
事前・事後学習の内容	・事前学習では、授業計画の内容を確認し、テキストの下調べをするなど自分なりの意見や疑問をもって参加すること。(事前学習については、毎回0.5時間が目安となる) ・事後学習では、授業後の資料や記録を振り返り理解を深めるようにすること。(事後学習については、毎回0.5時間が目安となる)					
履修上の注意	グループワークや実践的な演習など、積極的に参加し学びを深めること。					
テキスト	コンパス「保育内容人間関係」建帛社 文部科学省『幼稚園教育要領解説』 内閣府 文部科学省 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 厚生労働省『平成29年告示保育所保育指針解説』				978-4-7679-5061-7 C3037	
—						
—						
参考文献	授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布する。					

科 目 名	保育内容(表現I)		副題			
担 当 者	安村 清美					
開講期	半期	単位数	1		配当年次	2
授業の概要	子どもの表現にかかわる講義や実践記録などを通して、もの、音、動き、言葉による総合的な表現の育ちを理解する。また、実践例などを通して、子どもにとっての表現とは何かについて考え学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	1.乳幼児期のあそびや生活に見られる総合的な表現について、理論とその実際から子どもにとっての表現の意味について考察することができる。 2. 乳幼児期の、表現とコミュニケーションの特徴と発達特性について理解すると同時に、これを感じ得る感性をもつ。 3. これらを基礎に、保育者として子どものさまざまな表現に対して必要な援助について考え計画・実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(1)(2)(3)、D-3(1)(2)(4)(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	表現とは何か。子どもにとっての“表れ”と“表し”					
2	保育内容・表現のねらいと内容					
3	保育内容・表現と他領域の関連性					
4	保育内容・表現の歴史的変遷と問題点					
5	表現の育ち① 日常生活と表現 グループワーク、ディスカッション					
6	表現の育ち② 表れと表し グループワーク、ディスカッション					
7	表現の育ち③ イメージ・想像から創造へ					
8	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える①題材と個性 ディスカッション、プレゼンテーション					
9	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える② 題材と集団性 ディスカッション、プレゼンテーション					
10	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える③ 表現の方法と内容					
11	総合的な表現とコミュニケーション					
12	表現を育てる保育者の役割					
13	指導案作成と検討、実践①子どもの姿に即した表現にかかわる部分指導案 グループワーク					
14	指導案作成と検討、実践② 模擬保育と振り返り プレゼンテーション					
15	まとめ					
期末	試験実施なし					
授業に対するリアクションペーパーや、課題レポートなどの提出物については個別に確認し、事後の授業内において返却する。その際、共有すべき重要なポイントや今後の課題となる点については、授業内で解説をする。						
評価方法及び評価基準	学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して判断する。 授業における小テスト(40%)、課題レポート(30%)、授業態度及び授業中の活動(30%)として評価する。					
事前・事後学習の内容	授業時に配布する資料を参考に、教科書の指定ページを事前に熟読すること。(60分程度を目安とする) 事後は、資料を読み返し、授業内容について重要事項をまとめや課題の作成をする。(60分程度を目安とする)					
履修上の注意	授業は講義および演習形式で行う。クラスやグループでの討議などに主体的に参加する姿勢を望む。 子どもの表現についての感覚的な把握のため、具体的な子どもの表現について検討するにあたっては、映像資料を使用する。					
テキスト	『保育内容 表現』入江・榎沢編著 建帛社					978-4-7679-3204-0
—						
—						
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館) 、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館) その他、授業時に紹介する。					

科 目 名	保育内容(表現I)		副題		
担 当 者	安村 清美				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	子どもの表現にかかわる講義や実践記録などを通して、もの、音、動き、言葉による総合的な表現の育ちを理解する。また、実践例などを通して、子どもにとっての表現とは何かについて考え学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	1.乳幼児期のあそびや生活に見られる総合的な表現について、理論とその実際から子どもにとっての表現の意味について考察することができる。 2. 乳幼児期の、表現とコミュニケーションの特徴と発達特性について理解すると同時に、これを感じ得る感性をもつ。 3. これらを基礎に、保育者として子どものさまざま表現に対して必要な援助について考え計画・実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(1)(2)(3)、D-3(1)(2)(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	表現とは何か。子どもにとっての“表れ”と“表し”				
2	保育内容・表現のねらいと内容				
3	保育内容・表現と他領域の関連性				
4	保育内容・表現の歴史的変遷と問題点				
5	表現の育ち① 日常生活と表現 グループワーク、ディスカッション				
6	表現の育ち② 表れと表し グループワーク、ディスカッション				
7	表現の育ち③ イメージ・想像から創造へ				
8	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える①題材と個性 ディスカッション、プレゼンテーション				
9	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える② 題材と集団性 ディスカッション、プレゼンテーション				
10	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える③ 表現の方法と内容				
11	総合的な表現とコミュニケーション				
12	表現を育てる保育者の役割				
13	指導案作成と検討、実践①子どもの姿に即した表現にかかわる部分指導案 グループワーク				
14	指導案作成と検討、実践② 模擬保育と振り返り プレゼンテーション				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
授業に対するリアクションペーパーや、課題レポートなどの提出物については個別に確認し、事後の授業内において返却する。その際、共有すべき重要なポイントや今後の課題となる点については、授業内で解説をする。					
評価方法及び評価基準	学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して判断する。 授業における小テスト(40%)、課題レポート(30%)、授業態度及び授業中の活動(30%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	授業時に配布する資料を参考に、教科書の指定ページを事前に熟読すること。(60分程度を目安とする) 事後は、資料を読み返し、授業内容について重要事項をまとめや課題の作成をする。(60分程度を目安とする)				
履修上の注意	授業は講義および演習形式で行う。クラスやグループでの討議などに主体的に参加する姿勢を望む。 子どもの表現についての感覚的な把握のため、具体的な子どもの表現について検討するにあたっては、映像資料を使用する。				
テキスト	『保育内容 表現』入江・榎沢編著 建帛社				978-4-7679-3204-0
－					
－					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館) その他、授業時に紹介する。				

科 目 名	保育内容(表現II)		副題			
担 当 者	斉木 美紀子					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	表現活動の実践を通し、その過程と成果を経験する。また、これらにかかわる子どもの姿と保育者の援助について技能や表現方法を身に付ける。					
授業のねらい・到達目標	●授業のねらい:「動」「音」「造」による多様な表現方法を学び、グループでの表現の実践を通して創造し表現することの意味に気づき、他者とのコミュニケーションの在り方についても考える。 ●授業終了時の到達目標:表現にかかわる自らの実践を通し創造と表現、表現とコミュニケーションの意味について感じ考えることができるようになる。この経験を通し、乳幼児期における表現の意義を理解し、子どもの表現活動に共感しながら援助できる能力を身に付け実践できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目:D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)~(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション(合同授業)					
2	ローテーション授業①・「動き」の型と質を感知する。動きとイメージの関連に気づく (グループワーク)(茗井)					
3	ローテーション授業①・子どもの音楽表現を育むには(斉木)					
4	ローテーション授業①・「手作り」について(三政)					
5	ローテーション授業②・「動き」のダイナミクスー群と構成を生かして(グループワーク)(茗井)					
6	ローテーション授業②・子どもの音楽的発達(斉木)					
7	ローテーション授業②・素材と教材(三政)					
8	ローテーション授業③・テーマと作品 (グループワーク)(茗井)					
9	ローテーション授業③・身体による音楽表現(斉木)					
10	ローテーション授業③・子どもの遊びと表現(造形の視点から)(三政)					
11	「動」「音」「造」による総合的な表現活動計画立案ー共通課題による (11~15回 グループワーク)					
12	「動」「音」「造」による総合的な表現活動準備・制作					
13	「動」「音」「造」による総合的な表現活動中間発表					
14	「動」「音」「造」による総合的な表現活動準備・練習					
15	「動」「音」「造」による総合的な表現活動発表					
期末	試験実施なし					
・授業内で課される各教員の課題について、グループでの活動に積極的に関わり、自らの意見や表現したい内容を提示する姿勢をもつこと。また、他者の表現についても、実践やディスカッションを通して自ら感じ取ろうとする姿勢をもち、課題を深めることに努めること。						
評価方法及び評価基準	授業内評価 授業中の活動および発表によって評価をする。					
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、事前に該当部分の準備や課題に取り組んで授業に出席すること。 授業後は、記録を残すなど十分な復習を行い、次回授業に繋がるよう心掛けること。事前・事後学習にそれぞれ60分程度を必要とする。特に、発表に向けてのグループワークでは、協力・調整し合って課題に臨むこと。					
履修上の注意	・実践的な活動が主になるので、動きやすい服装で出席すること。 ・制作にかかる費用は原則、自己負担となる。					
テキスト	特になし					
—						
—						
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館、2018年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館、2018年)その他、授業時に紹介する。					

科 目 名	保育内容(表現II)		副題			
担 当 者	三政 洋一					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3	
授業の概要	表現活動の実践を通し、その過程と成果を経験する。また、これらにかかわる子どもの姿と保育者の援助について技能や表現方法を身に付ける。					
授業のねらい・到達目標	●授業のねらい:「動」「音」「造」による多様な表現方法を学び、グループでの表現の実践を通して創造し表現することの意味に気づき、他者とのコミュニケーションの在り方についても考える。 ●授業終了時の到達目標:表現にかかわる自らの実践を通し創造と表現、表現とコミュニケーションの意味について感じ考えることができるようになる。この経験を通し、乳幼児期における表現の意義を理解し、子どもの表現活動に共感しながら援助できる能力を身に付け実践できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目:D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)~(5)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション(合同授業)					
2	ローテーション授業①・「動き」の型と質を感知する。動きとイメージの関連に気づく (グループワーク)(茗井)					
3	ローテーション授業①・子どもの音楽表現を育むには(斉木)					
4	ローテーション授業①・「手作り」について(三政)					
5	ローテーション授業②・「動き」のダイナミクスー群と構成を生かして(グループワーク)(茗井)					
6	ローテーション授業②・子どもの音楽的発達(斉木)					
7	ローテーション授業②・素材と教材(三政)					
8	ローテーション授業③・テーマと作品 (グループワーク)(茗井)					
9	ローテーション授業③・身体による音楽表現(斉木)					
10	ローテーション授業③・子どもの遊びと表現(造形の視点から)(三政)					
11	「動」「音」「造」による総合的な表現活動計画立案ー共通課題による (11~15回 グループワーク)					
12	「動」「音」「造」による総合的な表現活動準備・制作					
13	「動」「音」「造」による総合的な表現活動中間発表					
14	「動」「音」「造」による総合的な表現活動準備・練習					
15	「動」「音」「造」による総合的な表現活動発表					
期末	試験実施なし					
・授業内で課される各教員の課題について、グループでの活動に積極的に関わり、自らの意見や表現したい内容を提示する姿勢をもつこと。また、他者の表現についても、実践やディスカッションを通して自ら感じ取ろうとする姿勢をもち、課題を深めることに努めること。						
評価方法及び評価基準	授業内評価 授業中の活動および発表によって評価をする。					
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、事前に該当部分の準備や課題に取り組んで授業に出席すること。 授業後は、記録を残すなど十分な復習を行い、次回授業に繋がるよう心掛けること。事前・事後学習にそれぞれ60分程度を必要とする。特に、発表に向けてのグループワークでは、協力・調整し合って課題に臨むこと。					
履修上の注意	・実践的な活動が主になるので、動きやすい服装で出席すること。 ・制作にかかる費用は原則、自己負担となる。					
テキスト	特になし					
—						
—						
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館、2018年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館、2018年)その他、授業時に紹介する。					

科 目 名	保育内容(表現II)		副題		
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	表現活動の実践を通し、その過程と成果を経験する。また、これらにかかわる子どもの姿と保育者の援助について技能や表現方法を身に付ける。				
授業のねらい・到達目標	●授業のねらい:「動」「音」「造」による多様な表現方法を学び、グループでの表現の実践を通して創造し表現することの意味に気づき、他者とのコミュニケーションの在り方についても考える。 ●授業終了時の到達目標:表現にかかわる自らの実践を通し創造と表現、表現とコミュニケーションの意味について感じ考えることができるようになる。この経験を通し、乳幼児期における表現の意義を理解し、子どもの表現活動に共感しながら援助できる能力を身に付け実践できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目:D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)~(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(合同授業)				
2	ローテーション授業①・「動き」の型と質を感知する。動きとイメージの関連に気づく(グループワーク)(茗井)				
3	ローテーション授業①・子どもの音楽表現を育むには(斉木)				
4	ローテーション授業①・「手作り」について(三政)				
5	ローテーション授業②・「動き」のダイナミクスー群と構成を生かして(グループワーク)(茗井)				
6	ローテーション授業②・子どもの音楽的発達(斉木)				
7	ローテーション授業②・素材と教材(三政)				
8	ローテーション授業③・テーマと作品(グループワーク)(茗井)				
9	ローテーション授業③・身体による音楽表現(斉木)				
10	ローテーション授業③・子どもの遊びと表現(造形の視点から)(三政)				
11	「動」「音」「造」による総合的な表現活動計画立案ー共通課題による(11~15回 グループワーク)				
12	「動」「音」「造」による総合的な表現活動準備・制作				
13	「動」「音」「造」による総合的な表現活動中間発表				
14	「動」「音」「造」による総合的な表現活動準備・練習				
15	「動」「音」「造」による総合的な表現活動発表				
期末	試験実施なし				
・授業内で課される各教員の課題について、グループでの活動に積極的に関わり、自らの意見や表現したい内容を提示する姿勢をもつこと。また、他者の表現についても、実践やディスカッションを通して自ら感じ取ろうとする姿勢をもち、課題を深めることに努めること。					
評価方法及び評価基準	授業内評価 授業中の活動および発表によって評価をする。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、事前に該当部分の準備や課題に取り組んで授業に出席すること。 授業後は、記録を残すなど十分な復習を行い、次回授業に繋がるよう心掛けること。事前・事後学習にそれぞれ60分程度を必要とする。特に、発表に向けてのグループワークでは、協力・調整し合って課題に臨むこと。				
履修上の注意	・実践的な活動が主になるので、動きやすい服装で出席すること。 ・制作にかかる費用は原則、自己負担となる。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館、2018年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館、2018年)その他、授業時に紹介する。				

科 目 名	保育内容総論		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	保育の中で生じた様々な具体例を題材に、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」において示されている保育内容の基本的な位置づけや原理について学び、子どもの育ちを支える保育の在り方について理解を深める。また、実習などの経験に基づいて具体的な子どもの姿をイメージしながら、保育内容に関連する保育の諸課題への対応を考える姿勢を持つようにし、幼稚園・保育所の保育内容のあるべき姿を検討していく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは以下の3点である。 ①幼稚園・保育所における保育内容についての基礎的な概念を理解するとともに、乳幼児期の特徴を保育内容の視点から捉えることができるようになる。 ②保育観の再構築や保育者のあるべき姿を検討していく力に繋がる多様な視点が獲得できる。 ③具体的な子どもの姿から保育内容を構想することができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目: A-4(3)(4), B-3(1)～(5),C-2(4),D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育内容とは何か				
3	子ども理解と保育内容				
4	「遊び」から捉えられる保育内容(1)～歴史の変遷を手がかりに～				
5	「遊び」から捉えられる保育内容(2)～保育における遊びの意味とは～				
6	「生活」から捉えられる保育内容～保育の一日(諸外国の保育から学ぶ)～				
7	「発達」から捉えられる保育内容(1)～低年齢児の生活と保育内容(保育案を構想する)～				
8	「発達」から捉えられる保育内容(2)～3歳以上児の生活と保育内容(保育案を構想する)～				
9	様々な保育形態とその背景としての保育内容				
10	幼稚園教育要領・保育所保育指針における保育内容の捉え方				
11	様々な配慮を必要とする子どもの園生活と保育内容				
12	社会の変化と保育内容～保育内容の変遷～				
13	保育所・幼稚園と小学校との連携と保育内容				
14	保育内容と保育者の専門性				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
授業内で提出したワークシート、提出物については、授業内において返却し、適宜フィードバックする。					
評価方法及び評価基準	コメントシート(20%)、課題(20%)、授業への参加度等(20%)・授業内に実施する小テスト(40%)				
事前・事後学習の内容	・事前学習では、授業計画の内容を確認し、自分なりの意見や疑問をもって参加すること。(事前学習については、毎回0.5時間が目安となる。) ・事後学習では、授業後の資料や記録を振り返り理解を深めること。(事後学習については、毎回0.5時間が目安となる。)				
履修上の注意	資料、記録等を整理・保管するファイル等を各自用意し、毎時間持参すること。				
テキスト	特になし。				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』 内閣府 文部科学省 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布する。				

科 目 名	保育内容総論		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	保育の中で生じた様々な具体例を題材に、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」において示されている保育内容の基本的な位置づけや原理について学び、子どもの育ちを支える保育の在り方について理解を深める。また、実習などの経験に基づいて具体的な子どもの姿をイメージしながら、保育内容に関連する保育の諸課題への対応を考える姿勢を持つようにし、幼稚園・保育所の保育内容のあるべき姿を検討していく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは以下の3点である。 ①幼稚園・保育所における保育内容についての基礎的な概念を理解するとともに、乳幼児期の特徴を保育内容の視点から捉えることができるようになる。 ②保育観の再構築や保育者のあるべき姿を検討していく力に繋がる多様な視点が獲得できる。 ③具体的な子どもの姿から保育内容を構想することができるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目: A-4(3)(4), B-3(1)～(5),C-2(4),D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育内容とは何か				
3	子ども理解と保育内容				
4	「遊び」から捉えられる保育内容(1)～歴史的変遷を手がかりに～				
5	「遊び」から捉えられる保育内容(2)～保育における遊びの意味とは～				
6	「生活」から捉えられる保育内容～保育の一日(諸外国の保育から学ぶ)～				
7	「発達」から捉えられる保育内容(1)～低年齢児の生活と保育内容(保育案を構想する)～				
8	「発達」から捉えられる保育内容(2)～3歳以上児の生活と保育内容(保育案を構想する)～				
9	様々な保育形態とその背景としての保育内容				
10	幼稚園教育要領・保育所保育指針における保育内容の捉え方				
11	様々な配慮を必要とする子どもの園生活と保育内容				
12	社会の変化と保育内容～保育内容の変遷～				
13	保育所・幼稚園と小学校との連携と保育内容				
14	保育内容と保育者の専門性				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
授業内で提出したワークシート、提出物については、授業内において返却し、適宜フィードバックする。					
評価方法及び評価基準	コメントシート(20%)、課題(20%)、授業への参加度等(20%)・授業内に実施する小テスト(40%)				
事前・事後学習の内容	・事前学習では、授業計画の内容を確認し、自分なりの意見や疑問をもって参加すること。(事前学習については、毎回0.5時間が目安となる。) ・事後学習では、授業後の資料や記録を振り返り理解を深めること。(事後学習については、毎回0.5時間が目安となる。)				
履修上の注意	資料、記録等を整理・保管するファイル等を各自用意し、毎時間持参すること。				
テキスト	特になし。				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』 内閣府 文部科学省 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布する。				

科 目 名	保育方法の研究		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	方法という語のギリシア語における語源は「道に沿って」という意味である。道には向かうべき目的がある。保育の方法について考えることは、保育者の抱く目的について考えることと不可分の営みである。 また、保育の目的と方法を考える上では対象である子どもの理解が不可欠である。そして子どもの遊びと成長が一人ひとり固有のものである限り、保育方法の実践は対象である子どもに対して保育者の目的には回収しきれない副産物を必ず生み出すことになる。 本授業では文献や実践事例の検討を通して、保育方法、技術を保育者の目的、保育の場における子どもの遊びと成長とともに理解していくことを目指す。このことを通して、受講生が保育の目的、方法、対象(子ども)の関連性に対して自覚的になり、反省的実践のための基礎を養うことを目指す。				
授業のねらい・到達目標	・保育の具体的な方法及び技術について、保育者の抱く目的との関係において理解することができること。 ・保育者の目的を背景として用いられる教育・保育方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む)が、子どもの遊びと成長にどのように寄与するかを保育者の目的を越える点まで含めて考えることができること。 ・他者の考えに触れることで、保育の目的と方法、子どもの遊びと成長について複眼的な視点を獲得することができること。また、保育者として同僚とともに育ち合うための基礎を養うことができること。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)(3)(4)、B-3(1)～(6)、C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)、D-4(1)～(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育・教育の目的を巡る考察				
3	子どもの自由な遊びについて考える(1)-見守りと環境への配慮-				
4	子どもの自由な遊びについて考える(2)-自由な遊びが子どもにもたらすもの-				
5	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(1) きっかけづくりとしての援助				
6	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(2) 臨機応変に判断する				
7	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(3) グループ発表				
8	子ども同士の関係づくりを援助する(1) 環境を通して				
9	子ども同士の関係づくりを援助する(2) 子どもとともに葛藤する保育者				
10	子ども同士の関係づくりを援助する(3) グループ発表				
11	園生活に困難を抱える子どもの援助(1) 関係性を編み直す				
12	園生活に困難を抱える子どもの援助(2) 一人ひとりが生きる場づくり				
13	園生活に困難を抱える子どもの援助(3) グループ発表				
14	障がいをもつ子どもの保育				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
・グループ発表の内容に対しては授業の中で口頭でコメントを行う。 ・毎回の授業におけるワークシートは提出を課し、適宜コメントやポイントとなる記述にアンダーラインを付すなどして返却する。 ・中間レポート、最終レポートについては結果が評価の中で大きなウェイトを占めることから各自入念な準備が求められる。					
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、グループ研究への取り組み、ワークシートの記入、などを含む授業中の活動(50%)と中間レポート(30%)学期末レポート(20%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて紹介するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。 事前学習に1時間、事後学習に3時間が目安となる。				
履修上の注意	知識の獲得よりは受講者自身が毎回のトピックについて考え、学び合うことを重視する。そのため、毎回の授業にグループワークを設ける。積極的な参加を期待する。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	文部科学省『平成29年告示幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館 その他、授業内で適宜紹介する。				

科 目 名	保育方法の研究		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	方法という語のギリシア語における語源は「道に沿って」という意味である。道には向かうべき目的がある。保育の方法について考えることは、保育者の抱く目的について考えることと不可分の営みである。 また、保育の目的と方法を考える上では対象である子どもの理解が不可欠である。そして子どもの遊びと成長が一人ひとり固有のものである限り、保育方法の実践は対象である子どもに対して保育者の目的には回収しきれない副産物を必ず生み出すことになる。 本授業では文献や実践事例の検討を通して、保育方法、技術を保育者の目的、保育の場における子どもの遊びと成長とともに理解していくことを目指す。このことを通して、受講生が保育の目的、方法、対象(子ども)の関連性に対して自覚的になり、反省的実践のための基礎を養うことを目指す。				
授業のねらい・到達目標	・保育の具体的な方法及び技術について、保育者の抱く目的との関係において理解することができること。 ・保育者の目的を背景として用いられる教育・保育方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む)が、子どもの遊びと成長にどのように寄与するかを保育者の目的を越える点まで含めて考えることができること。 ・他者の考えに触れることで、保育の目的と方法、子どもの遊びと成長について複眼的な視点を獲得することができること。また、保育者として同僚とともに育ち合うための基礎を養うことができること。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)(3)(4)、B-3(1)～(6)、C-2(4)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(5)、D-4(1)～(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育・教育の目的を巡る考察				
3	子どもの自由な遊びについて考える(1)-見守りと環境への配慮-				
4	子どもの自由な遊びについて考える(2)-自由な遊びが子どもにもたらすもの-				
5	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(1) きっかけづくりとしての援助				
6	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(2) 臨機応変に判断する				
7	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(3) グループ発表				
8	子ども同士の関係づくりを援助する(1) 環境を通して				
9	子ども同士の関係づくりを援助する(2) 子どもとともに葛藤する保育者				
10	子ども同士の関係づくりを援助する(3) グループ発表				
11	園生活に困難を抱える子どもの援助(1) 関係性を編み直す				
12	園生活に困難を抱える子どもの援助(2) 一人ひとりが生きる場づくり				
13	園生活に困難を抱える子どもの援助(3) グループ発表				
14	障がいをもつ子どもの保育				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
・グループ発表の内容に対しては授業の中で口頭でコメントを行う。 ・毎回の授業におけるワークシートは提出を課し、適宜コメントやポイントとなる記述にアンダーラインを付すなどして返却する。 ・中間レポート、最終レポートについては結果が評価の中で大きなウェイトを占めることから各自入念な準備が求められる。					
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、グループ研究への取り組み、ワークシートの記入、などを含む授業中の活動(50%)と中間レポート(30%)学期末レポート(20%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて紹介するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。 事前学習に1時間、事後学習に3時間が目安となる。				
履修上の注意	知識の獲得よりは受講者自身が毎回のトピックについて考え、学び合うことを重視する。そのため、毎回の授業にグループワークを設ける。積極的な参加を期待する。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	文部科学省『平成29年告示幼稚園教育要領解説』 内閣府・文部科学省・厚生労働省『平成29年告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館 その他、授業内で適宜紹介する。				

科 目 名	法学		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	「社会あるところに法あり」と言われるように、「法」は人間の社会生活の根源的要素です。我が国は、法治国家であり、「法」の重要性は、人間の社会生活のあらゆる場面において、ますます強まっていくばかりです。そこで、本講義では、下記の「1～7」で法の全体像を学び、下記の「8～15」で法の実在像を修得することにより、法的思考力を身につけることに向けて勉学を進めます。社会の変化が激しい今日、ネットを活用しながら身近な法律問題についての理解を深めましょう。				
授業のねらい・到達目標	前半では法の総論学習を通じて法の実在像を修得できるようになること、後半では法的思考力を身につけることができるようになることを目指します。 【履修ファイルの対応項目A-1-(1)、(2)、A-4-(5)、A-5-(1)、(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	法の概念				
3	法の目的				
4	法の効力				
5	法の分類				
6	法源				
7	権利と義務(ネットを活用して、身近な生活上の法律問題を知ろう)				
8	憲法				
9	民事法(民法の基本を学ぶ)				
10	刑事法(刑法の基本を学ぶ)				
11	行政法(行政法とはどんな法律か?)				
12	教育に関する法(こどもの権利と教育基本法)				
13	福祉に関する法(新しい家族と福祉課題)				
14	環境に関する法(パリ協定など環境関連問題)				
15	国際法(グローバリゼーションと地域連携協定の発展)				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	期末課題、小レポートやコメントシート、授業内の活動での得点を総合的に勘案し評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席してください(必要学習時間の目安は1.5時間)。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めてください(必要学習時間の目安は2.5時間)。				
履修上の注意	授業の際、必ずテキストを持参してください。法に関する科学の総称である「法学」を学ぶことによって一層の自己研鑽に励むのだとの熱意をもって、本科目に取り組むことを期待しています。				
テキスト	江頭 憲治郎他『ポケット六法』最新版(有斐閣)				
—					
—					
参考文献	適宜紹介します。				

科 目 名	民族と国家		副題	日本と東アジアの国々	
担 当 者	藤森 智子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	日本は、古来より近隣アジア諸国と密接な関係にあった。ことに近代以降の東アジア諸国との対外関係は、今なお外交上、そして人々の心理上、大きな影響を与え続けている。この講義では、東アジアの地理、歴史、社会及び国家間の関係を理解し、現代の東アジアに対する観察眼を養うことを目的とする。近代帝国主義の萌芽期から現代までを範囲として、日本を含む東アジア諸地域の地理、歴史、社会を概観しながら、日本が当地域、特に植民地として統治した台湾、朝鮮半島とどのように関わってきたかを検討し、東アジア地域に対する理解へとつなげる。				
授業のねらい・到達目標	受講学生には、近代以降の東アジアを含む歴史の流れを理解し、今日の日本と東アジア地域に対する関心と観察眼を持てるようになることを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	アジアとは				
2	欧米のアジア進出				
3	朝貢体制とアヘン戦争				
4	日本開国				
5	日朝関係の歴史と日清戦争				
6	日露戦争と「韓国併合」				
7	日本の朝鮮植民統治				
8	冷戦と朝鮮半島				
9	現代の朝鮮半島				
10	台湾の歴史と社会				
11	日本の台湾植民統治(1)－台湾総督府の政策				
12	日本の台湾植民統治(2)－台湾社会の変容				
13	国民党政権下の台湾				
14	現代の台湾				
15	現代の東アジア				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。					
評価方法及び評価基準	授業内の小テストやリアクションペーパーの合計を60%、レポートを40%とする。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、該当する部分の下調べをしてから授業に臨むこと。関連する新聞記事やニュースに目を通すこと。授業後は、配布プリントを活用し、十分な復習を行い、知識の定着をはかること。各回の授業の予習に1.5時間、復習に2.5時間が目安となる。				
履修上の注意	欠席をすると、その回の小テストは受けられない。				
テキスト					
－					
－					
参考文献	伊藤潔『台湾一四百年の歴史と展望』中公新書、1993				

科 目 名	幼児教育史		副題		「発見」された子どもたちは「もういない」か？	
担 当 者	杉下 文子					
開講期	半期	単位数	2		配当年次	3
授業の概要	幼児教育の歴史とは、人々が「子ども(幼児)」をどんな教えの対象として認識してきたか、の歴史である。本講では、「子どもの発見」者ルソーをはじめとする17～20世紀前半に活躍した西洋の教育思想家や実践家の言説を検討し、そこにおける「子ども」の理解を深める。その上で、西洋思想の影響下に成立した日本の幼児教育における「子ども」や、さらには現代社会における「子ども」はいかなる存在であるかを追ひ、彼ら彼女たちに相応しい教育とはいかなるものであるかを考察していく。					
授業のねらい ・到達目標	・「子ども」「幼児」という社会的存在への眼差しの歴史を理解すること。 ・現代社会における「幼児」をめぐる諸問題について論じることができること。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(1)】					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション:子どもへの眼差しの歴史序論～子どもの「発見」と教育の誕生					
2	子どもの「発見」(1)性悪説からの脱却					
3	子どもの「発見」(2)ルソーと子どもの誕生					
4	子どもの「発見」(3)ルソー『エミール』を読む					
5	子どもを教育する一幼稚園の誕生(1)ペスタロッチからフレーベルへ					
6	子どもを教育する一幼稚園の誕生(2)フレーベルと「遊び」					
7	子どもを預かる一保育園の誕生					
8	日本の幼児教育(1)保育園の系譜					
9	日本の幼児教育(2)幼稚園の系譜と西洋思想の影響					
10	日本の幼児教育(3)大正期の改革と幼保一元化課題					
11	フランス幼児教育実戦例紹介:「子ども」の今を考える					
12	現代社会と子ども(1)ポストマン『子どもはもういない』					
13	現代社会と子ども(2)メディアと子どもを考える					
14	現代社会と子ども(3)「子ども」を巡る諸問題					
15	まとめと考察					
期末	試験実施なし					
評価方法 及び評価基準	期末レポート(50%)、授業内小テスト(40%)、授業態度(10%)					
事前・事後 学習の内容	事前学習については、授業計画で各回の内容を確認し、予め配付済みの資料がある場合にはそれを熟読して授業に参加すること。また授業後は、資料やノートの内容をまとめ、十分な復習を行い、各自理解を深めることが望まれる。事前学習には1時間、事後学習には3時間を割くことが目安となる。					
履修上の注意	・初回授業時に出欠席や提出物の扱いについて説明するので、履修希望者は出席することが望ましい。 ・適宜リアクションペーパーや小テストを課す。その回に欠席した場合も、基本的には再提出や追試の機会は設けない。					
テキスト						
—						
—						
参考文献	ニール・ポストマン『子どもはもういない』(小柴一訳)1995年、新樹社 今井康雄『教育思想史』2009年、有斐閣アルマ					

科 目 名	幼稚園教育実習Ⅰ		副題		
担 当 者	瀬川 千津子				
開講期	集中	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼稚園教諭1種免許取得にかかわる教職課程必修の実習として、学外の幼稚園において1週間の実習を行う。「幼稚園教育実習Ⅱ」に向け、観察・参加実習を中心とした実習を行う。幼稚園における子どもや保育者、保護者の営む日々の生活との出会いを通して、幼稚園の保育の流れを知り、保育者の基本的な役割や職務内容について理解を深める。また、子どもとの実際のかかわりを通して、個々の子どもの思いやその背後にある行為の意味に気づき、そこで求められる援助のあり方について考えていくことが期待される。				
授業のねらい・到達目標	<「幼稚園教育実習Ⅰ」の実習課題>（共通課題） (1) 幼稚園の保育の流れを理解する。 (2) 個々の子どもに出会い、かかわる体験を通して、子どもの行為やかかわりの「意味」について考える。 (3) 保育者の役割、および職務内容について学ぶ。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),B-1(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7),B-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),B-3(1)(2)(3)(4)(5)(6),C-1(1)(2),C-2(2)(3)(4),C-3(1)(2)(3)(4)(5),C-4(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8),D-1(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5),D-4(1)(2)(3)】				
授業の方法・授業計画・補足説明					
1. 子どもたちの登園・降園の時間やそれぞれの活動の流れを把握し、次の活動を見通しつつ自ら動けるようになる。 2. 子どもの生活や遊びにおける幼稚園全体の環境、園庭や保育室などの環境構成を理解する。 3. 子どもの観察および記録や子どもとのかかわりを通して、子どもの行為やかかわりの「意味」について考え、理解を深める。 4. 保育者の子どもたちへのかかわりを通して、その役割と援助の在り方について考える。 5. 保育者の手伝いや環境整備に積極的に取り組み、保育者の職務内容について理解を深める。					
評価方法及び評価基準	実習園による評価、自己評価、実習日誌等により総合的に評価を行う。				
事前・事後学習の内容	実習指導授業に真剣に取り組むこと。また、各自において実習に対する事前学習・事前準備を具体的に進めることが望まれる。実習後は、事後指導授業へ出席し、実習からの学びを振り返る。				
履修上の注意	・「幼稚園教育実習指導Ⅰ」を併せて履修し出席すること。 ・「教育の原理」の単位を修得済みであること。 ・実習期間中は原則として欠勤および遅刻・早退は認められない。 ・その他『実習の手引き』に掲載されている要件に注意すること。				
テキスト	『幼稚園教育実習 実習の手引き』、田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2018年、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館,2018年、その他、「幼稚園教育実習指導Ⅰ」で適宜紹介する。				

科 目 名	幼稚園教育実習Ⅰ		副題		
担 当 者	茗井 香保里				
開講期	集中	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼稚園教諭1種免許取得にかかわる教職課程必修の実習として、学外の幼稚園において1週間の実習を行う。「幼稚園教育実習Ⅱ」に向け、観察・参加実習を中心とした実習を行う。幼稚園における子どもや保育者、保護者の営む日々の生活との出会いを通して、幼稚園の保育の流れを知り、保育者の基本的な役割や職務内容について理解を深める。また、子どもとの実際のかかわりを通して、個々の子どもの思いやその背後にある行為の意味に気づき、そこで求められる援助のあり方について考えていくことが期待される。				
授業のねらい・到達目標	<「幼稚園教育実習Ⅰ」の実習課題> (共通課題) (1) 幼稚園の保育の流れを理解する。 (2) 個々の子どもに出会い、かかわる体験を通して、子どもの行為やかかわりの「意味」について考える。 (3) 保育者の役割、および職務内容について学ぶ。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),B-1(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7),B-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),B-3(1)(2)(3)(4)(5)(6),C-1(1)(2),C-2(2)(3)(4),C-3(1)(2)(3)(4)(5),C-4(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8),D-1(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5),D-4(1)(2)(3)】				
授業の方法・授業計画・補足説明					
1. 子どもたちの登園・降園の時間やそれぞれの活動の流れを把握し、次の活動を見通しつつ自ら動けるようになる。 2. 子どもの生活や遊びにおける幼稚園全体の環境、園庭や保育室などの環境構成を理解する。 3. 子どもの観察および記録や子どもとのかかわりを通して、子どもの行為やかかわりの「意味」について考え、理解を深める。 4. 保育者の子どもたちへのかかわりを通して、その役割と援助の在り方について考える。 5. 保育者の手伝いや環境整備に積極的に取り組み、保育者の職務内容について理解を深める。					
評価方法及び評価基準	実習園による評価、自己評価、実習日誌等により総合的に評価を行う。				
事前・事後学習の内容	実習指導授業に真剣に取り組むこと。また、各自において実習に対する事前学習・事前準備を具体的に進めることが望まれる。実習後は、事後指導授業へ出席し、実習からの学びを振り返る。				
履修上の注意	・「幼稚園教育実習指導Ⅰ」を併せて履修し出席すること。 ・「教育の原理」の単位を修得済みであること。 ・実習期間中は原則として欠勤および遅刻・早退は認められない。 ・その他『実習の手引き』に掲載されている要件に注意すること。				
テキスト	『幼稚園教育実習 実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2018年、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館,2018年、その他、「幼稚園教育実習指導Ⅰ」で適宜紹介する。				

科 目 名	幼稚園教育実習II		副題			
担 当 者	瀬川 千津子					
開講期	集中	単位数	3	配当年次	4	
授業の概要	幼稚園教諭1種免許取得にかかわる教職課程必修の実習として、学外の幼稚園において3週間の実習を行う。 「幼稚園教育実習Ⅰ」を踏まえ、参加・責任実習を中心としたより専門性の高い実習を行う。幼稚園における子どもや保育者、保護者の営む日々の生活との出会いを通して、子どもへの理解を深めるとともに、保育者としての役割や援助の在り方について学ぶことを目的とする。また、責任実習を通して、自らの保育実践力の向上を目指す。さらに、幼稚園の社会的役割についても視野を広げ、学びを深めることが期待される。					
授業のねらい・到達目標	<「幼稚園教育実習Ⅱ」の実習課題>（共通課題） (1) 保育者という視点から子どもとかかわる中で、子どもの行為やかかわりへの理解を深め、そこで求められる保育者の援助の在り方について学びを深める。 (2) 子どもの実状に応じた指導計画の立案および保育の実践・評価を通して、環境の在り方や計画と実践の関係について学ぶ。 (3) 幼稚園と家庭や地域との連携、および子育て支援について学ぶことを通して、幼稚園の社会的役割について考えると同時に、保育者の役割や職務内容について、より広い視点から理解を深める。 ※上記の「共通課題」の他に、各自の「自己課題」を設定し、「共通課題」と合わせて「実習課題」とし、実習に臨む。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),B-1(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7),B-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),B-3(1)(2)(3)(4)(5)(6),C-1(1)(2),C-2(2)(3)(4),C-3(1)(2)(3)(4)(5),C-4(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8),D-1(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5),D-4(1)(2)(3)】					
授業の方法・授業計画・補足説明						
1. 子どもとかかわりや遊びを通して、そこで求められる援助の在り方や環境構成について学ぶ。 2. 一人ひとりの子どもとかかわりつつ、子ども集団全体にも目を向け、子ども同士の「関係」への援助について考える。 3. 障害を持っている子どもや外国籍の子ども等、さまざまな配慮を必要とする子どもに対する援助の在り方について学び、理解を深める。 4. 発達に応じた保育内容や方法を理解し、子どもの実状に即した指導計画を立案し、実践し、反省・評価を行う。 5. 家庭を含む地域との連携や子育て支援について理解を深め、幼稚園の社会的役割や保育者に求められる役割について考える。						
評価方法及び評価基準	実習園による評価、自己評価、実習日誌等により総合的に評価を行う。					
事前・事後学習の内容	実習指導授業に真剣に取り組むこと。また、各自において実習に対する事前学習・事後学習を具体的に進めることが望まれる。実習後は事後指導授業へ出席し、実習からの学びを振り返る。					
履修上の注意	・「幼稚園教育実習Ⅰ」を履修済みであること。 ・「幼稚園教育実習指導Ⅱ」を併せて履修し出席すること。 ・「教職概論」の単位修得済みであること。 ・実習期間中は原則として欠勤および遅刻・早退は認められない。 ・その他『実習の手引き』に掲載されている要件に注意すること。					
テキスト	『幼稚園教育実習 実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科					
—						
—						
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2018年、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館,2018年、その他、「幼稚園教育実習指導Ⅱ」で適宜紹介する。					

科 目 名	幼稚園教育実習II		副題			
担 当 者	茗井 香保里					
開講期	集中	単位数	3	配当年次	4	
授業の概要	幼稚園教諭1種免許取得にかかわる教職課程必修の実習として、学外の幼稚園において3週間の実習を行う。 「幼稚園教育実習Ⅰ」を踏まえ、参加・責任実習を中心としたより専門性の高い実習を行う。幼稚園における子どもや保育者、保護者の営む日々の生活との出会いを通して、子どもへの理解を深めるとともに、保育者としての役割や援助の在り方について学ぶことを目的とする。また、責任実習を通して、自らの保育実践力の向上を目指す。さらに、幼稚園の社会的役割についても視野を広げ、学びを深めることが期待される。					
授業のねらい・到達目標	<「幼稚園教育実習Ⅱ」の実習課題>（共通課題） (1) 保育者という視点から子どもとかかわる中で、子どもの行為やかかわりへの理解を深め、そこで求められる保育者の援助の在り方について学びを深める。 (2) 子どもの実状に応じた指導計画の立案および保育の実践・評価を通して、環境の在り方や計画と実践の関係について学ぶ。 (3) 幼稚園と家庭や地域との連携、および子育て支援について学ぶことを通して、幼稚園の社会的役割について考えると同時に、保育者の役割や職務内容について、より広い視点から理解を深める。 ※上記の「共通課題」の他に、各自の「自己課題」を設定し、「共通課題」と合わせて「実習課題」とし、実習に臨む。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),B-1(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7),B-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),B-3(1)(2)(3)(4)(5)(6),C-1(1)(2),C-2(2)(3)(4),C-3(1)(2)(3)(4)(5),C-4(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8),D-1(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5),D-4(1)(2)(3)】					
授業の方法・授業計画・補足説明						
1. 子どもとかかわりや遊びを通して、そこで求められる援助の在り方や環境構成について学ぶ。 2. 一人ひとりの子どもとかかわりつつ、子ども集団全体にも目を向け、子ども同士の「関係」への援助について考える。 3. 障害を持っている子どもや外国籍の子ども等、さまざまな配慮を必要とする子どもに対する援助の在り方について学び、理解を深める。 4. 発達に応じた保育内容や方法を理解し、子どもの実状に即した指導計画を立案し、実践し、反省・評価を行う。 5. 家庭を含む地域との連携や子育て支援について理解を深め、幼稚園の社会的役割や保育者に求められる役割について考える。						
評価方法及び評価基準	実習園による評価、自己評価、実習日誌等により総合的に評価を行う。					
事前・事後学習の内容	実習指導授業に真剣に取り組むこと。また、各自において実習に対する事前学習・事後学習を具体的に進めることが望まれる。実習後は事後指導授業へ出席し、実習からの学びを振り返る。					
履修上の注意	・「幼稚園教育実習Ⅰ」を履修済みであること。 ・「幼稚園教育実習指導Ⅱ」を併せて履修し出席すること。 ・「教職概論」の単位修得済みであること。 ・実習期間中は原則として欠勤および遅刻・早退は認められない。 ・その他『実習の手引き』に掲載されている要件に注意すること。					
テキスト	『幼稚園教育実習 実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科					
—						
—						
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2018年、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館,2018年、その他、「幼稚園教育実習指導Ⅱ」で適宜紹介する。					

科 目 名		幼稚園教育実習指導I		副題	
担 当 者		瀬川 千津子			
開講期		通年	単位数	1	配当年次
					2
授業の概要		「幼稚園教育実習Ⅰ」の事前指導として、幼稚園での実習に必要な心構えや態度、基本的な知識・技能について学ぶ。実習の意義や目的、手順、実習における留意点等を確認し、実習に向けた準備を行う。また幼稚園教育の特徴と基本理念について理解した上で、保育記録の意義と書き方について学習する。 実習終了後には、事後指導を通して、実習から得た学びを整理し、その「意味」を問い直すことにより、自らの学びを深め、次年度の実習へ向けての自己課題を抽出していくための学習を行う。			
授業のねらい・到達目標		1. 実習に必要な心構えや態度、留意点などを理解し、実習に対する意欲を高める。 2. 実習関係書類の作成、実習先オリエンテーションなど実習に必要な事前準備について理解し実行する。 3. 実習の目的や期待される学習内容について理解する。 4. 実習日誌の書き方を学び、習得する。 5. 実習を振り返り、自らの学びや反省から自己の課題を明確にする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),A-4(4),A-5(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5)】			
授業の方法・授業計画					
1	実習総合オリエンテーション①(実習スケジュール確認／実習要件／実習関係書類の配布・説明)			16	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導①(実習体験の発表・報告)
2	実習総合オリエンテーション②(実習生に求められる姿勢)			17	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導②(実習課題に即した学びの成果と反省点の整理)
3	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション①(実習関係書類の作成)			18	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導③(事例を基にしたグループカンファレンス／カンファレンスを通しての学びの共有)
4	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション②(外部講師による講演)【合同授業】			19	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導④(園評価に基づく個別面談／園評価と自己評価の照合／自己課題の抽出)
5	保育記録の意義と書き方①(時系列記録の意義と書き方)			20	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導⑤(実習日誌返却と講評)
6	保育記録の意義と書き方②(時系列記録の復習／エピソード記録の意義と書き方)			21	
7	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション③(目的および学習内容／実習園オリエンテーションに関する説明)			22	
8	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション④(実習中および実習後の留意点／お礼状の書き方／確認テスト)			23	
9	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション⑤(実習日誌の様式と記入上の留意点)			24	
10	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション⑥(実習評価について)			25	
11	実習総合オリエンテーション③(4年生との情報交換会)			26	
12	幼稚園教育実習Ⅰ直前オリエンテーション(実習における諸注意に関する最終確認)【合同授業】			27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
授業内や授業後に課される課題については、事後の授業において添削もしくはコメントを付して返却されるため、各自十分復習した上で実習に臨むこと。					
評価方法及び評価基準		実習関係書類、課題、実習日誌などの提出状況、授業への参加態度などを総合して評価する。			
事前・事後学習の内容		事前学習は各回の授業内容に関する手引きの該当ページを熟読しておくこと。事後学習については、授業内容を確実に理解するために配付資料やワークシート等で復習し、出された課題に取り組むこと。各回の事前・事後学習に最低でも1時間程度は必要となる。			
履修上の注意		「幼稚園教育実習Ⅰ」につながる科目であるため、実習同様、欠席および遅刻は認められない。特に、無断での欠席・遅刻は厳禁とする。			
テキスト		『幼稚園教育実習 実習の手引き』、田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館,2018年)			978-4-577-81245-7
－					
－					
参考文献		内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2018年)、その他、必要に応じて授業内で紹介する。			

科 目 名		幼稚園教育実習指導I		副題	
担 当 者		瀬川 千津子			
開講期		通年	単位数	1	配当年次
					2
授業の概要		「幼稚園教育実習Ⅰ」の事前指導として、幼稚園での実習に必要な心構えや態度、基本的な知識・技能について学ぶ。実習の意義や目的、手順、実習における留意点等を確認し、実習に向けた準備を行う。また幼稚園教育の特徴と基本理念について理解した上で、保育記録の意義と書き方について学習する。 実習終了後には、事後指導を通して、実習から得た学びを整理し、その「意味」を問い直すことにより、自らの学びを深め、次年度の実習へ向けての自己課題を抽出していくための学習を行う。			
授業のねらい・到達目標		1. 実習に必要な心構えや態度、留意点などを理解し、実習に対する意欲を高める。 2. 実習関係書類の作成、実習先オリエンテーションなど実習に必要な事前準備について理解し実行する。 3. 実習の目的や期待される学習内容について理解する。 4. 実習日誌の書き方を学び、習得する。 5. 実習を振り返り、自らの学びや反省から自己の課題を明確にする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),A-4(4),A-5(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5)】			
授業の方法・授業計画					
1	実習総合オリエンテーション①(実習スケジュール確認／実習要件／実習関係書類の配布・説明)			16	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導①(実習体験の発表・報告)
2	実習総合オリエンテーション②(実習生に求められる姿勢)			17	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導②(実習課題に即した学びの成果と反省点の整理)
3	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション①(実習関係書類の作成)			18	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導③(事例を基にしたグループカンファレンス／カンファレンスを通しての学びの共有)
4	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション②(外部講師による講演)【合同授業】			19	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導④(園評価に基づく個別面談／園評価と自己評価の照合／自己課題の抽出)
5	保育記録の意義と書き方①(時系列記録の意義と書き方)			20	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導⑤(実習日誌返却と講評)
6	保育記録の意義と書き方②(時系列記録の復習／エピソード記録の意義と書き方)			21	
7	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション③(目的および学習内容／実習園オリエンテーションに関する説明)			22	
8	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション④(実習中および実習後の留意点／お礼状の書き方／確認テスト)			23	
9	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション⑤(実習日誌の様式と記入上の留意点)			24	
10	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション⑥(実習評価について)			25	
11	実習総合オリエンテーション③(4年生との情報交換会)			26	
12	幼稚園教育実習Ⅰ直前オリエンテーション(実習における諸注意に関する最終確認)【合同授業】			27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
授業内や授業後に課される課題については、事後の授業において添削もしくはコメントを付して返却されるため、各自十分復習した上で実習に臨むこと。					
評価方法及び評価基準		実習関係書類、課題、実習日誌などの提出状況、授業への参加態度などを総合して評価する。			
事前・事後学習の内容		事前学習は各回の授業内容に関する手引きの該当ページを熟読しておくこと。事後学習については、授業内容を確実に理解するために配付資料やワークシート等で復習し、出された課題に取り組むこと。各回の事前・事後学習に最低でも1時間程度は必要となる。			
履修上の注意		「幼稚園教育実習Ⅰ」につながる科目であるため、実習同様、欠席および遅刻は認められない。特に、無断での欠席・遅刻は厳禁とする。			
テキスト		『幼稚園教育実習 実習の手引き』、田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館,2018年)			978-4-577-81245-7
—					
—					
参考文献		内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2018年)、その他、必要に応じて授業内で紹介する。			

科 目 名	幼稚園教育実習指導Ⅱ			副題	
担 当 者	瀬川 千津子				
開講期	通年	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	「幼稚園教育実習Ⅱ」の事前指導として、実習の目的や方法、留意点について確認し、そのために必要な心構えや知識について学ぶ。特に、「幼稚園教育実習Ⅱ」は、参加・責任実習を中心として展開される、より専門性の高い実習となるため、子どもの実態に即した保育の展開を目指し、保育に活きる記録のとり方や子どもに即した指導案の立案などについて、より実践的に学習する。 実習終了後の事後指導では、グループによる保育カンファレンスを通して、各自の実習体験から得た学びをより深め、保育者としての実践力の向上を図り、そのための自己課題を抽出していくための学習を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 実習に必要な心構えや態度、留意点、実習関係書類等の実習に必要な事前準備について確認し、実習に必要な事前準備を進める。 2. 「幼稚園教育実習Ⅱ」の目的や期待される学習内容について理解し、これまでの実習成果も踏まえた上で、実習に向けた自己課題を設定する。 3. 子どもの実態に即した保育実践を立案・展開するために必要な記録のとり方、指導案の立案方法などについて学ぶ。 4. 実習を振り返り、自らの学びの成果や反省から自己の課題を明確にする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),A-4(4),A-5(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション①(幼稚園教育実習Ⅱの意義と目的)	16	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導⑤(実習日誌の返却と個別面談／園評価と自己評価の照合／自己課題の抽出)		
2	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション②(自己課題の設定)	17			
3	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション③(学習内容の確認／実習園オリエンテーションに関する諸注意)	18			
4	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション④(卒業生によるシンポジウム)【合同授業】	19			
5	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション⑤(実習日誌の様式と記入上の留意点／多様な保育記録の書き方と意義)	20			
6	責任実習講座①(責任実習の流れと概要／指導案立案のためのポイント復習)	21			
7	責任実習講座②(指導案立案演習～責任実習を想定した指導案の立案～)	22			
8	責任実習講座③(指導案立案演習～相互添削による評価・反省～)	23			
9	責任実習講座④(指導案立案のための最終ポイント確認)	24			
10	幼稚園教育実習Ⅱ直前オリエンテーション(実習における諸注意に関する最終確認)【合同授業】	25			
11	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導①(実習経験の振り返り／課題に即した学びの整理)	26			
12	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導②(グループカンファレンス～実習における事例を基にしたカンファレンス～)	27			
13	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導③(グループカンファレンスによる学びの成果の発表)	28			
14	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導④(2年生との情報交流会)	29			
15		30			
期末	試験実施なし		期末	試験実施なし	
授業内や授業後に課される課題については、事後の授業において添削もしくはコメントを付して返却されるため、各自十分復習した上で実習に臨むこと。					
評価方法及び評価基準	実習関係書類、課題、実習日誌などの提出状況、授業への参加態度などを総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習は各回の授業内容に関する手引きの該当ページを熟読しておくこと。事後学習については、授業内容を確実に理解するために配布資料やワークシート等で復習し、出された課題に取り組むこと。各回の事前・事後学習に最低でも1時間程度は必要となる。				
履修上の注意	「幼稚園教育実習Ⅱ」につながる科目であるため、実習同様、欠席および遅刻は認められない。特に、無断での欠席・遅刻は厳禁とする。				
	『幼稚園教育実習 実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館,2018年)				

テキスト	厚生労働省『保育所保育指針解説書』(フレーベル館,2018年) 内閣府文部科学省厚生労働省『幼穂連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2018年)	
—		
—		
参考文献	内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2018 年)、その他、必要に応じて授業内で紹介する。	

科 目 名	幼稚園教育実習指導Ⅱ			副題	
担 当 者	瀬川 千津子				
開講期	通年	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	「幼稚園教育実習Ⅱ」の事前指導として、実習の目的や方法、留意点について確認し、そのために必要な心構えや知識について学ぶ。特に、「幼稚園教育実習Ⅱ」は、参加・責任実習を中心として展開される、より専門性の高い実習となるため、子どもの実態に即した保育の展開を目指し、保育に活きる記録のとり方や子どもに即した指導案の立案などについて、より実践的に学習する。 実習終了後の事後指導では、グループによる保育カンファレンスを通して、各自の実習体験から得た学びをより深め、保育者としての実践力の向上を図り、そのための自己課題を抽出していくための学習を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 実習に必要な心構えや態度、留意点、実習関係書類等の実習に必要な事前準備について確認し、実習に必要な事前準備を進める。 2. 「幼稚園教育実習Ⅱ」の目的や期待される学習内容について理解し、これまでの実習成果も踏まえた上で、実習に向けた自己課題を設定する。 3. 子どもの実態に即した保育実践を立案・展開するために必要な記録のとり方、指導案の立案方法などについて学ぶ。 4. 実習を振り返り、自らの学びの成果や反省から自己の課題を明確にする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),A-4(4),A-5(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション①(幼稚園教育実習Ⅱの意義と目的)	16	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導⑤(実習日誌の返却と個別面談／園評価と自己評価の照合／自己課題の抽出)		
2	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション②(自己課題の設定)	17			
3	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション③(学習内容の確認／実習園オリエンテーションに関する諸注意)	18			
4	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション④(卒業生によるシンポジウム)【合同授業】	19			
5	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション⑤(実習日誌の様式と記入上の留意点／多様な保育記録の書き方と意義)	20			
6	責任実習講座①(責任実習の流れと概要／指導案立案のためのポイント復習)	21			
7	責任実習講座②(指導案立案演習～責任実習を想定した指導案の立案～)	22			
8	責任実習講座③(指導案立案演習～相互添削による評価・反省～)	23			
9	責任実習講座④(指導案立案のための最終ポイント確認)	24			
10	幼稚園教育実習Ⅱ直前オリエンテーション(実習における諸注意に関する最終確認)【合同授業】	25			
11	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導①(実習経験の振り返り／課題に即した学びの整理)	26			
12	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導②(グループカンファレンス～実習における事例を基にしたカンファレンス～)	27			
13	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導③(グループカンファレンスによる学びの成果の発表)	28			
14	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導④(2年生との情報交流会)	29			
15		30			
期末	試験実施なし		期末	試験実施なし	
授業内や授業後に課される課題については、事後の授業において添削もしくはコメントを付して返却されるため、各自十分復習した上で実習に臨むこと。					
評価方法及び評価基準	実習関係書類、課題、実習日誌などの提出状況、授業への参加態度などを総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習は各回の授業内容に関する手引きの該当ページを熟読しておくこと。事後学習については、授業内容を確実に理解するために配布資料やワークシート等で復習し、出された課題に取り組むこと。各回の事前・事後学習に最低でも1時間程度は必要となる。				
履修上の注意	「幼稚園教育実習Ⅱ」につながる科目であるため、実習同様、欠席および遅刻は認められない。特に、無断での欠席・遅刻は厳禁とする。				
	『幼稚園教育実習 実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館,2018年)				

テキスト	厚生労働省『保育所保育指針解説書』(フレーベル館,2018年) 内閣府文部科学省厚生労働省『幼穂連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2018年)	
—		
—		
参考文献	内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2018 年)、その他、必要に応じて授業内で紹介する。	

科 目 名	倫理学		副題		
担 当 者	江島 尚俊				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	倫理学とは「倫理」の根幹原理を考えていく学問です。倫理学では知識を得るとともに、実際に自分で考えることが重要！ そこで本授業では、講義形式と実践形式の両方を行います。特に、実践形式では動画を用いながら、自身の学生自身の倫理的判断を問う授業を行っていきます。 動画の例としては、医療倫理:「ブラックジャック」、家族倫理:「NHKクローズアップ現代2014」などを予定しています。これらの動画視聴後には、必ずその都度、コメントペーパーへの記入、それに基づく発言の時間帯を設けます。				
授業のねらい・到達目標	(1)倫理と倫理学の違いを理解することができる。 (2)倫理学とは如何なる学問かを理解することができる。 (3)倫理的な知識と思考方法を身につける。 (4)上記3つを踏まえた上で、建学の精神「捨我精進」を如何にして実践できるようになるか、自身の考えを表明できるようになる。 教職課程対象者 【履修ファイル対応事項:A-4、B-1・2・3、C-1】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	倫理の発生と倫理学の分類				
3	倫理学の分類				
4	倫理の限界点を探る—嘘についてよい条件とはあるのか？				
5	ジョン・ハリスの「サバイバル・ロタリー」				
6	ベンサムとミルの「最大多数の最大幸福」論				
7	中間試験				
8	倫理の正当性を考える①—判断能力は誰が判断可能か				
9	倫理の正当性を考える②—判断能力の判定基準について				
10	正直者が得になる条件とは何か				
11	他人に迷惑をかけなければ何をしてもよいか				
12	現在の人間は未来に対する義務を持つのか？				
13	正義は絶対か？①—ロールズの正義論をめぐって				
14	義は絶対か？②—正義の相対性を考察する				
15	まとめ—倫理学の倫理性を問う				
期末	期末レポート				
主に講義形式で行いますが、隔週で実践形式を採用します。 その際は、授業前半を講義時間にあて、後半を動画閲覧および課題に取り組む時間とします。 授業内で提出した課題やリアクションペーパーについては、次週に必ずフィードバックを行う。それを踏まえて、よりよいリアクションペーパーの提出ができるよう心がけること。					
評価方法及び評価基準	授業への積極的参加(30%) 授業後のリアクションペーパー(20%) 期末レポート(50%)				
事前・事後学習の内容	毎回の授業前には、前回の配布資料やノートを熟読したのちに、シラバス上で今週の講義内容を確認し授業に臨むこと。なお、前回授業終了時に提示された課題は、次回授業開始時に提出すること。(事前学習の目安としては、1.5時間が必要となる) 毎回の授業後には、十分な復習を行うこと。その際には、授業で得た新しい知識を自身で再度学習し、知識の定着を心がけること。(事後学習の目安として、2.5時間が必要となる)				
履修上の注意	①学生からの発言時間帯には、積極的な参加を求めます。 ②毎授業の最後に、次回授業のための簡単な宿題を提示します。その宿題をやってこなければ、授業への参加資格はないので注意してください。				
テキスト	加藤尚武『現代倫理学入門』講談社学術文庫1997			978-4061592674	
—					
—					
参考文献	特になし				